
『勇者』の反逆

匠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『勇者』の反逆

【Nコード】

N5382V

【作者名】

匠

【あらすじ】

異世界召喚モノ。異世界へと召喚された東城アキラ。自らを召喚した少女はアキラを「勇者様」と呼ぶ。とりあえず彼女についていき、謁見の間で王様に聖剣を授けられた。のだが!?!
契約!?! 『勇者』!?! これじゃ奴隷とかわらねえだろ!?!
そんな勇者の反逆計画物語になる予定。シリアスもきつとあるはず。処女作なので、gggdにならないことを祈ってます。

チートやご都合主義をおそらく含みます。それが苦手な方はご注意を。

第1章完結。第2章完結。第3章に入ります。

1：召喚

「勇者様、この国をお救いください」

そこは神殿のような、厳かな雰囲気の空間だった。

いくつもの柱が立ち並ぶ石造りの部屋の中心は、自らが座り込んでいる場所のようだ。

「どうなってんだよ……これ……」

神殿なんだからいるだろう神様とやらに届いてほしい。この気持ち。

ついさっきまで見える景色は、学校帰りの通学路だったはずだ。それが、いきなり光に飲み込まれたかと思うと、こんなところにいる。

どうなってんだよ、おい……。

「勇者様……?」

「なあ、あんた。これどうなってんだよ。どこだここは」

さっきから目の前で跪く少女に、そのまま疑問を投げつけた。

一応、ラノベやゲームをたしなむオレとしては、想像がついていないこともない。

よくあるテンプレな展開。

まあ、当たってほしくない想像なんだけど。

異世界召喚、なんて。

「ペルヴィア王国にあります、召喚の間です」

「召喚の間、ねえ……。こりゃ、確定か？」

少女の答えに、めまいを感じた。

そうやって途方にくれていると、少女に呼ばれる。

「それで、勇者様」

「その勇者様ってのやめて。そんなのガラじゃない」

「では、なんと……？」

「東城アキラ。それともアキラ・トウジヨウって言えばいいのか。好きに呼んでくれ。

で、君は？」

「申し遅れました。ペルヴィア国の第3王女、スフィア・ペルヴィアです」

巫女か神官かと思ってたら王女様かよ……。

やば、無礼な口きいたとかで怒られたりしねえかな……。

「じゃあ、スフィア。なんでここにオレを召喚したんだ？」

「それについては、後程、王から聞いていただきます。

ついてきてください」

彼女は疑問に答えることなく、立ち上がって踵を返した。すたすたと先を歩いていくスフィアに慌ててついていく。

王の間までの道のりは珍しいものだらけだった。

見るからに高そうな調度品やら絨毯やら甲冑やらが並んでいる。

そして、壁に掛けられたこの世界の大陸らしき地図を見つけた。

「ああ……、マジで異世界かよ……」

その大陸は自分が見慣れたものとは似ても似つかず。

しかも、何故か文字がわかる。

見たこともないような、ぐにゃぐにゃにのたくった字なのに。

この国のある場所、隣国の名前、すべて読める。

便利っちゃあ便利だけど、なんだかなー。

違和感に頭をひねっていると、歩みが遅くなったことに気づいたのか少女が振り返っていた。

「どうかしましたか、勇者様」

「また勇者って……。いや、もういい……」

「地図、ですか？」

スフィアは視線をたどったのが、同じように壁の地図を見る。

「そ。ちょっと気になっただけだよ。

行こう」

「はい、勇者様」

これから、どうなるんだろうな？

1：召喚（後書き）

スファイアが第2王女 第3王女と修正しました。

2：勇者

はい、やってきました謁見の間、の前ですよ。
リポーターの東城アキラです。

さて、来たのはいいんだけどね。
待たされています。
めっちゃ待たされています。

かれこれ一時間くらい。

「勇者召喚なんてことやるんだったら準備しとけよクソが……」

国家的プロジェクトとかじゃねえのかよ。

ペルヴィア王国に対する好感度がグングン下がっていく。
勝手に召喚しやがった時点で限界値振り切って地の底だけど。

そんなわけで、ヒマな間にスフィアにこの世界について教えてもらうことにした。

「あのさー、勇者とか言われても、オレ一般人の上にただの雑魚だよ？」

なんもできないよ？

そこらへん、どうなの？」

当然の疑問。

召喚、なんて魔法があるのだ。攻撃魔法なんて当然のようにあるだろう。

そんな世界でできることなど、高が知れている。

「大丈夫です。歴代の勇者様によって分かっていることですが、勇者様はこちらにいらした時点で身体能力が上昇しますし、魔力も計り知れません。」

それに、勇者様だけの魔法がありますから」

おお、まさにテンプレ。

試しにちよっとジャンプしてみたい衝動にかられ、とんでみた。

「セーのっ、ぶっ!？」

オレ個人の感覚としては、あれだ。

体育の時間に準備運動でだらだらとジャンプする感じだった。

その程度のもりだった。

そのはずが。

ジャンプ。

天井にロケット頭突き。(マジでロケット並)

重力にひかれ、落下。

無様にべちゃりと着地(むしろ墜落) いまここ

「だ、大丈夫ですか!？」

スフィアが心配そうに駆け寄る。

ジャンプして天井に激突、さらに落下してみじめに潰れたオレの元に。

「あー。だいじょぶだいじょぶ。

なんか全然痛くないし」

頭をさすりながら、すつくと起き上がる。

本当だった。

込めた力に反して相当なスピードでぶつかったのだが、さすっている頭にはたんこぶひとつできていない。

しばらく悶えていたのはあまりにかつこ悪かったからです。

「それならいいのですが……。」

勇者様はもう一人だけの身体ではないので、気を付けてください
ね」

アキラは好きな彼女に言ってもらいたいセリフ17位くらいの言葉
をいただいた

照れるなこれは……。

にやけそうになる表情を無理矢理固定し、話を続けることに。

「　　そういえば、勇者だけの魔法って？」

「そのままの意味です。この世界のだれにも使えない、勇者様だけの魔法」

「えっと、よくある聖剣とか、そういうの？」

スフィアはふるふると顔を横に振った。

「いえ、それもあります……そうではありません

召喚された勇者様を作る、その勇者様だけの魔法です」

「魔法を……作る？」

「ええ。」

勇者様方はみな、この世界にある魔法を軽く超えてしまいましたが、それは序の口。

勇者様が勇者様たる所以は魔法創造にこそあるんですよ」

まあ、無詠唱や混成魔法だけでも十分すごいんですけどね、とスフィアは笑った。

「へえ……」

「勇者様も学べばすぐにできるようになりますよ

勇者様がどんな魔法を作るのか、楽しみにしてますね」

「できるといいけどねえ……」

アキラは少し、気を引き締めることにした。

ソフィアの中では、オレが勇者として働くのが決まっているようだ。

勇者として召喚した者だから、勇者として働け。

そう言われているようで。

無理難題を吹っかけられないようにしないと……。。

「スフィア様、勇者様、準備が整いました。

お入りください」

メイドさんはそう言って。

謁見の間へと通じる扉を開いた。

3：聖剣と契約

謁見の間。

およそ、一生関わることはないと思っていた場所だった。

ゲームでよく見るような造りをしている。

奥行きのある広い部屋。高い天井。

玉座までまっすぐに赤い敷き布がしかれ、足元まで道が伸びている。

スフィアに導かれるように、玉座の前へ。

上と下を明確に区別する階段の下で、王からの視線が降り注ぐ。

「余が第36代ペルヴィア王、リード・ペルヴィアだ。

そなたが今代の勇者か？」

「……アキラ・トウジョウと申します」

厳かな声。

国を治める者、というフィルターがそれをより重くしている気がした。

さらに、部屋の端には騎士と貴族、つばい人たちがずらっと並んでいるのだ。

放たれるあまたのプレッシャー。じろじろと見定めるような視線の数々。

ついさっきまで近くにいたスフィアは王族のいるべき場所へいつてしまった。

今は王妃に兄妹姉妹らしき人の元にいる。

うっ、心細い。

とりあえず、深呼吸して、と。

気持ちも切り替えて。

いろいろと聞かないとな。

「リード王。なにぶん、まだ召喚されたばかりで、よくわかりませ
ん。

勇者と言われても、いったいなにをすればいいのですか？」

「貴様！王に対して不敬であるぞ！」

あれー。自分にできる精一杯で、敬語とか使ってみたのだが、不
満だったみたい。

「よい。来たばかりの勇者に言っても仕様があるまい」

なんだその言い方は。

どうして、そこまで上から物が言えるんだ。

来たんじゃないよ。呼び出されたんだよ。無理矢理な！

とはさすがに言えない。

騎士に囲まれ、魔法もあるらしい世界の人たちを相手取るには丸
腰だと無謀だ。

「いま、我が国を含め、この世界は窮地に陥っているのだ。

魔物が増え、土地は荒れ、人心もすさんで盗賊なども増える始末。

他国と戦争状態の国もある。

それらを解決するため、聖王国家と呼ばれる我がスペルヴィアは、代々勇者を召喚してきたのだ」

「なるほど……」

尻拭いをしろってことかよ……。

しかも、最悪戦争に巻き込まれるかもしれない……。

平和な国で育ったアキラにとって、それは恐ろしい未来予想図だった。

魔物相手ならまだわかる。

だが、人となると……。

今までの勇者も、そんな重荷を背負わされたのだろうか。

アキラの心情など気づかないのか、興味がないのか。

リード王は話を進めていく。

「そなたには、聖剣を与える。

それを用いて、我が国の力になってもらいたい」

そういうと、綺麗な服を着た人が歩み寄り、一振りの剣を差し出された。

受け取る気などさらさらなかったが、聖剣というワードに心をくすぐられてしまう。

その綺麗な剣を見て、強烈な衝動に襲われた。

持ちたい。

手に取りたい。

抜いて、美しい刀身を見たい。

その思考に疑問を挟む間もないほどに。
頭の中が目の前の剣にのみ、占領されていた。

まさに、魅入られていた。

おそろおそろ、その剣を受け取り、右手でそれを抜いた。

抜いて、しまった。

しゃらん、という透明感のある美しい音。
そして。

「 つなんだ!?! 」

突然、剣が光り輝く。

あまりの眩しさに目がくらむ。

本能的に鞘を持っていた左手を前にかざし、光りを遮る。

そして、ようやく光がはれた。

左手に持っていたはずの鞘も、右手に持っていたはずの抜き身の
剣もない。

なにが起こったのかわからない。

剣を探し、右手を見ると、手首には金色の腕輪が付けられていた。

そして、混乱している自分をよそに、事態は急変していった。

「 契約は完了した! 」

「 今代の勇者、アキラの誕生だ! 」

リード王が立ち上がり、大声でそう叫ぶ。
すると割れんばかりの歓声とともに、謁見の間に拍手が降り注いだ。

この場にいる、自分以外が。
だれもが手を叩き祝福している。

その光景は、恐怖を覚えるほどに空々しかった。

「そんなっ、契約！って？ まだオレは勇者になるなんて
！」

「ふん。わめくな。」

腕輪よ、その力を持って契約を知らしめよ。コンライス」

リード王がオレを睨み、その手のひらを向ける。

そして、なにかを そう、それはまさしく呪文のようなモ
ノを告げた。

「ぎ、ぐああああ！？」

痛い、痛い、なんだこれは！

本能のままに、痛みを訴える右手首を そこにある腕輪を
抑える。

その腕輪は淡く光を放っていて、痛みの原因はこれだと、確信し
た。

その光が緩やかにおさまっていく。

と同時に、感じる激痛も少しずつ弱くなっていった。

「はあっ、あぐっ……
んだよ、これ……」

わからない。

これはなんだ。

どうしてこうなった。

魔法？でもなんのために？

「わかったか。

もはや契約はなされた。

我が国のために働け」

告げられるのはもはや先程のような依頼ではなく、明らかな命令

口調。

王の、こちらを見る目は明らかに侮蔑を含んでいて。

それはまるで、
を見る目。

「
勇者という名の奴隷よ」

その言葉を理解すると同時に。

オレは痛みに耐えきれず、意識を手放した。

1：決意

目覚めると、そこにあるのは知らない天井。

起き上がると、寝汗で張りついた前髪が気持ち悪かった。

汗をぬぐおうとして

気づいた。

「ああ、やっぱり夢じゃねエのか……」

汗をぬぐう、右手首にある腕輪。

それを見ているだけで、昨日の痛みが蘇るような気がしてしまう。
幻痛だとわかっていても。

思い出して、息が詰まる。

「くそつたれ……」

この腕輪も。幻痛も。

昨日のアレが現実だったという証拠だ。

異世界召喚。

聖剣とやら。

そして、契約。

寝ぼけていた頭は急速に冴えていき、現状をある限りの情報で推測していく。

この腕輪はあのクソ王の呪文をキーに痛みを感じさせるってところか。

さすがファンタジー。

まったく、夢のない魔法を最初に見ちまったよ。

につつき腕輪を睨みつける。

きれいな腕輪だが、その本質には嫌悪しか感じない。

「さしずめ奴隷の首輪だ。」

「一応勇者ってことにしているから、腕輪になっているだけだろう。首輪をつけた勇者なんて、ぜんぜんかっこよくないしな。」

「くそつたれめ。気をつけよう、と思っていたはずなのになー」

あっさり騙された。

今思えば、聖剣とやらになにか細工があつたのだろう。

一種の洗脳、幻惑、そんな感じか。

今思い返すと、あの時は受け取らない、という選択をまったく思いつかなかった。

吸い込まれるように、魅入られたように。

あの剣に、あの雰囲気にもまれていた。

あの剣は、剣であり、契約書であり、腕輪という形の強制執行装置でもあるのだろう。

たぶんこの腕輪が剣ってことは……。

試しに、天井に向かって手を伸ばして剣をイメージすると、シユンツと見覚えのある剣が現れた。

「実体化はできた、か……」

右手には昨日見た、聖剣。いやもう、腹立つからクソ剣とよんでやるう。

そのクソ剣からは昨日のような威圧感、神々しさは感じない。

腹が立つので、剣をベッド脇にぽいつと投げ捨てる。

すると、手を離れたクソ剣は床を転がるかと思いきや、腕輪に戻りやがった。

「ちっ、普通の剣なら便利なんだろうが、オレに取っちゃ忌々しいだけだな」

弾かれても弾かれても戻ってくる剣、と言えば聞こえはいい。

ま、実際は。

捨てても捨ててもなぜか戻ってくる剣。

完全に呪われたアイテムじゃね？

「勇者様？起きていらっしやいますか？」

ドアがノックされ、聞いたことのあるような声が聞こえてきた。身体を起こし、ベッドに腰掛けると声を返す。

「ああ、いるぞ」

「失礼します。おはようございます、勇者様」

「ソフィア、それは皮肉か？」

昨日は気にならなかった言葉が、癪に障る。

勇者？

奴隷の間違いだろ。

あのクソ王も言ってたしな。

「そんなつもりは……」

うろたえながら、なんとか釈明しようとして一歩、二歩、とソフィアが近づく。

「シッ！」

ソフィアが間合いに入った瞬間、剣を実体化して首を狙う！

「やっぱり、か……」

ビタッ！と剣が止められた。

ソフィアがなにかしたわけでも、オレが寸止めたわけでもない。むしろオレは力を入れ続けている。

なのに、見えない何かに止められた。

「クソ剣、消えろ」

今度は命令を聞いて消える剣。

ほんとに忌々しい。

契約相手、おそらく王族には剣を向けられないらしいな。

別の武器を手に入れないと。

「 な、なにするんですかっ!？」

いきなり切りつけられて、口をパクパクさせていたソフィアが現実に戻ってきた。

その頬は紅潮し、安堵を通り越した彼女は怒りを訴える。

「殺そうとした」

その彼女に、あっさりと告げる。

特に気負うこともないかのように。

制約が無ければそれができる、と言い聞かせるように。

「なっ!？」

「まあ、予想はしてたけど、やっぱりだめか」

ふむ。格闘だとうなるんだろ。

勇者補正で身体能力は上がってるから、やってやれないことはないはず。

腕輪が邪魔しなければ、だが。

「邪魔、するんだろうなあ、どうせ。はあ」

実験はするが、期待はできない。

腕輪ということは、身体に触れているのだから。

ため息が止まらないぜ。

「ちょっと、無視しないでください!

なんでいきなり殺そうなんてしたんですか!」

「はあ？異世界に拉致されて、勝手に奴隷にされたのに恨まれる覚えはないとでも？」

「図らずも、声は冷たく鋭いものとなった。」

明確な敵意を向けられた彼女は、逃げるように目をそらす。

「わたしは……その、知らなかったんです。」

「勇者様があんなふうに扱われるなんて……」

「嘘くせー。だいたい、勇者なんてオレの前にもいたから知ってんだろ」

「ほ、ほんとにっ」

「それに、知らなかったからってなんになる。」

「オレを召喚したのはおまえだ。奴隷扱いじゃなくなつて、オレはおまえを恨んでるさ」

「言い訳なんて聞きたくない。」

「遮ることで、それを突きつけた。」

「そんな……」

「ショックを受けたらしく、ソフィアの瞳に涙がにじむ。」

「あーくそつ、泣くなよ！」

「こんなとこ見られたらまたオレが痛めつけられるかもしれねえだろっが！」

「わぶっ、ちよっ」

わしゃわしゃと頭をなでてやる。

ソフィアは見た目頬を膨らませて不満気だが、どことなく嬉しそうだ。

（敵意がなければ触れる……。殴れるかどうかは別の機会に試そう。お仕置きの意味で殴る、そんな機会を逃さないようにするか）

思わず漏れる黒い笑みをソフィアに気づかれないうつ、少し強めに撫でて俯かせる。

気分は某ライト君だ。

「……契約を果たせば腕輪は解けるんだろ。」

真面目にやってりや懲罰もされなйдらうし、やってやるぞ。

クソ王にもそう言っとけ。ただし報酬はもらうってな」

一度反抗して、それが無理だと悟った風を装う。

こっちは勇者補正持ちだ。

聞いた話が正しければ、身体能力、魔力、魔法創造とまさに危険人物。

物わかりが良すぎれば警戒される。

物わかりが悪すぎれば排除される。

奴隷勇者としては適度な、軽い反抗心を見せておくのがベストだろう。

ついでに報酬を与えておけば飼い殺せると思わせておく。

あとで金寄こせって念押しにいくか。
最悪、拒否られて激痛くらうのも覚悟しとかないとな……。あー
怖え。

頭の中で、これからの計画ととるべき態度を考えて、撫でる手を
離した。

「で、何の用だ？」

「ご飯です。従業員用の食堂まで案内しますから」

そういえば、お腹がすいている。

昨日はなにも食べることなく日をまたいだから、もうぺこぺこだ。

「へー。王女様は暇なこって」

「……ええ、そうですか。知り合いがない勇者様を気遣おうとし
たのは間違いだったようですね。」

メイドに任せますから気まずい時間を過ごすといいです」

「どっかのだれかのおかげで天涯孤独になっちまったからな。」

人見知りを直すいい機会って無理矢理納得しないとないとなー」

拗ねるようにそっぽを向いて唇を尖らせる相手に、これ見よがし
にそう告げた。

「……………」

「……………」

「嫌味ですか？」

「嫌味ですが？」

ばちばちを火花を散らす。
すぐにソフィアが折れた。

「朝ごはんの後の訓練、地獄レベルにしてもらおうようお願いしておきます」

と思ったら、実にさわやかな笑顔で仕返しされた。
強かだな。さすが王女サマってか。

「ま、強くないといけないからな。
それくらいの仕返しなら受けてやるか」

これから魔物と戦わせられるはず。
命を守るためには強くないと。

そして、いつか必ず。

確かな決意を胸に宿し。
異世界での一日が始まる。

2：地獄の訓練1～VS騎士団長～（前書き）

うーん、戦闘シーンって難しい。

2：地獄の訓練1〜VS騎士団長〜

「ぐぬぬ……」

アキラは食堂で一人、顔をしかめて唸っていた。

朝食が不満だ。

一応衛士用も兼ねている食堂なので、肉系メインなのはいい。ただ味が薄い。醤油がほしい。

塩も現代日本と比べて質が悪いっぽい。そのくせ高いから量は入ってない。

そして、なにより米だ。

日本人なら朝は米だろうがあ！！

とちやぶ台……ではなくテーブル返しを……自主規制。

その際、ちょっとひっかけただけのつもりだったが、テーブルがひっくり返りそうだった。

思っていた以上に、力が強い……。

勇者補正やべえ……。

自分の身体くらいきちん制御できるようにならないとダメだな。課題にしとこう。

「おろつ、これはこれは、勇者さんじゃないツスか。前、いいツスか？」

アキラが不満たらたらで飯を食っている途中、下っ端兵士っぽいやつがやってきた。

あまりにもなれなれしく話しかけてきたが無下には扱わず、対面に座ることを了承する。

もぐもぐしながら、情報収集も兼ねて会話してみることにした。

「いやー、勇者さんと一緒に訓練とか楽しみッス」

「……………前の勇者とはやらなかったのか？」

「前の勇者さんはアッシが生まれる前の事ッスからねー」

「へえ。つか、なんで今頃になってまた勇者を呼んだんだか」

「それは召喚に必要な魔力と星の並びの関係らしいッス。

次は少なくとも17年後らしいッスね。

それがどうかしたッスか？」

勇者の召喚儀式は17年周期ってことか…………？

いや、少なくとも、ということは例外もあるかもしれない。

それに定期的な周期ではなく、ただ単に次が17年後というだけなのか。

考察のため、眉間にしわがよりそうになったのを慌てて防ぐ。

これ以上不審に思われてもまずい。つとめて何事もなかったかのように、話を変えた。

「いやいや、お仲間ができるのかもって思っただけ。

んなことよりさ。騎士の見分け方教えてくれ。

騎士団長とか、近衛とか、第1とか、魔法騎士団とか、魔法部隊とかさ。

どうせいろいろあんだろ？」

「勇者さんはそこらへんわからないんですけどっけね。

いいでしょう。このチョウ・シモーノが教えてあげますッス」

序列なんかもあるだろう。

わからなければいろいろとまずいことになりかねない。

そう納得してくれたのか、彼は素直に教えてくれた。

「それじゃ、まず、騎士の団ごとの装備と服装について

」

そんなこんなで、おしゃべりな下っ端のおかげでいろいろとわかった。

勇者は対外的には奴隷じゃなく勇者として扱われている。

首輪ではなく腕輪だったことからもうそうではないかと思っていたが、これで確証が得られた。

おそらく、事実を知っているのはあの時謁見の間にいた奴らだけだろう。

王族と、いくつかの有力貴族、騎士団や魔法、近衛のうちの団長、副団長つてところか……？

特にこいつらには用心しなければならぬ。

顔と名前、戦闘スタイルくらいは一致、把握しておかないと。

さて、それではお待ちかね。

ソフィアが予告した地獄の訓練だが……。

VS 騎士団長、だって

「いやいやいやいや、無理でしょこれ!？」

それを聞いた反応はだれだってこうなるだろう。
だというのに、目の前の騎士団長サマはというと

「はっはっは。勇者君は謙遜するんだなあ」

「イラッ」

いきなりの騎士団長。

文字通り騎士団のトップ。

そんな相手にずぶの素人が戦いを挑むという無謀さなど理解しているだろうに、目の前のこいつは笑って流した。
知っているくせに。

“勇者” なんだから大丈夫だろう?と。

「君には聖剣があるじゃないか。
折れない欠けない曲がらない。
持ち手には羽根のように軽く、相手には岩のように重い。
私の剣とは比べ物にならない代物だ」

「あのクソ剣そんなレベル高かったのかよ……」

武器の良さは分かった。

だが、そんなことじゃ樂觀なんてできない。

剣なんて竹刀くらいしか扱ったことはないのだ。

いきなり剣を持たされても、どうすればいいのかわからない。
名剣も鈍らも、等しく使えない。

それに、羽根のように軽いつてことはオレの修行には使いつらい。筋肉がつかないし、もしも普通の剣を使うときには扱いつらく感じるだろう。

そもそも復讐に使えないクソ剣なんてどんな能力があるつとナマクラ以下だ。

よし、訓練中にこつそり剣をかつぱらうか。
練習も道具が無ければ始まらない。

「さあ。やり合おうか
ソフィア王女から君をしくよく言われているのでね。
みっちり指導するよ」

「あのクソ王女がああああああ！！」

精一杯の罵倒は、虚しく響き渡るだけだった。

|||||

あれよあれよと訓練場のど真ん中へつれられました。
ええ、見世物の如く。

一緒に訓練していた騎士団や近衛兵がわらわら集まり、城の窓にはヒマ人どもが見える。
だれかが触れ回ったのか、城のほとんどがこの試合に注目していた。

どこにも逃げ場がねえ……。

訓練場の中央、簡易的に作られた舞台の上に立つ。目の前には、剣を持ち、軽鎧を身にまとった騎士団長。

生身で見たときにはなかった威圧感が、重くのしかかる。

優男の顔は消え失せ、その雰囲気は戦士のそれに。

それに比べ、この右手にあるクソ剣ときたら。

重量操作のせいもあって、軽い。軽すぎる。

利点である軽さが、心もとない。不安を煽る材料でしかない。完全な裏目だ。

「では、これより第1騎士団長、グレン・トリスタン対アキラ・トウジヨウの試合を始めるッス！」

審判、司会はこのチヨウ・シモーノがお送りするッス！」

「てめえ！なにやってやがる！」

勝手に進めんな！」

さっきの下っ端兵士が武闘会ばりのセッティングをしてくれやがった。

いつかコロス。

「はいはい。外野がうるさいのでちゃちゃっといくッス」

「おもつくそ内野だろうが！オレ当事者だろうが！」

「でははじめ！」

「完全にスルーしやがった!？」

唯一存在した脱出への突破口が消えやがった!

「よそ見をされていていいのか？」

「うお!？」

耳元で声がして、本能に従い全力で屈んだ。

風を切り裂く音の後、髪が数本パラパラと舞い落ちる。

顔だけあげると視界ギリギリ、右上に振り切られた剣先が微かに映り、それが横から縦に向きを変えるのが見えた。

振り下ろしが来る !

「くそっ!」

慌てて飛び込み前転。

体育の授業で何の役に立つのかと思ってたが、ここぞか。

「おわつとお!？」

勇者補正の持つ脚力を存分に発揮し、10メートル近い距離を軽く跳んだ。

回転を終えると滑らかに立ち上がり、重心を落として追撃に備える。

ふと見ると、グレンは剣を振り下ろした姿勢で残心していた。

「不意打ちとか騎士のやり方かよ!」

「開始早々よそ見する君が悪い。
戦場でのよそ見は死を招くと教えてあげようと思ったただだよ。
魔物は待ってくれないからね」

「つか、マジで殺す気だっただろ。
避けなかったら死んでたぞ」

「君なら避けると思ってたさ」

「身勝手かつ迷惑な信頼はいらねえよ」

騎士団長というだけあって、グレンは飄々としていて、余裕を崩さない。

そりゃそうか。実際、余裕なんだからな。

身体能力は勇者補正のおかげでこっちが上だろう。

だが、徹底的に技術が足りない。

戦闘技術、剣術、重心移動、フェイント、足運び、視線のやり方、立ち位置。

全てにおいて劣っている。

騎士に勝っていきそうな魔法も、学んでないので使えない。

できることはただ一つ。

力押し、だけ……か。

「魔力無限チートなはずなのに……」。

魔法覚えるヒマくらいよこせてんだよ」

ぼやきつつ、クソ剣を実体化。

「よつやくやる気になってくれたか。

では 行くぞー!!」

袈裟掛けに斬りかかられる。

「よつ、と」

それを軽々と受けた。

手首を固め、力がどこにも分散しないように押し返す。

「くっ!」

「あれ?」

疑問の声はアキラ自身の物。

押し負けてグレンが少し下がったと同時に、大きくバックステップ。距離を取る。

「んー?」

クソ剣を何度か振って、ついさっき感じた違和感の正体を探る。

「不思議そうだね?」

「ああ。なんか剣筋っていうのかな。

あんたの斬りかかる姿が予測できたっていうか」

「そうか。半信半疑だったが……本当のようだ」

こちらの言葉を聞いて、騎士団長は驚きを露わにし、納得した。自らの剣を受け止め、さばけた理由を。

「どうやら知ってるみたいだな。これってこのクソ剣のせいか？」

「クソケン……？」

それがなんのことは知らないが、君の聖剣は歴代勇者たちの戦いを記憶している。

勇者の力の使い方から、相手の魔物の攻撃傾向、人間の流派や剣筋、重心移動や、目くばせなどもだ。

つまり、歴代勇者の戦闘経験を君に与えているんだよ」

「なる。一気に歴戦の勇士ってことか。

さっすが勇者はチートだな」

クソ剣をちよつとだけ見直した。

まあ、クソ剣はどこまで行ってもクソ剣だがな。

につくきクソ剣を持ち上げ、意思を伝えんと握りしめる。

さあ、情報をすべて寄せ。

小出しになんかするな。持っている勇者の戦いの記録をすべて寄せ。

意志に応えるように、大量に送り込まれる情報が送り込まれた。

そのあまりの多さに、めまいと頭痛を感じるが、なんとかそれに耐える。

一つの戦闘時間は数分でも、歴代勇者合わせれば年単位にのぼる。それだけ勇者が戦いにおくりこまれたってことなんだろう。

ある時はモンスターと。ある時は剣士と。ある時は弓兵と。ある時は槍兵と。ある時は格闘家と。ある時は暗殺者と。ある時は魔法使いと。ある時は魔族と。ある時は獣人と。

何度も何度も何度も何度も。

来る日も来る日も来る日も。

戦って戦って、殺して殺して、傷ついて傷ついて。

その果てに　　死んできた。

そんな勇者たちの日々のうち、戦闘経験だけが受け継がれる。そこに彼らの想いはなく、ただただ戦い方だけが流れ込む。

「さて、戦闘経験の獲得は終わったかな？」

そして　　戦闘経験の引き継ぎが終わった。

「へえ、待っていてくれたのか？」

「大量の経験を一気に受け取って顔をしかめている相手と戦ってもおもしろくないからね」

「へっ不意打ちしてきたやつがよくいう」

自分の声から硬さが抜けたことを自覚する。

いまだに少しめまいはするが、今では大分すっきりしていた。

戦闘経験を得たおかげで、今までの自分がどんなに動揺し、焦っていたかがわかる。

もう戦闘の空気に吞まれてはいない。
相手の放つ威圧感をはねのけられる。
どう動けばいいのか、最適解が即断できる。

「訓練だからね。さっきがあつて、今の君は不意打ちを警戒するようになった。」

身体で覚えたことはそうそう忘れない。だから一番気を付けてほしい不意打ちをしたんだよ」

「へーへー、そりゃどーも。」

「ありがためーわくですよー」

「歴代勇者の戦闘経験を得た君なら、いいだろう。」

しばらくは指導の予定だったけど、実践に即した形でいこうか」

グレンはそう言って、口角をゆがませる。

にい、という戦いを楽しむ者の笑み。

「騎士団長のくせにバトルジャンキーかよ……」

呆れはするものの、恐れはない。

そんな相手とは山ほど戦ってきたからだ。

「行儀なら近衛に任せるさ。」

僕みたいな騎士の仕事は、結局は戦いなんだ、よっー！」

繰り出される剣戟をきちんと見切つて避ける。

ギリギリでかわすなんて馬鹿な真似はせず、きちんと余裕を持つて。

相手が片手に持ち替えても、とっさに跳んでも、よけられるよう

に。

歴代勇者の戦闘経験が教えてくれる。

王国の騎士とはなんども訓練で戦っているせいか、その剣筋の流れが大体読めるのだ。

グレンの剣が右下から右上へ跳ね上がる。その後、肩へ叩きつけるように落とす。

左に避けたアキラへ肩の鎧をぶつけるようにタックル。同時に、剣を横薙ぎに振るう。

時に避け、時に剣で受け、それらをさけていく。

しばらくそれを続けるが、さすが騎士団長。息が上がる様子はない。

こっちは勇者補正のおかげで体力は余裕があるが、向こうもそうそうへばる相手じゃなかったようだ。

(体力が切れるのを待つのは無理か。

やっぱり、倒すしかないか)

ちようどいいし、クソ剣の実験だ。

騎士団長を 王国騎士を攻撃できるか。

いや、鎮圧用に軽い攻撃ならできるかもしれない。

軽く傷をつけ、捕縛する程度ならできるかもしれない。

だから、調べるべきは。

王国騎士を 殺せるか。

試さなければならぬ。

たとえどんなにくだらないことでも確かめなければ。

クソ剣の性能、特性、仕様、条件を完全に把握しなくてはならぬ。
い。

最後の最後で足元をすくわれるのはごめんだ。

だから やる。

ソフィアの時のように、絶対に殺せないという確信はない。
本当に殺してしまうかもしれない。

罪悪感を、受けた痛みと恨みで塗りつぶす。

殺す。殺す。殺す。

自己暗示。

オレは、グレンを

殺す！

「おおおっ！！」

焦れたのか、グレンの大振りが来る。

オレの左肩から右脇腹へ抜けるような軌道の一撃だ。

「っああああ！」

グレンの剣に、クソ剣の軌道を下から重ねる。

そのまま、グレンの剣の軌道を少しだけ逸らしながら。
思いつきり力を乗せた。

「なっ！」

肩から脇腹へ抜けるはずだった剣は、クソ剣によってその流れを書き換えられる。

アキラの頭の上を通り過ぎ、さらに背後に乗ったクソ剣の力で勢い余って大きく振り回される。

剣を持ったグレンは、当然体勢を崩してしまった。

「もらったっ!!」

グレンの剣はクソ剣の外側にある。

つまり、このままクソ剣を跳ね上げれば、グレンの防御は間に合わない。

最速の道を鉄が翔ける。

グレンの左腕、鎧の隙間に剣の横っ腹が突き刺さった。

「ぐうっ!!」

周囲の野次馬騎士たちから驚きの声が漏れる。

それを無視し、アキラはさらに動いた。

剣を素早く引き、巻きつけるような勢いのまま一回転。

膝について左腕を抑えるグレンの右首に叩きこむ

!!!

「終わりだ!!」

「そこまでだっ!!」

ギーン！

クソ剣がグレンの首に届くほんの刹那。
だれかの槍の穂先が間に割って入っていた。

「勇者殿。剣を納めてほしい」

「　　つ、ああ、わかった」

槍の持ち主は鋭くにらみを利かせる。
それで硬直が解け、クソ剣を引いた。

「試合終了！勝者は勇者だあああああああああ！！」

司会のチヨウが叫び、周りの野次馬がわあつと沸いた。

同時に、ローブをまとった魔法使いらしき人たちがグレンに駆け寄る。

魔法使いたちはグレンの腕に手をかざすと、そこから淡い緑色の光を放った。

少しずつ、グレンの傷口がふさがっていく。

「すごいな……。これが治癒魔法ってやつか……」

その光景に思わず声を漏らした。

味方のいない勇者のオレとしては、ぜひとも覚えなければならぬ魔法だ。

数分後。グレンの傷はきれいにふさがった。

少し痛みは残っているようだが、きちんと指先まで動かせている。

「すごいな。勇者君。あの技には驚いたよ」

「ちょっとしたカウンター技ですよ。

相手の剣の軌道を書き換えて、かつ勢いを乗せることで体勢を崩す技です」

「そうか。今度は負けないよ……」

そういつて、グレンは剣を鞘に納めて訓練場を後にした。

オレの剣を止めた槍の騎士は、グレンを追おうとして、ちらりとこちらを振り返り。

「おまえは私の敵だ……」

それだけ告げてグレンを小走りで追いかけた。

「なんなんだあの女槍兵……」。

いきなり嫌われたんだけど……」

グレンのことが好きなのかな？

うーん、どっちかっていうと尊敬っばいか……」。

それにしても。

「オレの敵、ねえ……」。

それを言うなら、この国全員が、オレの敵だよ」

だれにも聞こえないよう、小さくつぶやく。

現実を受け止め、覚悟をより強固にするために。

さてさて、そんなわけで、
実験結果。

課題だった勇者補正の力の扱い、クソ剣の経験により、習得。

戦闘経験の不足、やっぱりクソ剣により、解決。

騎士への攻撃はやはり可能。手におえない騎士を粛清するためと
推測。

今後の課題。

クソ剣以外の武器の練習。（訓練場からかつぱらい済み）

戦闘経験の自分への最適化。（他の勇者と体格などが違うため）

グレンの本気を引き出し、超える。

あと、魔法を覚える。

「先は長いな……」

騒いでいる騎士たちをよそに、アキラは顔をあげて。

王城を睨みつけた。

3：地獄の訓練 1・5

地獄の訓練は騎士団長への勝利で華々しく終了！

すればよかったんだけどね……。

さすが地獄。

「午後は魔法です」

テキストに自主練した後、昼飯を食っているとヒマな第三王女様がやってきてそう告げました。

「えーっと、マジで？」

「はい。マジ？ですよ」

マジの意味がわからないのか小首をかしげる。

そんなことされたって、ドキツとなんかしないんだからねっ！

おっとなち狂っちゃった。

閑話休題。

「またいきなり魔法部隊と戦えなんて言わないだろうな？」

「そんな無茶なこと言いませんって。

最初は属性を調べて、簡単な魔法の扱い方を教えるだけです」

「ならいいけど……。
魔法を使うってのはわくわくするな」

最初にみた魔法がアレだったのはもう忘れよう。
こうなったら最初に使った魔法に希望を持つことにする。

「つかさ、ソフィアはヒマなの？
オレんとこしよっちゆう来てるし」

「ご迷惑ですか……？」

「そ、そんな上目づかいで懐柔されると思ったら、大間違いなんだからなっ！」

ちよっとツンデレ風味だな、オレ。

男のはツンデレとは言わんか。

あーあ、ツンデレ女の子いないかなー。

「じゃあ、頑張ってくださいね」

そういうと、ひらひらと手を振って彼女は行ってしまった。

「王女様はこんなとこじゃ飯は食わねえってか」

城内の下っ端や衛士、従者の食堂らしいからな。
ソフィアはただ単に嫌味を言いに来たんだらう。ヒマ人め。

がつがつもしましやもしまぐもぐくん。

「ふーっ、ごっそさん。
んでも、まだ時間あるな……。
城の探険でもすっか」

口笛を吹きつつ、気の向くままに歩いていく。
右に左に、階段登って降りてみて。
気がつけば。

「広すぎだろ……。城内地図とかねえのかよ……。
ここがどこかわかんねえじゃんか」

迷ってないぞ？

だって目的があるわけじゃないし。

強いて言えば散策が目的なので、どこにいったって目的の場所なのだ。

「だからオレは迷ってない!!」

「うるさいわね!!」

「すみませんした!!」

怒られた。

「ん？今の声はだれだ？」

あたりを見回しても、長い廊下があるだけでだれもいない。

「どこ見てんのよ、あんた」

「ああ、部屋の中からか。
そこは、えっと、書庫か？」

すぐ横にあった扉から顔を出している少女の奥には大きな本棚がいくつも覗いていた。

「知らないの？」

「うう、ああ。あなた勇者じゃない。それじゃ知らないか」

「だれだおまえ」

「失礼ね。第1王女、サーシャ・ペルヴィアよ」

第1王女……。

サーシャと名乗ったその少女は、見れば確かにスフィアと似た顔立ちをしている。

ついでに言えば、クソ王の面影もある。

その人を見下した目なんかとくに。

「なるほど。それで、第1王女サマはなんで書庫なんか？」

「資料があるからよ。私はまだ少しだけだけど、内政にたずさわっているの。」

どっかの誰かみたいに、剣を振るって遊んでるヒマはないのよ」

「そんな発言していいのか？」

「騎士が敵にまわるぞ？」

「今はいいからいいのよ。」

それに、あんた相手に気をつかってもしょうがないしね」

「その言葉遣いも、か……。
普段を知らんが、こっちが本性ってことか」

「ええ。かたつ苦しいのとかだいつきらい！」

「本性みせちまってるいいのかよ。」

「一国の王女がこんなって、嫁の貰い手がなくなるぞ？」

「王女ってだけで貰い手はできるのよ。」

「だいたい、あんななんかにもらわれる気はないわ。」

「だから見せてもいいのよ。あんなら口を封じるのも簡単だし」

「内政ばつかで、運動しない貧弱王女様にできるのか？」

「胸を締め付けるような。呼吸を妨げるような。」

「恐怖を感じる。」

「しかし、それを無理矢理押さえつけた。」

「知っておく必要がある。」

「サーシャの浮かべる自信満々の表情。」

「やっぱり、アレか……？」

「その身で味わいなさい。」

「腕輪よ、その力を持って契約を知らしめよ。コンライス」

「ぐ、あああああああああー！」

「あははははっ！わかった？」

「あんだときいつだってどうとでもできる！」

死んだら次の勇者を呼ぶだけ。代わりにいる奴隷じゆうとくなのよ！」

高らかに笑うサーシャ。

彼女が魔法を解いたのか、腕輪から与えられる痛みが急になくなった。

「　　っはあ！つてえ……………！」

「ふう。すぐに黙らせられるし、気を張らなくていい分、奴隷相手は楽よね」

「ああ、は、つうあ……………！」

「……………？ああ、まだそこにいたの？さっさと消えなさい。」

また食らわされる前に、気力を精一杯振り絞り、なんとか立ち上がる。

「……………失礼、しましたっ……………！」

サーシャはこちらをちらりと見ることにすらなく、本をとりに戻った。

扉が閉まり、彼女の姿が消える。

壁にずるずると寄り掛かるように歩き、なんとか見つけた空き部屋に飛び込んだ。

ドアを閉めて、そのまま崩れるように座り込む。

「ああ……………マジで、いってえ……………」

腕輪の痛みはほんとにシャレにならない。

罰の目的でこれなら、意識を奪おう、殺そうと思われたら痛みでシヨック死できるレベルになるはず。

それでも、あのクソ王の時よりはマシだったが、あと少し続けば確実に気絶していた。

「やっぱ、王族はオレに罰が与えられるのか……」

予測はしていたが、それはあくまで予測。

こうして実際に受けて、ようやく事実になる。

王だけではなく、王族には逆らえない。

「この罰を受ける検証だけはもうやりたくねえな……」

かなり痛い、得られる事実にはそれだけの価値がある。

この奴隷勇者契約は王族とオレとの間らしいな。

クソ王が死んでも、その息子、娘がオレをいいように使えるようにってことだろう。

まったく、いやに行き届いてやがる。

「腕輪よ、その力を持って契約を知らしめよ。コンランス、か……」

この言葉を言いきらせる前に、やりきれるか……?」

その可能性は絶望的だった。

王族は、謁見の間で見ただけでも6人はいた。

クソ王、王妃、第1〜3王女、そして王子。

妾とかはどうなるのかね。

「まあいいか。とりあえず皆殺せばいい」
でも。

「その手段が、問題か……」

呪文を唱える前に全員をやるのは難しい。
広範囲殲滅魔法でも覚えるか？あつただけど。
そもそも攻撃できるのかも疑問だな。

「だったら、別のアプローチ……。
契約解除の魔法を探すか……？」

幸いにして、書庫は見つかった。
あそこには魔導書の類もあるだろう。

今日の魔法訓練が終わったら、行って本を漁るのもいいかもしれ
ない。

「よし、なんとか体は動かせるようになったな……。
行くか」

部屋を出て、訓練場へと向かう。

途中、書庫の前を通った。

その扉を睨みつけ、銃をかたどった指を突きつける。

「クソ王の次は、おまえだ。サーシャ王女さま」

順番をつける。

騎士団長との戦いで、わかった。

もうあいつらを殺すことを忌避する感情はもつない。

やれる。

奴隷は道具。

道具は意志を持たない。

ゆえにだれも害さない。

「おまえらはそう思ってるんだろ？」

バン、と口に出して、反動を模して指をはねさせた。

「おまえらがオレを道具扱いするなら

オレはおまえらを人として扱わない」

タンスが人をつぶしても、それはただの事故なんだから。

4：地獄の訓練〜魔法編〜（前書き）

地獄の訓練とは名ばかりになってしまった……。
あれー？

4：地獄の訓練〜魔法編〜

「では、勇者様。

今から魔法についてご説明しますね」

クソ王女サーシャの罰からなんとか立ち直り、やってきました訓練場。

そして。

アキラ・トウジヨウ！魔法デビュー！！

いやっっほおおおおおおおおっ！！

いやもうね、みんなオレの名前忘れてるんじゃないかと。

アキラですよー。東城アキラー。

……まあ、みんな『勇者』としか呼ばないからね。

使い捨ての道具に名前なんか聞かないか。

愛着なんてわくわけもないし。

召喚されてからこっち、名前で呼ばれることはめったにない。

だからこそ、『勇者』などと呼ばれるとイラッとするんだろう。

役職名でしか呼ばれない。

囚人が番号でしか呼ばれないのと同じようなもんだ。

いいさ。こつちだっておまえらの名前は覚えてやらん。

グレン？だれそれ、あれは騎士団長でしょ。

みんな役職名とA、B、Cとかで呼んでやらあ。

そんなわけで、魔法部隊隊長さんから魔法を教えてもらうことになった。

魔法少女っていうより、魔女って感じの妙齡の女性。

彼女が隊長でオレの先生の用だ。

〈隊長さんの魔法講義〉

「まず、魔法には魔力が必要となります。

魔力を呪文という構築式に流し込み、結果として魔法が発生するわけです」

「なる。

呪文はさしずめ魔力の変換装置ってところか」

魔力という無定形、方向性のない力を、呪文という変換装置でもって形、属性などを与えて魔法とする。

それがこの世界における魔法と呼ばれるものなのだろう。

「へんかんそーち？

それがなにかわかりませんが、先に進めても構いませんか？」

「いいよ」

「では、次は属性についてです。」

属性は、火、水、風、土、光、闇の6属性ですね

属性は基本的に一人一つ。まれに二つを持つ人もいます」

「魔法は全部そのどれかに分けられるの？」

雷とか、時とか、空間魔法とかないのかな。あー、あと影とか。

「いいえ。中には派生属性、混合属性として、氷、雷、炎がありませんね。」

残念ながら、実際の使い手となるとわが国にはいません」

「他の国にはいるのか？」

「ええ、いますね。それに、歴代の勇者様方がそうです。」

氷、雷、炎に加えて、時、空間などと言われる魔法をお使いになりました」

「魔法創造、か……」

アキラは時や空間は、魔法創造の結果かとも思ったのだが、それはすぐに否定された。

「いえ、違います。」

勇者様の魔法創造とは別に、理論的にはあるものの魔力が足りないなどの理由で使い手がいなかった魔法。

それが時魔法や空間魔法と呼ばれるものです」

「じゃあ、魔法創造ってなんなんだ？」

「わたしにもよくわかりません。

ただ字面から見て、勇者様にだけ使える魔法で、勇者様が望む魔法を創るのではないかと」

「……………眉唾もんだなあ」

魔法創造、ねえ…………。

その正体は二つの可能性がある。

一つ目。

現代のゲームやファンタジーに存在した魔法の再現。

たとえば、ウインドカッター という魔法。

これがこの世界にはなかったとしたら。

この世界の人にとって、新しい魔法を使ったように見えるだろう。

このパターンでは、あくまでこの世界の魔法法則にのっとった魔法でしかない。

「新呪文の創造」タイプとする。

二つ目。

この世界の法則とは全く異なった魔法法則による魔法を創造。

属性、呪文、などこの世界の法則とはまるで違った魔法。

これはもはや「魔の法則」を創ることそのものだ。

「法則の創造」タイプとする。

前者は元の世界の知識によるもの。

後者は勇者召喚によって得た特殊魔法。

いったいどつちなのか。

書庫で歴代勇者について調べてみよう。

いや、なんか魔法を創ってみるのもいいか？

「じゃあ、派生魔法や混成魔法ってなんですか？」

「派生魔法は、例えば火の派生は炎、水の派生は氷つてところですが、属性の強化版みたいなものですね。」

混成魔法は、複数の属性を混ぜたものです。雷は水と風、または光と風の混成と言われています」

「なるほど。少しややこしいですが、わかりました。」

混成魔法の組み合わせも、いろいろと考えてみよう。うまくいけば新呪文を創れるかも……くふふ。土と火の混成魔法【錬金】とかできねえかな……。

「では、さっそく属性について調べてみましょう。」

こちらの水晶玉に血を一滴垂らしてください」

差し出されたナイフで指を軽く切って血を垂らす。

水晶は血を吸い込むと、淡い光を放った。

水晶の中には六芒星のような陣が映っており、その頂点がすべて

光っている。

「やはり、勇者様は全属性を扱えるようですね……」

隊長が呆れたように声を漏らした。

頂点一つ一つが魔法の属性を示しているのだろう。

頂点の光はそれぞれ色が違っていた。

赤は火、青は水、緑は風、茶は土、白は光、黒は闇ってところだろう。

「光と闇は我が国に使い手がいませんので、書庫で調べていただく
しかありませんが

他の属性については我々が指導させていただきますので」

「隊長は何属性の魔法を？」

「わたしは風と火です。その強化派生である炎も少しなら使えます」

「2属性もちですか。すごいですね……」

しかも相性がよさそうだ。

風は火の勢いを強くする。

案外、炎魔法は火の強化派生という形と、風と火の混成魔法という二つの形があるのかもな。

「全属性を使える勇者様に言われると嫌味に聞こえますよ……」

「……………すいません」

「では、今日は魔力を感じることから始めましょう。それができたら、初級魔法の練習に入りますからね」

「はいっ！」

「いよいよ魔法だ！」

「魔力を感じるのは結構楽に行けた。」

「なんせ今までずっと付き合ってきた身体だ。」

「その身体の中によくわからん力があるのはすぐにわかった。」

「魔力を感じたのなら、それを引き出すイメージを持ってください。最初は手のひらがわかりやすいでしょう」

「手のひら以外からでもできるんですか？」

「身体全身に纏う様な風の魔法は、薄い魔力の膜を纏うイメージです。」

「そういう使い方もあります」

「なるほど。では、やってみますかっ！」

「手にひらを上に突出し、体中に流れる魔力を手のひらに集めていく。」

「まずは火の魔法。復唱してください。」

火よ、球となりて燃える。ファイヤーボール」

隊長の手のひらに火の玉が現れた。

アキラも同じように、呪文を唱える。

「火よ、球となりて燃える。ファイヤーボール」

ゴオウツ！！

アキラの手のひらに、1メートルはあるでかい火の玉が現れた。

「うおおおお！？」

「ま、魔力の込めすぎです！もつと抑えてください！」

「んなこといったって、そんなに込めたつもりはないよ！」

「ああもつつ、じゃあ、手のひらに送る魔力を止めてください」

言われて、魔力の供給を止めるイメージ。

しばらく火の玉は燃え続けたが、やがて魔力が切れたのかふつと消えた。

「魔力を止めてもあれだけ燃え続けるなんて……」。

「いったいどれだけ魔力を送り込んだんですか……」

「魔力供給をやめても、すでに送った分ですばらく燃え続けるのか……」。

「まじで魔力制御を学ばないとやばいな……」

「ですね……。まずは身体強化とか、周りに害のない魔法を使って慣れましょう」

「はい……」

はじめてのまほう、大成功かつ大失敗。

先生のコメント

魔力制御を勉強しましょう。

そのまま、魔力制御の練習で訓練は終わりを告げた。

いや、戦闘訓練がなくてよかった。

隊長さんに聞いてみると

「危なっかしくて許可できません。

下手したら相手が死にます」

だって。

王国に対して魔法攻撃が可能かどうかの検証はまた今度ってことだな。

5：書庫と発見

訓練も終わり、夕食も終えた。
寝るまでは自由時間だ。

当初の予定通り、書庫でいろいろと調べることにした。

あのにつきクソ第1王女サーシャはいなかった。
ちっ、いたら魔法の実験台にしてやろうと思ったのに。

ええ冗談ですよ。

腕輪使われるかもとか考えたら怖いもんだよ。

「ライト」

テキストに光属性ライトの魔法で明かりを確保。

自主練で分かった事だが、オレは無詠唱と詠唱破棄ができる。
何にも言わないで魔法発動が無詠唱。

魔法の名前だけで、長つたらしい呪文を言わないのが詠唱破棄な。

理論的にはだれにだって使える『技術』らしいのだが、詠唱にな
れてしまったこの世界の魔法使いには難しいようだ。

魔法は魔力が変化したものであり、呪文は変換装置。

その変換装置は魔力が魔法に効率よく変わるよう、術者に強くイ
メージさせるためのものらしい。

だから、極論すれば魔法を強くイメージさえすれば魔法は呪文な
しで使える。

しかし、それをするには生まれたときから魔法を見まくって目に焼き付け、強固なイメージを得る、くらいはしないとだめっばい。
そんな面倒なことするくらいなら詠唱するよ、とのこと。

さらに驚いたことに、詠唱はテキストでも魔法は使えることがわかった。

例えば、ファイヤーボールなら、火よ、球となりて燃える。ファイヤーボール と唱える。

しかし、火よ、球となりて敵を燃やし尽くせ。ファイヤーボールでも発動する。

後者は少し火力が上がるようだ。

上級呪文が強いのも、詠唱が長い分イメージが強固だからだろう。

つまり、魔法はイメージ次第で強くなったり、弱くなったりする。

そして、日本でゲームやアニメを見ていたオレは魔法のイメージが楽にできる。

詠唱しなくても、十分な威力が出るほどに。

これが勇者補正の一つ、詠唱破棄&無詠唱の正体らしい。

確かに、なにも言わないで魔法を使う「無詠唱」はできるにはできるのだが、失敗することも多かった。

そこで、魔法の名前だけを言う「詠唱破棄」にすると失敗はなくなつた。

やっぱり頭の中だけでやるのは難しい。

「いつかは無詠唱で使えるようになりたいもんだな。奇襲にも使えるだろうし」

しかし、隊長さんに聞いたところによると、優秀な魔法使いになると、相手の放つ魔力を感じられるため奇襲は通用しにくいらしい。

それに、熟練の戦士になると、殺気＝魔力を感じ取れるものもあるのだとか。

「どんだけだよ。殺気とか、クソ剣の戦闘経験をもらわなかったら一生わかってねえって。」

「でもま、王族にそんな能力はないだろ。んなことより、そもそも王族に魔法が効くかどうかを検証しないと」

全部無効なのか、それとも殺意があるものは無効なのか。

おそらく後者だろう。

治癒魔法がきかないからな。勇者の持つ無限の魔力による回復は捨てられまい。

おそらく、剣も拳も魔法も設定は同じ。

ソフィアの頭を撫でられるってことは、おそらく全部無効ではあるまい。

殺意の有無がキーだと思っている。

王族を殴れるか、魔法が効くか（治癒系、攻撃系、両方）を検証

しなければ。

明日ソフィアでためそう。

「それ以外になにか……………」。

あ、腕輪の契約強制よりもつよい魔力で、強制力を無効化できないかな……………」。

腕輪の与える痛み、王族への攻撃不可。

これらも魔法であるのなら、それを超える魔力や魔法をぶつければ壊せるんじゃないか？

「うかつには試せないけど…………」。調べてからにしよう

たとえ壊れても、その後に捕まって対策されたらやっかいだ。

爪はなるべく隠して研いでおかなければ。

「さてさて、そんなじゃ切り替えて歴代勇者についての本と魔導書を探すか」

〜1時間後〜

「見つからねえ…………」。

この蔵書量できちんと整理されてねえとかバカかよ

アキラの身長ほどの本棚がずらーっと並んでいる。

学校の図書室の二倍くらいはあった。

なのに、きちんと整理されていない。

よく使われる内政関係、法律関係、魔物の生態関係、魔導書関係は整理されている。

しかし、歴史書や著名人の本、だれのかわらない日記、数十年前からの貴族の領地の報告書。

それらのあまり使われない本はテキストに開いてる場所に突っ込まれているのだ。

火、水、風、土など、この国にも使い手のいる魔導書は見つかった。

だが、初心者用の入門書、光属性、闇属性、派生属性、混成属性の魔導書は見つからない。

なくてもイメージはできるのだが、やはり手本がほしい。

「あーくそ、どうやって探せつつうんだよ。

図書館の書籍検索とかなんて便利だったんだ……」

検索したい本の情報を入力すれば、それがどこにあるのか捜しだす便利システム。

あれ考えた人は天才だ。マジ便利。

そんな風に、元の世界の技術に思いをさせていると。

「おおおっ!?!?」

予想外の効果が現れた。

AR技術のような、半透明のスクリーンが虚空に映ったのだ。

そのままきよるきよるとあたりを見回すと、ピピッ！と音がする。見ると、スクリーンの向こうに映る、とある本棚の一部分に○がついていて、そこから線が伸び、『光の魔導書』と書かれている。

「マジであつた！すげー！」

その本棚まで行き、○で囲まれている本を手にとると、「光の魔導入門」と書かれている本。

それならば、と魔力を集めたまま、今度は明確にイメージする。望むものに○で囲み、その情報を表示するスクリーンビジョンを。

「よし、できるな……」

やはりできた。そのビジョンをくつつけたまま書庫をうろつく。視界に入ると、音とともに○が囲まれた望みの本が見つかる。検索項目を増やすこともできた。

「見えないところにも○がみえるとは……」

積み上げられた本の山に埋まった部分、目では見えない部分にあるモノでも、検索項目にヒットすれば○とともに情報が表示された。検索項目に隠し通路、とか入れたら城内探険が楽しいことになるかもしれない。

そんな風に、便利な魔法のおかげで書庫の搜索はグンと効率があがった。

「これが魔法創造なのか……？」

サーチ と名付けたこの魔法。

検索項目に入れたモノを搜しだす。

抽象的な内容でもOKの便利な魔法だ。

「いや、決めつけるのは早いか。

同じ魔法があるかもしれないし。

魔法関係の本を読めばわかるだろ」

ほくほく顔で、見つけた本をすべて持ち出し、自室として与えられた部屋に戻ることにした。

てれれ

『アキラは魔法理論、魔法の未来予想、光の魔導入門、闇の魔導入門、火、水、土、風の魔導書、ペルヴィアの勇者上下巻（ノンフィクション小説）を手に入れた』

6：読書とこれから

早く目が覚めたので、サーチを使って遊んでみることにした。結果。

サーチ マジ使える。

敵、で検索すれば敵がわかる。

さらに、マップ機能を追加してみた。

出てくるスクリーン、その右上に全体のマップをつけ、生物の存在や動きを光点で示すマーカー機能もつけた。

おかげで城の中が手に取るようにわかる。

ちなみに、緑が仲間、赤が敵、中立がオレンジの光点というマーカーになっている。

そのマップでもって、周囲を見ると

「　　ってまあ、見事にまっかつか……」

敵だらけ……。

城内マップに倍率変更しても、まっかつか。あってもオレンジくらいだ。

視界内の対象を直接見た場合、名前や武装の情報が表示されるようにしてあるが、マップ上は光点だけで名前などの情報は表示されない。

名前を表示するところじゃこちゃこちゃになってしまうので苦肉の策だっ

た。

そこで、マップ表示を街に向けると、オレンジオンリー。まだオレという新勇者の事は告知していないようだ。知らないからこそ中立。

勇者には友好的かもしれないが、オレという個人についてはどちらでもないからだ。

「民衆への告知は、訓練が終わり次第、ってことなんだろうな。ある程度強くなってからでないと、勇者として見られないわけだし」

おっと。話を戻して。

さらに、サーチ にロックオン機能をつけた。

補足範囲内のマーカーに対して、任意でロックオン、遠距離狙撃できる。

ちなみに、補足範囲は魔力の波が広げられるだけ。

魔力無限チートの勇者にとっては、それはもう補足範囲無限と同義だ。

これでマップ内にいる敵は一気に殲滅できることになる。

優秀な魔法使いは、魔力の波を検知すると同時にとっさに全方位障壁でも張れば防げるかもしれないが、それ以外の敵はいきなり襲い掛かってくる魔法に殲滅されるだろう。

急に魔法が襲い、逃げても追尾されるのだ。防ぐしか手はない。

「勇者の魔法が防げるなら、な……」

これがあれば、夢物語じゃなくなってくる。

1人VS1国という、荒唐無稽な戦争が。敵以外、城や一般市民を一切傷つけることなく、一瞬で決着がつくかもしれない。

「侵略戦争とかに便利すぎるな……。楽しみだ」

そして、最も大きな収穫があった。

「王族に攻撃魔法は無理、か……」

ロックオンはできる。

だが、試しに小さな水鉄砲くらいなイタズラレベルのウォーターボール撃とうとするとERRORの文字が表示されたのだ。

サーチ・ロックオン
無害な魔法は向けられるが、攻的な魔法は向けられない。

「これは格闘でも、他の武器でも無理だと思ったほうがよさそうだな……」

ベッドにぼすつと沈み込む。

思わずため息をついてしまった。

痛みを強弱自在に与える呪文。攻撃、攻性魔法は通用しない。

奴隷に対する主人のなんてチートっぷり。

勇者のチートなんて目じゃないぞ。

「城の制圧はできても、クソ王を殺す方法がない……」

光明がさした道の先が、すっぱりと途切れている。

「はあ……………落ち込んでてもしょうがないか。

昨日見つけた本でも読もう」

各魔導書はイメージの手助け程度と割り切って、斜めに読み流していく。

魔法の名前、その効果だけで十分だった。

おかげで全属性の魔法を軽くだが使えるようになった。

魔力制御が甘いせいで、威力が大きすぎたり、極大すぎたりしたが、そこは課題だな。

ちなみに、小さくはならなかった。

勇者補正のせいで持っている魔力が桁外れらしい。

オレはちよつとのつもりでも、標準の2〜3倍の魔法になる困りものだ。

そして、魔法理論、という本。

これはなかなか興味深かった。

普通の魔法についての理論的なことも載っていたが、魔法としてではなく、魔力を魔力そのままとして使う技術。

つまり、魔法に属性という方向性を与えない、いわば無属性魔法が載っていたのだ。

例えば。

魔力をそのまま撃ちだす衝撃^{ショック}。

純粋な身体強化。

これは風属性の身体強化のように、風を纏うことで空気抵抗を減らし、風の鎧として防御力をあげるものとは違い、筋力、骨、神経

といった身体そのものを強化する魔法。
程度を謝ると、肉体にかかる負荷が半端ではないため、あまりつかわれない。

しかし、勇者補正を受け、常人を軽く超えた身体のおれなら、うまく使いこなせるはずだ。

あとは、魔法の体系に含まれるかどうかは疑問なのだが、気功のようなものについても語られていた。

気〓魔力とみなしているらしい。

硬気功などは、魔力による身体強化の一種だと考えられている。
そして、あらゆる魔法のどこにも サーチ は載っていないかった。
そうになると、やはり サーチ は勇者による魔法創造のたまもの
ということになる。

「魔法創造は、『魔の法則』を創るタイプの方が……。

これは嬉しい発見だな……」

しかし、そうなるとあまり魔法関連書を読むのはやめたほうがいいだろう。

イメージや発想力がこの世界の法則にしばらくいられてしまうからな。
先入観はなるべく排除した方が、おもしろい魔法を思いつく。

そして、次の本はもっと面白かった。

魔法の未来予想。

オカルト本 魔法というオカルトに対してこれはどうかと思う
が だ。

この世界のオカルト本で、「こんな魔法があったらいいな!」「」

こんな魔法がきつとあるはず！」といった内容が大半を占めている。

「これはお宝だぞ……！」

思わず笑みが漏れる。

この世界の人にとっては、役に立たない空想本なのだろう。根拠もない妄言でしかない。

しかし、「魔法創造」を持つオレなら。

「あつたらいいな」を実際に創れる　！

なので、早速。

「この亜空間創造魔法をやってみるか……」

空間魔法と時魔法に属するはずの魔法。

魔力によって空間を作り上げ、その中に物をいれても腐らない。

某猫型ロボットのポケットのような便利魔法。

空間魔法についての本が見つからなかったので、イメージで創る。失われた呪文、新呪文の創造だ。

「クリエイトルーム」

とりあえず、元の世界で済んでいた家くらいの広さを想像し、大量の魔力を送り込んで空間を創る。

15分くらい、魔力を吸われ続け、ようやく空間が完成したようだ。

魔力無限チートがない一般人がこれやったら、魔力枯渇でオダブ

ツすんぞこれ……。

「中に入る呪文はどうするか……。」

ま、ゲートオープン でいいか」

即席の呪文を唱え、現れた身長ほどの黒い扉の中へ。

真っ白い殺風景な、ただっ広い空間。

「これは……ずっとここにいたら気が狂いそうだな……。」

扉の外にでて、元の部屋へ戻る。

部屋から出たと同時、ゲートはスウツと溶けて消えるように設定した。

「じゃあ、今度は…… ゲートオープン 」

今度はさっきよりも小さな、カバン大のゲートをイメージ。

扉を固定し、消えないようにして……と。

その中に、ぽんぽんと荷物をいれていく。

かっぱらった剣、魔導書、与えられた服や部屋のタオルなどなど、役に立ちそうなものは全部いれておく。

「あとで補充してもらって、それもまた入れよう」

あらかた入れ終わって、ゲートを閉じる。

これで、城内のお宝はすべていたたく準備が整ったってわけだな。

サーチ と組み合わせれば、根こそぎかっぱらうこともできる
ぜ、げへへ。

訓練期間が終わるまで、少しずつ少しずつ、金目のものを奪って

おじい。

「じゃあ、残ったこの本を読むか」

ベッドに腰掛け、亜空間にしまわなかった本を開く。

「ペルヴィアの勇者」上下巻

ノンフィクション、らしい小説だ。

勇者に関して記された本が見つからなかったので、これを読むことに。

ストーリーはよくあるものだ。

この世界には魔王がいて。

異世界から呼ばれた勇者はそれを倒すことを王に約束。

1ヶ月ほど訓練をつけ、街やギルドで何人かの仲間を作り、この国を出ていった。

獣人やエルフ、精霊などを仲間にして、勇者たちの旅は続いている。

(ときどき、獣人やエルフに対して差別的な扱いが見られた。どうやらそういう世界らしい)

時に隣の国や獣人の国へ。エルフの里へ。精霊の王に会い、ドラゴンを倒し。

仲間を失うこともあった。

それでも勇者は魔王を倒すため旅路に行く。

そして、ついに魔王との最終決戦。

その戦いで、勇者は魔王と相討ち、双方が死んだ。

仲間たちはその勇者の戦いを様々な国で伝え、勇者は英雄として称えられた。

「よくある小説って感じか、オレからしたらただけど」

勇者の名前はジュンイチ・タナカとなっていることから、やはり同郷っばい。

彼の使う魔法はあまり参考にはならなかった。

作者自身も又聞きレベルなのだろうし、特殊な魔法を使っているような描写はなかった。

「勇者の子孫がいたら、会ってみたいな……。
もう何百年も前の事っばいけど」

本当にノンフィクションなら仲間の内の一人と恋仲になっていたようである。

その人との間に子供がいてもおかしくない。

そして、アキラが一番気になったことは。

「クソ剣が出てこないな……」

ペルヴィアで召喚されたのなら、与えられているはずである。それが無いということは、このジュンイチ君は善意で魔王討伐に向かったのだろうか。すごいな。お人よしめ。

「これが最初の勇者みたいだから、その後の勇者が暴れたりしたのかな……。だから、クソ剣使って奴隷勇者契約を結ぶようになったとか？ その勇者さんの気持ちはわかるが、後のやつのも考えてくれると嬉しかった……」

パタン、と本を閉じて亜空間に放り込んでおく。

「クソ剣の収穫はなし、か。今度書庫に行ったときは奴隷契約とかクソ剣についての本を探すかな」

勇者関係の本はハズレだったからな。クソ剣についての情報を集めないと。

「最初の勇者と同じ道をたどるなら、一ヶ月の訓練ののち、魔物討伐や戦争にかり出されることになるだろうな。

それまでにこの国の最強程度を軽く倒せるくらいに強くなるぞ」
なによりも、まず力が必要だ。

「今後の方針としては、力を出し惜しみして、訓練期間を延ばす。与えられていない情報、王家の不利な情報を集める。

魔法、武器の上達。装備の確保。あとついでに金目のものも。国から脱出するための、城内や周辺地域の地形を完全把握。

やらなきやいけないことは山積みだな」

こんこん。

「勇者様。起きていらっしやいますか？」

今日もスフィアが迎えに来た。

深呼吸して、敵意をおしこめる。

「ああ、起きてる。入っていいぞ」

「おはようございます。」

今日は斬りかからないんですね？」

「おいおい、まだ疑ってたのか。しょうがないっちゃしょうがないが……。」

昨日も打った通り、真面目に契約を果たすさ。報酬はもらうがな」

大嘘だがな。

「お父様からも、報酬の件は了承していただきました。」

最初は渋っていたんですけど、頑張つて説得しました！」

ほめてください、とばかりに満面の笑みを浮かべるスフィア。

「そうか。ありがとな」

その頭をなでる。

スフィアはくすぐったそうにしながらも、やはり嬉しそうだった。

その姿に、少しだけ和むが、頭を振ってそれを追い出す。

「……？」

今日も訓練です。がんばってくださいね。

昨日ほどは厳しくしないよう、言っておきますから」

「せいぜい訓練頑張るぞ。

契約から解放されるためにな」

せいぜいオレを鍛えてくれ。

おまえらを食い殺す、牙を研いでくれ。

一ヶ月後を目安に。

いずれくる、勇者のお披露目の日を、この腐った国の命日にしてやるつ。

6：読書とこれから（後書き）

アキラくんの方針決定。

細かい所はこれから煮詰めるんだ！

7：VS魔物（前書き）

サラッとバトロうと思っていたのに、
ついつい筆が乗って長くなり
ました。

7：VS 魔物

「そろそろ力もついてきたことだろう。」

一度、魔物と戦ってみるのはどうだろうか？」

召喚されてから半月あまりが経過したころだろうか、騎士団長サマが余計なこと120%で構成された妄言を発してくれやがりました。

「そうですねグレン団長！」

勇者とやらの力と度胸試しに最適ですっ！」

あ、今のオレじゃないよ？

こんなキラキラした目でクソ男を見るわけないじゃん。

彼女はオレに「私の敵だ」発言をしゃがった、団長との勝負を邪魔したあの槍女だ。

グレン直属の副団長らしく、あふれる好意が丸わかりだ。

騎士団には、気づかない団長とわかりやすい副団長をなんとかつつけようとしているやつらもいる。

「いいわけないだろ……。まだオレは騎士団の中でも中の上くらいなんだぞ……？」

簡単に殺されるんじゃないか？」

能ある鷹は爪を隠す。

かっこいい諺を、オレは今実践中なわけだ。

訓練期間をなんとか伸ばすため、模擬戦ではあえて力をセーブしている。

勇者の高すぎる身体能力制御の修行にもなるので一石二鳥だ。

そのおかげか、騎士団長に勝ったのはまぐれということになった。副団長サマが嬉々とした顔で言いふらしまくってくれたしな。

よって今回の「勇者はあまり強くはない」、一部の聡い奴には、「勇者は力の制御ができていないのでは？」ということになっている。

(オレがわざとテメエに負けたとは知らず、団長の仇をとったぞー、とか言ってた姿は滑稽だったな)

ただ、にやにやと見下すような笑みを浮かべるのだけは、本気でぶん殴ってやりたい。

女？いやいや、こいつは謁見の間にいたヤツだから、人じゃないって。

それに、オレは男女平等主義者だから。

女は男を殴ってもいいのに、男はだめってそりゃないだろ。

力の差？女にもゴリラみたいなのやっはいるだろ？こいつがそうだ。

「君は自分を過小評価しすぎるくらいがあるな。

仮にもわたしに勝ったのだから、堂々としてもらいたいね」

「なにを言います団長！

こいつは私にも勝てないのです！団長様ときはまぐれにすぎません！」

はいはい、おまえのほうがまぐれ、というか道化ですよー。

「あー、うつぜ……」

「なんだ？」

やべ、聞こえた。

「なんでもない。魔物と戦う、ってどこで？
外壁の向こうにでも狩りに行くのか？」

「そうではない。一応停戦中とはいえ他国に勇者のことを知られてもまずいからな。

強くなる前に、と攻めてこられてはこまる。

今回は調査のために捕えておいた魔物と戦ってもらおう」

「もう戦うことが決定しちゃってないか？なあ？」

「うるさい。おまえはつべこべいわずグレン団長の言つとおりにすればいいのだ！」

「くっそ、こいつにだけは勝つとけばよかったか……？だが、トツ
プ、ナンバー2の両方に勝つたらまぐれとは言いにくくなる。

我慢、我慢だオレ……」

拳を握りしめ、顔面ぶん殴って陥没させてやりたい衝動を、なんとか、なんとか抑える。

いいさ、魔物相手に発散してやろう。

「では、わたしは準備をしてくる。王にも一言申し上げねばなるまい。」

一刻後、訓練場に来るがいい。ではな」

「ふっ、おまえなぞ無様に負けてしまえ」

二人はついぞオレの言葉など聞かずに行ってしまった。

「こっ、なんていうか……。」

ちよいちよい、見えるよな。勇者への態度の差ってやつが。

知ってるやつと、知らないやつで」

今までのより遅咲きの勇者（このぐらいのレベルにとどめている）とわかってから、より露骨になりやがった。

当初の予測通り『知っている』連中、団長、副団長や隊長、副隊長などの上のやつらがそうだ。

たまに調子に乗った武官一族のお坊ちゃんとかいたが、そいつらには負けてやんなかった。

うざい上に弱いから。

お坊ちゃんてやつは、力もないのに人を口撃する箇所だけは見逃さない目をもってやがる。

もつとないのか、見るものは。

「気をつけるのはそいつくらいでいいだろう。」

心の内を悟られないよう、うまく演技しないとな」

念のため、精神に作用する魔法の対策もしている。

「まあ、どうせ全員ぶっ殺すんだ。攻撃不可じゃないやつらなんて

勇者の敵じゃねえ」

無関係？

違うだろ。

本来なら、オレこそ無関係だ。

この国どころか、この世界に。

なのに、オレにテメエらの尻拭いをさせる？

それが当然のことだと思っっている？

おかしいだろ？

なのにこいつらはそれをおかしいとは思っていないのだ。

確かに少数派には、オレに感謝してくれるやつもいる。

だが、そいつらも含め、この国の馬鹿どもは「勇者は国に尽くすもの」という見方をしている。

「そういうやつらは反省しない。

オレが暴れても、『今代の勇者はなんてひどい』とか言って次を召喚しやがる」

勇者の召喚儀式を行っていた神殿をぶっ壊すことも、目的としてうかね。

書庫で調べたところ、あれは王族の今までの交配によって得た多量の魔力とそれを増幅できる日付という条件の元で行われる。

必要なのは、中級魔法使い100人分の魔力と星の配置、そして神殿の魔法陣。

最初の勇者を召喚したのはもう何百年も前。

魔法陣はそのころから変わっていない、というか変えられない。

魔法陣の構成方法を知る人間はすべて死に、もはや失われている。

「調査して、再現できないよう跡形もなく消してやる」

「アキラさん！魔物との試合ですよ！」

「なんでオレをよびに来るのは毎回スフィアなんだ？
本当にヒマなのか？」

この半月で、スフィアとはそれなりに打ち解けた。
オレに対して、普通に味方として話をしてくれるのは彼女だけだ。
王族であることに、召喚主であることにしこりはあるが、クソ王
やクソ第1王女に対するものよりは小さなものだ。

「むー！応援しようと思ってきたのに、そういうこというんですね
っ！」

アキラさんなんかとても苦戦すればいいんです！」

スフィアにだけは、アキラと呼んでもらっている。

最初の時は人から呼びかけられることを久しぶりと感じてしまっ
た。

「苦戦て……。一応勝ってはほしいわけね」

「だって、捕獲したとはいえ、魔物相手ですよ？」

騎士団や魔法部隊のように手加減も寸止めもしてくれませんか」

「やれるだけのことはやるわ」

見直されない程度に、な。

「では行きましょう。今回は多くの人が見学に来ますから、緊張しないください」

「はあ、また見世物になるのか……」

今回はおそらく、勇者の仕上がり具合の途中確認。
クソ王なども観戦に来るだろう。

優雅に酒でも飲みながら、何分で倒すか賭けでもしているかもしれない。

「事故に見せかけてぶっ殺してやろうか……」

「なにか言いました？」

「いや、なにも。いいから行こうか。そろそろ時間だ」

ダメだな。それではオレの気が済まない。

「拷問魔法、創っておこうかねエ……」

ニタア、と口角を歪ませる。

歴代勇者の分まで、ツケを払ってもらおうか。

せいぜい、今日の試合を眺めて油断しててくれよ。

～訓練場～

「ではあ！これより勇者VSオーガ&ゴーレムの試合を開始します
」！」

司会はいつもの下っ端兵士。

だが、今回はクソ王をはじめ国の重鎮どもも観戦しているからあまりふざけてはいないようだ。

やつらは安全圏にいて、ゆうゆうと観戦している。

オレの扱いは完全に、コロッセウムでのグラディエイターだな…
…。

「あれが、オーガ……。モンスター、か……」

オレの正面、訓練場の入り口に置いてある檻の中にソレがいた。
身長はオレよりも一回り大きい。

たくましい筋肉、鬼の角、そして、ギラギラとした目つき。

武器はメイス。騎士団が与えやがったらしい。

見ただけでわかる。強いな……。

そして、檻の外には土色のゴーレムが3体。

オーガだけでは足りないだろう、と魔法部隊副隊長一（土、水の
使い手）が造ったそうだ。

試合開始とともに、副隊長がオレを殺す気でやれという命令を送
り込む。

一応、緊急停止はできるようにしてあるらしい。全然安心じゃね
エけど。

直接操作しないのは、訓練とはいえ初の魔物相手なのだから、と
いう気遣いなんだって。

じゃあゴーレムなんていらねえよ。まずそこに気イ遣え。そう言ったら「魔物は群れできますから、対複数戦闘は基本です」だって。

正論だけど、ねえ……？もっと弱いやつらじゃね、群れで来んの。

オーガもゴーレムも、騎士団では上の中レベルが数人がかりで攻略するレベルの相手。

「でも、やるしかないか……」

クソ剣を実体化。

それをだらんと下ろしたまま、オーガとゴーレムを視界におさめておく。

「ではっ、はじめ！」

オーガが檻から解き放たれ、火ぶたが切って落とされた。

「ゴオオ！」

最初に動いたのは一番右にいたゴーレム。3体いるから右から順にゴーレムA、B、Cと名付けよう。

ドスドスと大地を震わせ、一直線に襲い掛かってくる。

「ゴーレムつてのは拠点防御にこそ真価を発揮すんじゃないのか？
なのに向かってくるとは」

今回は術者の操作がない。本能のままに襲い、大振りを繰り返すのみ。

いくら攻撃力が高かろうが、当たらなければ意味はない。

振り回される茶色い拳を軽く避ける。

そのまま、すれ違いざまにクソ剣で切りつけた。

ガキッ！

「ちっ、かてえじゃねえかこのヤロウ……」

土を凝縮させて硬さを増しているのか？

「こりゃ、1割じゃなく3割くらいの力を出すべきか……？」

後ろから襲いくるゴーレムB、Cを見ないで避ける。

すでに訓練場の戦闘領域に魔力の波を広げている。

気配だけでも察知できないことはないが、細かな動きがわかるこれは便利だ。

「苦労して魔力制御覚えたかいるってもん、だっ！」

さっきよりも力と速さをこめ、振り返りざまにゴーレムBの左足を刈り取る。

バランスを崩したゴーレムBは隣にいたゴーレムCにもたれかかった。

それを広げた魔力で感じ取りながら、振り下ろされるゴーレムAの腕を切断。

ゴーレムAの腕と、ゴーレムB、Cが倒れて土煙を上げる。それに紛れ、一時間合いを取る。

「オーガは動かないのか……？」

襲ってきたのはゴーレムのみ。オーガは試合開始の位置から動いていない。

「オーガはBランクの魔物だったはず。

もしかして、ゴーレムとは共闘しないのかもな。仮にも自分を捕えたやつらだ。

オレもゴーレムも、オーガにとっては敵なんだから」

自分を納得させると、土煙の向こうに起き上がってくるゴーレムに目を向けた。

一応、オーガに注意は向けておくが、まずゴーレムを先に片づける！

「はあっ！」

魔力による身体強化、風魔法による風の鎧と空気抵抗の減少。それらを同時に、魔法部隊の平隊員程度の魔力で行う。

この半月間、訓練時間外もずっと自主練してきたんだ。魔力制御と歴代勇者の戦闘経験を自分のものにした。

そうして得たのは　　速さ。

魔法による速度上昇。鍛錬による無駄を省いた最適行動。

のろいゴーレムの動きなんて、止まって見えるぜっ!!

一瞬で背後に回り、クソ剣で薙ぎ払う。

胴で上下真つ二つにしてやった。

「次っ！」

残った2体のゴーレムに切りかかる。

やはり大振りな拳をかくぐり、同じく上下に分断する。

「っ!？」

直観とともに魔力の波が動きを感知。
横つとびに跳んだ。

「さつき切ったはずだろ……?」
なんで動いてるんだあのゴーレム」

ゴーレムA、B、Cは変わらず動いている。

「……いや、色が濃いな。地面と同じ、乾いた土色だったはず。
副隊長がなにかやったな……?」

一度、軽く切りかかって、すぐに間合いを離す。
腕を切りおとしたはずだが、ズズツとうごめきくつついた。

「ふん、泥、か……。副隊長は水と土属性が使えたな。
土で造ったゴーレムに魔法で生み出した水を混ぜたのか。

混ぜてから放つんじゃない、放つたものを混ぜたわけだから混成魔法じゃないが、いい発想だ」

なら、どうするか。

元の世界のゴーレムはなんか文字をかけば死んだはずだが、こっちとは違うだろ。

書庫で読み漁った本や、勇者の経験による知識を思い出す。

「……どっかに核があるわけか。それさえ壊せば復活はない」

探し物にはうってつけの魔法がオレにはある。

「サーチ」

軽くつぶやく。

検索項目は『ゴーレムの核』。

それだけで、スクリーンを通した世界に映るゴーレムのある部分に○が表示された。

ゴーレムAは右目。ゴーレムBは心臓。ゴーレムCは喉、か。

「ロックオン。」

光よ、其はなによりも速く、貫く矢なり。アローレイ」

詠唱破棄はしない。

歴代勇者と違ってできないと思わせているのだから、使うわけにはいかない。

詠唱と力強いイメージによって、無形の光は形を得る。

普通のアローレイよりも、速さと貫通力を詠唱で強化してあ

る。

ヒュッ

！

音は3つ。

すべて一撃で、ゴーレムの核を撃ち抜いた。

泥のゴーレムは核を失ったことでまとまりを失い、どろどろと崩れていく。

「来たか！」

ゴーレムが崩れ始めるのとほぼ同時。

敵を倒して、気を緩めてしまう絶妙のタイミング。

オーガがメイスを振り上げ襲いかかってきた。

「オレにはそんな隙ねえけどなあ！」

クソ剣で受ける。

「重いな……。さすが鬼。身体強化かけてなかったら勇者でも互角くらいか」

「ガアアッ！！」

力任せに押されるメイスを、クソ剣を操って流す。

「サーチ」

オーガの弱点。どこだ……？

「人間とあんまかわんねえ。角が入ってる以外は人体の急所と変わらねえな」

空気をぶち抜き、唸りをあげるメイスをさける。

初めての、本気の戦闘。

騎士団の訓練とも、緊急停止付きゴーレムとも異なる、殺し合いの空気。

歴代勇者の経験とも違う、肌で感じる殺意と凶器。

「くそっ、ビビってんじゃねえよ」

震えそうになる心を叱咤する。

本気の戦闘だが、まだ実践じゃない。

横槍のない訓練場。予想外の第三者の乱入もない、安全な場での試合に成り下がった殺し合いだ。

「殺し合いには違いはないけど、なっ！」

足払い。

かたい。が、勇者と強化の力で無理矢理押しとおる。

態勢を崩した。

当然、致命的な隙は逃さない。

「とつとと終われ!!」

メイスを持っている手首を切り取る。

予想以上にかたかったが、さっきのでそれは知っている。ゴーレムに対した時以上の力を込めた。

「グガアアア!!」

オーガの悲鳴。

「恨みはないが、死にやがれっ!」

空気を切り裂くクソ剣。

オーガの首が飛ぶ。

「はあっ、終わった……」

吹きだす血を避け、クソ剣を杖のようにして支えにする。

「試合終了!」

勇者様の治療とオーガの回収を行え」

訓練場に声が響き渡り、ぱらぱらとまばらな拍手が降ってきた。

初めて、人型の生物を殺した。

なんの恨みもなかった分、クるものがあるな……。

オーガの死体をちらりと見て、訓練場を後にした。

あいつも、オレと同じく、捕まって、いいように使われた。

殺したオレが言うのもおかしな話だし、知能が低いことで有名なオーガに言うことじゃないかもしれない。

でも。

おまえの分まで、観覧席で眺めているクソどもに思い知らせてやるよ。

7：VS魔物（後書き）

初めて拙作を読んでいただいた感想をいただきました。
ありがとうございます。これはうれしい。

8：疑問と改善（前書き）

いつの間にかやらPVが累計70、000アクセスを超えていた。
びっくり……。ありがとうございます。

8：疑問と改善

やりすぎた。

能ある鷹は爪を隠す作戦のはずが、ゴーレム3体と改造オーガをあっさり倒してしまった。

「調子に乗ったって言うか、初の殺し合いで心の余裕がなかったって言うか……。」

でも、改造オーガとか聞いてねえよ……。言っとけて」

そう、改造オーガ。

本来のオーガはランクB。確かに強い魔物だが、あれほどじゃない。

筋力は勇者に匹敵するほど強くない。

オレの3割近い力で切りかかって、かたく感じるほどその皮膚はかたくない。

ゴーレムをオレの力を計るための罠にし、ゴーレムを倒して気を抜いた瞬間を狙い澄ますほどの知能はない。

3つ目に関しては、あの時はゴーレムへの敵意やランクBの持つ本能かとも思った。

だが、3つも並ぶと個体差や本能で説明をつけられないほど異常だった。

そこで、毎度おなじみ サーチ さんのご登場です。

回収されたオーガの死体を見に行き、調べた。

あの時はオーガと紹介され、見た目も資料で見たのと変わらなかつたから名前の欄を気にしていなかった。
弱点や急所の検索結果しか見ていなかったのだ。

改めて、オーガ本体の個体情報を調べる。

検索結果。

名称：改造オーガ。

種族：オーガ亜種。

特記事項

ペルヴィア王国によって、近隣の洞窟討伐任務に向かった騎士団がオーガの調査目的として捕えた。

あらかじめ調査を済ませた後、勇者の力試しとしてその身体を魔法の調整を受ける。

筋力は素体の約3倍。

神経系の伝達速度約1.5倍。

知能約2倍。（元が低すぎるのでそう高くはなかった）

皮膚の硬度約3倍。

サーチ によって知りえた情報はまだまだあったが、それ以上は見たくなかった。

「おぞましいな……」

この後、このオーガは解剖されるのだろう。

どうせ殺すのだから、勇者の力試しにしようという魂胆だったらしい。

「……………サーチ」

自分に サーチ をかける。

検索結果。

名称：東城アキラ。

種族：人間。

「勇者」。

能力：身体能力限界突破。 成長限界突破。 魔力無限大。 魔法創造。

特記事項：隷属契約の腕輪を装備。

e t c . . .

ズラ ツと表示された情報を眺めていく。

「オレはなにもされてないみたいだな……。よかった……」

クソ剣を受け取った後、意識を失ってから目覚めるまでになにかされたのではと思ったが、そこまで腐ってはいなかったらしい。

本当によかった……。

「このツケはしっかり払ってもらおうとして、これからがヤバいな」

改造オーガをあつさり倒してしまったのだ。

あれが改造オーガであることを知っているヤツには、オレの強さがバレた。

近隣の魔物討伐ならいいが、戦争にかり出されるのは御免こうむる。

幸い今は停戦中。

勇者が一騎当千になったら攻め込む腹積もりかもしれないが、そのころにはこの国はない。

なくしてやる。

さあ、書庫でいろいろ読み漁って、後は自主鍛錬だ。

くアキラの部屋く

訓練場での殺し合いから3日。

この3日でわかったことは2つある。

まず1つ目。

元の世界に帰るのは絶望的だということ。

書庫を見つけてから、契約解除よりもさきに送還の方法を調べていた。

元の世界に帰っちまえばこんな腕輪はアクセサリーで通用する。

さて、魔法陣の構成を知るものが皆死んで、失われたのはすでに調べた。

これ以上は本だけでなく、実際に見てみないと無理。

そこで新たに造った存在を消す（物理攻撃、魔法攻撃無効。臭いも気配もなくなる）魔法 ステルス を使って儀式の行われた部屋に忍び込み、サーチ で魔法陣を調べた。

結果、あの魔法陣は召喚専用であり、送還は行えない。

召喚だけならあそこまで巨大な魔法陣はいらないが、勇者に特殊能力を与える魔法陣がアレを大きくしている。

魔法創造を行おうにも、下手すれば次元の狭間に取り残される可能性が高い。そんな危険はおかせない。

魔法陣を壊そうと思ったが、大騒ぎになるので今は我慢した。

そして、2つ目。

それは サーチ についてだ。

今現在、オレの創った魔法の中で亜空間創造に並ぶ便利魔法。

そのマーカー機能。

マップ上に存在する見方、中立、敵ユニットを緑、オレンジ、赤の光点で示す サーチ の昨日の1つ。

ここで、まず復習しておきたい。

魔法創造はイメージだ。東城アキラが『こうあってほしい』と願ったイメージの結果『そういう』魔法ができる。

しかし、イメージが曖昧だった場合、どうなるか。

一度試してみたことがある。

結果、「なんか細かいところはよくわかんないけどいい感じ」に調整される。

おそらく、無意識下のイメージのたまものなんだろう。

さあ、マーカー機能に戻る。

マーカー機能を創った本質、オレのイメージは「ユニットの居場所と動きの把握」ではなく「城内の敵の居場所と動きの把握」だった。

思い出してみると、城内のマーカーが真っ赤つかというのはおかしいのだ。

中立はオレンジ。実際に、オレのことを知らない街の人間はオレンジだった。

おかしいじゃないか。

オレのことを『今代の勇者』としてしか知らない人間は城内にもいる。

謁見の間にいなかった人間がそうだ。

それに、謁見の間にいたヤツらにしても、オレの事を奴隷だとは思っても敵だとは思っていないはず。

道具なのだから。意志のない道具に敵意を持つヤツはいない。

つまり、城内の人間はオレンジで表示されるべきなのだ。

中には地位を脅かす勇者が嫌いな騎士団や魔法部隊のやつもいるだろうが、少数派のはず。

これに気づいたのは、昨日の事だ。

魔法陣のサーチを終えて少しヒマになった後、改造オーガをけしかけた報復に城内の宝物をいくつかつかっばらおうと思ったのだ。ついでに前に思いついた王族用の隠し通路とかないかと探してみようとも思った。

そこで、マーカー機能を使ってだれにもバレないようにスニーキングしていたのだ。

ステルスを使えばどうと歩いても認識されないのだが、それじゃあ楽しくない。

気分はスネークさん。レッツスニーキング！

そして、スフィアに出会った。

スフィアのマーカーは オレンジ。

中立。

以前、サーチにマーカー機能をつけたとき、最初に城内の間全部をマーカーで見た。

真っ赤っか。

つまり スフィアのマーカーは、赤だった。

そりゃそうだ。いきなり切り殺そうとしたのだし、敵意を持つてるだろう、と思った。

今中立だということは、敵意はなくなったのか、と思った。

と同時、疑問がわいた。

オレが敵意を持っている相手が赤マーカーになるのか。
オレに敵意を持っている相手が赤マーカーになるのか。

これはどっちがいいとかではない。

前者は、遠距離からのロックオン 狙撃の際、きれいな相手だけを攻撃できる。

敵意はあるが、ライバル関係や利用し合える関係なら殺しまではしなくていいからな。

デレ期に入っていないツン100%の子だって、後者なら赤だが前者なら緑だ。

後者は、表面上はにこやかだが、腹のうちにある敵意がわかる。

これで詐欺などに会う確率は激減だ！

2つの可能性に気づいたので、この2つのモードを切り替えられるようにした。

すると、今まではオレが敵意を持っている相手が赤、前者の設定だったことが判明。

それを変更し、今はデフォルトではオレに敵意を向ける相手が赤、にしている。

さらに追加設定で、魔物については灰色で表示するようにもした。

ちなみに、変更した設定において、スフィアはオレンジのままだった。

あと、城内のほとんどがオレンジに変わった。

みんなオレを歯牙にもかけてない。

演技がうまく行っているようでうれしいやら、空気過ぎてかなしいやら。

ちなみに、赤を見つけたので名前を表示してみた。

リーゼロッテ・フラウ。

「だれ？」

調べてみたら、あの騎士団長至上主義の槍女でした。

「……………」

さあ、契約についての調査と、宝物庫漁りと、王族専用秘密脱出経路探しでもしようかねー」

忙しくなりそうだ。

そう思ってたのにつ……！

「今日、リード王からお話があるそうだ。

一刻後に謁見の間に来てよ」

改造オーガと戦う原因をつくりやがったクソ騎士団長が、食堂で朝食もぐもぐやってるオレにそんなことを言ってきた。

ちっ、なんだよクソ王が。こっちにだって予定あんだぞ。

（謁見の間）

「ここ、王都ペルヴィアより東に1日ほど行った先にある、ノーマという村から『山に恐ろしい魔物がすんでいる』という報告が来ている。

本来ならば村からギルドへ依頼するなり、騎士が討伐に行くのだがな。

「ここで勇者殿に実戦を経験してもらいたいと思っただ」

「つまり、山へ行つて、姿も、そもそもいるかもわからない魔物を討伐せよ、と？」

「村人の不安を取り除くのも勇者の役目ではないかね？」

謁見の間に行ったオレがやたら偉そうな宰相っぽいやつ（食べないタヌキって印象だ）に慇懃無礼にそう言われた。

言外に、拒否権などないと目が告げている。

謁見の間には事情通しかいない。ならオレだって品行方正な勇者

をやってやる必要もない。

反感は抱かせないが、素直には応じてやらん。

金を望むが、金さえ与えておけば扱いやすいオレを演じてやるう。

「路銀と報酬は？」

「は、ははは！？勇者殿は民を助けるのに金銭を要求するのか！？
これは驚いた！」

明らかな嘲笑にイラツとする。

「タダ働きさせる気とは、ペルヴィア王国も狭量ですね」

「貴様ツ！」

「そうでしょう？召喚されてこちらは無一文なのです。

武器はいいとしても、騎士団の防具では体にあっていないので買
わねばなりませんし、移動の馬や食料、盗賊に対する護衛。

そういった金があれば討伐などできません。

そんなに民を助けたいのならば、宰相ご自身で行かれてはいかが
です？

騎士を連れず、身一つで路銀も持たず。

まあ、すぐに逃げ帰ってくるでしょう。棺でね」

「き、きさまあ………！！！」

語彙がすくねえよ。貴様しか言えんのか。

しつつかし、宰相なんて国のトップレベルがこんなに挑発に乗りや
すいとは。

王は身勝手、第1王女はわがまま唯我独尊、宰相は器も小さい。

改めてみてもひでえ国だ。

「……装備や食料についての金銭ならば応じよう。だが、護衛はいらんだろう。」

そなたはオーガにも単体で勝てるのだ。盗賊如きに遅れはとるまい。

馬は城内のものを持って行け」

「わかりました。では、報酬の話をしましょうか。もちろん路銀とは別です。善意だけでは生きていけませんのでね」

「……金貨1枚でよからう」

この世界の貨幣価値は、調べたところ、

白金貨⇐金貨10枚。金貨1枚⇐銀貨100枚。銀貨1枚⇐銅貨100枚となっている。

一般市民の年収が金貨5枚くらいだ。

ちなみに、ランクBのオーガ討伐依頼が金貨5枚ほど。

つか、よからうって。

なんでおまえが決めてんだよ。

おまえ頼む立場、オレ頼まれる立場。ユーアンダスタン？

「金貨5枚。相手次第で金貨3枚までプラス。Sランクでプラス3、Aでプラス2とBランクでプラス1枚追加してもらいたい」

「なっ！」

「オーガを倒したのです。Bランクの冒険者に依頼すればそのくらいになるでしょう？」

「……………いいだろう。しかし、必ず魔物を殺してこい。牙か角か、なんらかの証明部位を持ってこなければ報酬は支払わん。くれぐれも、どさくさに紛れて逃げようなどとは思わんことだ。おまえの居場所など、腕輪がある限り容易に知れる。6日ほどで戻ってこい」

「わかっております。報酬さえいただけるのなら、尽くさせていただきますよ」

バカな宰相だ。脅しのつもりだろうが、いいことを教えてくれた。腕輪には発信機のような魔法がかかっている。情報はどんなものでも、集めておくに越したことはないのだ。

「では失礼します。」

路銀を受け取り、装備を整えたのち現地に向かいますので」

「後程届けさせる」

魔物の討伐のためってのがあれだが、この息苦しい城から出られる。いい気分転換になりそうだ。

「金を受け取って、装備を整えて向かうか。リフレッシュしよう」

8：疑問と改善（後書き）

予想外に長くなりそうなので、分割。
次は武器と防具。

9：準備

「王都ペルヴィア、城外」

「はじめてのがいしゅつ！」

路銀として金貨1枚と銀貨50枚を受け取り、勇者とバレないよ
うに、フードをかぶり、準備万端！

後をつけてくる監視役たちはそうそうに巻いて、と。

サーチ を使うまでもなく気配でバレバレ。もっと精進しなされ。

「まずは武器屋だな」

ふはは、大手を振って武器を買える。

クソ剣以外の武器を。

実は、こっそり狙える武器（スフィアがまた許してくれるとは限
らないからな）、弓でにつき第1王女の頬をかすらせる遠距離狙
撃を試してみようとしたのだが、引き切って、狙いをすました後に
矢が放せなくなった。

仕方なく腕を下ろす。

これはクソ剣の特性というわけではなく、奴隷契約のせいだろう。
主人への攻撃不可。

ま、拳や魔法が不可である時点でわかったことだけだな。

落ち込んでなんていられないぜい。

さてさて、今回は国を滅ぼすための武器ではなく、クソ剣をぶっ壊した後、王都を出て生きていくための武器をあらかじめ買って慣れておこうという目的だ。

「しかし、何を買おうか……」

日本人の心意気としては、刀がほしい所だけど、ないんだろうなあ……。

あと、銃があったらほしいんだけど、ないんだろうなあ……。

「らっしや〜い」

やる気のなさそうな店主に迎えられた。

オレが小僧だから、冷やかしだと思ってるんだろう。

「サーチ」

おやじを無視して、店内の武器を隅々まで見ていく。

攻撃力、耐久性、素材、付加魔法の有無。すべて丸裸だ！

「しょぼっ……」

大した武器はなかった。

期待して、カウンターの向こうに飾られている槍を見てみた。

検索結果。

名称：火槍・銘無し。

タイプ：ランス。

能力：火属性付加。火属性ダメージ10%減。

その下にも耐久値や重量、製作者名などがついていたが見るのをやめた。

見切りをつけて、別の武器屋よりも近い、防具屋に行くことにする。

「炎属性ならまだしも、火属性じゃねえ？」

自分で造れば炎属性とか余裕だし」

ん？

「高い魔法剣を買うより、同じ値段のいい剣を買って、自分で付加すれば最強レベルの炎属性つけられるな……。」

いや、待てよ……？

そもそも、魔法創造で 武器創造 魔法を創れば武器は創れる？」

気になったのなら検証すべし。

それが鉄則。

…。
というわけで、誰にも見られない場所で、集中してできる場所…

近くにあった宿屋に1泊分の料金を支払うことにする。

部屋に入って、音漏れ防止の サイレントフィールド 、監視防止の ブラックカーテン という魔法を部屋にはる。

前者は静寂・浄化が主な水属性に、似た魔法があるが、後者はオリジナルだ。

さて、なんの素材でできた武器にしようか……。

この世界にはファンタジーの王道、オリハルコンやミスリル、アダマントタイト、ダマスカス鋼が存在する。

それで創ったものがどういうものなのかわからないので、とりあえずひととおりやってみよう。

おおっ、オラわくわくしてきたぞ！

「おっし。準備おっけ。失敗したくないし、詠唱すつか……。
クリエイトウエポン」

まずはミスリルから……。

「其は銀。染まることのない高貴で聖なる、鋼をも凌ぐ真なる銀。
ミスリルブレード」

パアアアッ
！

「……できたっちゃできたけど……なんだ？」

出来たのは、ミスリル、というよりただの銀の刀っぼい。

なんかちよっとくすんで見えるというか、しょぼい？

サーチしてみると、「シルバールブレード」となっている。

イメージが弱かったってのと、完全に無から創ろうとしたからかな。

直観だが、どっちもな気がする。

「幸い、銀の刀はできたから、これをミスリルに変えようかね。
クリエイトウエポン」

其は銀。染まることなく、高貴で聖なる、鋼を凌ぐ真なる銀。
ミスリルブレード」

もう一度、銀の刀が光って、より輝かしい刀が出来上がった。

「ふむ。サーチ してつと……。おお！ミスリルだー！」

めっちゃテンションあがるな！

架空の武器のミスリルさんだ！しかも刀だ！！

「じゃあ、お次はオリハルコンに行こうかね。青銅の刀創って、オリハルコンに精製って感じでいいかな」

ブロンズブレードを創り、その後オリハルコンに。

同様に、スチールブレイド アダマンタイトブレード&ダマスカスブレードを創りあげる。

「てれれってつてれー！武器をいっぱい手に入れた！」

さて、こいつらの特性を知るか。

「サーチ」

ふむふむ。

「オリハルコンが一番強いな。でも、ミスリルの方が魔法伝導効率がいい。付加魔法には最適だな。

硬度でいうとアダマンタイトだな」

残念ながらダマスカスは上記三つには敵わない。でも、せっかく創ったしなあ……。

とりあえず今考えた チェンジンゴット でもって、ダマスカス刀を鉱石の塊にして亜空間に放り込んでおく。

いつか使う日も来るだろう。

「しっかし、うーん、どうしよう。
攻撃力も捨てられんし、刀に魔法纏わせたいし、整備の仕方知らないから丈夫さもほしいし……」

やっぱりオリハルコンかなー。

魔法伝導効率と硬度で負けてるって言うっても、少しだけだし。それに刀はオリハルコンことヒビイロカネって感じもするし。

「しかし捨てがたい……。むう。よし、混ぜよう。

魔法創造で 融合魔法 を創っちまおう。
ミスったらまた創ればいいだけだし」

オリハルコンとミスリル、アダマンタイトを手に取り。

「フューツ、ジョン。はあああああああ！！」

詠唱はイメージだ。

最も強い融合のイメージはこれだった。

ゴテ○クスばりの超進化を遂げてやるぜ！

パアアアツ
！

クリエイトウェポン の時もみた発光ののち、現れたのは見た目銀に近い色の刀。

しかし、見る角度によって、黄金色、緋色、銀、灰などなど、様々な色にも見える。

「サーチ……」。

ふむ、名称がカオスブレードになってる。能力値はっと……うお
お！？たけエ！！」

まさにいいところだ。

そうなるようイメージしたのだから、その結果ともいえるがこれ
はうれしい。

そして何より、美しい。

クソ剣を初めて見たとき、感じさせられた魅惑よりも、強烈な感
動。

やっぱり日本刀は美術品としても一級だねエ。

「いやいや、呆けてないで。

さて、もう1本創るか。

コピー」

カオスブレードが2本。

双刀。それがオレが望んだ武器だ。

「さて、属性付加しようか。

全属性付加して、マジでカオスな刀にしてやんよ」

これが双刀にした理由。

1本にまとめようとすると火と水、土と風、光と闇、対消滅しか
ねない。

ならば、2つにしてしまおうということだ。

「片方に、炎、嵐、光。もう片方に氷、岩、闇を付加してっ」と

基本属性ではなく、すべて強化派生属性にした。派生属性でも、

基本魔法は使えるから問題ない。

大は小を兼ねるってね。

「これでわざわざ付加しなくてもいいな。

炎、嵐、光を『天』氷、岩、闇を『地』と呼ぶか。付加した属性も空と大地、上と下って感じだし」

名前を付けると、サーチ の名称欄がカオスブレードから、天と地に変わった。

さて、次にいこう。

「武器創造 ができるってことは、銃が創れるじゃねえか……。うはははは！」

同じ手順で、カオスガン（あんまかつこよくないな）が2丁できた。

ちなみにイメージしたのはSIG SAUER P226とベレッタM92FS。

元の世界でこれらのモデルガンを持っててイメージしやすかったからな。

「イメージ勝負だからこの2つでいくか。デザートイーグルとかリボルバー系も欲しかったが、それはまたいつか、だな」

ちなみに弾丸は必要ない。

魔力、魔法を込めて撃つように設計したので弾数無限。

なのでフルオート機能もつけてみた特別品だ。

ファンタジーはなんでもありで助かるね。

ついでに、P90というあの有名な特徴のある形のサブマシンガンも2丁創った。

ぶっちゃけ2丁拳銃にフルオートつけちゃったからあんまり使う機会はこないかも。

でも創りたかったから創っちまうことにした。反省はしていないし、するつもりもない。

「狙撃銃もそのうち創ろう。」

でもイメージできるかなあ……。あーあ、もっと銃の出てくるゲームやってればよかったなあ……」

P90を亜空間に放り込んでっつと。

「次は防具だな。鎧とかは重いし好きじゃないから、外套にしよう。ついでに普通の服もめっちゃ防御力高くしよっつと」

防具創造 魔法を創って、防具を創りだす。

カオスコート、カオスシャツ、カオスパンツを手に入れた。

「コートとシャツ、ズボン程度でいいか。さすがに下着まではいいだろっつ」

そこらの鎧なんて目じゃないほどの防御力と耐魔性能だ。打撃も魔法もほとんど弾いてしまっつ。

「うーん、でもなあ……。この派手な色はどうにかならんか……」

カオスシリーズの象徴たる変わる色は武器とかならかつこいいが、防具となると……。

ぶつちやけ派手だし、目立つし、目がチカチカする。

「色彩変更の魔法創るか。

気分はゲームのキャラメイクだな。

チェンジカラー」

外套、シャツ、ズボンを黒系の色で固めてみた。

おしゃれ低級者であるオレには派手な色は難しい。

黒ばんざーい！

「さて、金も余ってるし、雑貨でも買いに行こうか」

装備を買うはずだった路銀は宿代のぞいて丸まるあまっている。

水筒とか、バッグとか買っていかか。

正直、水魔法と亜空間魔法があれば事足りるのだが、身一つで旅をするやつはいない。

悪目立ちするに決まってる。カモフラージュできることはしておこう。

雑貨屋に行って、水筒とバッグを買う。

そこで、見つけた。

「あー、ナイフがあったか……」

無人島に1つだけ持っていくならナイフという答えがあるほど万能な道具だ。

旅するなら必需品だろう。採取に剥ぎ取り、調理に攻撃なんでもいじむね。

「買うのもつたないからインゴットにしたダマスカスでナイフ作るかな。」

「あー、でも木目模様のナイフって目立つかも」

店のおばちゃんと交渉し、鍋などの調理器具一式と一緒に買うことでナイフをおまけしてもらった。

旅のお供に美味しい料理は欠かせない。

携帯食料なんてまずいもんは喰いたくないしな。

ダマスカスを剥ぎ取り用に、買ったヤツを包丁替わりに使うことにしよう。

魔物はぎ取ったナイフで調理したものはちょっと食べたくないし。

次は食料品店に行き、調味料や食材を買ってバッグに入れるふりして中につくった穴から亜空間へ。

そうやって散策しながら準備をすすめていると。

「ギルドか……」

今を逃せば登録の機会はないかもしれない。

次に外に出るときは魔物討伐か国の崩壊の時。

「次も魔物討伐があるとは限らないし、今のうちに行っておくか」

「ギルド」

うわー、ガラの悪そうなやついっぱいだ……。
当然のことだが、みんな引き締まった体つきの上、武器を持っている。

「ギルドへようこそ。登録ですか？」

「あ、はい。どうしてわかったんです？」

「ギルドに来て、だれかを待つでもなく、依頼ボードを見るのでもなく、依頼達成を報告しに来るのでもない。さらに言えば、きよろきよろしてたら、それは初めて来た人って思うでしょう？」

もつ何年も勤めてますから、同じような人を何度もお世話しています」

そう言って、受付さんにはっこりと笑う。

「なるほど。じゃあ、登録お願いします」

「ではこちらの紙に必要な事項を書いてください」

名前。職業。魔法が使えるか否か、属性はなにか、そのくらい。

「魔法が使えるかとか属性とか絶対書かないとだめなんですか？」

「確かに自分の力を明かしたくない人もいますから、絶対ではないです。

ですが、書いておくと他の冒険者から後衛や回復要因がほしいという依頼がくることもあります。

パーティーをつくるときのコネにもなりますし、知り合いをつく

れますよ」

「他の冒険者に、って。教えちゃっていいんですか？」

「もちろん、全員に言うわけではありません。あくまでギルドからの紹介、として依頼者本人に話す程度です。」

『こういう人たちがいますが、どうしましょう』と。ああ、強引に参加させることもありませんかから安心してくださいね」

「ふーん」

なに属性にするのがいいか……。

光と闇はだめだな。めずらしいし。

コネはあつて困るもんじゃないから欲しいし、ここは回復系が使える水かな……。

名前はアキラ。水、と書いて、提出する。職業は冒険者としておいた。

偽名にすることも考えたが、追っ手などはすべて潰せばいい。

「はい、承りました。アキラさん、ですな

では、こちらのカードを持ってください」

言われるがまま、さしだされたプレートを手を持つ。

すると、プレートに文字が浮かび上がった。

さつき紙に書いた項目に加え、ランクEと書かれている。

「それは個人証明にもなりますし、依頼を受けるとき、達成時に必要になるので失くさないでください。」

再発行にはお金がかかりますからね。

あ、見せたくない部分は消えろと念じながらこすれば見えなくなりますよ」「

「おお、ほんとだ。」

とりあえず、名前と職業欄だけ見えるようにしておく。

「ではギルドについての説明をしますね。」

ギルドでは依頼の仲介とモンスター素材の買い取りを行っています。す。

依頼はボードに張っているものを持って来れば受けられます。

原則、1人1つしかつけられません。

依頼には討伐、採取、護衛、雑用までいろんな依頼がありますから、自分にあつたものを搜してください。

ランクはSからEまで、ランクアップは2つ上のランク1回、1つ上のランク5回、同ランク10回の連続成功です。

途中失敗すれば最初から数えなおしになりますから、身の丈にあつた依頼を受けてくださいね。

そうでなくても、無茶して取り返しのつかないことになる人もおいですから」「

「気をつけます」

「はい。では、質問はありますか?」

「討伐の証明はどうするんです?」

「モンスターの部位を持ちかえっていただきます。盗賊などの場合は、その首か武器を。」

報酬はその時点にお渡ししますが、ギルドが調査団を派遣して確

認めますから、ズルしたら降格か、ギルドの使用禁止になりますよ」

「じゃあ、依頼がないモンスターを倒したら？

偶然出会って、討伐した場合とか」

「その場合も、証明部位を持ち帰って、依頼が出ていればその報酬をお渡しします。

依頼が出ていなくても、報酬は出ませんが証明部位を売ればお金になりますね」

「わかりました。ありがとうございます」

受付の人に礼を告げ、依頼ボードを見に行く。

受けるつもりはないが、どんなものがあるかは知っておこう。

ここに張り出されているということは、近隣にいるモンスターってことだし。

グレイウルフ、フリーズウルフ、フレアラット、ホワイトスネーク、グレイリザードくらいか。

そこまで強いモンスターはいないみたいだ。

「他には……えーっと、ノーマ村の例の討伐依頼はないのか……」

一応、村近辺の討伐依頼を見て、どんなザコ敵が出るのかを確認しておく。

採取依頼にも、「くがでるのでランクC以上」とかいう言葉があるのできちんと見るのが吉だ。

「よし。じゃあ、明日に備えて帰って寝るか」

ボスの情報はない。

敵は会って見なきゃわからないってことか。
さてさて、正体不明の魔物、ね……。

鬼がでるか、蛇が出るか。

9：準備（後書き）

予想外のチートっぷり。

アキラくんは基本チート使えば何でもできますが、使えることと使うことは別物なので、ちよいちよい面倒な道を行います。

生温かく見守ってやってください。

復讐前日くらいにアキラくんの心情話が入る予定。

ノーマの村

一度はやってみたかった　フライ　で空を飛んでやってきました
ノーマの村。

楽しかった空の散歩はこれで終わり。

村から見えないところでそっと降り立ち、のんびり歩いて村につく。

一応柵はあるが、石ではなく木製だ。

弥生時代の集落っぽいな。

「止まれ！何者だ！」

「依頼できた者だ。森にいるという魔物を討伐してほしい、と」

「むっ、そうか。なにか身分を証明できるものはあるか？」

「では、これを」

タヌキ宰相からもらった紙を渡す。

ちなみに、オレは勇者ではなく、騎士ということになっている。

「なるほど、国から……。おひとりで？」

「ああ。オレは一人の方が楽なんだ。仲間を気遣うと派手に攻撃できないうでな」

「わかりました。では、村長の家まで案内します」

「村長？」

「ええ。獣を見たのは村長です。遠吠えのような声が聞こえるため、その後森は立ち入り禁止になったんです」

「ふーん。賢明な判断だ」

「ですが、森で得られる食材や薬草がなければ村もやっていけません。今はたくわえを少しずつ消費してなんとか繋いでいるのです。

おっと、つきました。

村長！国から騎士の方がいらっしやいました！」

「おおっ！そうか、はいってくだされ」

「では、わたしはこれで失礼します」

門番は村長の家まで案内した後、くれぐれもお願ひしますと礼をして元の配置に戻っていった。

村長のじいさんに家の中へ招かれ、テーブルにつく。

お茶の準備をし始めた彼を遮って、話を聞くことにした。
時間が惜しい。

「もてなしはけっこうです。それよりも、見かけた魔物についてお聞きしたい。

村としても、早めになんとかしなければいけないでしょう？」

「しかし、あなた1人で大丈夫なのですか……？　こういってはなんですが、お強そうには見えませんで」

「村人相手に力を振りかざすほど性格は腐ってませんので」

オレの言葉を聞いて、じいさんはぼかんとしたあと、大声で笑い出した。

「あははははっ！　こりやまいった！　だれに対しての皮肉かは知らんが、騎士のお方が言う相手ってのは限られてる。

だれが相手かは知らんが、あなたの身近に性根の腐った奴がいるのでしよう。

これはいい。国の人間のくせに、あなたは高潔だ。どっかの貴族などよりは何倍も」

高潔、ねえ……。 奴隷にふさわしい言葉じゃねエな。

それとじいさん、言葉遣い乱れてるぞ。

「そんなことはどうでもいいので、魔物について教えてください」

じいさんはまだにやけながら、思い出すように話を始めた。

「ああ、まだだれにもいってないのですがな。おそらくフェンリルだと思っております」

「なっ！？」

「フェンリルとなればA～Sランクの魔物です。魔法を使うし、動きも速い。

しかし、縄張り意識が強い反面、よっぽどのがなければ縄張

り以外には出ないことで知られております。
森に入らないならば、いまずぐの危険があるわけじゃないでしょ
う」

こいつ……。

「なるほど。あなたはひどいお人ですね」

「ほう？なんですかいきなり」

「まず依頼を正体不明の魔物、とするのが上手い。これならフェン
リルが出ようと契約違反にはならない。」

依頼料の増額を要求されるでしょうが、本当に上手いのはそこじ
やないです」

依頼料がおいしいなら、別の魔物の討伐依頼してフェンリルと引き
合わせればいいと思うのは早計だ。

それではフェンリルから逃げてでも依頼が達成されてしまう。
肝心のフェンリルが討伐されないままに。

「フェンリルとなれば、依頼を受ける人は格段に減るでしょう。ラ
ンクが跳ね上がりますしね。」

つまり、討伐に人が来ない。

森に入らなければいいとはいっても、たくわえにも限りがあるで
しょう。ずっと入らないわけにはいきません。

はやめに討伐しなければならぬ」

思えば、おかしなことがあった。

「一番うまいのは国に依頼したことです。」

国の騎士団はギルドに仕事を奪われることを嫌います。

特にギルドができてからは民に軽んじられている。

そんな彼らはギルドを出し抜こうとやっきだ。高ランクを引き抜いたり、勇者を引き入れようとしたり、ね。

そして彼らはなにより　メンツを重んじる」

ギルドに依頼がなかったこと。

あれはおかしい。

国の平騎士よりもギルドのCランクが圧倒的に強い。それほど力の差がある。実戦経験の差がある。

確実性を選ぶなら国の騎士よりギルドの冒険者だ。

しかし、ギルドの高ランクは少数精鋭。

彼らが運よく依頼を受けてくれるとは限らない。

「もし、この依頼に騎士が来たとしましょう。

そして、フェンリルという予想外の敵に敗北します。騎士程度の実力なら当然です。

だが、騎士はそこでは終われません。騎士と、国のメンツつてものがあからです。

ギルドや民に馬鹿にされる原因になりますからね。

それを許容できない騎士と国はやっきになって討伐軍を編成してやってくるでしょうね。

フェンリルが討伐されるまで、何度も何度も」

「お察しの通りです。依頼を受ける側に比べてする側が圧倒的に多いギルドじゃ、高ランク冒険者がやってくるころにはたくわえがなくなりません。

その点、国や騎士なら名声をあげたいがためにすぐ受けてくれるだろうと思ったのです。

幸い、村の名産である酒は王の御用達でもあります。

この依頼を通すために、金と酒も送りましたから」

「そうですか。国が受けると半ば確信しての行動ですか。

こちらにはどうして国が受けたか不思議だったのですが、酒と賄賂とはね……」

あのクソ王はとことんオレに面倒事を持ってきやがるな……！

「にしても、村長さん？

あんた、腹黒いことするねエ。最初の騎士は死ぬことを想定して立った計画じゃないかこれ。

あんたが故意に情報を秘匿したせいで、ね。

どうしてオレに話す気になったのかは知らないが、元々は見殺しにするつもりだったんだろ？」

「村長の仕事は村の繁栄と村人を守ること。

騎士は入ってないので。

それに、こっちは高い税金払っております。

あなたはどうかは存じませんが、お仲間の騎士は特に仕事せず、城でぜいたくしてるのでしょうか？」

残念ながら、それは騎士であって、勇者には適用されないんだよ。

「まあ、いいさ。フェンリル程度狩ってこなくちゃ戦争はできない」

「おいおい、いいのかよ。あんたが珍しくいい騎士だったから話してやったのに、無駄死にする気か？」

立ち上がり、出ていく。

その途中、振り返って笑ってやった。

「オレが死んだら国に伝えればいいさ。当初の予定通り次を待てよ。じゃあな」

じいさんの作戦は成功確率が高いが、ある前提の上に成り立っている。

国のやつらが、メンツと命、どちらを天秤にかけるか。やつらは村なんて見捨てるだろうさ。それだけ腐ってる。

運のいいことに、「賄賂ももらったし、ちょうどいいから勇者の力試しにでも使おう」と思われなければ。

この村は終わっていただろう。

「ま、イフのことを考えてもしようがない」

利用されるのはシヤクだが、じいさんの村のために全力を、本気で全力を振り絞る様は好ましい。

やっつてやるぞ。

く森く

「さっさと済ませようか……」

フェンリル討伐が終わったら、もう時間がない。召喚されてから1月まで、10日を切る。

「いろいろとやっておかなきゃならないことが多いんでな。悪いがさっさとやらせてもらおう」

フェンリルを討伐したとなれば、勇者の力は本物だということになってしまふ。

だから、さっさと終わらせて準備したい。

「ソッコーで終わらせて、期限のあと5日まで城に ステルス で忍び込んで暗躍しねえといけないんでね」

亜空間から双刀「天地」と鞘を取り出し、腰の横に二つ装備。

また、シグとベレッタを防具と一緒につくっておいたホルスターに入れて腰の後ろへ。

「サーチ」

魔力の波を一気に広げる。
マップ上。

魔物を示す灰色の光点が多く存在する。

そこへ、万が一フェンリル以外がいる可能性も考え、大きな魔物でフィルターをかける。

残った光点

名称表示させると「フェンリル」。

「マジでか……」

とりあえず、フェンリルの姿でも拝んでやろう、と光点の場所まで移動。

ステルス を使って、忍び寄る。

いたのは、悠然と寝ている銀色の狼。
神狼・魔狼・氷狼、あまたの名を冠するフェンリルは威風堂々と
していた。

一步、また一步と近づいていく。

しかし次の瞬間、急にフェンリルが起き上がり、真っ直ぐとオレ
を見た。

(なっ!?!気づかれてる!なんで!?!)

確信する。きよろきよろとあたりを探るのではない、威圧と挑発
の入り混じった眼光がこちらを突き刺している。
なぜかはわからないが、バレている。
しかし、攻撃無効の ステルス を信じて、間合いに入った。

「ッ!?!」

背筋に走った恐怖に押されるように、アキラは屈む。
その数センチ上を、フェンリルの爪が通っていた。
ぱらぱらと、アキラの髪の毛が舞った。

(マジかよ! ステルス 中だぞ!?!)

驚いたのは完全に居場所がバレていたことともう一つ。
髪の毛が、舞っていたこと。

(ステルス に干渉できるのかこいつ!?!)

検証は後でいい！

今は ステルス が役に立たない前提で動くしかない！

「ちっ、仕方ねえ！」

ステルス を解いて、姿を現す。

フェンリルはだれかいることは確信していたようだが、少し驚いたような顔を見せた。

『ほう、幽鬼の類と思いきや、生きた人間とはな』

「……話せるのか？」

『人間如きの言葉、千の時を生きる我等にとっては赤子でも容易く使える。』

『発声はできんが、念話くらい容易いことだ』

「なんでオレがいるってわかった？」

『おかしなことを言う。在るモノは在るだけで存在感を発している。たとえ、幽鬼でも』

わけわからん。もっとわかりやすく言ってほしい。

「……そうかい。ご忠告どうも。

で、フェンリルさん。早速お願いなんだが、この森から出ていってもらえないか？」

『断る、と言えば？』

「勝った方が蹂躪する。負ければ地べた這いずって眺めるのみ。以上も以下も以外もねえ。一番わかりやすく簡単なやり方だ」
言い、力を漲らせる。

『ふっ、ふははは、いい！心地いい殺気だ！！
強者と出会うため、人里に下りてきたかいがあつた！
同族相手ではもう飽いていたのだ！存分に楽しませてくれよ！！』

フェンリルの毛が逆立つ。
今まで抑えていたのだらう、溢れ出す魔力で森中がざわめいていた。

「おいおい、バトルジャンキーかよ……。
フェンリルってのは、縄張りを侵さなきゃ無害じゃなかったのか……？」

『ふん。なんにもせず、ただ毎日寝て食料を狩って、たまにくる人間を脅かすだけで生きていく一生は嫌なのだ。
生がほしい。死の間際にあつて感じる、強烈な生の実感が！
あまた狩ってきた獲物のように、輝く命がほしいのだ！！』

「へえ、いい根性してる。共感できるモンがあるな」
双刀、天と地を鞘から抜き。

「勇者、東城アキラ。参るっ　　！！」

『さあ、我に生を実感させてくれっ！！』

「レーザーランス！」

真つ直ぐに襲い掛かる光の槍。

フェンリルはそれを横に跳んで避け、なお直角に曲がって追尾してくる槍に笑みをこぼす。

『はははっ、古代魔法までをも操るか！
ならば、お返しだ！』

障壁を張って、真正面から受け止めたフェンリルは自らの周りに浮かぶ氷の槍を複数生み出した。

「古代魔法？オレのオリジナルだつての！！」

氷の槍すべてがオレに当たるように曲線を描いて襲ってくる。
こいつもロツクオンが使えるらしいな！

「シールド……！！」

ごく普通の初級無属性魔法。

魔力の塊を盾として生み出すだけの初歩の初歩。

ただし、今のこれに込められた魔力は尋常ではない。

『ははっ、初級魔法で防ぐか！！』

「天、炎属性発動。地、闇属性発動」

右手に持った刀が呼応して、燃え盛る炎を、左手の刀がうごめく

闇を発する。

「ラァッ!!!」

出しうる最高速度で間合いを詰める。

フェンリルの足に十文字の傷をつけた。

『おおっ、私の毛を裂き、傷をつけるとは！
これは驚いた!』

「さつきから余裕こいてんじゃねエぞテメエ」

炎の蹂躪し尽くす侵掠性、闇の毒の如き侵食性。

この刀で切りつけられればタダではすまない。

フェンリルにつけた十文字から、黒い炎が立ち上る。

それらはじわじわと足から、全身へ、少しずつ広がっていく。

「ありったけの魔力を込めてやった。オレにできる最高の毒だろう
よ」

言葉通り毒の如く、フェンリルの魔力に押されながらも、少しずつ
つ少しずつ、銀が黒に染められていく。

『ふ、はは。はははははははは!!』

ああ、感じるぞ！これだ！これが生！これが命!!

我をむしばむ毒を感じる!!

毒に抗う我が命を感じる!!

素晴らしい！素晴らしいじゃないか人間!!』

「くそつ、魔抗が高い……。侵攻が遅いな……」

黒い炎がフェンリルの全身へまわりきるまで、後15分くらいか。

『さあ、楽しもう！もっと生を感じさせてくれ！…』

15分、しのぎきれるか……。

「 違う。逃げるんじゃないエ。勝つんだ」

その情弱な思考を、押し殺した。

「敵がでかいからって、逃げてどうする。

打ち勝って、ぶち殺してこそだろうが」

そつだ。こんなところで逃げられるか。

「犬コロ一匹に勝てなきゃ、国なんて落とせねエよなア……」

この世界で生きていく。

そのためには、この程度の障害など、食い破ってやる！

「おおおああああああああああああああああああ……」

「グルウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ……」

双刀で舞う。

爪を防ぎ、かいくぐり、皮膚を斬って新たな十文字を刻む。

爪と牙が駆ける。

刀を弾き、噛んで止め、強固な力オスコートに引きちぎる。

「はあ、はあ……。いい加減倒れるよこの犬……」

アキラは肩で息を吸う。少しでも気を抜けばぶっ倒れそうだ。服はあちこち裂けて、その下からは血がのぞいている。治癒魔法を使う隙を与えてくれないから血が出っぱなしだ。

『貴様こそ、その着物はどうなっている。我が全力の爪でようやく裂ける程度など……。それと、我は狼だ』

フェンリルは苦しげに声をもらす。身体のいたるところに十文字の刀傷があり、そこから黒い炎がうかがえる。

双刀・天地による浸食がほぼ全身にわたり、美しかった銀の毛並みはほとんどが黒に染まっていた。

「ふーっ、少年漫画の王道よろしく、次が最後になりそうだ」

『もう我は助からぬだろうが、勝って、勝ち取った生を感じて死なせてもらおう』

「はっ、そりゃ負けフラグだ。オレの勝ちだな」

『言っているがいい。そなたも妄言が出るほど危ういようだしな』

オレは天地を構える。

天の放つ炎・嵐・光。
地の放つ氷・岩・闇。
様々な色がまじりあい、最終的に天が白、地が黒に染まる。

フエンリルが身を沈める。

魔力を身体強化、牙と爪への属性付加と強化に注ぎきる。

溢れる魔力に押され、黒に染まった毛並みが銀に戻ろうとし、色素が薄れた。

……………。

お互い、力を込めていく。

ビリビリと空気が震え、木々はざわめく。

動き出しは 同時。

「天地開闢！！」
てんちかいびやく

「餓狼天声！！」
がろうてんせい

注ぎこまれた力は同格だった。
振るう力も、互角だった。

だから、この結果は持っていた武器の差。

「はは、私の牙が、折れるとは……………」

「それを言うのなら、オレの愛刀がちょっと欠けちまったぜ……………」

フェンリルの魔力強化を受けた牙と打ち合っつて、欠けるだけで済んだだけでもすごいのだが。

『ああ……。これが、死か。』

価値ある生ののちに訪れる、満ち足りた死だ……。
欲を言えば、勝って死にたかったのだがな……』

「最初から死ぬ気のやつは勝てねえよ。」

みじめったらしくしがみつこうと足掻くから、生は勝てるんだ」

『ふはは、それが道理か……。結局、我はずっと生に翻弄され続けたわけだ』

どこか自嘲に満ちた声に、オレは同意する。

「だれだって、生に翻弄されながら足掻いてんだ。」

奴隷にされたり、異世界に呼び出されたり、戦場に放り込まれたり。

それでも、オレは生きたいんだ」

『くはっ、そんな一生ならば、それはそれは楽しそうだ』

「なら、一緒に来るか？」

『はっ。』

「その傷、たぶん治せる。」

おまえには、オレの味方になってもらいたい」

ずっと考えてきたことだった。

1人でできることには限りがある。

直接的な復讐はオレ一人でやるが、誰一人逃がさないためには仲間がいる。

だれかを雇うことも考えたが、国家転覆に力を貸してくれる知り合いはいない。

裏切りも怖い。

そんなのはタダの建前か。

本音は、仲間が、緑色で表示されるだれかがほしかったのだ。

『好きにすればいい。我は敗者。勝者に意見する権利はない』

「オレはだれにも命令しない。

だれかを無理矢理従えるような、オレの嫌いなヤツのところまで墮ちる気はないんだよ。

そういうクソどもを殺すことなら、どんなに手を汚してでもやるがな」

『……………では、お主について行く』

やっと、生を知って楽しくなってきたところだ。

お主と行くのなら、もっと楽しくなりそうだしな』

地面に倒れたまま、狼はにやりと笑う。

その傍らに歩み寄り、天地を軽く当てた。

「戻せ」

命令に従い、天が炎を、地が闇を吸い込んでいく。
元がオレの魔力によるものだし、できるかなーとおもって試してみたが、できた。

『お主、なにを驚いている。』

まさか、今のは自信がなかったのか……？』

「そんなときゃそんなときで考えるさ」

『ははっ、やはりお主を選んでよかった。 退屈しない』

「じゃあ、身体を小さくしてついてきてくれ。魔力はできるだけ抑えてな」

『わかった』

フエンリルが身体を小さくしている間に、天地で折った牙を拾う。
これが討伐証明になるはずだ。

『終わったぞ』

振り返ると、中型犬サイズになっていた。
その頭を軽く撫でて。

「オレはアキラ・トウジヨウだ」

『我に個体名はない。リースとでも呼んでくれ』

「あれ、メスなの？」

『そうだが？』

「そっか」

『お望みなら人型になろうか？』

「いや、いい。どうせ服がなくて銀髪全裸少女だったりして、おかしなことになるんだ。

オレはそんなフラグはたてないぞ」

『むう、そっか。お主と同じ形態をとるのもまた一興かと思ったのだが』

「オレが自由になったらな」

そのころには、面倒なごたごたもないし自由に生きてやる。

「さて、村に戻って報告したら檻に戻るか」

『檻？お主は捕まっていたのか？』

「いずれ食い破るさ。今は油断させるために大人しくしてるけどな」

『ほう、早速楽しいことが起こりそうだ』

「ああ、楽しみにしてくれ」

この依頼から戻ったら、勇者のお披露目まで秒読みに入るだろう。
その日に、決行する。

勇者に、無関係な他人に押し付けてきた分、国も、民にも、しっかりと反省してもらおう。

10：緑（後書き）

そろそろ国の終わりも近いです。

11: 布石

「ペルヴィア王都近辺の荒野」

「なあ、なんでオレがいるって気づいたんだ？」

「気になっていたことを、リースに聞いた。」

「ステルス を見破られ、攻撃まで通されたことだ。」

『すてるす?』

「ああ、狼に小首を傾げられるとマジで和む。」

「もふもふしたい。ああ、もふもふしたい……。」

『なあ、アキラよ。離してほしいのだが』

「はっ、すまんすまん」

「無意識のうちに、もふもふしてしまった……。恐るべき魔力。」

「いや、な？」

「あの時、オレは完全に消えてたはずなのになんで見つかったのが不思議だな」

『消えることなど不可能だ。』

「そもそもあれは幽鬼のようにつに、そこにあるが干渉できない存在に変換する類だろうか?」

ステルス を創った目的は、だれにも見えないこと。
見えないだけじゃ、ぶつかれることもあるだろうと物理干渉不可に
し、ついでに魔法干渉も不可にしたはず。

ああ、そう考えると、幽霊みたいな存在になるってのが本質っば
いな。

魔法創造は、無意識下をいい感じに読み取ってくれるのはいい所
なんだが、ちよいちよい欠点でてくるな！。

「干渉できないのに、なんでおまえはオレに攻撃できたんだよ」

『うむ、なんとすべきか……』。

幽鬼は干渉できないが、確かにそこに存在する。

その……少しだけ、次元がズレているとでもいうのか。

その次元へ攻撃すれば、そこにいる幽鬼をも攻撃できるのだ』

幽霊は次元、世界がズレた向こうにいるからこの次元からは干渉
できない。

しかし、幽霊のいる次元へ攻撃すれば、通るってことか？

『私の爪ならばそれくらいのことではできる。』

他の魔物でも、古代魔法や空間魔法が使えるのならば確実にでき
るだろうな』

「人間相手なら使えるが、上位魔物や幻獣レベルになるとだめって
ことか」

ま、人間には効くなら何の問題もない。

「今からしばらく、城に忍び込んで、暗躍する。」

「フェンリル討伐任務の期限まで。すべての準備をすませる。」

『我はどうすればよいのだ？』

「うーん、ステルス かけてついてきてもいいんだけど、ぶっちやけやってもらうことは今ないしな」

『では、観光してくる。人間の街は初めてだ』

どこかわくわくとしている感じで、声が上がっている。尻尾も振ってるし。

「ああ、じゃあ、決行前日くらいにはよぶから」

『そうか。では街を満喫しようかな。』

その前に 『

ぼんつ、と。

「人型の方がいろいろと便利であろう」

銀髪の少女が現れた。
全裸で。

「前回言った通りになったあああああああ！？」

慌てて 防具創造 でテキトーなワンピースを用意。

下着は……ね？ ないよ。だってイメージできないもん。

女性用下着なんて絵でしか見たことないもん。
なにより、気が進まない。

真剣にパンツをイメージする男て……きもつ。
街で買ってもらおう。

「むう、身体の上に何か着るのは違和感があるな……」

不満気なリース。

見た目銀髪美少女がノーパンで。狙いすぎだろ。

「ついでに金わたしとくから、下着かつとけ。マジで、ホント頼む」

「ふむ。これが貨幣というやつか。知識では知っていたが、これでモノが買えるとはな」

とりあえず銀貨60枚ほど渡しておく。

タヌキ宰相からもらった路銀の残り全額だ。残してたらどうせ没収されるんだろっし。

〜ペルヴィア王都・城内〜

今日は、宝物庫と貴族の領地、貯め込んだ賄賂などを荒らそうと思っ。

まずは城からだ。

ステルスでもって城に潜入。

サーチで宝物庫や隠し部屋がないか探っていく。

まずは宝物庫。

鍵に加え、アンロックの魔法に対策がしてある。

「ま、こっそり鍵はパクってるから問題ないけどな」

パクったままでは困るので、似てるけど使えない鍵と交換しておいた。

時間稼ぎの意味もあるが、ぶっちゃけ嫌がらせが主である。

ふはは、なぜか鍵が合わずに宝物庫が開けられなくて困るがいい。

「では、お宝ごたいめーん！」

手当たり次第に、金貨や強そうな武器防具をぽいぽい亜空間へ放り込んでいく。

いらぬものとか使わなさそうなものもとりあえず回収。

あとで売っぱらう。

1時間ほどかかって、宝物庫は空っぽになった。

「よし、次に行くか」

ドアを開ける際は物理干渉できない ステルス を解かないといけないので、サーチ で人がいないのを確認してから退出。

次は サーチ で見つけた隠し宝物庫だ。

王族の財産などが収められている。

宝物庫はあくまで国の財産、こっちは王族の私的財産だ。

「王族のくせに私的財産とかため込むんじゃないやねエよ。トップがそん

「なだから貴族まで腐ってくんた」

金銀財宝、宝石に加えて秘蔵らしい酒がいっぱいあった。もちろん、全部かっぱらう。

次は宰相だ。

宰相の私室にはいろいろ危ないものがたくさんあった。暗殺部隊への指令書とか、いろいろと。国の暗部が凝縮されたような部屋だ。

改造オーガもこいつの指令だと判明。ふふふ、オボエテロ……？

宰相含め、王都に住んでいる貴族の住所を調べあげ、後で盗みに入ることを決意。

あと、手ぶらで帰るのもシヤクなので、とりあえず、不正の証拠をパクっておいた。

そんな感じで、城の中にある金目のものを次々と亜空間に放り込んでおく。

しかし、廊下にある調度品などは手が出せなかった。バレたら困る。

「まあ、サーチ したところ見かけだけはきれいな贋作とかばっかだったけど」

さて、次は武器・防具庫だ。

ここは訓練前に、騎士たちが自分で開けられるように、鍵はかかってない。

貴重な武器などはここにはなく、団長や隊長のように個人で肌身離さず持っているか、宝物庫にあった。

「さて、ここの武器を全部スポンジ製にかえてやるか」

嫌がらせ以外のなにものでもない。

しかも、スポンジにした後、チェンジカラーで鉄の色にかえて、変わらない重さしておいた。

「防具は……どうしよう。布でいつか」

同じように、元の形とは変えないようにして材質だけを変えた。

布の鎧。

ただの重ね着じゃん、ウケるw

すべてを終えるのに結構時間を費やした。

でも楽しかった。

これに気づいた時が楽しみでしょうがない。

「一部のやつらの武器は個人所有だから変えられなかったが、それでもいいか。

あまり簡単に行き過ぎても、おもしろくない。

希望を持たせて、それが敗れて、少しずつ絶望してもらいたいし」

「じゃあ、次は、逃げ道をなくそうかね。」

「王城・王族専用地下通路」

サーチ で見つけた隠し通路。
王城の外へ通じている。

「さて、塞ごうか。 ロックシールド 」

岩の盾呪文で壁を創りだし、通路をびっしりと塞ぐ。
ついでに 固定 の魔法をかけてびくともしないようにする。

王族用、そして貴族用の脱出路は城にいくつかあったので、それを全てふさぐ。

さーって、お次は召喚の魔法陣を壊しに行こうかなー。

「城内・召喚儀式の間」

この部屋のカギも、やっぱり偽物とすり替えてった。
次の召喚は10年以上後らしいし、もうその頃には全部終わってるけどなんとなくだ。

「これ、リースの言う古代魔法っぽいんだよね……。
ま、前回来た時に サーチ で魔法陣の形はコピーしてるからヒ
マになったら研究してもいいかもしれん」

とりあえず、床に彫られた魔法陣をがりがり削っていく。

プロテクト の魔法（古代魔法ではない。おそらく、後世のやつ
がかけたんだろ）なんか目じゃないね。

「ちまちま削るのは面倒だ。一気にやるか」

亜空間からP90を取り出す。

「リース戦では、どうせ防ぐか避けられるかされる銃は使わなかつ
たからな。

気分よくぶっ放そう」

儀式の間全体に サイレントフィールド をかけて音漏れ防止。

「せーのっー！」

パパパパパパパパパパパパパパ！

「ひゃっはー！！」

魔法陣の刻まれている床が穴だらけになっていく。
テンションあがってきたー！

撃ち続けること数分。

「ふう、もはや原形はとどめてないな」

魔法陣のあった場所はすべて塗りつぶした。ふうっ、これで第2第3のオレという厨二的展開は防いだけ。

次は、書庫だな。

魔法陣関係の書物を根こそぎ焼いておこう。

〜書庫〜

いつかのようにサーチで重要な書類、書籍を探し、役立つものはパクって魔法陣関係は焼却。

全部燃やそうかとも思ったのだが、今は露見を避けるため必要最小限にしておこう。

今は、だけどな。

「よし、城の中にはもうないな。

………おっと、最後に謁見の間に行こう。

あそこは国の顔。いいもんがいっぱいあるだろ」

〜謁見の間〜

こっそり忍び込んだ先、無人だと思いきやなにやら集まっている

らしかった。

「それで、勇者は今どういう具合なのだ？」

（ん？オレの話？）

「ここにいるのは、クソ王と宰相、王族くらい。スフィアの姿もあつた。」

クソ王の言葉を受けて、宰相が前に出る。

「それが、城を出たところで見失ったようでして。

ノーマの村に行き、依頼を終えたことは潜入した魔法部隊からつい先ほど報告がありました。」

今は帰り道の途中でしよう。」

腕輪の力で探しますか？」

「それは明日戻ってこなかったらでいいだろう。」

それよりもやるべきことがあるだろう？」

勇者の披露会はいつにするのだ？」

「明日帰還した場合、その3日後というところではないかと」

ふむ。明日あたりにはつかないと不審に思われるか……。

そして、お披露目まであと4日。

少し急がないとな。

「では、そのようにはからえ。」

次だ スフィア」

「はい」

宰相がさがり、代わりにスフィアがクソ王の前へ。

「勇者のいない今、おまえの印象を聞いておきたい。

あやつの籠絡はできているのか？」

「いえ、まだです。

どうも、ア……勇者様はあまり女性に手を出されないようです。

城内のメイドも含め、わたし相手でさえ手を握ることすらありません。

どうやら、女よりも金、なお方のようです……」

スフィアの尻すばみな答えに、王は声を荒げて叱咤した。

「なにをやっている！

おまえの役割は勇者の召喚と籠絡だろうが！！

いつまでも金をせびられてはかなわん！」

「……申し訳、ありません」

「契約と痛みという負の鎖。

女と信頼という正の鎖。

その二つが揃って初めて、勇者を完全に操れるのだ！

負の鎖だけでは縛るだけ。

使える道具だが、最高の道具にはならんのだ！

勇者を最高の道具として完成させること！

それがおまえの役割だ！それを忘れ遊びほうけていたのか！？」

ああ、そうか。

そういうことか。

最初は、警戒していた。

こいつも王族だから、と。

でも、彼女だけはオレを奴隷として扱わなかった。
知っているのに。

オレを名前で呼んでくれた。

なんだ。

こいつも、変わらないか。

ああ、本当に サーチ は優秀だな。
頼りになる魔法のことを思い出した。

スフィアのマークは、オレンジ。
中立。

オレに、敵意は持っていない。

他の王族と同じように、オレンジ。

当たり前だ。奴隷という道具に敵意を向けることはしない。

設定を変えて、オレが敵意を持っている人間を赤にしてみる。

謁見の間、オレを除くすべての光点が赤に染まった。

(はは、本当に、優秀だな……。

言葉で誤魔化そうとしても、こつもはっきり見せられちゃ、な)

今までの態度は、すべてクソ王の作戦だった。

危うく懐柔されかけていたかもしれない。

スフィアだけは、助けてやろう、なんて血迷ったかもしれない。

ああ、今すぐこいつらを肉片にしてやりたい。

でも、ダメだ。それじゃあ、気が済まない。

(……抑える。今は耐える。

ここで殺してやるほど、オレの復讐は軽くない。

一瞬で終わらせてやるほど、オレの憎しみは甘くない)

ここで爆発してはいけない。

なんのために、今まで耐えてきた？

「一気に」ひっくり返すためだ。

契約の腕輪をつけたまま、痛みに怯えたのはなぜだ？

11：布石（後書き）

スフィアの今までの行動という布石。
アキラくんの戦争のための布石。

前者は儂く崩れ、後者はそろそろ実りそう。

12：前夜

（ペルヴィア王城・アキラの自室）

「さて、リースも来たことだし、やろつかね」

「アキラよ、我をよんだということは明日なのだろう？」

人間形態のリースをこつそり侵入させた。

ちなみに下着を買ったかどうかは聞いていない。

羞恥心なく教えてくれそうだが、そこはアレだ。シュレディンガー？

知らなければ、はいていない、はいているの可能性が……。

閑話休題。

勇者のお披露目は、日が昇れば行われる。

討伐任務から帰った際、フェンリルの牙（リース的には生えてくるから別にいらしい）を見せて驚かれた。

「フェンリルまでをも倒すとは！」的な感じで。

もう立派な勇者として民に紹介できよう！
って、成りた
くないから。

ちっ、うぜえ。

透けて見えんだよ。

力出し惜しみしてた時は、「今代の勇者使えねエ」みたいな顔し
といてさー。

フェンリル倒したって知ったら、「やはり勇者は伊達じゃない」
みたいな？

むしろそれくらい当然みたいな顔しちやってるからね、彼ら。

「テメエで一回戦って見ろってんだ。秒殺どころか瞬殺されんぞ」

「いやいやアキラ、やつらは戦いに入った事にも気づかず、死んだ
ことにすら気づけんじゃろ」

「あっはっは、そりゃそーだ」

「ふはは、そうだろうそうだろう」

話がそれそうだったので、パンパンと手を叩いて。

「さて、呼んだのは他でもない、このクソつたれな腕輪についてだ」

クソ剣と腕輪。

ぎりぎりまで破壊するのはやめ、その方法の模索をしている段階
だ。

そこで、古代魔法など、詳しくそうなりースも交えてナマ討論会。

「正直、オレはあんまり魔法は上手くないんだわ。

魔導書だつて初級〜中級レベルしかこの城にはなかったし、目を
見張るほどの使い手もそんないなかった。

オレにできたのは、勇者補正の魔力量で力任せに初級を中級、中
級を上級に引き上げるくらいなわけで。

魔法そのものについての知識はそんなになんだよね」

「我を追尾した 光の槍 があつたではないか。

魔法の自力操作ではなく、追尾効果付加は古代魔法レベルじゃぞ
」？」

「あー、なんていうの？勇者の能力で、魔法を創るつてのがあんだよ。」

それで、魔法が追っかけたら便利なのになーって創った」

「そんなあつさりと……。」

本来であれば、相手の魔力を読み取って、それを攻撃魔法に組み込んで、という繊細な作業なのだがな」

どこか呆れたような銀髪幼女。

どうでもいいけど狼耳とかしっぽとか出せないのかな……。」

狼形態のもふもふもいいが、人間プラス獣耳&しっぽもすばらし

げふんげふん。

「まあ、それはおいといてだ。

この腕輪の最適な解除方法を話し合おうというのが主旨なわけで」

右腕につけられた、むしろ憑りついた腕輪をリリースに見せる。

「これがアキラを縛っているという例のものか……。」

我を破った者なのに、どうしてかの……。」

「油断だ」

「胸を張って言いきられても……。」

ああ、げんなりしてる。

獸耳があつたらしょぼくれてるに違いない！なぜないんだ！！

「案としてはいくつかあるんだ。できるかどうかは度外視して、考えてみただけのやつは。

できるかどうかも含めて意見を聞きたいんだよね。

？　ディスプレイ　系の魔法

？クソ剣状態にして、頑張つてぶっ壊す（今までのウラミ！）

？契約を莫大な魔力でオーバーヒートさせて上書き

？王族を脅す。（どうにかして）

？一度仮死状態になって契約破棄、その後復活（番外その1）

？腕を斬りおとす（番外その2）

つてとこだな」

「ふむ……。」

まず、ディスプレイ　系魔法は効かないであろう。

当然対策されておるはずじゃ」

「まあ、サーチ　でそれがあるのはわかってたけどな。

魔力にものを言わせてできるかと思つたんだがやっぱ無理か？」

「アキラ……、お主は魔法を力技で使いすぎじゃ……。」

そもそも魔法とは　　うんぬんかんぬん（約15分）

よつて、対策魔法は魔法の持つ構成をうまく機能させなくさせる。とはリースの談。

そんなこと言われても……、フィーリングでできるからいいじゃん、と思つて半分以上聞き流したのは内緒だ。

「次に、剣状態？というのにして、もっとよく見せてくれ」

「あいよー」

「ふむ。固定化 がかかっておるの。」

「生半可な力じゃ壊せまい」

「リースやオレの刀でも？」

「できるかもしれないが、無理矢理破壊しようとするとなんらかの防衛機能が働くかもしれないぞ？」

「いやあ、大丈夫ですよ。」

「そんなことしたら、ドラゴンとかとバトったときに不可抗力でも防衛機能はたらいちやうじゃん」

「まあ、話が終わってから試すといい。」

「次は、契約者に解除させる、ということでもいいのか？」

「ああ」

「それならば安全に解除できるかもしれないが……そう素直に解除してくれるのか？」

「してくれるわけねえよな」

「そもそも、そんなことするくらいならこんなもん使わねえって話ですな。」

「まあ、そこはいろいろとどうにかこうにかしよつ。」

「では、次の……なんだこれは。仮死状態？死ぬ気がお主っ！！」

「ちょ、近い近い！いきなり詰め寄るな！！」

透き通るような瞳が、目の前にある。

少し動けば、簡単に触れ合える距離。

「させんぞ！復活する確信などないのであろう！！絶対にダメじゃからな！！」

すごく心配されました。

まあ、確かに復活の確信はなかったけど。死ぬのって怖いし、だからこそその番外だ。

「わかった、これはやらない。約束する」

「ぜったいじゃぞ？ぜったいじゃからな？」

「ああ、約束だ」

リースの頭にポンと手を置いて、サラサラの髪をくしけずる。

目を細めて、身をゆだねてくれた。

しばらくしてから、恥ずかしそうにはねのけられたけど。

「……ごほん。それで、次じゃ。

腕を斬る……。まあ、治癒魔法もあるし、切り口が綺麗ならすぐにくつつく、か……？」

「あんまりたくないんだよな……」。

痛いし、本当に腕輪が取れるか心配だ」

クソ剣の腕輪が右手首にあるのは、きっとクソ剣を抜いたのが右手だったから。

別に、腕輪でなくともいいのだ。

元の形態はおそらく剣なのだから。

形態変化できるのなら、腕輪であることに意味はない。

「肌身離さず」が一番の目的なのだ。

呪いの道具ばりに、アクセサリー装備欄がロックされているかもしれない。

「右手首を切ったら、左に移って、それも切ったら足、二の腕、太もも、最後に首とか移動したらヤバいだろ」

それに、腕を斬りおとしてすぐにくつつける。

事故にとる大けがを大手術で治すのなら受け入れられるが、魔法で簡単に、なんて。

接着剤で治す人形みたいだ。

新しく生やすのも論外。トカゲのしっぽじゃあるまいし。

そこまで、人をやめたくない。

「確かに。切ってすぐに治療しても、別の場所に移動されてはな…
…。
首なんて切ったら即死じゃから、実際は仮死よりも危ないのではないか？」

「これ以上悩んでも無理だな。こうなったら実際にいろいろ試して…
…それもダメだったら、めっちゃ嫌だけど、ほんっとーに嫌だけど、手の斬りおとしを試すか」

「やってみなくてはわからんからな」

「そんなじゃ、とりあえず、亜空間に行つて検証しよう。ゲートオープン」

現れたおなじみの黒い扉へ入る。リースもこの魔法を知っているのか、普通に後をついてきた。

「おおつ、財宝が沢山じゃな！」

ばいばい放り込んでおいた金銀財宝が無造作に散らばっている。

「この中で修行することも考えると、整理しといた方がいいのかな……」

取り出す時は、思い浮かべるだけでとりだせてしまうのだが、中で修行するとなると邪魔だな。

「いまはテキストな倉庫でも建てとくか」

土属性を駆使して、簡単な倉庫を建てる。

風を操作して財宝などをとりあえず押し込んでおいた。

「掃除が苦手なやつが押入れに全部ぶち込むようなもんだな……。まあ、掃除苦手なのは否定しないが」

「すつきりしたな。で、アキラ。まずはどうするのだ？」

「まずはクソ剣をぶつ壊そうと画策しようかね」

クソ剣を剣形態に。

「その辺に置いて、と……あれ？」

「消えたの……」

クソ剣を置いて、少し離れるとクソ剣が消えて腕輪に戻りやがった。

「あー、オレに触れてないと戻ってくるんだった。ほんっと忌々しい」

今度は土属性魔法を使い、ブロックを二つ生み出す。

ブロックを橋渡しするようにクソ剣を置き、足で踏んづけた。

お父さんが日曜大工でのこぎりを使う時のような体勢だ。切るのは木じゃなく剣なのだが。

「一刀・天」

天地の内、天だけ呼び出し、上段に構える。

光、嵐の属性と魔力で覆って無属性を発揮させ、速度と切れ味を増す。

「くられ、今までのウラムスラッシュュ!!はあっ!!」

イン!

刀を振り切ると同時、透き通った音色が響いた。振り切れた。

「はははっ、真っ二つだクソ剣め!!」

「やったなアキラ!」

リースと仲良くハイタッチ

「あれ?」

した手首には、見覚えのある腕輪が。

「……………実体化」

嫌な予感。

「直ってる……………」

「これは……………アキラの魔力を吸い上げて自己修復したのか……………」

ほほう、このクソ剣は人の魔力を勝手に持っていきましたか。

いくら溢れんばかりの魔力とはいえ、貴様にくれてやる分などないわあっ!!

「いいだろう、跡形も残らず粉々にしてやる……………!」

「ロックオン」

つぶやく。

再びブロックの上におかれたクソ剣。

それに【LOCK・ON】と表示される。

集中。

練り上げる。

自らの内に存在する莫大な魔力を。

まずは光。

求めるは、速さと貫通力。

光
其は光、なにもものよりも速く速く、速く。貫き穿ち、駆け抜ける

闇。

求めるは、毒の如き侵食。

闇
其は闇、すべてを飲み込み、侵食し、虚空へといざなう、暴食の

炎。

求めるは、圧倒的攻撃力。

炎
其は炎、一切を燃やし尽くし、蒸発させ、なにもかも奪い去る

氷。

求めるは、敵の不活性化。

氷
其は氷、触れたものを遍く静止させ、眠りとともに死を運ぶ死の

嵐。

求めるは、攻撃の連撃化。

其は嵐、立ちあがるのを許さず、何度も何度も吹き飛ばす暴虐の

嵐

岩。

求めるは、魔法の不滅化。

其は岩、ただそこに在り、なにごとにも動じず静かに佇む不滅の岩

白、黒、赤、青、緑、茶色の玉が宙に浮かんでいる。

その一つ一つに、常人ならば浴びただけで卒倒しかねない魔力が練り込んでいる。

「フュージョン　！！！！」

叫ぶ。

すべての属性を、無理矢理まとめ混ぜ合わせる。

そして、凝縮、凝縮、凝縮。

溢れだそうとする力を、魔力で押さえつける。

そうして出来上がったのは、クソ剣のみを押し潰す長方形の黒。

これが今、出来る限りの最強魔法。

撃ちだす直前に、足を引き、クソ剣が腕輪に戻る前に消す。

「カオス　！！」

なんの音もしなかった。

音を置き去りにして、進路上にあるすべてを薙ぎ払って、突き進む。

びりびりびり ！！

魔法が完全に見えなくなって、ようやく音が追いついた。

「うおおおお！？あ、アキラ！亜空間が壊れかけているぞ！！」

言われ、慌てて亜空間に補強用の魔力を流していく。
クソ剣のあつた場所は……。

「やったか……？」

「ちょ、リリース。それはフラ……」

言いかけて、気づいてしまった。

あー、手に軽い重みが。

「実体化。………また魔力パクリやがったな」

「ふむ。アキラという巨大な魔力タンクとつながっている今、破壊はできんと考えるべきじゃな」

がつくりと肩を落とす。
では次。

以下ダイジェストでお送りします。

検証？

「デイスぺ あだだだだだ！」

警告の意味か、唱えようとしたら軽い反撃を受けた。無駄とわかっていても、クソ剣に八つ当たりした。

検証？

「くらえ、オレの魔力をおおおお！！！」

魔力、食べられた。

クソ剣は光り輝き、切れ味が増した！

とりあえず、地面に叩きつけた。

検証？

「一思いにやってくれ……」

リースの爪では繊維がずたずたになるかもなので、一刀・天を貸した。

怖かったので、パラライズを部分的にかけ、局所麻酔としてみた。

腕輪は左手首へ移動しましたとき。

腕をくっつけた後、クソ剣を力の限り叩きつけた。

しかも次に腕輪に戻ったときは右手首の戻っていた。てめえ……。

「やっぱ、契約を解除させるしかないか……」

鬱だ……。

実は契約はすでに無効だったんだよ！

な、なんだってー！！

みたいな夢の展開が……。

「アキラ……、そう落ち込むな。
我も手伝うから、な？」

リースは優しいなあ。

「わかった。そうだよな。味方もいるし、明日なんだ。
今から落ち込んでてもいいことねえし、前向きに考えよう」

いやいや、レッツ、ポジティブシンキング。

「計画変更！」

奴隷に命令される王族、よしそれでいこう！

うんうん、こっちの方がより出し抜かれるよりも屈辱的だろう。
今までずっと、臣下に、民に、奴隷に、そして
命令してきたんだ。勇者に。

「そろそろ、命令される側に回ってもらおうか」

ああ、明日が楽しみだ。

13・はじまり

その日は、朝からお偉いさん方に囲まれていた。

どうやらこのお披露目、結構でつかい行事らしい。

勇者召喚の頻度などは知らないが、魔法陣の条件を満たす時機はそう来ないから、回数は多くないはずだ。

今は式典の一時間ほど前。

タヌキ宰相によって諸注意を受けているところだ。

「勇者のお披露目なのだ。

くれぐれも、それらしい振る舞いをするようにな

奴隷らしい、ですか？

とは言わず。

「特に注意することなどはあるのでしょうか？」

「おそらく、他国の間諜は入り込んでいるだろう。

あまり目立つことはせず、大人しくしていればいい」

「では、念のため顔と名前を変えていいですか？」

「一国家を転覆させようというのだ、本名と顔バレだけは避けないとな。」

「それもそうか……。」

では、紹介の時は何とよべばいい」

「アカツキ・ヒガシとでも。

顔は魔法で変えておきますので」

「アキラ 暁 アカツキ。東城 ヒガシ、というなんとも安直なネーミング。」

「そうか。護衛の騎士どもにもそう伝える。

それと、忠誠を誓う場面と民に演説する場面が存在する。

きちんと文言を考えておけ」

「わかりました」

直前に言つなよ。

存在しない物をでっちあげる必要があるんなら先に言つとけつて。

今回の勇者お披露目という式典。

その全体の流れは。

ある程度、王都内を馬車でパレード。

城門前広場に戻ってくる。

そこで、王と忠誠を誓い騎士となる儀式を行う。

集まった民衆に所信表明演説。

こんなところか。

「では、よばれるまで自室で待機しておけ。
侍従がおまえを着替えさせにいくからな」

「一礼し、部屋へと戻る。」

『リース、聞こえるか。オーバー』

『聞こえるぞ。おーばあ？』

念話でリースと連絡を取った。

彼女は今、人間形態になってオレが ステルス をかけ、潜んで
もらっている。

『王族の見張り、頼むな。』

逃げようとしても、できるだけ殺さないでおいでくれ。
ダルマまでなら許す』

『それも首だけしか残っておらんだろうに……。』

まあ、わかったよ。国潰しとは、これはこれで楽しいかもしれん』
『おっけ。王族についてれば、たぶんオレの動き出しはわかるから。
臨機応変にな。最低限、王族さえ逃がさなきゃ何してもいいよ』

『逃げた奴はどうする？』

『オレのところにつれてきてくれ』

唇の端が吊り上る。

自然と、肉食動物をほうふつとさせる凶悪な笑みが浮かぶ。

『 オレが、やるからさ』

『殺気、抑えた方がいいと思うぞ。
離れていても感じる。』

人は我ほど敏感ではないとはいえ、気づくものは気づく』

『おっと、すまんすまん。じゃあ、よろしくね』

『あいわかった』

念話は終了。

さあ、茶番劇の始まりだ。

踊ろうか。

踊ってもらおうか。

〜王都〜

もうすぐパレードが始まる。

見るからに豪華な馬車の中にあるのは階段。

これを上って、馬車の屋根の上から顔を出して選挙カーのごとく顔を見せまくるのだ。

「ふう……」

ため息をつき、顔に手を当てる。

「マスクレイド 仮面舞踏会」

アキラの顔と手の間に、魔法の象徴が顕現した。

それはオペラ座の怪人であるファントムの仮面をイメージしたモノ。

この日のために創った変装特化の魔法である。
装備することで、仮面は顔になじんでいき、まったく別の顔となることができるのだ。

ちなみに、元に戻るときはルパン三世の変装の如く、顎からペリペリめくればいい。

様式美を追求した遊び心満点の魔法である。

「顔立ちは、完全に別物にするか。
髪と目の色も変えよう。色が同じって言いがかりつけられても困る」

そうして出来上がったのは茶色い髪と目のイケメンさん。
あらこれがわたし、ってなもんだ。

「そろそろパレードが始まります。
準備をしてください」

「わかりました」

御者台にすわる騎士に声をかけられ、階段を上る。

馬車の上から見える景色は、人、人、人、人。

某ラピユタ王の名ゼリフを叫びたいくらい、道の両側にずらーつと並んでいる。

(これが、この国が勇者にかけてきた期待か……)

それは、勇者に押し付けてきた身勝手な希望。

無自覚で、無意識で。

純粹だからこそ、この上なく傲慢な。

そういうものを押し付ける視線だ。

馬車はがたがたと揺れながら進んでいき、王都の街並みをぐるりと回っていく。

そのどこへいっても、民衆たちは勇者に希望の目を向けていた。

「勇者様ー!!」

「我等をお救いくださいー!!」

「魔物を退治してくださいー!!」

「息子の仇をとってくださいー!!」

「俺らも一緒に戦いますからー!!」

道すがら、かけられる声が、つくづく癪に障る。

(ああ、いらいらするっ!!)

勇者だと？

オレを勇者と呼ぶな。

救う？

どうして？なんのために？

魔物を退治？

ギルドにでも頼め。

息子の仇？

人任せにしていい程度なら復讐なんて考えるなよクズ。

一緒に戦う？

おまえらだけでやれ。オレは無関係だ。

彼らは善意で声をかけているのかもしれない。

久しぶりの勇者を前に、これからの期待を募らせているだけなのかもしれない。

だからこそ、腹が立つ。

他人にすべてをゆだねることを疑問に思うやつは、いないのか？

異世界から呼び出すってことが、どういふことかきちんと考えたヤツはいないのか？

魔王がいないこの時代に、勇者という存在の必要性を考えたヤツはいないのか？

そんなやつも、サーチ を使えば、見つかるかもしれない。

あいまいな検索でも、きちんと結果を出してくれるこの魔法なら。

(でも、今さらだ)

こいつらは慣れてしまっている。

身勝手な勇者召喚という、人ひとりの人生を奪う最悪なシステムに。

一方的な奴隷契約という、人ひとりの尊厳を汚す醜悪なシステムに。

後者の、裏の事情を知らないからって、情状酌量の余地はない。前者だけでも、十分だ。

目を覚ませばいい。
国の崩壊とともに。

今まで頼ってきたツケを、支払えばいい。

〔城門前広場〕

広場の周り。

そこは勇者の姿と騎士叙任の模様を、ナマで一目見ようと多くの人が殺到していた。

彼らの視線を背中に感じて、アキラはしかれた絨毯の上を歩いていく。

いつかの、謁見の間のように。

王が玉座に座っているのではなく立っていたり、室内と外との違いはあれど。

あの時と、見かけ上の構図は変わらない。

片や、身分が上の。

片や、身分が下の。

アキラが、王の前までたどり着く。

そうして、片膝をついた。

「今代の勇者、アカツキ・ヒガシよ」

頭の上から、クソ王の声が降ってくる。

広場にいるだれもがその声に耳を傾け、片膝をつくアキラを見つめていた。

「汝を、我が聖王国ペルヴィアの勇者として。

剣となり盾となり、王家を守護することを誓つか？」

「 誓おう！」

初代聖王家の志に仇なす、貴様ら現王族を殺す剣となることを！！」

13：はじまり（後書き）

長くなりそうだったので、ここで分割。

だが断るが不評だった。

言ってみただけの深夜テンションだったことを許してください。

14：騎士団と魔法部隊（前書き）

今回はいろいろとグロイことだ。

14：騎士団と魔法部隊

「誓おう！」

初代聖王家の志に仇なす、貴様ら現王族を殺す剣となることを！！」

「なっ　　！？」

全国民を代表し、クソ王が驚愕の声を漏らす。

そんなものにはかまってやらず、畳み掛けるように大声で叫ぶ。
すでに拡声器のような魔法を使っていて、オレの言葉は王都中に広がっていく。

「勇者と王は盟友だった！
ともに戦うことを誓った対等なる友だったはずだ！！」

知らんけど。
初代聖王家の志？
以前の勇者との関係？
どうでもいい。

だが、大義名分が手に入るならいくらでも吹いてやる。

後々追いかけれないように、オレこそが正しいと誤認させ、畳み掛けてやる。

「だが、いつしか王家はそれを忘れた!!」

勇者を従わせ、格下として扱い、いいように使い捨ててきた!!」

オレの言葉に、だれもが耳を傾け、思考を巡らせる。

勇者のアドバンテージ。

それは カリスマ性だ。

盲目的な、宗教的な、『勇者は正義の味方』という幻想だ。

「黙れっ！そんな出まかせを ！」

「何度も何度も！」

いいように使い捨てては新たな勇者をよび、奴隷のように扱ってきた!!」

さあ、来いよ。

オレがこれだけ挑発してんだ。

「勇者も人だ！」

家族がいて、友がいた!

召喚され、それらをすべて失った勇者の最初の友になることが王家の誇りだったはずだ!!」

やってみろ。

おまえらの切り札を、使え。

拡声魔法を一時解除し、ニヤリと笑って答えてやる。

「おまえがくれた苦痛を、この国全員を対象に感覚共有した。痛覚だったからか、王族とは共有できなかったみたいだが……それだけが残念だ」

何度か味わったオレなら分かる。

あれはなんの覚悟もなければ一瞬で気絶しかねない。

くる、ことが分かっていなければ、今、広場にうつる景色のようにだれもが地に伏すことになる。

一部、冒険者などは痛みに強いのか、膝をつく程度で終わっているようだが。

これでいい。

だれもが今の痛みを感じた。

冷静になれば、勇者が与えたものという別の間違った答えを思いつくかもしれない。

だが、王族の服従魔法行使を聞いた。

王族だけが無事で立っている。

そして 先程の、勇者の演説。

それらは繋がり、人々は勝手に信じやすい真相を見出す。

王家が、悪だと。

「オレは、『正義の味方』扱いらしくてな」

びしっと指を突きつけ、並んだ王族全員をさしていく。

スフィアがびくっと震えたが、なんの感情も浮かんでこなかった。

「おまえらは、オレの前に立っている。
正義の味方である勇者の敵として。
そして、だからこそおまえらに残された役は悪役しかない。
悪役として踊ることしかできない」

再び、拡声魔法を復活させる。

「これが！！王家のやり方だ！！
今のように服従の呪文を使い、代々勇者を奴隷に貶めてきた！！」
さあ、今こそ。

「そんな王家は許容しない！！」
ようやく、雌伏の時間が終わる。

「今代の勇者 アカツキ・ヒガシは！
王家への反逆を宣言する！！」

舞台の幕が開く。
何百年も続いた、歴史ある国家の、最後の日が。

|| || || || || ||

だれもが、声を失っていた。

拡声魔法はもう解除した。

それでもいまだ、騎士や魔法使い、王族、民、だれもが、勇者の告げた言葉の意味を考え、呆けていた。

そんな隙を、見逃すわけがない。

「ロックオン!!!」

王都内全域のマップ。

検索条件。

王都の兵隊。団長、副団長クラスを除く。

貴族とその私有兵。謁見の間にはいたヤツらを除く。

検索結果。

18672人。

その光点すべてに、【LOCK・ON】の表示が重なる。

「勇者に仇なす輩に神の鉄槌を！トールハンマー……！」

王都内のあちこちで、雷が落ちる。

パレードの道を警備していた兵。

広場の警備をしていた兵。

城内から広場を見ていた兵。

それらを映す光点が、すべて黒に変わった。

一瞬で、18672人が死んだ。

「さて、王様ア……！」

これであんたを守る兵隊は、団長と副団長くらいしかいなくなったア！？

オレのことを奴隷にしてくれやがった、

あの時謁見の間にいたヤツらだけは、この手で殺してやりたかったんですよオ……！」

「貴様ア……！」

誰よりも早く、硬直から覚めたのは騎士団長。名前は忘れた。彼が立ちふさがるように切りかかってきた。

双刀・天地を取り出し、剣を防ぐ。

「王よ！城へ！速くお逃げください！」

『リース、逃がすなよ。』

一応城内の通路はすべて塞いだけどな。

あと、自害もさせるな』

『わかっておる』

隠し通路がある城の方が安全だと思っただらうが、残念。
外にも中にも、逃げ場なんてねえんだよ。

王族と残った貴族たちは近衛の団長副団長に導かれ、慌てて城内に
駆け込んでいく。

それを見送って、騎士団長へ向き直った。

「どうしてだ！どうして勇者の君がこんなことを！？」

「黙れよ。」

この腕輪の意味を知っている、おまえらが、オレを勇者だって？
はははっ、馬鹿馬鹿しい！
自分までも騙してるのか！？」

ガキイツ、キイン！

剣戟とともに火花が散る。

「その見慣れない剣、聖剣じゃないな。
なのに、それ以上の業物だ……」

「クソ剣でおまえらをぶった切るのも楽しそうだったけどな。使ってやるかよあんなクソ剣」

会話しながらも、騎士団長の剣は鈍ることのないまま猛攻撃を続ける。

アキラは涼しげな顔でそれをすべてさばいていた。

リースの速さに比べれば、この程度止まって見える。

リースの膂力に比べれば、指一本で止められる。

だが、実力を知らない団長はその事実を許容しない。

フェンリル討伐成功という噂より、手合せしてきた自身の戦績を信じているから。

フェンリルの牙という証拠も、どうせ偽物だと思っていた。

だからこそ、一撃も加えられず、いいようにあしらわれている状況が理解できない。

それは焦りにつながり、力みにつながり
死につながるとい
うのに。

「くそつ、どうして！」

いつもはわたしが勝っていたのに！
力を隠していたのか！」

「全力出したら、おまえらみたいな虫、簡単に死んじゃうだろ？」

「誇りはないのか！」

「その誇りを奪って、奴隷に貶めたのは貴様らだろうが……！」

右手に持った天で、騎士団長の剣を、持っていた腕ごと切り落とした。

「グレン団長！」

その肩越しに、副団長が見える。

（最初の模擬戦を再現しているみたいだな。
違うのは、あの時腕は切り飛んでいなかったことと）

「もう間に合わねえってことだっ！！」

「グレン団長おおおおお！！」

今度はだれの横槍も入ることなく、騎士団長の首が飛んでいった。身体は噴水と化しながら、倒れて。首は副団長の、足元までごろごろと転がっていく。

彼女は崩れ落ちるようにつま先を突き、震える手でそつと手を伸ばした。

「あ、ああ……、あああああああ……！！」

「次はおまえだよ。副団長さま。
愛しの団長の仇、とりにきな」

生首を抱きしめていた副団長に、声をかける。
気色わりい。

「貴様……殺す。殺す殺す殺してやる！！」

ゆらりと立ち上がる狂った戦鬼。
自らの獲物である槍を構え。

「真っ直ぐ突っ込んでくるとか、バカか？」

ひらりとかわし、背中を蹴りつける。

「あぐっ！」

簡単に転がった。

冷静さのかけらもない。

怒りにのみれ、狂気のままに突っ込むだけ。

「んだよこれ。あー、この状態でやってもなあ……。

そだ、いいこと思いついた。

よいしょっと。これこれ。よし、愛しの団長サマの剣で、やってやるよ」

双刀・天地をしまい、ついさっき斬りおとしたオブジェのついた剣を回収。

無雑作に構えた。

「さあ、来いよ。なんならサービスでおまえの腕と首飛ばしておんなじ姿にしてやっからさ」

だが、倒れ伏したままの副団長はうわごとのようにつぶやくだけで反応しなかった。

「くそっ、くそっ、こんなおかしい。間違ってる。

どうしてグレン団長が、なんで、どうして、おかしい、間違ってる」

「あーめんどくせ。もう切っつていいか？」

「まぐれ以外、グレン団長にも、わたしにも手も足もでなかったあいつに負けるはずがない。

そうか、これは悪夢なのか……」

ぶつぶつと、倒れたままでつぶやいている。

「ちっ、この程度で壊れやがって。

あ、そうだ」

思いついた。

＝
＝
＝

「おい、何を呆けている」

「えっ　　？グレン団長！？無事だったんですか！？」

副団長は、目の前に立っているグレン団長を見て驚愕した。

「無事？何を言っている。わたしが負けるはずないだろう。それより、立て。王の所まで行かねばならん」

「はいっ！」

くるりと振り返り、城の中へ走っていきこうとして。

「先に逃げ　　！」

ドスッ

「え、なん、で……？」

背中から腹へ、剣が飛び出していた。

憧れとともに見つめ、見慣れていた、愛しい人の長剣が。

振り返ると、グレン団長が、笑っていて。

わけがわからないまま、彼女は絶命した。

「はははっ！ マスカレード 仮面舞踏会 は面白れえな！」

正気を失ったヤツに復讐しても意味がない。

きちんと正気を取り戻してもらって、それから絶望してもらわないと。

そのために、騎士団長の顔を借りた。

「さて、魔法部隊と近衛のトップ二人ずつを片付けに行くか」

騎士団は剣で。

魔法部隊は魔法で。

近衛は両方を使って。

同じ土俵で圧倒的に勝って、絶望してもらおう。

「今まで侮ってきた勇者が、どういうものなのかきちんとわかって

もらおうか」

サーチ で居場所をさぐった後、その場所まで跳んだ。

|| || || || ||

「やーやー、魔法部隊の隊長さん、副隊長さん」

「なっ!?!」

急に目の前へ降り立ったアキラに、魔法部隊トップツイーであるの女性二人は驚きを隠せなかった。

しかし、すぐに気を取り直して、杖を構える。

そんなものは歯牙にもかけずアキラは笑う。

「さ、かかってこい。

魔法使いとしてのプライドをずたずたにして、その後死んでもらうから」

手のひらを上に向け、全部の指でくいくいと手招き。
かかってこい、と。

「なめないでっ!勇者の魔力量や属性が上でも、腕と経験が違うのよ!」

「勇者とはいえ反逆者、ここで死んでもらうわ!」

「あんたらも勇者って……。知ってるくせになんでそういうことが言えるんだ？」

この国じゃ奴隷と勇者は同義ってのは周知の事実なのか？」

それに、腕も経験も、オレの方が上だろうに。

「火よ、風とともにあれ。風よ、火とともにあれ
「水よ、土とともにあれ。土よ、水とともにあれ
「

二人が詠唱を始める。それをのんびり構えて待っていた。

「へえ、混成魔法か。待っててやるから、ゆっくり準備しな」

「炎となりて、その力を増せ」
「泥となりて、その力を増せ」

隊長が、火と風を混ぜて、火の上位派生である炎を疑似的に作り上げる。

副隊長が、水と土を混ぜて、ゴーレムの時のような後出しの偽物ではなく最初から泥の混成魔法を用いる。

「炎よ、すべてを燃やし尽くせ。触れたものを許さず燃やし続ける。地獄の業火^{ヘルフレイム}」
「泥よ、すべてを包み込み、糧とせよ。敵を包み動きを止める、動く人形となれ。マッドゴーレム」

副隊長の周りに、泥人形が3体ずうっとせりあがる。

出現が終わるまでの間に、隊長が青白い炎を生みだし、こちらへは

なつた。

「ヘルフレイム
地獄の業火」

こちらも、同じ魔法を放つた。

「そんなつ、上級魔法を詠唱破棄！？しかも同じ威力なんて！」

「おいおい、どこ見てんだ。同じ威力？」

オレの言葉に、隊長が炎のせめぎ合いを見やる。片方の炎が、もう片方を飲み込もうとしていた。

「そんなつ、わたしの最強魔法が……」

「最強？あんたは上級魔法だと思ってるようだが、こんなの炎属性の初級だぜ？」

ファイヤーボールの炎属性版みたいなもんだ」

リースに聞いたことだ。

魔法関連の本があるから、読みたいといったリースに貸したのだが、彼女は憤慨しながら文句を言っていた。

「この程度で上級魔法じゃと！？」とか「魔法の構成が違う！効率が悪くないか！」とかいろいろ。

「まさか、きやあああああああ！」

隊長の魔法を吸収し、大きくなった青白い炎はそのまま彼女を飲み込んだ。

圧倒的火力は一瞬ですべてを焼きつくし、後には何も残さなかった。

当然だ。彼女の詠唱がそう望んでいたのだから。

「隊長!？」

「あんたの魔法展開が遅いからこうなる。

なんでゴーレムなんか出しちゃうかなー。ゴーレムは動きが遅いから数の少ない相手には使いづらくて翻弄されるだけなのに」

それでも、防御に専念すれば、その高い防御力で壁にはできる。だが、その程度だ。

「ま、同じ土俵でやってやるけどね。 マッドゴーレム 」

同じように、泥のゴーレムを3体生み出すと、それをぶつけ合った。ゴーレムがなぐり合うたび、泥が飛び散る。が、元が泥なのでどちらもすぐに再生する。

「まさに泥試合(笑)」

「ぶざけないでっ! ゴーレムたち! 」

「ふう、これじゃ終わらねエ。

悪いが、これから先の予定も詰まってるんだ。ちやっちやと終わらす。 錬金 魔法」

オレが造ったゴーレムたちに使う。

属性について学んだ時に考えた魔法。

火属性と土属性の混成魔法。

土にある鉱石などを火の熱と土の打撃によって鍛えるイメージの混

成魔法。

それにより、ゴーレムが鉄に変わる。

「アイアンゴーレム!？」

「鉄と泥じゃ、勝負にもなんねえよ」

はじまったのは一方的な蹂躪。

鉄が泥を殴り、蹴り、再生しようとするればそのたびに散らす。

そのうちに、核が壊され、泥のゴーレムの数が減り、全滅した。

「じゃあ、終わりだ」

「そんなっ !？」

ズドオウン!!

鉄の拳が、副隊長を押し潰し、地面へとめり込ませる。

それを見届けて、ゴーレムたちを消した。

残るは、王族と一緒に逃げた近衛と貴族たち。

「さあ、いよいよメインディッシュだ」

15：復讐と結果（前書き）

今回はちょっと難産。

拷問的シーンはなんか無双と違って、書いているとテンションさが
っていくなあ。

15：復讐と結果

（ペルヴィア城内・謁見の間）

謁見の間の前、門番のように2人の男が立っていた。

近衛騎士団の団長と副団長。

「そこを通してもらおうか？」

間合いに入る、半歩手前。

そこで立ち止まり、声をかける。

「貴様よくもおめおめと！」

声を荒げたのは団長の方だけ。

副団長は油断なく、剣に手をかけ、重心を落としていた。

「逃げたわけじゃないのに、おめおめとって……。逃げたのはおまえらじゃん」

「その逃げ道をすべて塞いでいたのはおまえだろうが！」

「証拠もないのに言いがかりはよくないね。

つか、そんなことはどうでもいいからさ。

そこ通してくんない？部屋の中のやつらに用があるんだ」

「黙れっ！なぜ奴隷の言葉を聞かねばならん！」

「隊長!？」

副団長は、オレの逆鱗に触れることを考慮し、団長をいさめる。

が、オレにとっては団長の方がまだましだった。

「そつだよ。」

みんなさあ、オレのことを勇者勇者ってさ。

バカじゃないの？

「奴隷だろ？」

へらへらしながら笑いかけてやるが、目は笑ってない。

「なのに、おまえらは善人ぶりたいのか勇者ってよぶ。」

おまえらが人を騙して奴隷にしておいて。

反省って言うか、自分がやったことなんだから責任もてないのか
と

人の目があるなら、まだわからんでもない。

でも、この期に及んでそう呼ぶのはおかしい。

もはや勇者ではなく敵なのだ。

「てかさ、こんなことはおまえらに言ってもしょうがないんだよ。」

ああもう、面倒だ。押し通る。」

今まで使う機会がなかったシグとベレッタの2丁拳銃を手に。

無属性の魔力を込め、そのまま魔力砲として撃ちだした。

「がああっ!?!」「ぐっ!」

二人は無様に吹っ飛んで、勢いに押されて謁見の間の扉を体で開けた。

「ご対面ってな」

悠々と中へ。

部屋の中にいたのは、王族と一部貴族、そして、さっき入った近衛騎士二人。

騎士二人は気絶してしまっているようで、起き上がることはなかった。

自らの身を守る、最後の生命線が断たれて、王は半狂乱になっていた。

「近衛がなんという体たらくを!」

「お父様!そんなことより、あいつを!

服従の呪文を使えばあいつは動けなくなります!

そのうちに

「だが、あいつはそれを共有させるのだぞ!」

「ですが、それは王族には効きません!苦しんでいる隙に、わたしたちで殺せばいいんです!」

お、第1王女が気づきやがったか。

でも、それは下策だよ。

「いい作戦だが、第1王女さま。できるのか？」

「できるわよ！」

「へえ。城の中で過ごし、剣を使って人を殺したことがない王族にできるのか？」

「汚れ仕事は騎士や勇者にずっと押し付けて、椅子の上でふんぞり返っていたくせに？」

それに加えて。

「さらに、大声で言ったのはまずかったな。

確かに、痛覚共有は王族どもには効かないかもしれない。でも、そこにいる他の貴族さま方には効くんだよ。

今のおまえの言葉で、王族は孤立するぞ？」

「それであんたが殺せるのなら、耐えるわ！」

「勝手だねエ。ショック死しかねない痛みに耐えるのは、おまえら以外ののに」

一時の痛みを覚悟して、勇者を排除しようとするれば、おそらく殺せるかもしれない。

しかし、その痛みに耐えるのは王族以外。

見れば、王族は部屋に残った王族以外のヤツラから白い目で見られていた。

「クソ王さま。
契約の解除、おまえが自主的にできるだろ？
それでもいいんだぜ？」

「ふっ、どうせ今のおまえは我らに攻撃できん。契約の解除などしたら、それこそ殺される！

貴族たちもだ！

あの時謁見の間にいた我らはみな敵なのだろう！？
こいつが命を助ける保障などないんだからな！
こいつを殺せば確実に助かるんだ！」

ちっ、バカ貴族共も乗り気になりそうだ。

「じゃあ、その手をつぶさせてもらおう。
リース」

「なんじゃ？出番か？」

王族たちの背後から、ステルス を解除して銀髪の少女が現れた。

「……っ!?」「」「」

だれもが、いるとは思っていなかった存在の登場に驚愕する。

「彼女はオレの仲間だね。痛覚の共有からはずしてある。
つまり、オレに服従の魔法をかけて、無事な王族がオレを殺そうとする前に、おまえらは彼女に殺される」

「じっ、じゃあ……」

空気が王族にとって悪くなったのを感じ、クソ王に要求を突きつける。

「ほら、従え。」

奴隷と蔑んできたオレの命令に従え。

じゃないとみんなリースに殺されるぞ？」

「……………」

王妃や三人の王女、王子の少年、全員の目がクソ王を見る。責めるような、懇願するような、様々な想いの混じった視線。

「決断力がねエな。」

クソ王、テメエ自分がぜんぶ決める立場とか勘違いしてないか？
リース、王族のだれかの手、一本飛ばそうぜ。

そしたら、自分の置かれてる立場ってもんがわかんたる」

「なっ、なにをつっ!？」

「おまえの選択肢は2つ。」

リースに殺されるか、自分で契約を解除するか。

服従の魔法をおうとすれば、王族以外は倒れるが、共有から除外したリースがおまえを殺す。

ようは、生きて契約解除するか、死んで解除するか、どっちかしかねえんだ」

「くそっ……………」

「オレがこんな面倒なことをするのはな、奴隷側の気持ちに興味あわ

せたいからだ。

飽きたら、即殺したっていいんだよ」

「そんな……………」

「さあ、オレに従うしか道はないと、認める。

奴隷に命令される立場なんだよ、おまえらは」

クソ王につめより、今にもこたえようとした時、邪魔が入った。

「……………待ってください!」

「……………なんだ? スファイア」

「……………どうして、こんなことを……………」

目に涙を浮かべ、彼女はそんなことを言った。

この期に及んで、そんなことを言った。

一瞬で、頭が沸騰しそうなほどに怒りがわきあがる。

「……………どうして! ? どうしてだ! !」

おまえらがそれを言うのか! !」

オレを無理矢理召喚して! 奴隷にして!

都合のいい道具として扱ってきたおまえらが恨まれていないとでも! ?」

心当たりがないとでもいうつもりか! ?」

「……………それはっ……………」

「言い訳はさせない！」

オレから家族も友人も尊厳も奪ったくせに、おまえらはそれが当然のような顔をしている！

どうして!？

その言葉は、罪の意識がかけらもないやつからしかでない言葉だ！
そういう無自覚だからこそ、オレはおまえらを殺したい!!
誠意も謝罪もないおまえらをぶち殺してやりたいんだよ!!」

「……………」

「それにな、もう遅いんだよ。

オレはすでに18000近い兵を殺したんだからな。
いまさらだ」

「そんな、何も知らない一般兵まで、殺したんですか……………」

「ふーん、どの口でいうんだか。

おまえら、魔物退治だけじゃなくてオレを戦争の道具に使つつも
りだったろ？」

それは、相手国の人間を殺しまくってことじゃないか。
それこそ一般兵どころか民衆も含めてな」

言い当てられたクソ王や宰相は、気まずそうに視線を逸らした。

「オレにとって、その国と、この国。大した違いはないんだよ。

この国に思い入れがあるわけじゃないし、仲間もいない。
むしろ憎しみがあるぶん、ペルヴィアの方が嫌いだ。

戦争するならこっちの国。それだけ。
戦争なら、兵は殺すだろ?」

気づいているか？と壮絶な顔で笑い。

「これはな、1人对1国の戦争なんだよ。無差別に殺してないだけよっぽどマシだ。

それにな、オレはおまえらと違って、自分のやったことくらいきちんと認識してる」

大勢の人を殺したってことくらい、わかってるぞ。

「でも、バカね。そんなに大勢の人を殺せば、あの演説も意味がなくなってしまうわ。

わたしたちが悪くてことにはならない。兵にも家族はある。彼らを奪ったあなたが悪になるじゃない」

第1王女の嘲笑を、逆に笑いとばす。

わかってない、と。

「あれはこの国相手じゃなく、他国相手の演説だ。

間諜が入り込んでいるって聞いてたからな。

反逆の理由を説明して、勇者怒らせたらこんなことになるって言いたかっただけのモノ。

勇者召喚なんて馬鹿げたことを他国もやろうとしないように。

どんな大義名分、きれいごとをいったって、18000人殺してるんだ。

オレはもうこの国の敵だってことくらいわかってるぞ」

「もう、これ以上は、やめてくださいいっ……。アキラ様……」

スフィアが、そう懇願した。

「これ以上、ね。おまえらで終わりなんだけどな。ていうかさ、スフィア。君はどっち側なの？」

「……え？」

「おまえの“役割”は知ってる。正の鎖だろ？」

勇者を縛り、操る、見えない鎖にして、手綱。城で唯一勇者に優しくふるまい、信頼を勝ち取る。そのためならば、身体を使うことも辞さない。

「痛みや恐怖と言った負の鎖じゃなく、信頼や好意といった正の鎖の役割」

「なんで、知って……？」

その言葉に、返事はしない。

「君の行動が全部嘘で、クソツタレな王の命令だったとしても、オレはおまえに癒してもらったし、助けられた」

あの時、真実を聞いてしまった時。

彼女は「勇者」ではなく、「アキラ」とオレの名前を呼びそうになった。

王の命令に、葛藤しているように見えた。

だから、最後に、一度だけ、聞く。

「君は、どっちの味方だ？」

王か？オレか？」

「……………わたしは、アキラさんが好きですっ……………」

最初は命令でしたけど、名前を覚えてもらって、そう呼ぶたびに少しだけ嬉しそうにしてくれるあなたが、わたしにも嬉しかった。

わたしたちがひどいことをしていたって、分かりましたから、人を殺させてしまったって、わかりましたから……………。だから、やめてください。

あなたの意志で、これ以上、だれかを傷つけないで……………」

涙交じりに、スフィアの吐露したそれに。

オレは小さくつぶやいて、答えた。

サーチと。

結果は。

「あは、あははははは！！」

真っ赤だ！真っ赤なウソだね！スフィア！！」

スフィア・ペルヴィア。そのマークは、赤色。

設定はデフォルト。

オレ」に「敵意があるかどうか。

「あー、やっぱり、この国は心底腐ってるな」

緑は味方。
橙は中立。
赤は敵。

「涙まで浮かべて。すげえなあ、オンナの演技って！
サーチ がなかったら絶対に騙されてたな！
あははははは！..！」

顔を手で覆って、笑っているアキラ。
その言葉の端々に、気になる言葉を聞いてスフィアは恐る恐る尋ねた。

「なにを……？」

「もう迷いはない。」

クソ王サマ。契約の解除か、死か、選べ」

もう、第3王女の言葉は気にしない。

「じゃあいい。」

クソ王。おまえは絶対に殺すが、自ら契約を解除すればおまえが愛しているやつを一人だけ助けてやる」

「やめてくれ！王が契約解除したらわしたちは ..！」

「だまれクソ貴族」

ベレッタで撃ち殺す。

放たれた無属性魔法は込められた魔力に応じた威力と硬度で、ザ

クロのようにはじけさせた。

だれかが怯えた声を漏らしたが、そんなものはどうでもいい。

「契約解除以外に道はねえんだよ！

さっさとやれ！」

「余たち王族の安全が保障されなければ

！」

「物わがりの悪いクソ王だな。リース、そいつの腕を飛ばせ」

「わかった」

リースは魔力を固めてつくった半透明の爪を生み出し「やめつ
！」 あっさり王の腕を抉り取った。

「あああぎゃあああああああああ！！」

「黙れ」

以心伝心。察したリースが先のない肩を抑えて倒れているクソ王の顔を蹴り飛ばしてくれる。

「オレは攻撃できないが、彼女にはできる。この意味がわかるか？

おまえはオレに従うしかないんだ。

何度も言わせんなよ？

オレはおまえらを皆殺しにして契約解除してもいいんだよ。

さっきもいったが、おまえらにも奴隷の気分を味わってほしくてな。

自主的に解除すれば、愛する人ひとりだけ助けてやる」

「つぐう……、だがっ……！」

「痛いかな？服従の魔法の痛みはそれくらいかな」

「リース、こいつの腕をくっつけてくれ」

「いいのかな？」

「ああ」

リースが治癒魔法を使い、腕をくっつける。実物の爪ではなく、魔力の爪だったからか、切り口は綺麗で簡単につながった。

「おお、腕が……」

「じゃあ、リース。腕を切りおとしてくれ」

「なん、だつて……？」

あまりの発言に、呆然としてしまうクソ王。

「面倒じゃなあ。何度もやるのか？」

魔力はまだまだ余裕なんじゃが、だるいのう。具体的にどのくらいまでやるのかの？」

「王が契約解除をするまでだ」

「面倒くさいのう……」。

おい人間、さっさと諦めてくれ。

「アキラはやると思ったらやるからの」

そういつて、リースは再び腕を飛ばす。

しばらく放置してから、またくっつけようと治癒魔法を使った。

「ふうああ、あくあ……。はあ、はあ……」

「さあ、契約を解除しろよ。」

あと10数えるうちにしなければ、1人だけ助けるとい言葉も無効だ。

10、9、8、7

「わかった、わかったから!!」

「6、5、4

言葉が聞きたいんじゃない、と目で睨みつける。

「契約の無効を宣言する」

王が魔法を行使すると。

パキーン!という澄んだ音のち、カランと何かが落ちる音がした。

右腕の腕輪がなくなり、腕の下にはクソ剣が転がっていた。

じつと右手首を見つめ、持ち上げ、腕輪の姿も重さもないことを確認した。

銃でクソ剣を撃ちまくり、粉々にする。

オレからの魔力供給がなければ、ちよつと丈夫な剣でしかない。

「あははははは！これで自由だ！」

「よかつたなアキラ。我もうれしいぞ」

「ああ、ありがとよリース。

……で、クソ王。約束通り、1人だけ選びな」

「子どもたちだけは助けてくれ……」

「なにいつてんだ？1人だって言ったただろうが。選べ。

自ら、子どもの生死を決める。

子どもの中で優劣をつけ、3人を殺し、1人を生かせ」

「……………アレク王子を、助けてくれ」

苦渋の選択の末、ただ1人の王子を選択した。

「「「お父様っ！」「」」

三人の王女は、絶望的な声を漏らす。

「すまん……。しかし、王として、血を絶やすことはできん……」

「そうか、では。

王子　死ね」

ターン！と一発。

利発そうな少年は浮かべていた安堵の表情のまま、その命を失った。

「なっ！？助けると言ったではないか！！」

「だから？」

そんな口約束破るに決まってるだろ。

オレは、おまえらから何もかもを奪って絶望して、それから死んでもらいたいんだよ」

平然と言いきったアキラに、リースを除く場の全員が戦慄し、恐怖し、後悔した。

「どうしてこんなことに……」

「ここでどうしてっていうからこんなことになったんだよ、そのの貴族サマ。

ああ、あなたは確か金を全部奪っておいたな。

家族は路頭に迷うだろうな。父親がいなくなるんだから」

「そんつ ！？」

引き金を引く。

次々と。次々と。

恐怖に震えている貴族。倒れ伏す近衛騎士。すべて始末していく。

「さて、宰相サマ。

あなたには世話になったな、改造オーガ、フェンリル討伐。

さよならだ」

その状態のクソ王を、何度も何度も蹴りつけた。悪夢に怯えているため、つねに叫びっぱなしの彼を、気のすむまで蹴りつける。

死にそうになれば治癒魔法をかけ、また蹴りつける。

「もう悲鳴は聞き飽きたな。　　デイスペル」

「「「「　　はっ!?!」」」」

どこかうつろな表情の王族たちを、水をかけて覚醒させる。

「さて、順番に死んでくれ」

まず、第2王女。かわりもないので、特に何とも思わなかった。次は王妃、こちらと同じ。

そのままの流れで、第1王女に銃を向けると、彼女は指を組み。

「待って、助けて……?なんでもするから……」

「おまえにとってオレは道具なんだろう?

道具に意志はない。だから殺意も慈悲もない。

おまえに対しては、そうするって決めたんだよ。書庫の時に。オレがおまえら王族にとって人間だったら、助けるって選択もあつたんだろっけどな」

「そんなっ、やだっ、まだ死にたくっ」

負の鎖の役割を一部になっていた少女は、風穴を空けてそのわず

らわしい口を閉じた。

次は、王。

「クソ王。おまえがこの国を滅ぼした。

おまえが貴族を、騎士を、兵を、家族を殺す原因をつくった。

その事実を認識して

死ね」

「

一言も許さず、引き金を引く。

あつけないもんだ。

「さあ、最後だ」

「(びくっ!?)」

「第3王女。君がオレを召喚した。

奴隷にすると知っていて、使い捨てのコマとするためオレを召喚した。

奴隷契約を結ばせたクソ王も憎いが、君が一番憎いよ。

一時期、オレの心の支えになりかけただけに」

「……………もう、名前では……………呼んでくれないんですね……………」

「そんなことを言いながら、テメエは今も、オレに敵意を持つてる」

「……………はい。でも、もういいんです。

家族を殺し、国を殺したあなたに敵意はありません。

ですが、もう、いいんです。疲れました」

そういった彼女は、どこかすっきりした顔をしていて。

「勇者の慰み者という運命だった私は、この国の崩壊が嬉しかったのかもしれない。

やっと、解放された気分」

満足げな　　。

「そんな顔をするな！

オレはおまえの満足のためにやったんじゃない！
オレのためだけにやったんだ！」

「ええ。だから、あなたのためだけに私を殺して」

両手を開いて。

「あなたは、わたしを縛る所有者だった」

死を、受け入れた　　。

「あなたは、わたしを救う勇者様でした」

タン！

震える指を、動かして。

スフィアは死んだ。

「アキラ……」

「くそつ、後味わりい……」

リースは気遣わしげにアキラを見やる。
俯いて影になったその表情から心情まではうかがい知ることはできなかつた。

「……………ふう、さあ、城を跡形もなく破壊して、国を出ようか」

顔をあげたアキラは力なく笑っていて、魔法とは違つ、新たな仮面をかぶつたようだった。

241

その日。

アキラの パンデミック 感染爆発 による服従の魔法の影響から立ち直つた人々が見たのは。

跡形もなく消えているペルヴィア城と、それがあつた場所の巨大なクレーターだった。

そこには勇者も、王も、貴族も、騎士も、兵も。
なにも残つてはいなかつた。

こうして聖王国家ペルヴィアは完全に崩壊した。

15：復讐と結果（後書き）

次回はスフィアの心情を書いたEX話の予定。
少し時間が開くかも。

EX1:side(スフィア)(前書き)

予想以上の難産っぷり。

途中でブラウザの強制終了をくらい、最初からやりなおしなどの苦難に耐えてお送りします。

EX1：side～スフィア～

side～スフィア～

その日。

勇者召喚の儀が行われる。

生まれてからずっと、わたしはこのために生きてきた。

第3王女という、政略結婚程度にしか道のない役立たずのわたし。

王族という血統が受け継いできた潤沢な魔力で、勇者を呼び出し、籠絡する。

それだけが、わたしの存在意義。

(これが失敗すれば、17年後……)

失敗すればいい、という思いはある。

だが、成功しなければならぬ。

これさえも失敗してしまえば、わたしの居場所なんてどこにも存在しなくなるのだから。

「
」

儀式は簡単。

床に刻まれた魔法陣に魔力を流し込むだけ。

詠唱も必要がなく、すべて魔法陣がやってくれる。

「あ……」

魔法陣が光の柱を生んだ。

やがて、光は収束していき、一人の青年が現れた。

「勇者様、この国をお救いください」

彼は黒髪黒目の、同い年くらいで、わたしとしては少し安心した。

戸惑う彼に名を名乗り、謁見の間へつれていく。

勇者様は廊下をずっとときよろきよろ見回しては、ため息をついたり、頭を抱えたりしていた。

どうしたのだろう、と思いながらも謁見の間に彼を連れていく。

（謁見の間）

勇者様が部屋の中へ入っていくのを見て、わたしも後を追って、王族の立ち位置まで歩いて行った。

謁見の間には、王族や上級貴族、団長、副団長階級がすでに集まっている。

いくつかの説明の後、王家に代々伝わる聖剣が勇者様の前に運ばれてきました。

「しゃらん、と。」

お人形としての、本格的な役割の始まりを告げる音がしました。

「契約は完了した！
今代の勇者、アキラの誕生だ！！」

「そんなっ、契約！って？ まだオレは勇者になるなんて
！」

謁見の間に拍手が鳴り響きます。
わたしは少し遅れて、それに続きました。

「ふん。わめくな。」

腕輪よ、その力を持って契約を知らしめよ。コンライス」

服従の魔法の行使により、勇者様は倒れてしまいます。
いきなりの事態に、わたしは驚きを隠せません。

正の鎖、負の鎖とは聞いていましたが、服従の魔法まで使うとは思っていませんでした。

契約が終わって、勇者様は部屋へ運ばれていきました。

謁見の間からは次々と人が出ていき、王族と宰相だけが残ります。

「スフィア。おまえの役割、わかっているな？」

「はい。わかっております」

「では、明日、勇者が起きたときからはじめよ」

そういつて、お父様は会話を……命令を終えました。

もうこれ以上言うことはないと体現するかのように、わたしのこ

とは眼中から外されます。
人形は役割を果たすのみ、ですね……。

〜2日目〜

わたしの役割、初日です。

朝、勇者様を起こしに行きます。

できるだけかいがいしく、人好きのするように。

そのようにしつけられたわたしは、そのことしか知りません。

「勇者様？起きていらっしやいますか？」

「ああ、いるぞ」

「失礼します。おはようございます、勇者様」

「ソフィア、それは皮肉か？」

皮肉？

わかりません。どういうことでしょうか。

「そんなつもりは……」

わけもわからず嫌われては困ります。

なんとか弁解しようと、ベッドに腰掛けている勇者様に歩み寄り
ていくと。

「 シッ！やっぱり、か……。クソ剣、消えろ」

「 な、なにするんですかつ!？」

「なにが、起こったんですか!？」
え、いきなり、剣で斬られた!?!でも、止まった!?!やっぱりつて!?!」

「殺そうとした」

「なっ!?!」

「まあ、予想はしてたけど、やっぱりだめか」

「どうして朝の挨拶を交わしてすぐ殺されかけたんですか!?!」
なのに、勇者様は平然と、顎に手を当てて考え事!?!」

「邪魔、するんだろうなあ、どうせ。はあ」

「ちよつと、無視しないでください!
なんでいきなり殺そうなんてしたんですか!?!」

「はあ?異世界に拉致されて、勝手に奴隷にされたのに恨まれる覚えはないとでも?」

「わたしは……その、知らなかつたんです。
勇者様があんなふうに扱われるなんて……」

「だって、わたしが知っていることは“役割”と、それを果たすための知識だけ。」

「それ以外は、なにも教えられていない。」

「嘘くせー。オレの前にもいたから知ってんだろ」

「ほ、ほんとにっ」

「それに、知らなかったからってなんになる。

オレを召喚したのはおまえだ。奴隷扱いじゃなくなたって、オレはおまえを恨んでるさ」

「そんな……」

嫌われた……。

どうしよう……やっぱり、わたしは役立たずなの？

役立たず、いらぬ道具、また、あの目で、あんな目で見られるの？

「あーくそっ、泣くなよ！

こんなところ見られたらまたオレが痛めつけられるかもしれねえだろっが！」

「わぶっ、ちよっ」

すごく乱暴に頭を撫でられた。

初めて、だれかに触られる温かさを感じたよつな気がする。

わたし、こんなことも知らなかったんだ……。

なんだかばかばかして、すごく気持ちいい……。

ついさっき殺されかけたというのに、のんきなことだと我ながら思っ。

「……契約を果たせば腕輪は解けるんだろ。」

真面目にやってりゃ懲罰もされないうっし、やってやるぞ。

クソ王にもそう言っとけ。ただし報酬はもらうってな」

あっ、手が……。いっちゃった……。

うん、勇者様のために、報酬についてはお礼代わりに話してみよう。

「で、何の用だ？」

「……ご飯です。従業員用の食堂まで案内しますから」

「へー。王女様は暇なこって」

「……ええ、そうですね。知り合いがいない勇者様を気遣おうとしたのは間違いだったようですね。」

メイドに任せますから気まずい時間を過ごすといいです」

「どっかのだれかのおかげで天涯孤独になっちゃったからな。人見知りを直すいい機会って無理矢理納得しないとないな」

「……………」

「……………」

「嫌味ですか？」

「嫌味ですか？」

少し、意地悪をしてしまいました。

でも、楽しいです。

こういう、だれかと気兼ねなく話すことなんてなかったから。

だから、今回は許してあげます。

「朝ごはんの後の訓練、地獄レベルにしてもらうようお願いしてきます」

しっかりがんばってくださいね？

〜16日目〜

勇者様は、グレン様に勝つほど強かった。

あれだけの凛々しい姿と鮮やかな剣技は見たことがない。

なかったのだが……………。

「どっして…………？」

今では、グレン様にも副団長のリーゼロッテ様にも、騎士団の中で上位にいる人相手では負けてしまう。

またあの汗と聖剣で輝いて見える勇者様を見て見たかったのに。

頭を撫でられたときに感じた温かい気持ち。

戦う姿に感じた憧れ。

それ以来、何度も声をかけてようやく、わたしの方はわだかまりもなく勇者様と付き合っことができるようになった。

あくまで、わたしの方は、だけど。

勇者様は時々、わたしを睨みつけるような眼で見ることがある。

最初、切りかかられた時よりは親密になれていると思っ
ているのですが、道は遠いようです。

そんな中でも、一番の変化が。

アキラさん、とよぶようになった事。

勇者様、とよぶのはやめてくれと。

なんと形容したらいいのか、とりあえず怖い空気でさ
うお願いされた。

アキラさん、と呼ぶと彼は少しだけ嬉しそうにしてく
れる。

でも、それは一瞬だけで、すぐに暗い表情に変わっ
てしまう。

どうして、そんな顔をしてしまうんですか？

笑顔が見たい。

その、きつときれいだろう彼の笑顔が。

見える日が来るといいな。

（19日目）

ついにアキラさんの実戦の日がやってきた。

なんでも、近隣の村から届いた山に住む魔物を退治
してくる、というものらしい。

正体不明の魔物。

もしかすると、とんでもなく強いのかも
しれない。

「でも、どうやってもアキラさんが負ける姿は想像できませんね…」

だから、わたしは彼が帰ってきてからの事を考えよう。

どうやって出迎えてあげようか。

どうやって疲れを癒してあげようか。

いろいろと考え、それに対する反応を想像するととても楽しかった。

しばらく会えない日々をそっやって過ごす。

彼が帰ってきてからの日々を思い描いて。

いまだ見ることのできない笑顔を想って。

「はやく、帰ってこないかなあ……」

〜22日目〜

アキラさんが出ていってからもう3日目。

わたしは、謁見の間によばれていた。

「それで、勇者は今どういう具合なのだ？」

今日は、アキラさんがいない間に、アキラさんの民へのお披露目をどうするかという話のようだ。

「それが、城を出たところで見失ったようでした。

ノーマの村に行き、依頼を終えたことは潜入した魔法部隊からつい先ほど報告がありました。

今は帰り道の途中でしよう。

腕輪の力で探しますか？」

「それは明日戻ってこなかったらでいいだろう。

それよりもやるべきことがあるだろう？」

勇者の披露会はいつにするのだ？」

「明日帰還した場合、その3日後というところではないかと」

今日から、4日後。

アキラさんがわたしたちの勇者から、この国の勇者に変わる日。

「では、そのようにはからえ。

次だ　　スフィア」

「はい」

お父様に呼ばれ、前に進み出る。

その顔は、いつものように厳しかった。

「勇者のいない今、おまえの印象を聞いておきたい。

あやつの籠絡はできているのか？」

「いえ、まだです」

声が、震えそうだった。

そのことを、忘れていた。

「どうも、ア……勇者様はあまり女性に手を出されないようです。城内のメイドも含め、わたし相手でさえ手を握ることすらありません。」

「どうやら、女よりも金、なお方のようです……」

必死で言葉を紡いでいく。

「そうだ。そうだった。」

「なにをやっている！」

「おまえの役割は勇者の召喚と籠絡だろうが……！」

「いつまでも金をせびられてはかなわん！」

わたしの、役割。

何の役にも立てないわたしの、存在意義。

「……申し訳、ありません」

「契約と痛みという負の鎖。

女と信頼という正の鎖。

その二つが揃って初めて、勇者を完全に操れるのだ！

負の鎖だけでは縛るだけ。

使える道具だが、最高の道具にはならんのだ！

勇者を最高の道具として完成させること！

それがおまえの役割だ！それを忘れ遊びほうけていたのか!？」

「……そうじゃないか。」

わたしは、ずっとそのためだけに生かされてきた。

王家と勇者をつなぐもの、といえば聞こえはいいかもしれない。でも実際は、勇者の慰み者で人形、王家の道具で操り人形。

わたしの本質は

人形なのだ。

王家と勇者、そのどちらにも偏ることはゆるされない。

王家のために勇者を籠絡して。

勇者のために身体を提供する。

間に立って、勇者を間接的にだが王家とつなげる役割。

好意を持たせ、いいように操る。

人形がだれかを操るなんて、滑稽だ。

(わたしの役割は、お人形。

勇者に愛される愛玩人形であり、王家の意図―(糸)どおりに動く操り人形)

あんなに楽しかったのに、気づいてしまった。

気づかされてしまった。

そして、信じられなくなってしまった。

このためだけに生きてきたわたしは、今までアキラさんとどう接してきたか。

どこか温かさを感じたのは、彼に好意を持っているから？

それとも、そうなるようにしつけ、育てられてきたから？

わからない。

わからない。

(わたしは、お人形、考えなければ、それで……いい)

結論から逃げて、答えを出すことを恐れたゆえに、最初に戻ることにした。

アキラさんに知られないうちは、どちら側でもない人形でいい。

こんなわたしを知ったら、彼はなんと思うだろうか。
それだけは、怖いかな……。

アキラがすぐそばで、一部始終を眺めていて。
オレンジを示す光を確認していたのは、ついぞ知ることはなかった。

スフィアの諦め、アキラのサーチ。
順番が入れ替わっていれば、光の色も違ったのかもしれない。
それはもう、誰にも確認できないのだが。

〈26日目〉

アキラさんのお披露目の日。

討伐任務から帰ってきたアキラさんはフェンリルの牙を持ってきました。

だれもが驚き、彼をやはり勇者なのだな、と思いました。

そして、それ以来、アキラさんが急に冷たくなりました。

いきなり切りつけられようとした、あの日のように。
敵意の混じった、キツイ視線を浴びせられます。

これでは役割も果たせません。

それにこの3日間、つめたくされただけで、人形ではない生き方をあきらめきれなくなっています。

わたしは、弱いですね……。

それにしても、この急な変化はどうして？

わたしが、なにかしてしまったのでしょうか。

おまえが悪い、そう言われることが怖くて、なにも聞けません。

ですが、このままでは嫌です。

この式典が終わったら、勇気を出して、聞いてみましょう。

そう、思っていたのに。

「誓おう！」

初代聖王家の志に仇なす、貴様ら現王族を殺す剣となることを！

「！」

「なっ　　！？」

「今代の勇者　　アカツキ・ヒガシは！

王家への反逆を宣言する……！」

仲直りの機会は、永遠に失われてしまった。

|| || || ||

国中に雷が降って、わたしたち王族と一部貴族は近衛の二人に守られながら城へと逃げ込んだ。

付き従うように走りながらも、わたしの頭の中は疑問だらけだった。

奴隷。

反逆。

その言葉がぐるぐるとめぐり、どうすればいいのかわからない。

「くそっ！この道もふさがれている！どうなってるんだ！」

「ダメです！この岩は壊せません！魔法で補強がしてあります！」

「これもあの勇者か……っ！くそっ！」

王城にあったはずの地下通路はすべて塞がれて、どこにも逃げることはできそうにありません。

(これは……ずっと前から……)

これは、ずっと前から計画していなければできない。すべての道をふさぐなど、事前の準備が必要になる。

(アキラさん、いつからこんな……)

彼が聖剣を受け取ってからというものの、向けられていた敵意は、ずっとこれのためだったのでしょうか……？

冷たかったのも、これのため？

少しだけ仲良くなれたと思っていたのはすべて幻想だったのかな。

(痛い……)

ズキン、と響く。

そのこと自体に、疑問を持った。

お人形が感じるものなんてない。

愛されてうれしいか、めでられて喜ぶか、その程度しか許されない。

寂しいとか、辛いとか、そんな感情は……。

よくわからない何かに苛まれながらも、わたしたちは逃げ道を探し続けていた。

それは結局実ることはなく、たどり着いたのは謁見の間。そこで籠城することになった。

すぐに、謁見の間にアキラさんが現れた。

そこにあるのは純然たる殺意。

それが向けられているというだけで、身体に怖気が走る。

彼はお父様を睨みつけ、銃を突きつけている。

奴隷にされたことに怒りを燃やし、契約の解除を迫っている。

その姿に、わたしはどんな感情を抱いているのだろう。

自分でも自分がわからない。

「 待ってください! ! ! 」

「 ……なんだ? スファイア 」

「 どうして、こんなことを……? 」

反逆。

これがなければ、きっと。

今頃は仲直りができていて、アキラさんの笑顔が見れたんじゃないか。

そう、思ってしまっ。

「 どうして! ? どうしてだ! ! ! 」

おまえらがそれを言うのか! ! !

オレを無理矢理召喚して! 奴隷にして!

都合のいい道具として扱ってきたおまえらが恨まれていないとで

も!?

心当たりがないとでもいうつもりか!？」

「それはっ……………」

そうかもしれない!でも、わたしが言いたかったのはそういう意味じゃ……………」。

「言い訳はさせない!

オレから家族も友人も尊厳も奪ったくせに、おまえらはそれが当然のような顔をしている!

どうして!？」

その言葉は、罪の意識がかけらもないやつからしかでない言葉だ!そういう無自覚だからこそ、オレはおまえらを殺したい!!誠意も謝罪もないおまえらをぶち殺してやりたいんだよ!!」

「……………」

向けられる殺意に、何も言えなくなってしまう。すでに引き返す機会を失った、望んでいた未来への希望を捨てきれないだけ。

今この状況をどうにかしたいとは思っていないかった。

「それにな、もう遅いんだよ。

オレはすでに18000近い兵を殺したんだからな。いまさらだ」

「そんな、何も知らない一般兵まで、殺したんですか……………」?

「ふーん、どの口でいうんだか。」

おまえら、魔物退治だけじゃなくてオレを戦争の道具に使ったもりだったろ？

それは、相手国の人間を殺しまくってことじゃないか。それこそ一般兵どころか民衆も含めてな」

道具。

その言葉に、はからずも共感してしまう。

人形であるわたしと、同じ。

愛玩人形であり、操り人形であることしか望まれなかったわたしは知らないことばかりだけど、似た境遇であることだけは理解できた。

だからこそ。

「もう、これ以上は、やめてください……。アキラ様……」

そう懇願した。

すべてに耐えられなかった時の、自分を見ているようで。人形としての役割を放棄し、解放された自分の未来のようすで。見ていられない。

「これ以上、ね。おまえらで終わりなんだけどな。

ていうかさ、スフィア。君はどっち側なの？」

「……え？」

「おまえの“役割”は知ってる。
正の鎖だろ？」

その、言葉は。。。

「痛みや恐怖と言った負の鎖じゃなく、信頼や好意といった正の鎖の役割」

「なんで、知って……？」

一番、知られなくなかった事実。

知られたくない人に、知られてしまった。

と、同時に、気づく。

どうして、知られなくなかったのか。

知られても、別に問題はない。

身体を使って虜にすればいいだけ。

彼だって都合のいい女としてわたしを使っただろう。

それが……嫌？

(そっか。わたし……………)

お人形。

彼にだけは、そう思われなくなかった。

役割を知っている人はわたしをお人形として扱い。

そうでなければ第3王女として扱う。

勇者と王家のお人形か、王家のお人形かというだけで違いはない。

でも彼はそれを知らないから。

「君の行動が全部嘘で、クソツタレな王の命令だったとしても、オシはおまえに癒してもらったし、助けられた」

わたしも、癒されていたんだ。
助けられていたんだ。

アキラさんに依存するように。
逃れられないお人形の役割を果たしながらも、そうとは知らずに接してくれる彼に、助けられていた。

「君は、どっちの味方だ？
王か？オレか？」

この気持ちは、きっと。

「……………わたしは、アキラさんが好きですつ……………。
最初は命令でしたけど、名前を教えてもらって、そう呼ぶたびに
少だけ嬉しそうにしてくれるあなたが、わたしにも嬉しかった。
わたしたちがひどいことをしていたって、分かりましたから。
人を殺させてしまったって、わかりましたから……………。
だから、やめてください。
あなたの意志で、これ以上、だれかを傷つけないで……………」

人形としての役割しか与えられず、それに関する知識しか知らない少女は、初めて感じた好意がどこか歪んでいるとは気づかず。
だからこそ、自らの内につごめき持て余す、様々な感情はそのま
まに、その言葉を口にした。

初めての愛や好意も、同類と出会えた喜びも、この状況の恐怖も、

人殺しに向ける敵意も、なにもかもをひっくりくるめたまま。

人形として、生きてきた彼女には。

気持ちの整理をつける、なんてことはできるはずもなかった。

そして、優秀な魔法である サーチ は、彼女の内にうごめく敵意をきちんと読み取り、主に報告する。

結果は。

「あは、あはははははは！！」

真っ赤だ！真っ赤なウソだね！スフィア！！」

スフィア・ペルヴィア。そのマーカーは、赤色。

「涙まで浮かべて。すげえなあ、オンナの演技って！

サーチ がなかったら絶対に騙されてたな！

あはははははは！！」

どうして彼が笑っているのかわからない。

どうして演技や嘘などと言われるのかわからない。

「なにを……？」

「もう迷いはない。

クソ王サマ。契約の解除か、死か、選べ」

アキラさんはわたしから視線を外してしまっ。

彼の眼に、わたしは映らなくなってしまった。

それが悲しくて、その原因がわからなくて困惑して、どうすれば

いいのか、どうなっているのかわからなくなる。

お人形としての知識では、どうすればいいのかは教えられていないから。

そうこうしているうちに。

人が殺され、拷問が始まり、すべてが終わりへ加速していく。

「 契約の無効を宣言する 」

「 あはははは！これで自由だ！ 」

「 よかったなアキラ。我もうれしいぞ 」

その光景を、憧れを持ってみていた。

それと同時に、なにかがガラガラと崩れていくのを感じる。

もう彼は、自由となり、一人となった。

お人形のままのわたしとは違って。

たとえ役割を果たせるとは到底思えなくなった今でも。

お人形としての生き方しか知らない、わたしとは違って。

彼は進める。

わたしを置いて、どこまでも。

「ああ、ありがとよリース。

……で、クソ王。約束通り、1人だけ選びな」

「子どもたちだけは助けてくれ……」

「なにいつてんだ？1人だって言ったただろうが。選べ。

自ら、子どもの生死を決めろ。

子どもの中で優劣をつけ、3人を殺し、1人を生かせ」

「……………アレク王子を、助けてくれ」

「「「お父様っ！」「」」

予想はしていたが、やはり衝撃だった。

仲間からも、家族から見放されてしまった。

役割をはたしている間は、見放されはしなかったけれど……もう
終わりということなんだ。

「すまん……。しかし、王として、血を絶やすことはできん……」

「そうか、では。

王子 死ね」

タアン！と一発。

大した会話もしたことがない、弟はあっさり死んでしまった。
それに、もはや大した感情を抱かないわたしはまさしく人形なん
だろう。

一般兵について責めたことも、アキラさんがそれをしたことが嫌

「「「「 はっ!?!? 「「「「

解呪されたのだろう。現実に戻ってきた。
でも、ここもそう変わりはない。

わたしを望むものはすでになく、彼らはわたしを必要としていない。
い。

王も、アキラさんも。

姉が、母が、また姉が、そして、父が。

それらの命が奪われていくのに、やはりわたしは何も感じない。

いや、少しだけ、あった。

解放されたことへの喜び。
解放されたことへの恐怖。

自由になれた。でも、生きていくすべなど知らない。
お人形としての生き方しか知らない。
そんな喜びと恐怖。

「さあ、最後だ」

「(びくっ!?!?)」

命を失うことに恐怖する感情は、残ってたんだ……。
どこか他人事のように、わたしは思う。

「第3王女。君がオレを召喚した。

奴隷にすると知っていて、使い捨てのコマとするためオレを召喚した。

奴隷契約を結ばせたクソ王も憎いが、君が一番憎いよ。

一時期、オレの心の支えになりかけただけに」

「……………もう、名前では……………呼んでくれないんですね……………」

それだけ。

目の前に迫る死ではなく、それだけが、心残り。

「そんなことを言いながら、テメエは今も、オレに敵意を持ってる」

「……………はい。でも、もういいんです。

家族を殺し、国を殺したあなたに敵意はあります。

ですが、もう、いいんです。疲れました」

それは本当だろうか。

気づいてしまったわたしは、それらが亡くなり、解放されたわたしは、今では敵意を持っていないのではないか？

ぐちゃぐちゃだった気持ちは、この光景を前に整理がついてしまった。

自分をお人形にした王族はすべて死に、鎖は消えてなくなった。

敵意を向ける相手はもういない。

好意を向けるべき相手だけ。

それが自身のものか、役割による強迫観念なのかはわからないけど。

この気持ちは、確かにここにある。

それがわかったただけでもう、すっかりした気分だ。

「勇者の慰み者という運命だった私は、この国の崩壊が嬉しかったのかもしれない。

やっと、解放された気分」

だから、この状況をつくり、わたしをお人形ではなくしてくれたアキラさんに感謝すらしている。

「そんな顔をするな！

オレはおまえの満足のためにやったんじゃない！

オレのためだけにやったんだ！」

「ええ。だから、あなたのためだけに私を殺して」

あなたに殺されるのなら、わたしはきっと嬉しいから。

「あなたは、わたしを縛る所有者だった」

アキラさんがくれる、最初の贈り物。

彼からもたらされる、死を、受け入れよう

「あなたは、わたしを救う勇者様でした」

最後に見たアキラさんの顔はひどく歪んでいて。

心残り、もう一つ、あつたなあ。

一度くらい、笑顔が見たかったなあ……。

スフィア・ペルヴィアは、人形ではなく、人間として。

死を迎えた。

EX1:side(スフィア)(後書き)

これはスフィアをいい人にするための話ではないです。
彼女も彼女でいろいろ狂ってますからね。

そのように育てられたことに一番の原因はありますが。

EX2：過ぎ去りし思い出

これは、まだスフィアの役割を知らなかった頃。

王宮の中で、彼女だけは味方なのかもしれないと思っていた時の話だ。

アキラは朝食の後、用意された自室に戻ってきた。

はいいが、これからの予定はない。

騎士団長によるシゴキもなく、魔法部隊たちの講義や練習もなく、クソ王との嫌味謁見もなく。

一日オフの完全フリー。

実に1週間ぶり休みだ！

「さすがに、疲れてるな……。」

今日のはんびり寝てすごす……ぜったいだ……」

ベッドにぼすつと倒れ込み、ふかふかの枕に頭を埋めて……眠りに……。

「勇者様！わたしも剣を振ってみたいんです！」

ばたんと大きな音を立てて現れたのはスフィア。

そんな彼女に、とりあえずあいさつする。

うん、一日の始まり。朝のあいさつは大事だぞ。

「帰れ」

「いやですー！」

「おまえここでは『はい、では失礼しま　せんよっ!?!?』ぐ
らいのノリッッコ!!!しろよ。」

もう帰れよ

「のりっっこみ?」

「うわー、まさか伝わらないとか……。もう土に還れ」

「それ遠まわしに死ねって言うてますよね!?!?」

「はあ……。寝よ……」

もぞもぞ。布団にもぐりこんで、頭からかぶってシャットアウト。
うん、これで万全。おやすみー。

「寝ないでください!
起きてくださいよー!」

かけ布団をはぎ取られ、身体を揺すられる。

最初は無視していたが、さすがに我慢できなくなった。

とりあえず身体を揺するスフィアの手を払いのけ、彼女を睨みつ
けて「正座」と告げて座らせる。

「……スフィア。オレは久しぶりの休みなわけだ」

「はい。そう聞いています。

だから、ここに来たんです。

お暇なんでしょう?」

「スフィアに付き合う元気がない。
だから休ませろ」

まるで日曜日に子どもを邪険にするお父さんの如き振る舞いである。

だが、そんなもの子どもには通用しないのだ。

「いいからいいから!

ほらっ行きますよ!」

「あー……めんどくせー……」

ずるずると引きずられ、やってきたのは城の裏庭的場所だ。

城が影になって日が差さない暗い場所だからか、オレ達以外にはだれもいない。

「さあ、勇者様!

わたしに剣を教えてください!」

細身の剣を向けるスフィア。

いや、これ……。

「おまえ、教えてもらおう立場じゃないよね。」

今、オレに剣を突きつけて脅しちゃってるよね?」

「違います!」

ほら、この剣を取って、見本を見せてほしいんです!」

「持ち手の方を向けるよ……。はさみ……。はまだ発明されてないんだっけ?」

とりあえず、刃物を渡す時は刃が無い方をさし出せ」

「あ、そうですね。気づきませんでした……」

「大体、オレにはクソ剣があるからおまえが使え」

ささっとテキトーに教えて、部屋に戻ろう。
どうせ気まぐれだろうし。

「くそけん……?」

あ、聖剣をそんな呼び方しちゃダメですよ!」

「うっせ。いいからやるぞ」

「はいっ!」

よろしくお願いします!」

「……………まず、持ち方が逆だと気づけ」

スフィアの剣の持ち方から指導していく。

右手と左手逆につつやつが本当にいるとは思わなかった。

オレの騎士団シゴキを見学していたくせに、いったい何を見てい

たんだこいつは。

持ち方を指導した後は、とりあえず素振り。

へろへろくっという素振りを見て頭を抱えてしまったが、とりあえず改善点を指摘していく。

が、直らない。

まあ、ね。剣なんて持ったこともないだろうヤツが相手だ。しかも、無駄に熱心で諦めてくれない。

テキストに教えてさっさと退散計画が台無しじゃないか。

「そんなへっぴり腰でなにを斬るつもりだ！」

「なにも斬りませんよ！物騒な！」

「じゃあなんで剣を習いたいなんていいだしたんだよ……」

結局、スフィアの剣の指導は日が暮れるまで続くこととなった。

「なあ、もうやめないか？」

「日も暮れてきたし」

「はあっ、はあっ……」。

「そうですね……。そろそろ、終わりにしないと……」

地面に突き刺した剣にもたれかかり、荒い息を整えるスフィア。

「それにしても、どうしていきなり剣を習いたいなんて言い出した

んだ……？」

スフィアは王女。

自身が矢面に立って戦うなどありえない。

それに、剣よりも魔法の方がまだ可能性があるだろうに。

「あの、だって……」

「だって？」

「……勇者様は剣を主に使いますし……、同じ武器を使うならその……」

スフィアはもじもじしながら指を突つつき、顔を俯かせる。

「……もっと、仲良くなれるかと思ったんです……」

顔は見えないが、髪から覗く耳が真っ赤に染まった。

そして、スフィアはそれ以上しゃべらなくなる。

「そか」

「……っ、はい」

なんとなく言っていていかかわからなくなって、手持無沙汰にスフィアの頭を撫でた。

置いた瞬間、彼女はビクツと震えたが、撫でられる感触に力を抜く。

しばらく、そのまま時間が経ち、ここからどうすればいいかわか

らなくなってしまう。

手をゆっくりと放し、気まずそうに咳払いして空気を誤魔化すが、それが成功したかはわからない。

「じゃ、オレは夕食に戻るよ」

「……はい」

この時は、知らなかった。

だからこそ、こんなにも楽しい時間を過ごすことができたのだらう。

一応、復讐の相手だと頭では理解していても。

やはり彼女だけは違う、などという愉快的な勘違いをしてしまった。

オレは、知らなかったから。

仲良くなりたい。

その気持ちは純粹なモノではなく。

正の鎖という、勇者を縛る役割から生まれたものである
じやなび。

EX3:sideリリース1(前書き)

500万PV記念のリリース話です。

アキラくんと出会う前までの話となっています。

EX3：sideリリース1

自分と他の同族たちは違っていた。

フェンリル族の隠れ里という小さな世界。

その中で、我は“ズレて”いた

それを最初に自覚したのは、生後1年ほどの時。

初めての狩りの時だ。

同族たちが傷つきながらも学び、獲物を狩っていった。

かすり傷一つでさえも、つくことはなかった。

同族たちが初めての成功に喜び、鮮やかな思い出を得た。

それはただの作業に過ぎず、達成したというほどのことでもなかった。

色褪せていた。

温度差があった。

同族の感情が頭では分かってても、心では分からない。

理解はできても、共感はできない。

どうして喜べる？

あんな雑魚に傷をつけられたのに。

どうして喜べる？

できて当然のことができただけなのに。

なあ、どうしてなんだ？

そうしたズレを抱えながら、年月を過ごし。

次のズレを感じた。

ある時。 同い年のオスを下した。

発情期に、とあるオスが寄ってきたのがその原因。

どうしてもそんな気にはなれず、嫌悪すら抱いた我はそれをはねのけた。

「こんな奴に身をゆだねるなどあり得ない」

言葉にするなら、これが一番近いように思う。

上手く言いづらいが、自らの選択は 心は正しいことだと思っていた。

だから、それを信じ続け、それに従い続けた。

しかし、このようなことを考えるのは異端だったようだ。

個体種の少ないフェンリル族は、絶滅のすぐ隣を歩いていたのだから。

強いオスを望む精神性・誇りはあろうと、それは何十年もの間、子をなさないこととは直結しない。

巡る年月の中、一度も子を産んでおらず、そもそも一度だって交わってすらいない、なんて個体は彼女だけだった。

自分よりも強い個体は確かにいたのだから、ソレを選ぶこともできたはずなのだ。

それでも。

たとえ強く、里一番とされるソレが。

皆が言うほど強くも気高くも感じられなかったのは、やはり我だけだったのだろう。

ズレが決定的なものとなったのが、里一番のオスを下した時だ。

ヒマな時間、いや、ほぼすべての時間を鍛錬にのみ費やしてきた。

そのおかげか、元よりぬきんでていた実力は瞬く間に伸びていった。

メスの中では、最も強いと噂されるほどに。

我としては、その噂は間違いであり、メスの中という枠などいらなないと思っていたが。

里一番のオスから襲われた　　という表現は私の認識であり、

向こうとしては繁殖のための当然の行為だろう　　時、それを
はっきりと確信した。

そのオスとしては強い個体を求め、より強い個体を産み出すためだったのだろう。

まあ、我の不遜な態度に誇りを傷つけられ、鼻っ柱を折ってやろうというのもあったのかもしれないが。

そして、それはどちらも失敗した。

我が強く、相手が弱かったからだ。

一瞬だけひやりとした場面はあったものの、それだけだ。

そして、私の行いは同族にとって、やはり異端の一言に尽きたようだ。

フェンリル族としての繁栄を望まぬかのような行い。

力と言えば群れのオスともなりうるオスを拒絶。

そのオスを慕っている、狙っている者からすればやはり苛立つ行いだったのだろう。

我としては、当然の如く、弱き者に身を任せる気が起きなかっただけなのだが。

だが。この戦いで得たものがあつた。

一瞬だけ。

ほんの刹那。

感じたものがあつた。

微かに、触れた死は。
我に色を与えた。

色褪せていた景色が、鮮やかに見えた。

初めてであった困難が、壁が、達成の喜びを垣間見せた。

……次の瞬間には、やはり容易いことだったと、諦めることになったのだが。

刹那の間に得たソレは、この手から零れ落ち、二度とはつかめなかった

だが。

あの時感じた熱が、ほとほと進む「生」の実感が、とっくに我を虜にした。

だから、戦いを求めた。

近くになければ外に出て、ひたすらに強者を求めた。

同族たちと戦った。

終始つまらぬ戦いだった。

魔族と戦った。

初めて見た魔法に関心を覚えたものの、打ち破ってしまえば再び色が抜け落ちた。

獣人と戦った。

身体に傷をつけられたことに歓喜したが、全力をだせば終わりが

訪れた。

人間と戦った。

思いもよらぬ方法が飛び出してきたが、一振りですれは脆くも崩れ去った。

戦いを経るごとに、求める強者の基準が上がっていく。「生」を感じる瞬間が減っていく。

同族とのズレだったものは、いつしか世界とのズレのように感じていた。

ただ漫然と生きている。

呼吸している。食事している。就寝している。

ああ、それだけだ。

そこに意味はない。

そこに意義はない。

そこに貴賤はない。

そこに価値はない。

ズレている。

色がない。

望んでいた「生」は得られないまま過ぎていく。

もがくように、戦いを挑み続ける。

終わった後に残るのは虚しさだけ。

ふと、原因を考えてみた。

このズレの原因は、いったいなんなのかと。

答えは、強さ。

生まれたときから、その強さ故に同じ立場の者がいない。
その強さ故に、伴う誇りは尊く気高いものとなる。

だから理解されない。理解できない。

強者が欲しい。

生を実感させてくれる強者が。

このズレを埋めてくれる強者が。

共に並び立てる強者が。

そんな、諦めが混じり始めたある日。

見つけたのは、半透明の幽鬼。

か弱い人の姿をしているにもかかわらず、放つ力の波動は今まで
とは段違いだ。

ああ、そういえば、まだ霊の類とは戦っていなかったか。

そんなとりとめのない思考が浮かび。

速やかに意識、身体、すべてを戦闘へシフトさせていく。

おまえは、どうなのだ。そこな幽鬼よ。

我に、「生」を実感させてくれるのか？

そこに宿すは一縷の望み。

ずっと届かなかつた願いへ、今一度手を伸ばす。

さあ、幽鬼よ。

おぬしは我とともに、並び立ってくれるのか？

EX3: sideリリース① (後書き)

かっこいいリリースを目指して書き始めたはずが、なぜかこんな話に
……。

孤高という属性もちだからか会話らしい会話もなく……。

1：他者から見た変化（前書き）

切りのいい前話で終わらせるべきか、続けるべきか、いろいろな意見をいただきました。

自分は元々続けるつもりでしたし、最後の最後はハッピーエンドがいいなあと思うタチなので先に続けることにします。

できれば最後までよろしくお願いします。

1：他者から見た変化

『聖王国家ペルヴィア崩壊！

〜勇者の反逆と王家の暗部』

「……なに、これ？」

手渡された紙束に書いてあったのは、そんな見出し。

この世界におけるゴシツプ雑誌のようなもんなのかな。

「いやあー、びっくりだよなー。いやさ、僕も行商でペルヴィアに向かうところだったんだけどさ、もう大混乱で。

城ごと武器も食料の備蓄もなくなつて。噂では雷にうたれた兵士の装備がおもちゃになつてるなんてものもあるくらいさ」

「ごとごとと揺れながらペルヴィアを離れる馬車の中で、オレ達を乗せてくれた商人のボルクがからからと笑つ。

その表情と言っている内容は真逆だ。

「だが、商人にとってはいい機会なのではないか？

モノが足りんのならば、儲けるちゃんすであるつ？

どうして引き返したりしたんじゃ？」

人間形態のリースがそう言う。

慣れない馬車でお尻が痛いのか、こつそりさすつていた。かくいうオレもケツが痛い。

緩衝材とかマットとかないものかねえ……。

「それはきちんとした市場の話だよ。

足りないモノに対する希少価値を含めた対価がきちんと払われてこそ、のね」

「どう違うのじゃ？」

「うーん。例えばね、食料難の時、ご飯を持っていくといっぱい売れるよね？」

「けど、それが儲けになるにはきちんと代金をもらわないといけないんだ」

「買い物に金を払うのは当然であろう。」

「アキラに教わったから知っているぞ！」

「どこか得意気に胸を張るリリース。」

「ま、たいしてはれていないんだけど。」

「アキラ？なんじゃその目は」

「なんでもありません。ええ、なにも思ってたんかないですとも」

「ならいいのじゃ。」

「それでボルクよ。お主の言う通りならやはりチャンスじゃろうに」

「いやいや、そう甘くなかったんだよ。」

「国庫が消えたって言ったでしょ？」

「ようは、国から大量にお金がなくなっちゃったんだよ」

「ん？モノを買うのは民であろう。」

「民の金はなくなっていないはずじゃ」

ちらり、とこちらをうかがうリース。
それに小さくうなずき肯定を示す。
そんな時間はなかったからな。

「この混乱に乗じて、隣国の『帝国』と『城塞都市』が王国を属国化しようとしてね。

さっき言った通り、王都の武器屋以外ろくな武器がなくなつて、あっさり終わったみたいだ。

その国がね、国庫がないからって民から金を徴収してるんだよ。

おかげで治安は悪化して、行商に来た商人は入って数分で持ち物全部奪われるって噂さ」

「むづ……ひどいのう……」

「ギルドは？治安維持とかしなかったのか？」

うなるリースの頭を撫でて、とりあえず紙束を膝に置く。

ポルクはオレの疑問に手をありえないとばかりに振りながら笑って答えた。

「ギルドは一目散に撤退したよ。

慈善事業じゃないからね。冒険者は命がかかってるいる分、僕ら商人よりもシビアな時がある。

金と命のつりあいが取れるかどうかには敏感だ」

「ふーん。そんなものか……」。

にしてもさ、式典にはその国のやつらも来てたんだろ？

じゃあ、城ごと金が消えたってことくらい知ってたはずだ。

なのになんでそいつらは侵略しに来たんだ？」

ボルクに尋ねる。

兵士がいなくなったから治安の悪化はあり得るかとも思っていたが、そこはギルドがなんとかすると思っていた。

でも、まさか周辺各国が動くとは思っていなかったのだが。

「ペルヴィアは周りを国に囲まれているからね。

勇者の力でなんとか侵略を免れていたに過ぎない。

そんな国を抑えれば遠くの国へ侵攻するのも楽になるし、鉄などの鉱脈もある。

どうせ難民化した民衆は押し寄せるんだから、せめて旨みを、つてことじゃないかな」

「へー。さすがあきんど。

金の関わる話には頭が回るねー」

「それほどでもないかな、あはは」

照れたのか、頭をかきながら頬を染めるボルク。

どうでもいいが、30半ばの男がしてもなあ……という仕草である。

話がひと段落したので、もう一度新聞に目を落とした。

『聖王国家ペルヴィア崩壊！

～勇者の反逆と王家の暗部～』

センセーショナルな見出しの下、記事には事実と憶測織り交ぜて面白おかしく書いてある。

そこに書いてあるのは、勇者が行ったことや宣言、王族の死、城

の消失と言った事実から憶測を広げている。

いわく、王族は今代の勇者を制御しきれなかった。

いわく、勇者は悪逆非道で容赦がなく、万を超える犠牲がでた。

いわく、周辺各国、とくに『帝国』が反逆勇者のカウンターとして召喚を行うため研究中！？

(最後のこれ、記者の憶測だろうけど……、カウンター兵器として新たな勇者をよぶつもりか……？)

こんな重要な情報が漏れるとは思えない。

だが、根も葉もない、とは言いきれないのが怖い所だ。

記者でも考え付いたことを、国の上層部が考えないわけがない。心構えだけでもしておいた方がいいかもしれないな。

(しかし、あれだけのことをしでかした前例のある勇者をまた呼ぼうなんて考え……。

自分たちなら制御できるとでもうぬぼれているのか?)

自然、手に力が入ってぐしゃりと紙束が潰れた。

「わわ、ごめんボルク。せっかく見せてもらったのに……。

お金は払うから」

「いや、やぶれたわけじゃないし、僕個人のものだからいいんだけど……。

どうしたの？そんなに怒るなんて」

見れば、ボルクだけじゃなくリースまで心配の色を浮かべていた。それをごまかすため、努めて明るい声でおどけてみせる。

「この勇者の似顔絵見てねー。かつこいい癖に勇者とかくたばれっ
て感じですよね」

記事に大きく書いてあるのは変装、というか変身した後の姿。
ま、イケメンになるようにしたんだけどね。

「む、似顔絵まで出回っているとは……。
そやつは賞金首にでもなったのかのう？」

「リースちゃん、そうじゃないみたいだよ？
さすがに一人で国を崩壊させた相手に手を出しても無駄だろうし、
表立って探されてないだろうね」

「表立って？」

ボルクの言葉に違和感を覚えたのか、リースは小首をかしげる。

「ギルドの賞金首にはならないだろうけど、どこの国も水面下では
探してるんじゃないかな。

あくまで僕の予想では、だけど」

「水面下、ねえ。

接触してどうするつもりなんだかな」

「僕が思うに、我が国には手を出さないでくださいって不干渉をお
願いするか」

「　　とっ捕まえて、兵士にでもするかってところか」

ボルクのセリフを奪って、そうつぶやく。

彼はそれに頷いて。

「十中八九後者だろうね！。
だって不干渉なら探さなくてもいいし」

「野放しでも怖いし、だが好戦的な国に入られると考えるとそれも怖い。

この勇者ってやつはどこに行つて、これからどうするんだか……。
それだけで色々と大事になりそうだし」

自嘲気味に、そう漏らす。

どこかの国へ入ることは、一見するとそう悪い選択肢じゃないように思える。

一つの国に入り、その国に保護してもらおう。
代わりに戦力になる必要があるが、追われる心配はなくなる。

だが、それも国がまともだったときの話。
ペルヴィアのようなクソみたいな国もありうる。

それに例え国がまともだとしても、監視はつくだろうからゆっくり一息つくこともできなくなるだろう。

だから、その選択肢はない。
国なんて信用できるはずがないのだ。

「そうそう。勇者は置いといてさ、アキラくんたちはこれからどうするの？」

ペルヴィアに行く途中だったんだよね？」

「そうだったんだけど……。式典を見に行くつもりが、遅れて。でも、そのおかげでボルクに出会えてよかった。まさかペルヴィアがそんなことになっているとは思わなかったから」

「うむ、その通りじゃな」

ボルクはいい人だ。

そんな人に嘘をつくのは少し心苦しいが、そういうことにしておいた。

ペルヴィアに向かうつもりが、その国の方角から向かってくる馬車にたまたま声をかけ、状況を知って引き返す。

運のいい旅人、それがオレ達だ。

「まあ、おかげで目的地がなくなったんだけど。

そういうボルクはこれからどこに向かうんだ？」

「うーん、このまま拠点のある街まで戻ってもいいんだけどさ、行商でここまで来ちゃったからね。

帰り道の近くにある街でなにか売っていくつもり」

「その方向に近い国なんかはないかな？」

「どうせ旅人、王国にこだわる必要はないしね」

「それなら、獣王国家ムジンだね。

獣人や賢獣の国で、腕力至上主義の国だよ」

「じゃあ、その分かれ道まで相乗りさせてもらっていいかな？」

「これでも冒険者。護衛はするからさ」

「それならオーケーだよ。

僕もギルドの護衛がいたんだけどね、依頼はペルヴィアまでだったんだけど、王都で別れちゃってね。

なんでも王都のギルドに知り合いがいるらしくて。

帰りの護衛は国の混乱でそれどころじゃないし、不安だったんだ」

だが、そこで彼は口を濁し、申し訳なさそうに続きを話した。

「でもね、食料があまりないんだ。

切り詰めればいけないこともないけど……。途中で獣を捕えてもらわないといけないかも」

「ああ、こつちもある程度の食糧はあるので、大丈夫です。

相乗りまでさせてもらうんですから、ボルクさんにもあげますよ」

そういって、背負ったリュックから食料を取り出す よう

に見せかけて中につくった亜空間からバレないように取り出した。

「それはありがたい。じゃあ、途中までだけどうぞよろしくね」

「こちらこそ、よろしくお願ひします」

そういって、握手を交わす。

魔法を使って飛んでいくのもいいが、あまり目立ちたくない。

いろいろ情報も得たし、乗りかかった船（馬車？）だ。護衛の経験でもしておこう。

それに冒険者として過ごすなら馬車にはなれないといけないから、いい機会と思うことにする。

そんな風に納得した時。

1：他者から見た変化（後書き）

獣王国家ムジン。

獣王ムジン　じゅうおうむじん　縦横無尽

という安直ネーミング。

ムジンは無人とかけられることに気づいて一番驚いたのは作者かも
しれない。

誤字修正。

2：覚悟の種類（前書き）

いつの間にかPV150万アクセス超え ユニーク20万超えして
いてびっくり。

というかもうびっくりした。

ありがとうございます。

2：覚悟の種類

「グルオオオオオオオオオオオオ！」

突如響き渡った唸り声。

生物に本能的な恐怖を抱かせるような、低く重く震えるそれ。

「あれは……ドラゴン？」

そこにあるのは遠目に見ても豪華な馬車と、それを守るように広がる数人の護衛たち、そしてそれと戦うドラゴン。

ファンタジー世界の想像によくあるような翼を持ち、空を飛んでブレスを吐く類ではなく、どちらかといえば恐竜に近いイメージだ。四肢が発達し、その強靱な四肢でもって地上を蹂躞する陸の王者。

ティラノサウルスのような二足歩行ではなく、四足でトカゲのように這って進んでいるが、その安定性故に速度はなかなかのもの。

「ランドドラゴン……、こんなところにまで出てきてるなんて……」

ボルクがどこか絶望の色をにじませながら、そう漏らした。

「ふむ、大きさからみてまだ幼生体といったところかの」

「あれが、ドラゴン……」

アキラやリースの力量からしてみればしよせんただのでっかいト

カゲ。

もっとでっかい翼のある空飛ぶドラゴンならば心躍っただろうが、あれではね。

ティラノほど大きくないから、ジュラックパークごっこも期待できない。

自動車程度の大きさではロマン数值は低めだ。

「ど、どうすれば……」

「よし、目の前の馬車とその護衛に気をとられている間にさっさと逃げよう」

「じゃな。あの程度を相手にするのはおっくうじゃ」

「二人とも落ち着きすぎだよ！もっとないの!？」

「なにが？」

「だ、ただだって！ドラゴンだよ!？」

ランドドラゴンは下位竜種だけど、それでもBランクのモンスターなんだよ!？」

僕たちなんて一口でパクリでゴクンでドロドロだよ!？」

なにやら力説するボルク。

彼の頭の中ではあの口に丸のみされ、胃で溶かされる様がありありと想像できているんだろう。

「でも、フェンリルとか空飛ぶドラゴンとかと比べれば、なあ？」

「ふむ、歯牙にもかけぬとはまさにそのことじゃろっな」

「ええー？なにこれ僕がおかしいの？」

竜種なんて下位でも出会ったら死ぬ覚悟しろって言われるくらいなんだよ？

もしかして、二人とも高ランクだったりする？」

「ん？ギルドランクは最低のEだけど？」

「なのになんでっ！なんで余裕なの！？」

泰然としたオレ達の様子に期待したようだが、あいにくギルドの依頼はまだ受けたことがないので最低ランクだ。

その事実をしったボルクは頭を抱えてしまった。

「ま、落ち着け。さっさとトンスラする準備しようぜ」

幸いランドドラゴンは目の前の戦闘に夢中でこちらには気づいていないようだ。

ならば、このままトンスラこいてしまつのが正解だろう。

「……そ、そうだね。今のうちに迂回しよう」

「へえ、助けよう、とは言わないんだな」

自分で言っておいてなんだが、意外という印象を隠しもせず、ボルクの真意を聞こうと聞きかえしてみた。

その答えは。

「僕はただのしがない商人にしかすぎないんだ。

帰る家があるし、家族もいる。」

だから手におえないことはしないし、むやみに首は突っ込まない。それが僕みたいなのやつが生き残る術なんだよ」

馬に迂回するよう指示を出しながら、ボルクは100メートル程向こうの戦闘から目をそらした。

かるくいなくて、馬はゆっくりとその場から離れていく。

「それに参戦する、ということは僕だけじゃなく君たちまで危険にさらすということだ。

相乗りのお礼として護衛はしてもらっけれど、死地に送り込みかねないことはしない。

それは護衛じゃなくて討伐だ。別物だよ。

だいたいね、だれかを救いたいのなら、ペルヴィアから逃げずに食料をタダでも配ったろうさ。

そうしなかった僕がここで君たちを戦わせるなんて選択を取れるはずがないよ」

なるほど。

ボルクのこういふ精神には好感が持てる。

潔いというか、一本芯があるというか、確かな矜持と覚悟がある。

「ま、オレらはEランクだし、な？」

「どうにもEランクの態度じゃないけどね……」

「気にすんな」

ボルクの肩を軽く叩いて、視線をランドドラゴンと戦う一団へと向けた。

少し距離があるので、^{ズーム}拡大視を使用。
さて、世の冒険者はどんぐらいのレベルなのかね。

護衛らしき戦闘員は6人。

5人が半円状にランドドラゴンを囲むような配置で攻撃をしており、1人が正面の壁役の奥にいる。

杖を持ってなにやらぶつぶつやっている雰囲気なので、後衛の魔法使いなのだろう。

見るからに魔法使いというか、気弱そうな女の子だ。

一方、馬車の方に目を向けると、馬の近くに御者らしき男が赤く染まった右腕を抑えて倒れていた。

片腕でなんとか止血しようと動いていることから深い傷ではないとわかる。

戦闘の際に誤って通してしまったかなんかしらしい。

その衝撃で御者がいなくなり、馬車は即座に離脱できなくなったのか……。

さて、ドラゴンとの戦闘に目を戻す。

「けっこう善戦してるな……。こりゃあいつらだけでもどうとでもなったかな」

戦闘員の内訳は、剣が1人、槍が2人、双剣が1人、弓が1人、そして魔法使いが1人。

少し後衛が少ないが、パーティーに遠近、それに魔法と揃っているのはこの世界では珍しいことだろう。

見たところ、リーダーは槍を持ってランドドラゴンの正面に陣取っているヒゲの男。

たくましい体躯と槍捌き、他の数人によどみなく出す指示の正確さからみても熟練の冒険者だな。

Bランクのランドドラゴンを相手取れるのだから、平均C以上はあるパーティーなんだろう。

基本戦術としては、弓のやつが軽い牽制を行い、正面以外の3人が横や斜めから注意の薄いところに切りかかる。

そして、ランドドラゴンの気が完全にそれれば、真正面のヒゲ槍が大きな一撃をお見舞いする。

反撃には、その場所以外の人間が攻撃、気をそらせる。

それを繰り返し、徐々に徐々に、じわじわと体力を削っていく作戦。

「いやらしい戦い方すんなあ……。でも、堅実だ」

感心したようにそうつぶやく。

とその時、やっと後衛の魔法使いの詠唱が終わったようだ。

彼女の杖から大きな火の槍が現れる。

その大きさをゆえに、槍の形をとるまでにしばらく時間はかかったが、その放つ熱量と威圧感は今まで冒険者たちの剣戟を歯牙にもかけなかったランドドラゴンを初めて感情をうかがわせた。

驚愕と、恐怖。

「ほお……。単なる 火の槍 じゃなく 炎の槍 か……。けっこうな使い手だ。」

見た目内気っぽいのにけっこうやるね」

炎の槍 がきちんと形をとるまで他の5人がランドドラゴンを抑え込み、逃がさない。

と、クライマックスというところ。一つ思ったことがあった。

「やっぱ、声も聴きたいな……」

集音 を使うことにする。

制限しなければそこらじゅうの音が集まってしまつので、きちんと範囲・音量を制限する。

すると、さっきまで遠くでざわざわ程度だった戦場の様子がきちんと届くようになった。

「爆ぜよ！ 炎の」

それは最後の詠唱。

決まれば、この戦闘は無事に終わる。

「おまえら！ さっさと片付けないか……」

「きゅっ」

はずだった。

だれかの怒号と、小さな悲鳴。

内気な少女然とした魔法使いはその見た目通り、背後からいきなり怒鳴られたため身をすくめる。

それに伴い、魔法の制御が甘くなった。

詠唱の最終段階、魔法の名をもって魔法の効果を確定させる最重要の場面において邪魔が入ったから。

必然、魔法は本来想定していた結果とは異なることとなった。

ランドドラゴンのドタマにぶち込まれるはずだった 炎の槍 は狙いを違え、敵の手前、地面に落ちて大爆発を起こす。

それは爆風を巻き起こし、石ころを弾き飛ばし、それら二つはランドドラゴンを囲んでいた仲間を吹き飛ばした。

本来ならばランドドラゴンに当たり、周囲への影響は少しの熱波程度だったはず。

一応パーティーは距離を取っていたが、ランドドラゴンよりも手前に落ちたため、爆風だけではなく吹き飛ばされた石や砂がまずかった。

良くて打撲、悪ければ骨折や、最悪死の可能性もありうる。

今現在、すぐに動けるのはヒゲ槍が盾となった魔法使いの少女だけだ。

勝利の一步手前という状態から一転。
別の形での終わり。

「ち、ちがつ。これはわたしのせいじゃ……。」

「そうだ、今の内にっ！」

いきなり馬車から怒鳴り散らして戦闘の邪魔をした小太りで脂ぎった男は、自らの引き起こした光景におろおろとした後、なにを思ったのか落ちていた剣を拾い上げて。

切りつけた。

魔法使いの女の子を。

「きゃあっ!!！」

「なっ!?!」

信じがたい光景。

それはきつと、切りつけられた側の少女も変わらないだろう。

そして、少女は倒れ、その表情に絶望の色を浮かべていた。

少女は、死ぬ。

ついさっきまでなら、生き残る道があった。

詠唱の時間が稼げない分、敵の攻撃をかわしながら軽い魔法を連発して牽制し、周りの仲間の回復を待つ道が。

だが、それも潰えた。

爆風で怯んだランドドラゴンが気を取り直し、痛めつけられた怒りに身を任せればそれで終わり。

全員が、食われるのを待つことしかできない。

「急げっ……」

最善の可能性を奪った張本人、小太り男はようやく止血を終えらしい御者を叩き起こし、馬車へ乗り込む。

そして、すこしでも身軽になるため、いくつかの荷物を捨て始めた。

護衛たちの分であろう食料など、そして やつらのいう『
商売道具』。

それを聞いて。その言葉が指すモノを見てしまった。

「奴隷……だと……!?」

見覚えのある、見覚えがありすぎる刻印が刻まれた首輪。

それだけではなく、念のためなのか手かせ足かせがはめられ、それが奴隷全員を鎖でつないでいる。

それはアキラの頭を沸騰させた。

「時間稼ぎと、生贄……………」

聞こえた言葉とやつらの行動を総合してでた答えが、それ。

護衛の冒険者たちはまだいい。

そういう仕事をしているのだ。

命を失う覚悟くらいはしておいてしかるべき。

アキラ達が彼らを助けようとしらない理由の一つはそこにある。

だが。

奴隷には、それが無い。

確かに、奴隷の中にはオレのように無理矢理拉致された者ばかりがいるわけではない。

貧窮の結果、奴隷に身を落とす覚悟して身売りを決めた者はいらぬだろう。

しかし、それは死ぬ覚悟とは別物であるはずだ。

奴隷として働く覚悟と、死ぬ覚悟。

軽い重いではなく、種類の違い。

そして。

護衛と奴隸を見捨てたクソ小太りよりも。
迫るランドドラゴンに怯える護衛や奴隸たちよりも。

奴隸の内、数人の。

諦めている表情が。

ここで死んでしまうことも仕方ないと、受け入れているかのよう
な表情が。

なによりも、癪に障る。

だから。

「
殺^やるか」

そう、覚悟を決めた。

2：覚悟の種類（後書き）

予想以上に長くなった……。

脂小太りをブツ飛ばすまでのはずが、あれー？

3：最低と最悪（前書き）

やはり戦闘シーンは難しい……。
なんか冗長になるなあ……

3：最低と最悪

「アキラ……?」

「リース、ちよつと行ってくるわ」

「ちよつ!?!」

最後まで聞かず、馬車の淵に足をかける。

アキラは顔に手をやり、その手を下ろしたときには顔には一つの仮面がつけられていた。

マスカレード
仮面舞踏会。

それは顔を変える魔法。

いつかのように、東城アキラではなく、金髪イケメンの対外的な勇者アカツキ・ヒガシの顔に変化。

それが終わったことを確かめ、「ふっ」と呼気を一つ。一気に跳ぶ。

足場にした木が折れた音がしたが、かまうものか。

100メートル超の距離を一足飛び。

通りすぎる風を心地よく感じながら、舞うように跳ぶ。

その距離を滞空している間に、亜空間から久しぶりの登場になるベレッタとシグを取り出した。

「よっ、と」

軽く狙いをつけ、無属性のただの魔力弾を放つ。
狙いは、戦闘領域を離脱しようと急ぐ馬車。

タタタタツ、と馬車の周りへ発砲。

馬は怯え、御者は転げ落ち、馬車はその動きを止められた。

脂小太りのわめき声が聞こえる気がするが、無視して嫌がらせも兼ねて何発も撃っていく。

その反動で体勢を微調整、身体をランドドラゴンの頭上へ持っていくために。

「グルウオアアアアアアアアアアアア！」

眼下から、ようやく石つぶてと爆風から復活したランドドラゴンの怒りの咆哮が響く。

魔法使いの少女と数人の奴隷たちは、それを見てビクツと身をすくませる。

腰を抜かし、ケガした足や鎖のついた足のみままで、叶わないと知りながらもずるずると後ずさるうとする。

そこへ。

「口閉じろトカゲ」

「ガフツ!？」

強烈な一撃。

ランドドラゴンの頭上へつけたアキラは身をぐるりと回し、全体重をかけた回し蹴りをくらわせた。

強制的に咆哮は鳴りやみ、冒険者たちを飲み込まんとしていた口は閉ざされる。

その光景を、だれもがポカンとした表情で眺めていた。

理解ができない。

冒険者からすれば、あれほど苦戦していた相手にあっさり放った蹴りがダメージを与えるなんてことが。

奴隷からすれば、突然どこからか跳んできて、竜種に蹴りを入れる救いが現れるという事態そのものが。

アキラはそんな彼らではなく、虚ろな目でただただ諦観している数人を真正面から見据え、突きつける。

「さて、おまえらの全部諦めたクソみたいな人生をまだまだ続かせてやる。

ここがおまえらの転換点だ」

「グルアアアアアア！」

「うぜえよ」

背後から、完全なる死角からの攻撃。

それを虫でも払うかのような態度で蹴り飛ばす。

斜め下からの回し蹴りで顎をかち上げ、這っていた身体をのけぞらせる。

顎を蹴った勢いのままに足を地面につけると、ランドドラゴンが体勢を立て直す前に懐へ。

がら空きになった胴体に、魔力の身体強化を受けた全力の蹴り上げ。

「ギイギヤアアアア！」

アキラの4倍はあろうかというランドドラゴンがくの字に曲がって、宙へ。

砂塵を伴い飛び上がる。

「オラアアアアア！」

持っていた二丁拳銃を向ける。

属性をランドドラゴンの弱点、風の上位属性の嵐へ換装。

魔改造によって得たフルオートに設定。

二丁を構え、引き金をぐいと引いたまま固定する。

タタタタタタタタタタタタタタタタッ！！

まさに嵐の如く降り注ぐ緑の彗星。

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

銃撃の音は鳴りやまず。

竜の悲鳴は途切れない。

絶え間なく撃ち込まれる銃撃に、竜は地面へ落ちることを許さない。

肩が下がれば肩が、足が下がれば足が、頭が下がれば頭が、次々と撃たれ跳ね上げられる。

威力の抑えられた弾では体を貫通することなく、打撃を与えられ続けたランドドラゴンは悲鳴すら上げることはできなくなっていた。アキラは銃をしまい、緩やかに下降してくるそれに、手のひらを向けて。

「さあ、終わりだ。

火よ、汝はすべてを燃やし尽くす破壊の権化。」

先程の少女が失敗した魔法を強化させ、放つ。

いい趣向だろう、と言わんばかりに口の端を歪めて。力量を計られないよう、無詠唱ではなくきちんと詠唱する。

「風よ、汝は火を助け、ともに燃え盛り炎を成す。」

それは魔法使いの少女のものとは似て非なる魔法。なによりも、それは少女が一番肌で感じていた。

炎は一瞬で形を成し、籠められた魔力と熱量はビリビリと威圧感を発し、なのに肌を軽く焼くような熱さは感じない。

熱はすべて槍に閉じ込められ、完全に制御されている。

その色は赤ではなく、もはや青白い。

少女は気づかなかったが、火と風によって酸素供給量をいじった結果、火と火のかけ合わせでつくるよりも少ない魔力で到達できる

炎の領域だ。

それを、いとも簡単に作り上げた。

「炎よ、汝はすべてを燃やし、燃やし、燃やし尽くせ。灰すら残さずすべては無へ」

込められた意志は「燃やし尽くす」という強烈な意志。

少女のように「爆ぜよ」と爆散させるのではなく、「燃やし尽くせ」と燃焼させる。

前者は衝撃が広がる分、与える威力が若干下がってしまうが、後者にはそれがない。

槍を構成するすべてが敵だけを殺すために存在する。

圧倒的な殺意を宿す槍。

それなのに。

「きれい……」

少女は思わずそう漏らした。

「蒼炎の槍」

アキラは青く燃え盛る炎の槍を、振りかぶって

投擲。

飛ばないランドドラゴンに避ける術はなく、槍はその腹に直撃す

ると貫通することなく炎がそこから広がり竜を包みこむ。

「……！！！」

断末魔の叫びすら漏らすことも許さない。

青い炎は一瞬にしてドラゴンを燃やし、微かに残った灰すらも風に流されて。

なにも遺さなかった。

「……………」

だれもが呆然と、竜が燃え尽きた後の空を見上げていた。

|||||

「おっ、おおおお、よくやったぞ貴様！」

静かな空気をぶち壊したのは、馬車から文字通り転がり落ちた例のアイツだった。

「…………… 空気の読めねえ脂小太りが」

アキラは心底憎たらしい、とばかりに舌打ちする。

おまえに褒められたくなんかねエし、おまえのためでもねえ、と嫌悪のオーラが身体全体から発せられているがそれに気づかず脂小

太りはのしのし歩いてアキラに詰め寄った。

「貴様、よくやってくれた。

おかげで『商品』は無傷だ！」

ピクツ、とこめかみに青筋が立ったような気がする。

自分でも自分の顔がどうなっているかわからない。

脂小太りが汚らしく笑っているから気づいていないんだろうな。

「先程の護衛たちはなんとも使えないやつばかりだった！なので貴様是我輩の護衛として使ってやるっ！」

どんだけ上から目線だこいつ……。

我慢我慢。聞きたいことを聞くまで我慢だオレ……。

「使えない……？」

ランドドラゴン相手に善戦していたようだが？」

「ぶふっ！」

えええー、なにその笑い方……。

アキラはドン引き。

脂ぎった醜く汚い顔が歪んで何とも言えない、というか言いたくない顔を形成していた。

「6人がかりでいつまでたっても倒せず、拳闘同士討ちするような冒険者など役立たずとしか言いようがないではないか！」

Bランクだというから雇ってやったのに、まったく使えない！」

「そんなっ……最低っ！なにそれ！」

依頼を受けた護衛に対してそんなこと言っなんて！
しかも、わたしを剣で斬りつけてドラゴンのエサ兼足止め扱い！
このことはギルドに報告して罰を受けてもらうわ！」

魔法使いの少女ははまだ倒れている仲間たちを治療する傍ら、投げつけられた罵倒を聞いて憤る。

そこに今までの気弱さはなりをひそめ、脂小太りを気丈な目で見らみつけていた。

「それは困るな。

ほら、その新護衛。そのうるさい女を殺せ」

脂小太りはアゴで指示する。

その目線の先にいるのは……え、オレ？

護衛するなんて言っていないのに、もう護衛扱い？

「……………」

オレは黙って少女に近づくと、少女はビクッと身を固くすくませ、それでも持っていた杖をオレに向けた。

杖を軽くのけて、手のひらを彼女に向ける。

「ヒール 治療」

「……………え？」

魔法使いの少女、そしてその仲間であろう護衛パーティーの傷を癒す。

「き、貴様！なにをしているー！」

「治療しただけだ」

「貴様、命令に逆らうなど！」

「オレも冒険者でね。信頼できない依頼主につくなんざありえない。護衛を切りつけ、奴隷を捨てゴマにする。そんなやつの下じゃいつか自分も切られるからな」

ベレッタを持ち上げ、脂小太りに向ける。

この世界にここまで高度な銃はないが、先ほどの戦闘を見ていたらこれがどんなに危険なものかはわかるだろう。

その証拠に、面白いほど慌てはじめた。

「お、おい、なんだそれは。なんのつもり……」

「おまえの護衛？そんな依頼は受けない。だからおまえの命令はきかない」

……………

脂小太りに聞こえないように、そうつぶやく。

持っていたベレッタが微かな魔力に反応して、淡く光ったことは気づかれなかったようだ。

「 テメエごときが、オレに命令できるだなんて思うなよ？」

「 なっ！！このクピッグ商会次期会長のトンポー・クピッグ様に対してその口のきき方……！！」

貴族御用達の我が商会を敵に回すことがどういうことかわかって

いるのだろうなっ!!」

「さっさと消えろ」

クピッグ商会……。それが聞ければもう十分だ。

「くっ、クソッ！」

脂小太りはわたたと落とした食料を拾い集め、奴隷たちを馬車へと押し込んでいく。

アキラはそれを眺めながら、その背中に声をかけた。

「待て。その子は置いていけ」

奴隷たちの内、一人だけ。

頭に猫耳が生えている獣人の少女。

奴隷たちの中で、最も目が虚ろで、生気が感じられない。生命力ではなく、生きようという気持ちそのものが感じられない。

そこに、自分が歩んでいたかもしれない果てを幻視して、アキラはその少女を要求した。

今から向かう獣王国家ムジンならば獣人もいる。

せめて彼女だけは直接連れて行こう。そう思って。

「貴様、言うにことかいてなにをっ！」

「命を救ってやったんだ。これくらいいいだろう。」

……それとも、今すぐテメエを殺して奪ってやるのか？」

全力の殺気を叩きつける。

脂小太りは「ひっ」と震え、何度も何度も失敗しながらようやく手かせ足かせを解いた。

その様を、件の猫耳はただただ見ているだけ。

奴隷契約書を交わし、首輪にアキラの魔力を認識させて終了。

一連をびくびくしながら終えた脂小太りは一目散に馬車へ乗り込んでいった。

獣人の少女を除いた奴隷たちが乗り込み終わった後、ようやく目が覚めた護衛たちが不承不承といった感じでそれについていく。

さすがに、荒野のど真ん中において行かれるのは困る上、護衛の依頼を放り出すわけにはいかないらしい。

後々、ギルドに報告はするだろうが、それまではついていくようだ。

その中から一人がこちらに歩いてくる。

護衛パーティーのリーダーらしきヒゲ槍のおっさんだ。

「どうやら、あなたのおかげで助かったらしいな。礼を言う」

「別にいい。ただ、ギルドに報告するなりしてあの脂小太りはきちり制裁しろよ」

「ああ。力ある商会だから直接の制裁はできないだろうが、ブラックリストに乗せるよう働きかける」

「ならいいさ。気をつけるよ。魔物にも、あの脂小太りにもな」

「感謝する」

うーん、ダンディだ。

ヒゲ槍の後ろ姿を見ているとそう思う。

「行くぞっ!!」

走り出した脂小太りの馬車を見送る。

今は殺さない。

今は、な。

さっき、こっそり脂小太りに使った魔法は

パラサイト
寄生虫。

相手の体内にもぐりこみ、魔法を使った者の命令に対象者を永続的に従わせる魔法。

相手の持つ魔力を糧に、ずっと働き続ける最悪の魔法。

これが便利なのは、発見の困難さにある。

精神干渉系の魔法は、魔法の痕跡が残る。

探査系魔法を使うとバレてしまい、被使用者以外の、第三者（魔法行使者）の魔力が見つかってしまう。

ようは、探査系魔法に引っかかるのだ。

だが、パラサイト 寄生虫 はあくまで宿主の魔力を使っているため、感知されるのは宿主の魔力だけだ。

第三者の魔力は感じられず、探査系魔法の網を潜り抜ける。

ここで、脂小太りに宿した パラサイト 寄生虫 に与えた命令は5つ。

- 1、奴隷や護衛に害を与える行動はしない。
- 2、クピッグ商会に戻って、商会にいるすべての奴隷たちに商会の全財産を分配した後、解放せよ。
- 3、2の邪魔をする者は全力で排除。
- 4、クピッグ商会を潰せ。
- 5、すべてを終えたのち、自害せよ。

今ここで数人の奴隷たちだけを助けても、どうにもならない。

荒野のど真ん中から連れて行く手段もない上に（ボルクの馬車はそう広くない）、孤児院などのアテもない。

なにより、大元の原因、奴隷商人であるあいつらの商会は潰せない。

だから、パラサイト 寄生虫 を使うことにした。

結果は、数日後。あいつらが拠点に着いた後にわかる。

例のゴシップ雑誌まがいの新聞らしきもの（なんとも怪しい雰囲気だな）が楽しみだ。

にやにやほくそ笑んだ後、アキラは隣の少女に声をかけた。

「そんじゃま、オレ達も行くか？」

「……………」

「反応なし、か。まあいい。行くぞ」

ポツリとそう言って、アキラは獣人の少女を背負って、地面を強く蹴る。

遠くに見えるボルクの馬車へ向かう。

「……………」

にこりともしない少女を伴って。

「やれやれ。先が思いやられるね……………」

そのつぶやきにも、虚ろな少女は何の反応も示さなかった。

4：反省と名前と門

「やりすぎじゃ、たわけ」

怒られました。

中々に痛いオオカミパンチ。

リースが手に持ってパシパシ叩いているのはいつかの新聞兼ゴシップ雑誌最新号。

『クピッグ商会！次期会長の奇行！？』ですつてよ奥さん。

あの戦闘からすでに5日。

のんびり馬車の旅で、獣王国家ムジンの近郊にある小さな村にたどり着いたオレ達は1日の休憩の後、その村でボルクと別れた。

その時、伝書鳥？によって様々な場所へ運ばれるらしい例の雑誌を買ったのだ。

そこにはアキラの行動の結果がでかかと載っている。

クピッグ商会の行っていた悪事や、次期会長が奴隷を解放して商會をつぶすような行動を行ったことが書いてあった。

「確かに、アキラが奴隷のこととなると人が変わるのには理解できるがな、後先考えなさすぎじゃ」

「自分的にはいろいろ考えたんだけど……」

「奴隷には犯罪を犯して奴隷の身分に墮とされた罪科奴隷もおるのじゃぞ？」

無制限に開放していいわけがなかるうに。

罪科奴隷の内、純粋な労働以外、金で解放できるのは軽犯罪ばかりじゃが……、それでもやりすぎじゃ」

「うっ」

「それにじゃ。アキラの言い分でもこの紙束でも、最低の商会だとはわかるがな、真面目に働く者もないとは限らん。

奴隷を解放しよう、と突っ走ってそこだけしか考えとらん証拠じゃ」

くどくどくどくど。

正論なんだけど、それだけ痛みのある口撃である。

「まあ？見出しによればこの商会は基本娼婦や男娼を扱う奴隷商会で、従業員もクピッグ家の従者が奴隷くらいだったからいいもの……。

それでも、数人の軽犯罪の前科を持つ者が解放されたはずじゃ。

全員が反省していないとは限らんが、数人はまた犯罪に走るものもあるかもしれん」

「……………たとえ奴隷でも、こんな扱いを許容してるんだ。従業員だって許せないさ。

たしかに、奴隷の全員解放については考えなしだったかもしれないけど……………」

そう言って、となりに座る少女を見る。

安全のため、ボルクの馬車に乗る直前に契約を破棄した獣人の元奴隷少女。

首輪が碎けるその瞬間も、なんの感情もつかがわせなかった少女。

義務的な会話どころか、首を縦と横にわずかに動かすくらいの仕事草しか見せない。

「いったいどうやったら、ここまで人格が壊れるのか。奴隷になる前からこうだったのか、それとも奴隷になってからこうなったのか。」

「あいつが連れていた他の奴隷たち見るに、どっちにしてもクビック商会に原因の一端はあるはずだ。」

雑誌にも、ウソかホントか、酷い扱いについて言及してある。

ポカッ。

「あてっ」

そんなことを考えていると、またリースにたたかれた。

彼女は腕を組んで仁王立ち、じろりとこちらと睨みつけている。

「まだ反省が足りんの。まったく、アキラはもつと常識を身に着けるべきじゃ。」

長く生きていたとはいえ、人里に下りてきて短い我でも知っていることを知らんとは」

「……そうだよな。書庫で読んだのは勇者関係とかばっかだし、戦闘訓練と魔法の勉強くらいしかさせられなかったし。」

「このままじゃ、まずいか……」

自分の持つ知識は本当に少しだけなのだと思いきらされる。

そして、勇者という存在の歪さも。

この世界によばれ、暮らしながらも、この世界の常識を教えられ

ずただただ戦闘力だけを期待される。

「それにじゃ、この奴隷　　元、か。こやつはどうするのじゃ？」

「獣王国家に行くんだから、連れて行こうかなくて。

ボルクが言うには、あの国は誘拐されて奴隷になった獣人の保護もしてららしいし」

誘拐云々は、質問にはイエスノーの首ふりだけで答え、言葉を話さない少女から四苦八苦して聞きだした。

本当に大変だった……。

首ふりで応答してくれるようになるだけで、3日くらいかかったからな……。

「こやつもおるのじゃし、やはり馬車を買ったほうがよかったのではないかの？」

「あんなケツの痛くなる馬車は嫌だね」

地面（道路とは呼べない）はでこぼこガタガタなので揺れる揺れる。

そんな悪路を進むため、馬車はある程度丈夫なつくりをしているが、快適さはあまり重視されていない。

この世界の人はこれに慣れてるし、慣れるしかないからだ。

「それは我も同じだが……」

「しかも高いんだよ。そもそも馬自体がけっこう高いから馬車本体にはあまり金をかけられない。」

それなのにそこまで快適じゃないとかさ。

さすがに国の馬車とか裕福な貴族は気を遣ってるだろうけど、それでも大したレベルじゃないし」

「だがな。ムジンまでいいとしても、そこから旅を続けるならば馬車は必須じゃぞ?」

「ま、荷物は亜空間だから空を飛んでもいいし、リースに乗ってもいいけど、目立つからなあ……。」

材料さえ手に入ったら自作するんだけど」

「我に乗るなど……意味は分かっておるのか?」

隣を見れば、頬を赤く染めたリースがいて。羞恥に悶えるように、身をくねらせている。

「……え、なにが?」

「フェンリル族で、その……乗るといのは、な?」

なんとというか、つがいだけに許される、ことで……。強さを示し、屈服させた雄のみができる」

さあー、と。

血の気が引く音がした。

そういえば、もふもふはしたが背に乗ったことはなかった。まさかそんな意味があるうとは……。

「ちょっと待とうか、オレはその風習は知らなかったし、リースだつてオレなんか」

「いや、アキラは強き者であるし、我としても否やというわけではなくて」

(乗り気だー!!?)

かつてない衝撃走る。

見た目銀髪幼女と青少年。

ぜったいロリコンだと思われる……。

「そ、そそそんなことより、リース!

この女の子の名前なんだけど!どうしようか!?!」

「むっ!そんなに獣耳少女がいいのか!?!

我だって出せるぞ!! ほうっ!!」

ぽんっ、と軽い音をたて、リースの頭に狼の耳、お尻にしっぽが生える。

人形態から獣人形態に移行した。

とらんすふおーむ。

やばい。

これはやばい。

ふわふわで。もこもこで。もっふもふだ。

撫でたり、挟んだり、頬ずりしたり、舐めたり、ああ癒される癒されたい。

あつたかくて、やわっこくて、ああもう。

「ふわっ、ふぬゃ、これ、やめ……」

「　　っは!?!」

あぶねエ……。

あまりの魔力に飲み込まれて、オレはいつたいなにを……。手が勝手にリースの耳やしっぽへ伸びていた、だと……?」

「あっ」

正気に戻ったオレは手を離す。

リースが少し残念そうな顔をした気がしたが、気のせいだろう。

「よっし、さっさとムジンへ行こうか!」

「そ、そうじゃな!」

変な空気を吹き飛ばすように、オレ達は目的地へを目指すよう大声を上げた。

ちなみに、少女の呼び名はマナとした。

いつか真名が見つかるように。

いつか真名を得られるように。

「……………」

件の少女　　マナはなにも答えず、ただただ眺めているだけだった。

|| || || || || ||

歩くこと半日とちょっと。

朝に村を出たのに、そろそろ日が陰り始めた。

昼過ぎから遠くに見えた獣王国家ムジンの防壁がもうすぐそこに在る。

「はぁーやっと到着か」

マナを背負い、アキラがやっとついたとばかりにため息をつく。

碌な栄養を与えられていなかったからだろう、少女の体力は微々たるもので、途中から背負うこととなった。

なお、諸事情によりリースは背負わなかった。

ええ、あくまで諸事情です。

「さつさと中へ入って休みたいものじゃ」

「だな。それより、まずは財宝を換金して、資金を得ないと行けないが」

そして、防壁にたどり着いたとき。

「貴様！その背中の少女を解放しろ！」

ものすごい目でにらまれてる。

確かに、獣人と賢獣の国からしてみれば、やせ細った少女を背負う人間は警戒対象なのかもしれない。

でも、いきなりそんな風にみられるとやっぱりいい気はしない。

「わかったわかった。下ろすから話を聞け」

マナを背中から下ろし、隣に立たせる。

そして大声で彼に正当性を訴えた。

「オレ達は旅の途中でこの少女を保護したため、ムジンに連れてきた！」

ムジンへの入国を許可願いたい！」

「身分を証明するものはあるか？」

懐からギルドカードを取り出し、それを投げ渡す。

門番はそれを見て、投げ返した。

間合いをあげるため、距離を取っているとはいえこれはどうなんだろう……。

「その少女 いや、彼女だけじゃなく、隣も人間ではないな。

では、おまえだけか」

「ほう、よく見破ったな……」

「殺気だつなリース。

で、門番さん。どつという意味だ？」

そういうと、彼は大きく手を振って、演説することく叫んだ。

「ここは力こそが至上の獣の国！

体力、腕力、耐久力、知力、魅力、魔力、何でもいい！

人間は力を示せ！！」

「オレだけか？この二人は？」

「これは人間用の提案なのだ。

この国は、人間に悪感情を持つ民は多い」

申し訳そうな言葉を、ギラギラした目で言われても、な。

「なる。この門は弱者を落とすふるいつてわけか」

「そうだ。我が国は決闘が日常的に行われている。

腕力だろうが、知力だろうが、勝てなければ地べたを這いずって
もらう。

特に人間は、決闘の対象になりやすい。

そのため、門で試験を行っているのだ」

「なんて国だ……」

予想以上に殺伐としてるな。

主に人間に対してだけだろうが……。

アキラが呆れているのを無視して、門番は大声で告げる。

「さあ！汝が力を示せ！！」

4：反省と名前と門（後書き）

録画して見忘れていたガンダム00を見ていると思う。
決め台詞かつこいいなあ。

「狙い撃つぜ!」とか「目標を駆逐する!」とか

5：誤算

「さあ！汝が力を示せ！！」

「いきなりそんなこと言われてもな……。門番！オレは具体的に何をすればいいんだ？」

「さつきも言った通りだ！

どんな力でもいい！おまえを認めさせるだけのものを見せろ！
そうすれば、入国許可証であるメダルを与える！」

「メダル？」

「そうだ。強さのランクで、金、銀、銅の三色に塗られているメダルだ。

人間に決闘を仕掛ける民が多くてな。相手がどれくらい強いかわかっていれば、余計な決闘は未然に防げるだろう？」

なるほど。入国した人間の強さを示して、下手に獣人が負けることがないようにしているのか……。

まあ、人間にとっても格下からむやみに決闘を挑まれなくなるって利点もあるが。

「金とか銀のやつが胴メダルの人間に決闘を挑んで来たらどうする？」

「力に誇りを持つ民がそのような真似などするはずがない」

「そんな大雑把な……。絶対格下の銅メダルにケンカ売ってるヤツいるだろ」

ぼそつとつぶやいた声は聞かれなかったようだ。

確かに強者ほど力に誇りを持つ。

格下を相手に力を振るって悦に浸るようなやつは銀はともかく、金にはないだろう。

そういうことをする奴は、一流にはなれないからな。

そういう奴らがいると仮定して、銀の下位〜中位レベルが怪しい。そいつら相手なら勇者補正を使わずとも勝てるだろう。

となると、理想は銀メダル。

どんな強者がいるかわからない金からは相手にされず、銅のように格下狙いのやつからも狙われにくい。

なんだけど、獣人の基本的な能力がどれくらいかわからないから、どの程度の力を出せばいいのかかわからねえ……。

警戒されない程度に弱く、ムジンの中でケンカを吹っかけられない程度に強く。

なんて面倒なミッションだ。

ふむ、何の力を示すのがいいか……。

知力。

一応、力がつくけど頭でっかちなモヤシと侮られる可能性もあ

るので却下した方がいいか。

魅力。

検討するまでもなく却下。

耐久力。

マゾじゃないので、殴られるとか却下。

腕力、魔力。

手加減の程度が不明なので却下。

(すべてが潰えた……)。

くっそ、平和に過ごすには強すぎず弱すぎが一番。

せめて基準値となる、適当なお手本がいればいいんだが……あっ
！)

その時。

閃く。

「じゃあ、模擬戦しよう」

模擬戦の相手に合わせればいい！

そいつを少し上回る程度！

試験に出てくるのは銀レベルくらいのはず！

苦戦してる風を装い、ぎりぎりです倒せば万事解決だ！

「ほう。我等獣人と戦う、と」

「ルールは相手を殺す以外は何でもありだ。格闘も武器も魔法も詐術も卑怯も不意打ちも。文字通り何でもあり」

挑発するようになり、にやりと笑う。

それを見て、門番の顔にはっきりと笑みが浮かんだ。

獰猛な、肉食獣の笑み。

本能で戦いを望み、本能で戦いに臨む。

言葉はなくとも、強烈な殺気が告げている。

よく言ったニンゲン。食い殺すぞ、と。

「いいだろう！」

ならば我、センワがそなたの挑戦を受ける！！」

「だれが来るかと思ったが、門番とはな」

「門番は強くなければつとまらん。

押しとおろうとする者を蹴散らさなければならんうえ、試験官も兼ねるのでな」

「レベルは？銀か？」

「銀の内、中の上くらいか。

安心しろ。倒せずとも、力を見せれば銅と認めてやる」

「おまえを倒せば銀、瞬殺で金でいいのか？」

そういうと、彼はポカンとした表情の後、大声をあげて笑い出した。

「ふ、ふはははは！」

倒すなど、ましてや瞬殺など、なんの冗談だ！」

「いいさ、笑つてろ。」

それで、おまえは人化したままでいいのか？
いまなら獣化するまで待ってやるぞ？」

獣人に限らず、不特定多数を相手にする門番という性質上、人化しているセンワ。

彼が獣化すれば、戦闘力は跳ね上がるだろう。

「はっ、させて見せるよニンゲン！」

「上等！かかってこいや！」

互いに互いを挑発し、周囲に闘志が満ちていく。
リースがマナを連れて離れ、準備が整った。

「狗族センワ！」

「アキラ・トウジョウ！」

「いざ尋常に 勝負！」

|||||

アキラは武器として、ベレッタを選択。

双刀・天地は強すぎて殺さないのが難しい。

魔力を撃ちだす銃ならば、威力の強弱がつけられる。

そう考え、右腰につけておいたホルスターからベレッタを抜き放つ。

センワに狙いをつけようと、アキラの右腕は銃を腰から真正面へつきだそうと跳ね上がる。

「なんだ……？」

アキラの右手に握られた小さな塊
銃が武器と知らないセンワは、戸惑いの声を漏らす。

槍すらも届かない離れた間合いで、それでも自信満々で小さな塊を突き出す敵。

(よくわからないが、とりあえず避ける　！)

わからないからといって、棒立ちになってやる義理はない。
とりあえずアレは魔法具と判断し、左へ飛ぶ。

タン！

と軽い音の後、ついさっきまでセンワが立っていた場所に魔力の

塊が放たれた。

（やはりあれは魔法具！魔力を放つ物か！
ならば間合いを空けておくのは不利！）

今の間合い、そして槍では遠くから撃たれ続けるだけで反撃できない。

センワは獣人ならではの速度で、跳ぶ。

限界まで頭を下げ、射線を外れると同時に空気抵抗を減らし。
速度は出せる最速で。
一足で、間合いにとび込む。

その動きは、一般人には消えたように見えるはずだ。
見ていた先にはすでに存在しないことに戸惑う内に、間合いに入られたことに気づかないまま槍に貫かれるだろう。

だが。

「モード、
散弾銃ショットガン」

補正を受けた勇者には丸見えだ。

アキラの静かな声の後、ベレッタから放射状に魔力の弾丸がばら撒かれる。

撃ちだすのは魔力の弾丸。

定形のない魔力ならば、弾丸の種類を変えることだってできると考えたアキラは即座にそれを実行した。

選んだのは近、中距離という状況で最も効果を発揮する散弾銃。

ショットガン

「くっ！」

とび出した身体は急には止まらない。

センワは壁の如く視界いっぱいに広がる魔力の弾に突っ込む寸前、
せめてとばかりに槍を回して弾を弾く。

それでもすべてを弾くことはできず、センワの身体は大きく吹っ
飛ばされた。

「がはっ！」

背中を地面にしたたかに打ち付け、肺の空気が追い出される。

「止まったらいいだけ！」

アキラはその隙を逃すことなく、シグも取り出して散弾銃モード
を解除した二丁を撃ちまくった。

ショットガン

「くそったれ！」

センワは痛む身体を奮い立たせ、今度は雨のごとく降り注ぐ魔力
弾を避けていく。

（間合いを詰める暇がない！

これじゃ遠距離から一方的になぶられ続けることになっちまう！

こっとなったら　　）

手詰まりだからこそ、それを選択した。

センワがいくら撃たれても避けるのに十分な間合いをとると、アキラも銃撃をやめた。

それを受けてセンワは立ち止まると、吼えた。

「やってやるぞニンゲン！」

オオオオオオオオオオオオ！！」

センワは先祖から受け継いだ遺伝子を高め、人化を解いた。

誇り高い狗族としての力を使うことを選んだ。

センワの着ていた兜は脱げ落ち、服や軽鎧の隙間から毛がのぞく。筋肉は隆起し、口からは牙がぎりりと反射した。

アキラはその変化を銃を向けつつも、黙って見ていた。

センワはそんなアキラを睨みつけ、槍を捨てて爪を出した。

「安心しろ、殺すのは反則なので、半獣化で抑えておいた。

だが、これを使わせたからには、さっきまでのようにはいかないぞ」

自らの内にある、膨れ上がった力を感じ、センワは勝利を確信して嗤う。

しかし、獣化したセンワを見たアキラの感想は。

「うわぁ、こええ……」

兜が脱げたため、顔がはっきり見える。
人ではなく、犬の顔。

アキラの知識から見れば　　その顔はチワワだった。
その特徴的なぎょろりとした目。
なのに、鍛え上げられた肉体。

今のセンワは、狼男の顔だけをチワワにすげ替えれば、イメージ
しやすいだろう。

「チワワって小型犬だからこそ可愛さが出るわけで……。
筋骨隆々ムキムキマツチヨの身体に小さな顔とギョロ目とか。
アンバランスすぎて、キモい通り越してもう怖い……」

生理的に無理であった。
チワワなら可愛がれるが、アレは無理。

そんなアキラの心情など知らないセンワは第2ラウンド開始とば
かりに闘志をむき出しにしている。

「こないのならば、こちらから行くぞ！」

「うおわああああ、来んなあああああ……！」

迫ってくるセンワを見て、あまりの恐怖に半狂乱になったアキラ
はやたらめったらに銃を撃ち、振り回す。

「そんな狙いであたるものか！」

めちやくちやにぶつ放しているだけなので、狙いもクソもない魔力弾は当たらない。

ただでさえ、半獣化して敏捷性もあがっている。また、ろくに魔力も練られていない弾ので、体毛にはじかれる始末。

どどん迫ってくる人型マッチョチワワ（アキラ視点）。

アキラはとりあえず引き離そうと、強力な範囲魔法を使って吹き飛ばす。

「くそがっ！来るなっつってんだろ！
砂塵の嵐サンドストーム！」

「こんな上級魔法を使えるのか！？」

センワは慌てて急ブレーキ、全力で範囲外に逃れる。

アキラが動揺しているためか、威力も範囲もさほどではなかった。

（あんな魔法も使えたとは誤算だった。

あれも考慮すると、これからどうするべきか……）

再びある程度離れたところで、センワは作戦を練り直す。

アキラが魔力弾を使っていたからか、センワはアキラがあまり魔法を使えないと判断していた。

魔法の補助媒体である杖を持たず、ローブもないため、高位の魔法使いではないと。

そして、魔法を上手く使えないから、魔法具を使って魔力そのものを撃ちだす戦闘スタイルを取っているのだと。

(懐に入られるのをああも嫌がる、ということは他の魔法使い同様接近戦は得意ではないということ。)

魔法抵抗力に低い獣人相手に魔法使いは天敵だが、格闘剣術などの戦闘力が低い魔法使いにとっても獣人は天敵。

狗族としての速度と身体ならば、あれくらいの魔法は避けられる)

センワは懐に入り込めばたやすいという新たな誤算を導き出した。

アキラが懐に入られるのを嫌がったのはセンワが怖かったからで接近戦が得意じゃないからではないというのに。

一方、アキラは。

さつさと半獣化を解いて、人化するか完全に獣化するかしてほしい。

そのためには、さつさとこの戦闘を終わらせるしかない。

さらに言えば、あいつを近づけたくない。

だが、あいつは速いし硬い。生半可な攻撃は避けられるし防がれる。

(なら、気づかれないように強力な攻撃をするしかない)

相手に気づかれなければ速さは意味を失う。

それを、硬さをもろともしない強力な一撃で行う。

方針は決定。

やり方は思考中。

準備万端とは到底言えないが、やるしかないか。

「どうしたセンワ？黙っちまって。怖気づいたのか？」

「おまえがあんな魔法を使うとは思わなかった。

だが、あの程度なら避けられる。もう終わりだ」

「そうかい。じゃあ、仕切り直しだ」

「ああ。いつでも来い！

狗族の力を見せてや

「ポイントアタック座標攻撃　！！」

「　　がはっ！？」

アキラが声を遮って、魔法の行使を叫ぶ。

その名の通り、座標そのものへ直接攻撃を叩きこむ魔法。

予備動作は魔法の詠唱しかなく、それも一瞬で済む。

いきなり、後頭部に衝撃を受けたセンワは前のめりに倒れ込んだ。

何が起こったかわからないが、なにかをされたことはわかる。

だから、センワはアキラを睨みつけた。

「きさつま……！！」

「最初に言った。卑怯もあり。不意打ちくらい当然だ。

それにな、おまえが言ったことだぜ。

『いつでも来い』とな。オレが攻撃したのはその言葉の後だ」

「くそ、つたれ……！」

くらくらとかすむ視界の中、悪態をついた。

悪態はついたが、きちんとわかっている。

卑怯汚いは敗者の戯言。

それに、これは決闘ではなく試験だ。

提示されたルール上も問題ない。

自らの油断が招いたこと。

センワは潔くそう判断した。

「で、オレは合格か？」

アキラは銃を向けながら、そう聞いた。

ここに至っても、センワの顔を極力見ないようにしながら。

失礼だとは思っていても、怖いものは怖いのだ。

「ああつ、合格だ。」

最後、おまえ何しやがった？」

「あ、あれか？あれはな、えっと、おまえの背後からこっさり、な」

内心、冷や汗を垂らしながらアキラは平静を装う。

やべ、そう苦戦しないで勝っちゃった……。

しかもオリジナル魔法使っちゃまったし。

「あの魔法はいつたい……？」

「うあゝ、あれだ！撃つておいた魔力弾をこっそり動かしておまえの背後に持つていつたんだ！」

「なんだその言い方は？」

「気にすんな！これで、オレも入国していいんだろうな！」

「ああ、ちよつと待て。

それをなくすなよ？なくせば不法入国扱いされても文句はいえんからな。」

センワは懐から紐につけられた金色のメダルを取り出す。

「いや、金じゃなくて銀でいい」

「おまえは間合いに入られることなく、無傷だ。銀の我を圧倒したのならば金がふさわしいだろう」

「オレに金を受け取る資格はない。

あんな不意打ち、正々堂々たる決闘じゃあ使えないからな。

だから、おまえを正々堂々倒せるようになったら金をもらっさ」

「そうか。なら、貴様との再戦を待っている」

よっし、誤魔化した！こんな風に言っどけば金を辞退する理由になると思っただぜ！

再戦とかしないがな！

「ああ。じゃあ、ありがたくそれを受けと」

改めて銀色のメダルを受け取るうと手を伸ばしたとき。

「ちょっと待ったあああああああ！！」

ダン！

目の前に飛び降りてきたなにかが、センワとの間に立つと同時に、メダルを奪った。

「うお！？」

「な、なんだ！？」

突如降り立った男は、メダルを懐にしまつてバックステップ。一連の流れが実に自然に、そして早く行われた。

「おい、なんだおまえ！」

やっと硬直がとけたアキラは乱入した若い男を指さし怒りを露わにする。

しかし、相手はそんなものど吹く風。

さらりと無視する、どころか。

「このメダルが欲しければ、オレと戦ってもらおうか！

おまえ強そうだからな！！」

挑発してきた。

「あ、あ……」

「どつしたセンワ。門番として、このメダル泥棒ひつとらえるよ」

なぜか口をぽかんと開き、同じ言葉しか発さないセンワを小突く。

しかし、彼は再起動はしないまま、壊れたレコードのよつに「あ、あ……」と繰り返す。

そして。

「あ、あなた様は……ムジン様!？」

ムジン、サマ?

「確か、この国の王がそんな、名前……」。

「うええええええええ!？」

「なんで王サマが!？」

「さっきも言っただろ。」

「おまえはもっと強い!オレの勘がそう言ってる!」

「だからおまえと戦いたい!

「だからオレと戦え!」

アキラの大きな誤算は2つ。

真の強者は弱者のことなど相手にしないと、単純に考えてしまったこと。

センワの半獣化マッシュチョチワフに動揺し、さっさと終わらせようと力の片鱗を見せってしまったこと。

ここは力こそ全ての国、獣王国家ムジン。

つまり、極端に言えば、ここは戦闘狂バトルジャンキーの国なのだ。

真の強者は本能で強者ゴウジヤを判断する。

力に対する嗅覚が尋常ではないため、『弱者を装った強者』は嗅ぎ分けられる。

そして、ひとたび力の片鱗の垣間見せれば、全力を引き出そうと集いくる。

その結果。

「さあ、オレと楽しく殴り合おうぜえ!!」

アキラは国王ジョーカーを引き寄せた。

5：誤算（後書き）

ムジン国王のファーストネームどうしようかなあ……。
ネーミングセンスがほしい……。

6：激突（前書き）

ムジン国王の名前はイチ^ニテ^ニムジンとなりました。
由来はあとがきで。

感想欄に名前を考えて送ってくださった方、本当にありがとうございました。

6：激突

アキラはここ数日のことを振り返り、思う。

「なんか、やることなすこと裏目裏目になってる気がする……」

クピッグ商会然り、この国王サマ然り。

うまく考えているつもりで、結果を見るとなぜか逆効果という才子がつく。

そんなアキラの心情など気づきませず、というか気づいこうともせず、闖入者は再び誘う。

「さあ、やろうぜ！！」

いいなあ、悩みがなさそうで。

「いいなあ、悩みがなさそうで」

「貴様！国王様になんという口を！？」

「あ、本音漏れてた？」

「本音だと！なお悪いわ！」

だって、拳を握りしめてわくわくしながら目を輝かせていらっしやる戦闘バカが国王なんて。

力至上主義はいいけど、これはどうかと。

部下の人たち、すつごく苦労してるんだろうなあ……。

「無視すんなよ！」

「なんですか、国王さま」

「その呼び方やめろ！オレにはイチ＝テ＝ムジンって名前があんだよ！」

「へーへー。そのイチ＝テ＝ムジンさまはなんでオレのメダルを横取りしてくれやがったんですか？」

「てめえ国王に敬意払えや。」

「ま、オレの力を知らないんだから、今は許す」

「ありがたき幸せー」

ぶつちやけアキラはバカにしている。

もくろみを邪魔されて少し頭に来ているので扱いはぞんざいだ。

不敬罪？どうでもいいよ。

んなこと言ったって、どうせ

「ちなみに、メダルはオレと戦わないと返さない」

「あー、やっぱり、さっきのは空耳じゃなかったんだなあ……」

どうせ、有無を言わず戦わされるんだから。

戦闘を回避できるんなら、敬ったふりもありだったんだけど。

「おまえに拒否権はない！」

「さあ、戦おうぜ！」

「ああ、ほんとに」

イチの言葉に、アキラの逆鱗に触れる言葉があった。
何よりも嫌う、自由を奪う側の傲慢な言葉。

アキラはゆらりと半身になって、横目でイチを睨みつけ。

「ム力つくなあ」

空気を、凍らせた。

「ッ！」

それを向けられたイチ、その延長線上にいたセンワ、どちらも戦慄する。

それも一瞬のこと。

硬直から覚めた後に浮かぶのは強者と戦えるという愉悦。

自らの力を全力で振るっても尚楽しめる相手を見つけた興奮。

「どいつもこいつも、王つてのは無自覚に踏みにじる。
どこまでも傲慢で、どこまでも憎たらしいなあ……。
ああ、確かにオレの見通しの甘さもあつたんだろうけど。
でも、乱入なんて予想できねえだろ……。」

そんな二人から視線を外し、空を見上げてぶつぶつと怨嗟の声を漏らす。

「なに言ってるんだ？」

「やってやるよ。」

ストレスのはけ口になってもらおうか、王さま」

「いいねえ。いい殺気だ。」

とても今までの腑抜けたヤローとは思えねえぜ」

鳥肌が立ちそうな、武者震いを誘う様な、血沸き肉躍るような。どんな言葉でも語りつくせそうにない、濃密な戦闘の空気。

自然と口角が歪み、笑みがきつく獯猛になる。

「こ、国王様。なにも貴方様が出なくとも」

「うるせえ！」

こんな楽しい戦闘、邪魔すんじゃないよ。

国民だろうと　　殺すぜ？」

「王さま、来いよ。」

城壁から離れた広い場所に移る」

「いいぜ。望むところだ」

アキラとイチ、二人は並んで歩き出す。

センワヤリースたちも、それに離れてついていった。

決戦場となるのは、防壁からも離れた広い荒野の一画。

センワとリース、マナは遠くに離れさせた。

広範囲殲滅魔法を使っても、届かないほどに遠くに。

センワとリースは戦闘を間近で見られないことに不満だったが、二人とも目はいいので声は届かずとも目では見えるはずだ。

「今日は運がいい。」

こんなにビリビリ来る相手は久しぶりだ」

イチが楽しげに嗤う。

「今日は運が悪い。」

こんなに嫌な気分になるのは久しぶりだ」

アキラが憎々しげに吐く。

「獣王国家ムジン第32代国王イチ」ムジン」

「アキラ」トウジョウ」

「勝負だアキラ!!」

「這いつくばれ王さま!!」

吼えた。

今回は出し惜しみはしない。

王に戦えと命じられた。

それはつまり、戦う相手として力を認められたということ。すでに金レベルと判断されるだろう。

なら、もうどうでもいい。

どうせ金なら、ムカつくこいつを叩き潰して手に入れる。

だからこそ、アキラは自らの持つ最強の武器、双刀・天地を抜き放つ。

「おいおい、なんだその刀……。ありえねえだろその威圧感は……」

イチは天地の持つ力を本能で感じ取り、頬を引きつらせる。

が、そんなのは関係ない。

「斬り刻め。属性・嵐！」

天に魔力を注ぎ込み、持つ風の上位属性嵐を発動。

カマイタチなんてかわいいものじゃない、もはやそれは真空刃の
斧。

それが一振りですつ飛ぶ。

地面を切り裂きながらそれらは一直線へイチへ向かう。

「これは食らうとやべえな！
だが！」

しかし、イチは軽々と避けてみせた。

理由は簡単、地面を切り裂いて進んだため、せつかくの透明の刃は軌道が丸わかりだったからだ。

「くそっ」

「当たるかよこんな見え見えの技が！
もつと冷静になれや！」

イチの姿が視界から消え、代わりにアキラの視界が吹っ飛んだ。

「のんびり跳んでんじゃねえぞ！」

そして、アキラが横から殴られたのだと気づいたときには、もう追撃を受けている。

とつさに声に反応し、脇腹をガード。

それごと吹っ飛ばされるが今度は受け身を取って、素早く態勢を立て直した。

「どうしたあ！？

こんなもんじゃねえだろうが！

頭に血イのぼってテキトーな戦いしてんじゃねえぞー！」

殴られた頭がくらくらするし、防いだ腕は痺れてる。

それでも、意地で声を張り上げた。

「うつせえんだよ！」

こちらら殴り合いなんてしたことねえししたくもねえ！
なのにおまえらは強制しやがって！！」

鈍った頭で、痛んだ体で、それでも抗おうとアキラは意志を奮い
立たせる。

双刀を十字に重なるように構え。

「天地混合技・雷弾之嵐」
ひょうだんのあらし

天を振るって嵐を、地を振るって氷の弾丸を。

それを同時に放つことで、雷をまき散らし荒れ狂う嵐を生み出す。

嵐の中で、恐ろしいのは風そのものではない。

台風の時、飛んでくる石つぶて。それはガラスを容易く突き破り、
木や岩をも砕く。

その中では、身体がどうなるかなど言うまでもない。

「ぐっ！？」

吹っ飛ばしたアキラへ間合いを詰めようとしていたイチは嵐に飲
み込まれ、その身体に何度も雷が叩きつけられる。

殴り殴られが日常的なムジンでは、この程度のダメージなど日常
茶飯事。

自らにそう言い聞かせ、イチはやせ我慢で乗り切る。

「いい力持ってんじゃねえか！
もっともっともっともっただ！！」

ああ、楽しい。

楽しい殴り合い、技の応酬。

イチは心底楽しそうに笑い。

アキラは顔を歪ませいら立ちをあらわにした。

「地刀・氷竜！」

「王爪一閃！」

アキラは居合切りの構えから、地刀を抜き放って氷の竜を突撃させる。

対するイチは太く鋭利な爪を出して力任せに振るう。それだけで斬撃が飛ぶ。

「その刀いいなあ、ほしいぜ！」

「爪で十分じゃねえか！つかなんの獣だ！ありえねえだろそんな爪
！」

「ああ、言ってなかったな。オレは王牙虎が末裔！
天を裂き、地を駆る一族だ！」

「しらねエよ！！！！」

「なら見せてやる！
王牙虎の力をな！！」

そういうと、ハイトは拳を大きく振りかぶり、地面を殴りつける。

彼の足もとに、大きなクレーターが出来上がる　　ことはな
く、地面から盛り上がり、進路上にある大地を抉り崩しながら岩が
アキラへ向かう。

地面が、襲いかかる。

「土遁かよ！？」

「王牙虎は大地を操る！
だれもが立ち、生きているこの大地を統べるオレ達一族は最強だ
！！」

「なんだ自慢かあ！？
オレにだって、その程度はできるんだよ！！」

大地の名を冠する刀、地刀を地面に突き立てる。
そのままアキラは魔力を流し込み。

「魔剣技・碎土！！」

先程ハイトが行った技を再現する。
地刀を始点に地面から岩が飛び出しながら、進んでいく。

「猿真似か？甘え！」

「猫にや十分だ！」

「虎だ！！」

「だれかれ構わず挑むようなやつはガキなんて猫で十分だろ！」

「戦ってるからこそ生きてるんだ！それが正しいあり方ってもんだろ！」

「戦闘狂が！！」

「エセ平和主義者が！！」

襲いくる爪を刀で受け、もう一方の刀で斬りかければ爪で止められる。

「まだ牙があらあっ！！」

「くっ！！」

大口を開けて迫る牙。

そのすべてが鋭くとがり、命を噛み千切る形をしている。

ぎちぎち押し合いながら、少しずつアキラが押され牙が迫る。

「　　っああ！離れろっ！！」

「へっ、っおわっ！？」

噛みつこうと前のめりになっていたイチに、わざと力負けしたように腰を落として見様見真似の巴投げ。

アレンジして、投げる寸前に手を離し腹を思いっきり蹴り上げておく。

身体強化のプラスされた蹴り。

イチは初めてくろう柔術に対応できずに投げられ、弾丸のような勢いで吹っ飛んでいく。

「はあ、はあ……」

肩で息をはく。

(厄介だ……。さすが最強)

彼ら獣人の特徴はその身体能力の高さ。

紙のような魔法の抵抗力と引き換えに得た圧倒的物理攻撃力と耐久力。

ただただ素早く、ひたすら重い。

それだけなのに。

いや、それだけで十分か。

(クソ……。どうすれば勝てる)

たしかに、この身に勇者の戦闘経験は植えつけられた。

それと高い身体能力があれば、王国のへボたちは相手にできた。リースには武器の性能と魔法ばかりを使っていた。

だから、勘違いしていた。自分では戦闘技術を使いこなせていると思っていた。

違う。

ようやく分かった。

自分は程度の低いモノマネをしているにすぎず、動きを自分のモノに昇華できていない。

熟練の戦士には遠く及ばない。

「あははは！なんだよ今の動き！

初めて見たぞ！どうやられたのかわからないまま吹っ飛んだ！いいぞいいぞ！もっと来い！もっと見せろ！戦わせろ！！」

土煙がはれ、高らかに笑うイチが現れる。

（やっぱ終わらないか……。にしても、褒められてもな。未熟な動きを反省してたところだったのに）

まあいい。

今できないことを願ってもどうにもならない。今できることを考える。

（今から自分の動きを高めるのは無理。

なら、速さで勝つか、力で勝つか。

決まってる）

もちろん

速さだ。

徹底的に、潰す。

相手の土俵でこそ、潰しがいがある。

「おまえにはもうなにもさせねえ！」

「おお！来いよ！アキ　　「じっ！？」

一瞬でイチの背面上空へ。

空中で身体をひねって無防備な後頭部へ蹴りを叩きこんだ。

ビューテレポルト
視界内転移

移動速度の極致。

それは転移だ。

動作の入りがないから動きを先読みされることはない。
移動の過程がないから途中で追いつかれることはない。

だからこそ、視界に移る範囲への短距離転移魔法だ。

一般人なら4、5回で限界を迎える戦法。

それを勇者のありあまる魔力を用い、何度も転移を繰り返して高速戦闘を行う。

「いつのまに後ろ　　っあが！？」

振り向いたイチを翻弄するように、今度は前方に転移。がら空き

先程までいたクレーターの中には、白い毛並みに黒の線が数本入った大きな虎。

普通の虎と違い、尾が三本ある。

「獣化、か……。あれはヤバい。」

リース並、いや、それ以上かも……」

咆哮だけで、イチを中心に石が飛び出す。

音響兵器並だ。

（ん？音響兵器……。耳のいい獣人にはてき面かもしれない。考えとこ）

自分の声に耐えられるのだから、イチには効かないかもしれないが他の獣人には使えるかも。

そんなとりとめのないそれだ思考。

それを見逃してくれるほど甘い相手ではなかった。

「G U A A A ツ！！」

「消えっ！？」

速度はゆうに人間形態の数倍。

人間形態でもすでに最速レベルなのに、それ以上とは。

転移した自分と、移動した虎、双方の立ち位置が入れ替わった。

虎が一瞬で消え、いつの間にか爪がさつき立っていた地面に突き刺さっている。

虎から見ても、アキラが急に消えたと思っているだろう。

(視界から虎が消えた瞬間に転移していなければ、引き裂かれていた)

冷や汗がタラリと頬を伝う。

「……あれに接近戦なんてありえない。遠距離から一方的にやるしかないか」

天地をしまい、二丁拳銃を取り出す。

「さあて、間合いの外から蜂の巣にしてや」

その時、虎がニヤリと笑ったような気がした。

悪寒を感じ、上空へ。

恐る恐る下を見ると、土の棘が生えていた。

『大地を操る一族』。

最初に見た攻撃が、地面を盛り上げて襲ってくる丸見えの攻撃だったから油断していた。

本当に大地を操れるなら、すべてを地下で行い秘密裏に発動させられる。

「なら、空に浮かんだままやるだけだ。フライ。
それで、くらえ」

二丁拳銃を構え、撃ちまくる。

魔力の塊は引き金を引いている間ずっと撃ち続けられ、大地に穴をあけていく。

その弾雨を事もなげに、虎は避けていく。

どうしても避けられそうにないものは、虎が吼えて地面から壁を生み出し防ぐ。

人間形態の時より頭がいい。本能か？

「こうなったら、卑怯臭いが広範囲魔法で一気に決めるか。
エクスプロージョン
爆発」

ドゴオオオオオオオオオオウン！！

眼下の戦闘領域すべてを爆炎が覆う。

「……………どこだ？」

やったか、なんて口が裂けても言わない。

あれだけでやられているわけがない。

ビリビリ震える空気が教えてくれる。

まだまだここは戦場の中だ。

「GRAAAAAA！！」

咆哮はすぐ後ろから。

振り返ると、すでに爪が振り下ろされて迫っていた。
とっさに二丁拳銃をクロスさせて防ぐ。

「ぐあっ　！？」

虎の振りおろし。

アキラは羽虫を叩き落とすように、力任せにまっさかさまだ。

（どうして虎が空を飛んでる！！？）

墜落の道中、見えたものが謎を解決した。

それは　　土の階段。

それが虎の位置まで天高くそびえている。

（爆炎をまんまと目隠しに利用されたのか、クソッ！）

まんまと乗せられたことにいらだち、落ちゆく身体を防御ではな
く攻撃のために動かす。

幸い、　フライ　はかけられたまま。

落下は免れないが、少しでも激突の衝撃を弱めるために、そして
なにより　　攻撃の時間を得るために浮力を増す。

一矢報いてやるよ！

光よ！消し去れ！

ちゃんとした詠唱も魔法名もなにもない。
そんな時間は使えない。
行ったのは力任せの光属性魔力砲。

勝利を確信したような表情の虎、その足場の階段全てを消し飛ばす。

「いくら大地を操れても、空中からじゃ無理だろ!!」

そう、手で触れていなければあいつは大地を操れていなかった。

人間形態ではわざわざ地面を殴っていたし、虎になってからは四足歩行なので常に手は大地についているからその動作はなかった。代わりに特別な動作もしなかった。

足場を失った虎は自然落下。

獣化したあいつなら楽々着地しやがるだろう。

だから！

「おまえも墮ちろ虎！ グラレディ 重力！」

オレだけ墜落するのは不公平だろうが!!

「GUA!?!」

急激に落下速度が増したことに虎は驚きを隠せない。
何とかもがこうにも、普段の数十倍となった重力がそれを許さない。

ドガアアアン！！

ちょうど対称になるように、二つの流星が轟音とともに落下した。

アキラは落下の衝撃と痛みで動かない身体を、無理矢理動かす。せめて、指の一本だけでもと。

「サーチ LOCK - ON 光よ、行け」

虎は重力に潰され続ける身体をひねり、手を地面へ押し付ける。せめて、最後に一太刀でもと。

「GRAAAAAAAAAA！！」

光の弾丸が飛来し、直撃。

土の柱が突如現れ、直撃。

二人とも同時に力尽き、柱は土となって消え、重力は元に戻った。

結果。

ダブルノックダウン。

勝者、敗者、ともに無し。

6：激突（後書き）

イチムジン ー無尽（わき目もふらず行動するさま）

テムジン チンギスハン

王サマかつ無鉄砲。戦闘狂にはちょうどいいかなと思いました。

あとづけで、センワに数字が入っているから、最強はイチなんじゃね？というのがあります。

7：気づかされること

視線が痛い……。

ようやく国内に入れたと思ったら、視線がチクチク突き刺さってくる。

壁の外からドツカンドツカン聞こえてくるぜ。

おっ、国王と一緒にだれか入ってきた？まさか国王とやってたのか？

金メダル？王に認められるほどののか？

戦いてえな、オレも。

ぜったいこんな感じだと確信してる。

もっと「人間め！」という敵意あふれた視線が来ることを予想していたのだが、人間のくせに中々やるじゃねえか的な視線がけっこう多い。

まあ、中には否定的な意見を漏らす声も聞こえる。人になにかされたことがあるのだろう。

オレに危害を加えなければどうでもいいけど。

そんなじろじろ見られることより大きな問題がある。

あまたの視線の中で寒気がするほど痛い一つの視線。

「……………」

隣を歩くリリースである。

引き分けて、気絶したオレを膝枕（！？）までして介抱してくれていたのに、目覚めた瞬間ぼーいされた。

投げられ、痛みに悶絶するオレを見て爆笑することもなく、ただただ冷ややかな視線をくれた。

その後も、イチが「なんだよおまえやるじゃねえかヘタレっばい」のよ！またやるうぜー！」とか、センワが「おまえ！地形を変えな！あと国王様から挑んだとはいえやりすぎだ！手加減するのは認められんが、やりすぎだ！！」とか言っている間も、じと目で睨まれていた。

とりあえず、センワにはいったいどうすればよかったのか小一時間話し合いたいところだが、そんなことは今はどうでもいい。

問題は、今この瞬間もプレッシャーを増していくリリースである。

（しっかし、この眼。クピッグ商会を無計画に潰しちゃったときと同じだ…………）。

説教される…………。ぜったい怒られる雰囲気だ…………）

なぜだ。

悪いのは挑んできたイチでは？

むしろオレは頑張った方じゃね？

そんな風に、自己弁護していると。

「なあアキラ、おまえ今日どこに泊まるんだ？」

戦闘後、急にフレンドリーになりやがったイチが尋ねてきた。オレの肉体的精神的疲労の何割かはこいつのせいなのに、と睨んでみる。

だが、イチは気づいていないのか、意図的に無視しているのか、なれなれしく肩を叩いてくるばかり。

「はあ、まだ決まってるないな。そもそも、だれかさんのせいでさつきようやく入れたばかりだしよ」

「じゃあ、オレんとこ来いよ！」

「は？」

「おまえが来ればいつでも戦えるからな！やっぱ決着つけないと気がすまねえじゃん！」

「悪いが、それは遠慮してもらおう。

アキラにはいろいろ言いたいこともあるのでな……」

「なんでアキラじゃなくておまえが決めるん」

ギロツ！！

リースに口答えしようとしたイチへ、人も殺せるレベルの睨みが発せられる。

「お、おおう、わかった」

傍若無人を絵にかいたようなイチが退いた！？
リース超怖え！

「……………アキラ、なにか思ったか？」

「ごめんなさい！」

ひいひい！？考えることも許されない！？

「おいアキラ。なんでこいつこんなに怒ってるんだ」

「分からん……………」

男二人ひそひそと話し合いながら、やはり女には勝てないのだと思いきらされていると、遠くから「こりゃあああああああああああ」と叫びつつ走ってくる人影が。

それを見たイチがすぐさま反応した。

「やべっ、じじいが来た！そんじゃアキラ、またな！」

「あ、おいっ！」

イチがさっさと身をひるがえし、迫ってくる人影から逃げていく。

やめて！この場に置いていかないでくれ！
マナじゃ助けにも盾にもならないから！

しかし無情にも、イチは走り去ってしまふ。

「そのの！あの悪ガキはどこへ行つた！？」

そこへ走ってきた人影　　正体は少し白髪の混じつたじいさんだった。

雰囲気的に、イチのお目付け役みたいなのようだ。

「王ならば、あっちじゃ」

「そうか！ではな！」

彼は礼を言うと、リースが指さした方向へ「むあてえええええ」と駆けていく。

そして、王がいなくなったことで民衆のほとんどは解散。

通行人がちらちらオレのことを見てくるくらいに落ち着いたのはいい。

嬉しいことだ。

その代わり。

「.....」

「.....」

オレが会話する相手がなくなった。

いなくなつて気づく、うざつたかつたイチの大事さ。

「？」

マナが雰囲気がおかしいと感じたのか、小首をかしげてオレを見上げる。

その頭を、きつと大丈夫だといいなあ、と願望を込めてなでてやった。

「さて、アキラ。宿を取りに行こうか」

「はいい！」

なぜかリースの圧力が増したあ！

|||||

無言の宿探しをやつとの思いで乗り越え、三人部屋を取り、部屋の中へ。

お金は十分にあるので、それなりに高級な宿である。

早速ベッドに飛び込んでふつかふかだー、といきたかったのだが、リースの眼が許してくれなかった。

「そこへ座れ」

リースの指の先……床である。

とても逆らえず、いそいそと床に正座した。

「あの、リース……さん？
なぜそのようにお怒りなのでございましょうか」

ベッドに腰掛けるリースを見上げ、びくびくしながら尋ねた。
マナはそんな二人をぼんやり眺めているだけ。

「わかっておらんのか？」

「……………はい」

怖い。ほんとに怖い。

今の彼女には「ぐぐぐぐぐぐ！！」という擬音がピッタリだ。

「では、言わせてもらおう。

まず、王と戦うのはいい。挑まれたのだし、そうしなければ入国
できなかった」

「そうだろ？イチが」

「だが！

あの中途半端な戦いには言いたいことが多々ある」

反論は遮られる。

それでも、中途半端という言葉に納得できなかったオレは食って
かかった。

「オレは真面目にやっただろ！」

「やろうと思えば一瞬で決着はついたはずじゃ。」

我に放った、あの天地開闢とかいう技を使えばな」

「あんなのオーバークイルすぎて使えるわけがないだろ」

「掠らせるだけでいい。それなら死にはせん。

他にも、私の体力を削り身をむしばんだあの黒い炎を使うなどできるじゃろ。

魔法抵抗力の低い獣人にはてき面じゃ」

リース戦で使った闇の炎。

傷をつけた部分から、じわじわと広がる毒の炎。

相手が負けを認めれば、それを解除するだけでいい。死にはしない。

「我がそうしなかった理由を当ててやろうか。

アキラ、おぬし、相手の土俵で叩き潰そう、などと考えたじゃろう？」

「っ、それは」

「凶星か。そんなだから無様な結果になるのじゃ。

すなわち、出せる全力ではなく、自ら手段を限定した状態での全力。

制限が相手を殺さないための手加減ならばよい、手合せじゃからな。

しかしその実、慢心し、相手に勝つためではなく、跪かせようと戦い、結果が引き分け。

これを中途半端言わずなんという」

その通りだった。

魔法ではなく武器や肉弾戦を選び、相手が誇る速度を上回って、プライドごと叩き潰そうと考えた。

結果、そうとは気づかず枷をつけたくせに、引き分けに持ち込まされた。

それを無様と、中途半端な戦い方と言わずになんとという、とリースは言外に告げる。

「アキラ。今回はいい。国王に余裕で勝っては面倒なことにはかならん。

肉弾戦では押され、魔武器に助けられ魔法を使って引き分け。

それなりに強いが魔法さえ使わせなければ勝てる、と思われておるはずじゃ」

「結果オーライ？」

「かもな。しかし、それとこれとは別じゃ。

今のうちに、中途半端な戦い方は改めよ」

死んでからでは遅いだから、とリースは言った。

「今回のような手合せではなく、普通の戦闘 殺し合いでは、引き分けなぞ負けと同じ。

もし引き分けという言葉ではわかりにくいならばつきり言い換えてやろう。

相討ちとはすなわち死。ただの負けじゃ」

「そう、だな……」

たとえ相手を倒しても、自分が死ねばそれは負けだ。
殺し合いに引き分けは存在しない。

「……なあ、アキラ。我と出会ったときにも思ったのだが、おぬしはおかしい」

「そりゃ、勇者補正があるから……」

その言葉に、リースは首を横に振る。

「そこじゃないわ。つり合いが取れておらんと言っておる。
強大な力を扱う精神が未熟すぎる」

「……………」

元一般人に言われても、という言葉にはなんの意味もない。
召喚される前のことなど、この世界では通用しない。

それが分かっているから、アキラは口をつぐんだ。

「怒りに任せて商会をつぶす。

相手の土俵で倒そうと調子にのる。

わかっておるか、アキラ」

リースは真つ直ぐにオレを見て、忠告する。

「そのようなふざけた行いを続ければ　　いつか死ぬぞ？」

その真剣な瞳が、心配そうに揺れる瞳が、睨みつけられるよりも
痛い。

気まづくなつて、目をそらして頬をかいた。

「力に振り回されてるってのは、オレも今回でわかったけど……。精神的にも問題はあつたってわけか……」

戦っているときに気づいた、勇者の戦闘経験を持て余していること。

だが、それは些細なことだ。

それより、扱うオレの精神の方がはるかに問題だった。

奴隷のような、上から目線の不当な束縛・制限という扱いに対して沸点が低すぎ、すぐに怒りに飲まれる。

無意識のうちに、勇者補正があると慢心し。相手の土俵で負かそうと、調子に乗った。

その結果が、無様な引き分けだ。

ああ、全部リースの言う通りじゃないか。

精神的に未熟すぎる。

「ほんと、無様だな……」。

言われてようやく気づくところか、ほんと……」

力に振り回されている。

戦闘経験を扱えていないという意味だけではなく、精神的にも。

「なあ、アキラ。我が主よ。

おぬしが死んだら、我はどうなる？

おぬしのために生きる我を残していくのか？

それに、そのマナは？

もつと、自分とその周りを見てくれ……」

リースがベッドから降りて、寄り添うようにしなだれかかった。

温かい人肌の心地よさを感じ、リースの頭を撫でて引き寄せる。

リースはくすぐったそうに目を細め、身を任せてくれた。

「ごめんな」

「足りぬ。もつと撫でよ」

「はは、分かったよ」

「んっ……、分かればよい」

顔は隠れて見えないが、髪の間隙からのぞく耳が赤い。
照れているのだろう。

「でもさ、上から押さえつけられるのだけは、奴隷扱いだけは、どれだけ経っても我慢できない。

キレて、暴れまわって、殺し尽くす。

ここだけは譲れない」

「それならそれでいい。

中途半端に戦って、負けなければ、それでいい。

生きて戻ってきてくれるなら、それでいい」

「リース、ありがと。おまえがいてくれてよかった」

「……今頃気づいたか。」

あ、こら。手を止めるな」

「はいはい。」

「………なありース。がんばるよ。これからはもっと」

「そうしろ」

反省とともに、新たな決意を抱き。

とても頼りになる相棒の頭を撫でた。

7：気づかされること（後書き）

アキラが引き分けたのはリースをテレさせるためだったんだよ！

な、なんだってー！！

まあ、それは冗談です。

主人公は最初から変わらず最強です、力なら。
精神的にはこれ以降。

8 : 暗雲(前書き)

誤字修正

8：暗雲

ムジン入国から早1ヶ月。

アキラは“なぶり殺し”ができるようになった！

てれれてってれー！

レベルアップの過程はこうだ。

レッスン？「手加減を覚えよう！」

毎朝、リースを相手に模擬戦。たまに乱入してきたイチヤセンワをボコる。

ある程度、手加減が身について来たら、次へ。

レッスン？「きつちり半殺せ！」

侮ってくるバカや金メダルに決闘を挑んでくる猛者を“きつちり半殺しにしよう！”

それができるようになったら、直前にリースが指示した割合できつちりボコる。

これは難しかったなあ……。

最後らへんになると「右足の打撲、全治1週間」なんて指示が出る。

失敗した時の罰ゲームなんか思い出すだけでもう……っがっがががががgー！あーっ！やめっ！そんな、無理だろ！？ぎゃあああー！

閑話休題、そしてそれに伴う状態異常リセットオ！！

つまり、「勇者」アキラはレベルアップした。

スキル“なぶり殺し”を覚えた。

ようは、大火力による一方的殲滅だけでなく、生かさず殺さず狂わせずの三重苦攻撃をできるようになったわけだ。

力の把握のためだったのに………なんか鬼畜だな。
レベルアップは不思議がいつぱいだ。

しかし、経験値はそれだけで稼いだわけじゃない。
そんな生活を続けて入ればストレスが溜まるので、定期的にストレス解消を兼ねてギルドの依頼を受けていた。

ゴブリンの群れ 一斉焼却。

オーク 瞬間冷凍。

ジャツカル 餌付け。（リースを見た瞬間にひれ伏したため。その後、奴らは逃げていった）

ジャイアントキヤタピラ（でっかい芋虫モンスター） あまりのキモさに錯乱、気づけば大地がごっそり削れていた（後で怒られた。地面はきちんと魔法で均しておいた）。

そんな風に、ギルドの依頼をほどほどにこなして、ランクがようやくDになった。

Dランクなんて大したことないと思われるかもしれないが、ランクが急に上がっては目をつけられると思い、控えめにした結果だ。

それなりにギルド内でも顔を覚えてもらったオレは、リースから合格印をもらってからというもの、3日に1回はギルドに通い、依頼を受けたり情報収集を行っている。

ギルド会館二階のメシ屋兼バーや仲良くなったギルド職員からはいろいろな情報が得られる。

そして、今日も今日とて、ギルドへ。

しかし、一人だ。リースは留守番。

なんでも、今日は先日の雨の影響で、毛がべたつくので出たくないんだと。わがままな。

「こんにちはー、今日も来たぜー」

「あ、アキラさんアキラさん。知ってます？」

最近、いろいろときな臭いことになってきてますよ？」

受ける依頼を相談しようとする、いつもの受付さん、狐耳をピョンと立てたくせつ毛お姉さんが気になること告げてきた。

彼女は初依頼からの付き合いだ。とてもフレンドリーな人で、かなりのうわさ好き。

何度もお世話になった今では、気軽に話する仲なのだ。

「え、きな臭いって、なにが？」

「噂なんですけどね、この国の上の方が少しごたごたしてきそうな
んですって」

「はあ……」

「む、なんですかその反応は」

彼女は軽く頬を膨らませ、不満ですよー、とあからさまに表現し
た。

つついてぶすーってさせてやるつか。そんな度胸はないけど。

「この前も職員の不倫ーとか、王家秘伝の書があるーだとか、略奪
愛のドロドロがーとか言っていましたけどガセだったじゃないすか」

「あ、あれは……ほら、ね!？」

「ねって言われても……」

「今度はホントなの！
いいから聞いて!」

凶星をさされて焦った上に、子どものようにぷりぷり怒る彼女。
本当に年上なのだろうか。

「はいはい。わかりましたよー。で、ごたごたって?」

彼女は、ここだけの話なんだけどね、と前置きして耳に口を寄せ
てきた。

「なんでもね、王様の力を疑問視する人たちがいるみたいなのよ。ほら、今の王様って亡くなった前王の後を継いで短いじゃない？」

「じゃないって聞かれても……。知らないけど」

「短いよ！だからってわけじゃないけど、若い現王は暫定みたいなどころがあつて認めていない国民もいるらしいの。」

「まだ最強を決める国民大会前だから余計にねー」

力を示せていないから、とお姉さんは苦笑する。

アキラはイチのことを思い出し、確かに王と言うには若く、そして無鉄砲だったと思う。

かなり強かったが。

「それに、人間に引き分けたって噂が立って、認めないって声が大きくなってきてるらしいのよ」

「あはは……」

心当たりのあるすぎるアキラとしては、力なく笑うことしかできない。

実際の戦闘を見ていたのは戦った二人を除いて、センワやリースたちだけ。

アキラの規格外な強さなどは考慮されず、ただただ「人間と引き分け」という事実が急速に広まっているんだろう。

「今度の国民大会で力を示せなかったら、王を辞めさせられるかも知れないって話だよ」

「そんなことになってるのか……。
しっかし、この国にくる前にも思ったけど、よく国として成り立つよな。」

力至上って、そんなんで国を回せるわけ？」

「腕力だけがすべてじゃないからねー。
きちんと力の種類で分担してるんだよ？」

王は他国から責められても最強の名と実力でそれを排除する役割でも、宰相さんとか、腕力が必要ない役職には知力を基準に選ばれるんだよ。

まあ、そういう人たちは腕に自信がないって揶揄されることもあるらしいけどねー」

獣人社会は、やはり戦闘力が重要視される。
だれもが『力』に誇りを持ち、憧れを抱く。

「なるほど。王が最強ってのは象徴と威圧も兼ねてる。
それで、その分、腕力以外の頭脳自慢は肩身の狭い思いをしてる、と」

「まー、ぶっちゃけちゃうとそうだよ」

アキラの穿った意見に、お姉さんは苦笑する。
彼女も獣人として肩身の狭い思いをした一員なのかもしれない。

「でも、獣人社会は腕力重視っていうのは子どもどころから教えられてるものだから、そうそう不満は表にでないの。

知力が高いからって、必ずしも腕力で劣るわけでもないしね。両方兼ね備えた人は大勢いるのよ？」

例えば、あの有名なキザン様とかもうね！彼はもうすごくて、なにがすごいつて

「
お姉さんは具体名をあげながら、ミーハーなファンのように鼻息を荒く語りだす。」

そんな彼女の勢いに押されてそうになるが、このまま聞かされ続けてはたまらない。

本気で日が暮れてしまう。

三十六計逃げるに如かず！

「なるほど分かった！今日は依頼はいいんで、もう帰るから！」

「ええー、まだ話し足りないのにー!？」

話を遮られ、ぷくーっとむくれる彼女を放って足早に逃げ出した。

「しかし、きな臭く、ね……。」

噂が本当に化ける前に、国を出ちまうか……?」

アキラはとりあえずリースと相談しようと思い心に決め、宿へと向かう。

その決意が、もはや手遅れだと分かるのはこれからすぐ後のことだった。

9：要請

「頼む！おぬしの力を貸してはくれんか！？」

宿に帰ると、湿気で毛がぐとか抜かしていたくせして出掛けてしまったらしくリースやマナがいなかった。

だから、広い三人部屋を一人で占領し、今日は思う存分ゴロゴロしようと思っていたのに。

急に白髪まじりのじいさんやってきて、目の前で頭を下げている。

なにこの状況。

実はこのじいさん、知らない人ではない。

入国当日、イチを追いかけていたお目付け役らしき人だ。

「なんと、お目付け役兼この国の知力トップに君臨する宰相クマン
|| ベールさんその人である。」

まだまだ元気にイチを追いかけ捕まえ教育するクマンさん。

かなり歳のはずなのに、動けるじいさんである。

見た目は40代後半くらいだが、獣人は身体的ピーク期を長く維持するため20後半からあまり老化が現れなくなってくる。じいさんのようにいつまでも老化しないわけじゃないが。

もちろん、種族で寿命やピークの長さに差はあるが、獣人全体を通してそういうものだ。

なんの種族かはわからないが、長く続くピーク期を超えたこの見た目からして、年齢的には40代どころかもっと上のはずだ。

「あー……………」

『急にやってきてきてなんの用？』なんて聞きたくない。が、聞かないと始まらない。

こうして、年上に頭を下げられたままなのは相当居心地が悪いな……………。

これが敵なら年齢関係なく、下げられた頭に踵落としを決める一択なんだが。

(どうすっかなあ……………)

敵は殺せばいい。

しかし、敵でも仲間でもない『どうでもいい他人』は守る理由など当然ないが、わざわざ殺そうとする理由もない。

ああ、ペルヴィアの一般兵どもは『どうでもいい他人』ではなく、『片棒を担ぎ見て見ぬふりをする共犯者』の認識なので。

ふと、すでに果たした復讐を思い出して、意図せず微かに殺気が漏れる。

「っ!?」

おかげでクマンじいさんが反射的に身構えてしまった。
ひらひらと手を振り、なんでもないとアピール。

(ふう……………、復讐を終えて心に余裕ができたと思っていたんだけど……………落ち着けオレ)

敵は殺せばいい、とは物騒な考えだが、おそらくリースの説教と

なんら矛盾しない。

リースが言ったのは行き当たりばったりの、『不利益』な殺生をやめろということ。

怒りに身を任せて敵でないものまで敵に回しかねない行動を、沸騰しやすい頭を諫められた。

しかし、相手が敵なら、それは『不利益』でも、ましてや『無益』でもない。

敵が減る。

それは確かな『利益』だからだ。

(うーん、さすがに一国の宰相であるこのじいさんを理由なく殺すのは『不利益』だな)

そう判断し、アキラは方針を決めた。

「……………じいさん。話は聞くだけ聞く。だが、頼みとやらを受けるかどうかは別問題だ。それでいいか？」

敬語は使わない。

こっちは頼まれる立場

厄介事を持ち込まれる立場だ。

下手に出ればつけあがる。

クマンじいさんは無礼な態度を気にした風もなく頷き、話し始めた。

「最近、民の間に広がっている噂を、知っておるか？」

「ああ、『王が人間ごときに引き分けた』ってやつか？」

そういうと、クマンじいさんは苦虫をかみつぶしたような顔になった。

「……………その噂のせいで、王の持つ『最強』の名と実が崩れかかっておる。

『最強』という名の抑止力がな」

「『最強』の抑止力、ね……………」

「ムジンは力の国。

故にその王は『最強』。

相手がどのような強者でも、いや、だからこそ、王は負けてはならない」

この国の王は政治をほとんど行わない。

政治は宰相ら知力の高い連中が担っている。

王はただ敵に打ち勝つのみ。その威光でもって平和を保つ。

王は力の象徴であり、勝利の体現者であり、民衆の守護者なのだ。

「その王が引き分けたと言っただけでもまずいのだが、相手が人間だったのが拍車をかけたのだよ」

「人間だから余計につて？」

まさか獣人の誇りだとか言わないよな？」

「獣人の誇り、か……………」

腕力がすべてに勝るなどと言う戯けた誇りを声高に主張するのは、若造や頭の固い者、それと腕力だけの者だよ。儂はいきがるには歳をとりすぎたのでな」

辛辣な言葉を語る中で、一瞬だけ、クマンじいさんが暗く、黒い顔をのぞかせた。

腕力ではない力、知力である彼には思うところがあるのだろう。宰相として国を憂いているだけではない、個人的な感情が垣間見えた。

「じゃあ、あんたはなにが拍車をかけてまずいなんて思うんだ？」

「人間が根っからの侵略者だからだよ。」

魔族は居心地まじよくのおおいのいい領土に引きこもる。

獣人はそれぞれの縄張りの中で過ごす。

エルフは祖先の土地を守り、引き継ぐ。

この世界の中で、人間だけがあくなき欲望を持ち、領土を広げんと侵略を繰り返す種族ではないか。

なにを隠そう、この国ができたのも獣人たちが人間に追いやられた結果、身を寄せ合ったことからだ」

「……人間たちが、攻めてくるってか？」

『最強』の抑止力が薄れたから？」

問いかげに、クマンじいさんは首を横に振る。

「その可能性は低い。」

西側の国はペルヴィアの『整理』にかかりきり、東は魔族の国でわざわざ自国よりも土地に魔力が満ち満ちていないこの国を攻める必要はない」

ペルヴィア周辺各国はペルヴィアだった土地を属国化した。旧ペルヴィアに攻め込むこと自体は簡単に終わったが、しかし、『帝国』や『城塞都市』など、複数の国が旧ペルヴィア支配に乗り出したことで揉めに揉めている。

攻め入ったとさくさくで資源や鉱脈をこぞって取り合い、今は旧ペルヴィアをどこが正式に支配するのかを決めている段階。

そして、それが決まってから旧ペルヴィアの治安維持や戦略拠点とするための砦の建設、軍備を整える。

それらが終わって、ようやくムジンに攻め入るかどうかを決める段階になるだろう。

数年後、数十年後のことで、侵略自体もあるかどうかわからない。

それを聞いて。

「回りくどいな。じゃあ、なにが問題だったんだよ」

「獣人は人間に侵略された過去があり、それを忘れた者はおらん。だれもが子に言い聞かせておる。」

そんな人間と引き分けに持ち込まれた王。

これでは、侵略者から民を守れないと言うようなものではないか」

「あ……」

「王には外からの侵略を一人ではねのける『実力』など必要ない。戦争は多数で行うものなのだから。一人の力など高が知れる。そう、真の問題とは、王の力を疑い、外ではなく内によからぬ動きが出てくることよ」

「……………クーデター、か？」

『最強』の抑止力はなにも外だけに向けられたものじゃない。国民が抱く、『最強』がいるという安心感。

さらに、少々の不満も、自らを庇護する王の前には薄れてしまう。ただでさえ、獣人社会は実力主義の縦社会だ。

『最強』の名は不安や不満といった内乱の種に対する抑止力でもある。

「抑止力が薄れたことで、たとえ外から侵略がなくなるとも、内では募っていく。

今の王でいいのかと。守ってもらえるのかと。上に立たせていいのかと。

そして、いつしか思う。『ならば、新しい王を』とな。今、そうした内乱の種が育ち続けておる」

すでに、芽は出ている。

急速に広まった噂や王の最強を疑う民衆の声という形で。

「だが、解決は簡単じゃないか。

その内乱の芽も『イチ』王が人間に引き分けた。だから、イチは王にふさわしくない』って話なんだろう？

なら、イチ以外が王になればいい。

国民大会だっけ？それ開いて優勝者を王にすればいいだけだろうが」

必要なのは『最強』。

内外の抑止力となり、守護者になりえる者ならば、だれだってかまわないはずだ。

国で最強を決める大会ならば、ぴったりじゃないか。
そもそも、大会は王の力を国の内外に知らしめるためのものなのだから。

そう言われたクマンじいさんは、重いため息をついた。

「その、優勝にもっとも近い者がまともならば……それでもよかつたのだろうな」

「なに？」

「イチと比肩する強さを持つ優勝候補の名は、ヴァイニフターツ
とってな。」

腕力至上主義の塊のようなやつで、戦闘力と権力をイコールで結び、自らの上に立つ者を認めず弱い者を蔑む男なのだ。

イチのようにある程度でも戦闘力以外の力を認める器を持たない

俗物よ

クマンじいさんは嫌悪の色を隠しもしないで、吐き捨てるように言う。

宰相と言う立場にあるこの人がそこまで言うとは……相当なんだな。

「あやつは王牙虎と並び称される剣狼族の者でな。その身体は特に体毛は剣のように鋭く硬い。」

そのような高名な一族に生まれ、ちやほやされて育った。

あやつが欲しがっているのは『最強』の座、皆の上に立つことだけなのだ」

それが王になれば

暴君となる。

そうつぶやいたクマンじいさんは最悪の未来を想像したのか、小さく身を震わせた。

「そこで、おぬしへ頼みたいのだ。

国民大会でイチが奴を打倒する手助けをし、その後はイチに負けてほしい」

八百長かよ……。

イチがヴァイとかいうやつに勝った上、オレにも勝つ。

そうやって噂を完全に払しょくさせるわけか。

「……………報酬は？」

正直、依頼を受けるメリットはあるが、それをわざわざ教えてやる気もただで受けてやる気もない。

「言い値で用意する。口止めも兼ねてな」

「いや、金には困ってないから物がいい。

たとえば……国に伝わる秘伝書、とかな」

「なっ！？どこでそれを！？」

「お、その反応。本当にあるのか…………。カマかけて正解だな」

いつか聞いたお姉さんの噂だが、マジか。デマばかりじゃなかったんだな…………。

彼女曰く、過去に人間から侵略された時の反省と、次のための予防策が書き記されてるとかなんとか。

「くっ、ガラにもなく焦ってしまったわい……。知っていてもおかしくない雰囲気には騙されたか」

「それで、どうなんだ？」

クマンじいさんは長い沈黙の後、ようやく口を開いた。

「……………閲覧だけならば。成功報酬として、許可しよう……………」

「ま、読んだら終わりの物だからな。

なら、前払いとして、ムジン特産の物が情報をもらいたい」

「わかった。では、受けてくれるか……………？」

「少し考えさせてくれ。今すぐに答えは出せない。

前払いの報酬がなにかも決めてないからな」

飛びついたら足元を見られるし、痛くもない腹を探られるかもしれない。

宰相って存在はどんなにいい人っぽくても、腹黒がデフォだからな。

「ここまで決めておいて保留なのか……。まあ、断られないだけよしとしよう。

再来週、国民大会が開かれる。先払い分の用意もあるのでな、来週までには依頼を受けるかどうかを決めてくれるとありがたい。

色よい返事を期待しているよ」

こちらの返事に微かに落胆の色をうかがわせたが、クマンじいさんは静かに立ち上がって一礼してから部屋を後にした。

|| || || || || || || || || ||

（保留、か。断るようならばまだいいが、ヴァイ側につかれでもす
れば。

最悪、脅すしかないかもしれぬな。
来週までには、その材料を得なければ）

クマンは大通りを歩きながら、アキラに依頼を受けさせる算段を
つけはじめた。

|| || || || || || || || || ||

一人になった部屋で、ベッドに寝転がりぼんやりと天井を見つめ
る。

デメリットは国のごたごたに関わることとそれに伴うエトセトラ。
メリットは公式戦でイチに負けること。一国の宰相に恩を売れる
こと。秘伝書。

公式戦で負けること。これは大きい。

今はまだ、『王と引き分けた人間』オレ』という図式が広まって
いないが、センワという目撃者や金メダルもあることだし、いつか
はバレル。

『最強』と名高い国の王に引き分けたなんて事実、気ままに生き
たいオレには百害あって一利なしだ。

噂の払しょくのため、王と引き分ける程度の力は見せなければな
らないが、そこはそれなりで十分。

やっぱり王が強かったんだ、と思わせるレベルに抑えればいい。

まあ、王族への協力つてのも引っかかるが、イチはあいつらとは違う。

門では王族からの命令つてだけでキレてしまったが、その後も付き合つと嫌でも思い知らされたことがある。

イチは傲慢じゃなくバカなのだ。それと戦い大好きなだけ。実際、命令されるのは嫌いだつたつたら、謝った。

たとえ頼む態度だろうと「野球しようぜー」ぐらいのノリで模擬戦を挑んでくるのはいただけないが。

「リースが帰ってきたら話し合おうかね」

アキラが結論付けた、その時。

ドガッ！！

轟音と共に視界の左から右へ扉が吹っ飛んでいった。

「おい人間。話は聞いていた。」

クマンのクソジジイからの依頼は断れ」

ドアを吹っ飛ばしたそいつは何事もなかったかのように室内に入ってきて、告げた。

三角のふさふさ耳をピンと立て、長い銀髪を揺らす目つきの悪い男。

その姿や態度、言葉から目の前のクソがだれなのか理解する。

「てめえ……ヴァイニフターツか？」

「ふん、下等な人間如きが気安く呼ぶな」

「っ」

ぞわっ。

アキラのまとう雰囲気が増し、険しいものへと変わっていく。
ヴァイの傲慢な態度が、アキラの神経を逆撫でしたのだ。

「キサマがお飾り王と引き分けた人間か。」

ふん、あのお飾りがザコなのはわかっていたが、まさかその程度とは。

あげく、共闘を頼むなど……。クソジジイの独断かもしれんが、どちらにせよ獣人の誇りがかけらもないクズ共だな」

「……………」

「汚らしい人間とお飾り、二匹も相手にするのは面倒だ。」

今断れば、高貴な俺様の手間が減らす義務を果たせると同時に、キサマは命を拾える。

最高だろっ？

ほら、さっさとクソジジイのところへ依頼を断りに行け愚図が」

プッン！

「ああ」

「そうか。人間にしては賢明な判断」

「クマンじいさんの依頼を受ける」

「……ほう、死にたいのか？」

「はっ、やってみろや犬っころ。」

「全国民の前で無様に潰して、しつけてやるよ」

「犬、だどっ……！？」

「剣狼族の俺様を、犬扱いたな……っ！」

「いいだろう、大会で俺様がキサマを下し、鎖につないで引き回してやる！」

「そして、どちらからともなく。」

「お互いに相手を射殺さんばかりに睨みつけ。」

「「国民大会、覚悟している！」」

二人の間ではバチバチと火花が散り、まさに一触即発の空気を醸し出す。

国民大会を待たず、隙を見れば今すぐにも目の前のやつに殴りかかりそうなほどに。

「そんな中。」

「では、これより一切の私闘を禁止する……！」

「うおっ!?!」
「だれだっ!?!」

突如部屋中に響いた声が、殺気だった雰囲気霧散させた。
声の主 リースは凜と仁王立ちし、威厳を見せつけている。

その姿はまさに王者の風格、という表現がふさわしい。
……となりでちょこんと裾を掴んでいるマナを見なければ。

「双方、本番の時まで各自研鑽に励むがいい!」

「貴様ツ……、いきなりやってきて何様のつもりだ?」

アキラは見知った顔に警戒を解いたが、ヴァイは違つ。
上からなリースの態度に腹を立てていた。
リースもヴァイの無礼な態度に眉をひそめる。

「二度も言わせるな小童が」

「……身の程を思い知らせてやるつかメス?」

「はっ、相手の力量すら読み取れぬ愚か者がなにを言うか」

ゴゴゴゴゴ!
オレはいつしか蚊帳の外に追いやられ、なんだか二人で盛り上が
つておられます。

とりあえず殺気に怯えるマナを背後に隠して、と。

「やめろリース。オレの獲物をとるな」

「むう、そうか……。アキラが言うなら我慢しよう」

しぶしぶ、といった体でリースがにらみ合いをやめる。

よくできましたと頭を撫でてやると気持ちよさそうに目を細めた。

「待て。そのメスには俺様を愚か者と言った罪を償わせてやる。

人間、キサマもだ。手下の手綱も握れんのか」

「へー、大会で勝てる自信がないのか？

それについさつき『大会で』つつたばかりなのに前言撤回とは、器がちいせえ」

「……………そのふざけた挑発、乗ってやろう。

大会でなければ勝る自信がない人間が」

ヴァイは挑発を返し、くるりと反転。

吹っ飛ばしたドアを踏みつけ、去り際に「覚悟している」のとたまって去って行った。

とりあえず、ドアを修復した後、リースに向き直る。

「……………で、リース。いつからいたんだ？

計ったようなタイミングで現れたよな？」

「クマンとかいづのが来た時からずっと外で聞き耳を立てておったのじゃっー！」

どうだ参ったかー！と胸をはるリース。

いったいどこに威張れる要素があったのだろうか。

「最初からかよ!？」

聞いてたなら、もう言っちゃまうが……、オレは参加するぞ?」

「アキラ、そう不安そうな顔をするな。怒ったりなんぞせぬ」

「あ、そ、そう?」

元から受けようとは思っていたが、思い返せば傍から見ると衝動的に決めたように映る展開だった。

だから、また説教されるかとも思ったのだが。

「怒るな、とは言わんよ。

身体も大事だが、心も大事じゃ。貶められたのであればむしろ怒らなければならん。

我が言いたかったのは、どこかのバカのごとく、無鉄砲にはなるなということだな」

怒りに駆られ、衝動に吞まれなければ、怒ることは悪くない。

リースはそう補足した。

「それにじゃ、勘違いするでないぞ。

我はおぬしを大事に飼いたいのではない。共に生きたいのじゃ。死なないと誓えるのなら好きにせよ。

ほれ、今回の大会は殺し合いではないのだから?

まあ、八百長はどうかと思うが……、アキラが決めたのならば我は何も言わんさ」

それに我もあの犬っころは気に食わん、と。
リースとしては同じ狼だからこそ、あいつが気に入らないようだ。
狼の風上にも置けん、犬以下だと憤る。

「そっかこれで心置きなく参加できるな」

「そつだそつだ。全力であの犬に身の程と言うものを教えてやれ」

「全力、ねえ……」

「どうかしたのか？」

「私闘ならともかく大会では素の顔さらして派手なことではできないんだよな。」

噂の払しょくのためにや、それなりに強くないとだめなんだけど、それは王以下レベルでだ。

弱さを知らしめるためなのに、この国有数らしい犬を一方的にボコつたら本末転倒なわけで」

「犬は一方的に殴ってボコ雑巾にしたいが、それができる強さは隠したいと？」

つまり、アキラは勇者とバレないか不安なわけか？」

「まあ、な。勇者云々って言うより、すごく強いと思われたくない」

とくに国を挙げての大会らしいし、他国からの見物もある。強引な勧誘うかいなんかもあるかもしれない。

「あれだ、顔を変化させる魔法はどうなのだ？」

「ギルドのお姉さんや、クマンのじいさん、イチやセンワに犬つころはオレの素顔を知ってる。

もしもバレれば……、いや、むしろ変装の魔法が使えたと知られるのが一番まずい。

獣人だし、臭いでバレるとかもあるかもしれないしな」

マスクレード
仮面舞踏会 は存在が知られていないからこそ魔法だ。

顔が違うからこそ、大胆な真似も潜入なんかも可能になる。

もしも変装できると知られば、思わぬ方法で警戒され、見破られる可能性が高まる。

最悪、結び付けられる。

規格外の魔法を使える『人間』がどういう存在なのか。

「ん、結びつく……？」

待てよ、認識阻害なら……？」

ふと、閃きかけた案を練っていく。

大会は マスクレード 仮面舞踏会 で変装し、偽名で参加。

ギルドのお姉さんのような、素顔は知っているが強さを知らない人にはなにもしない。

だが、すでに強いと知っている人物（イチ、センワ、じいさん、犬）には、『変装顔が素顔』に見えるように、そして他者と会話して齟齬が出て変装と言う可能性に『気づけない』、『違和感をおぼえない』よう認識阻害をかける。

行けるかもしれん。

「……おお、これで解決かな。」

犬っころを心置きなくボコれる。トドメはイチだけど。

「んじゃ、先払いの品はなにがいいか……。リースはなにかあるか？」

「ムジンと言えば、武器や防具だが……。アキラや我には必要ないか」

ムジンは獣人の国だけあって、獣人の使用に耐えうる丈夫な武器防具が有名だ。

しかし、一方で魔力の少ない獣人相手のため、魔法の品があまり多くない。

初級程度のものを除けば、装備者の魔力をあまり使わない軽微の付加装飾品や魔力をこつこつ貯めておいていざという時に使える魔石、魔法防御力を上げる品などが売ってある程度でしかない。

高価な魔法補助の杖や装備者の魔力を大量に使う強力な魔法具などはほとんど売られていないのだ。

「創れるからな〜。」

だからこそ、これ！ってやつがないんだよ。

物じゃなくて、マナの親とか、その一族の居場所でも聞いてみるか……。マナが望むなら保護を頼んでもいいし」

「ま、実際に働くアキラが決めるが良い」

「ん？リースはでないのか？」

「出ぬ」

「おろ、珍しいな。バトル大好きなリースが絶好の機会を棒に振る

なんて」

「アキラと我がやり合えば辺り一面更地になりかねんしな。なにより、アキラの獲物をとるようなことはせんよ。さっき怒られてしまったからの」

「そんじゃ、あの犬コロはリースの分までボコしてくるよ」

「ふはは、アキラと戦うとは。あやつは災難じゃな」

大会まで、あと二週間。

9：要請（後書き）

次回からはバトルが続きます。

10：国民大会「武」予選……………の予選

国民大会。

正式名称、ムジン王国国民実力大会。

毎年4日間にわたって行われる大会で、様々な力を示す場である。戦闘力を競う「武」。

知力を競う「智」。

魅力を競う「魅」。

他にも、鍛冶屋や細工屋などが参加する道具作りの腕を競う「匠」や料理の味を競う「味」など多種多様な部に分かれている。「匠」や「味」などは展示や出店という形で売り、最終日に投票で順位が発表される形式だ。

その中で、目玉はもちろん、最終日前日の予選グループ別トーナメント、最終日の本選バトルロイヤルと二日にかけて行われる「武」だ。

他国からも観戦、偵察含め多くの人を訪れるムジン国の名物行事。

それが「国民大会」である。

国民大会、開催二日前。

「国民大会の名の通り、国民向け行事。

つーわけで、国民じゃないオレは予選の予選から、ってわけか」

マスクレイド
仮面舞踏会　で変装したアキラは、ため息を一つ。

この国民大会、外国からの挑戦者は予選の予選からなのだ。

一般国民は予選から、イチやヴァイ、お姉さん推薦キザン^{II}サー
ドリオなど、国の上位はシードでいきなり本選から。

その三人は時々行われる武闘大会や試合で優勝した時、シード権
をもらってるんだとさ。

そんな風に、他国の人間に対していささか不利な条件が存在する。
たぶん他にもあるだろう。

強い人間を倒し、どんな挑戦者にも勝つ王を演出するか。
万が一、王を倒す人間が現れる可能性を排除するか。

第1回の国民大会でルールを決めた時の宰相は後者を選んだよう
だ。

それも当然。人間に勝つても得るものは少ないが、負ければ失う
ものが大きすぎる。

王なら人間なんかには勝って当然、という風潮があるからな。

閑話休題。

その、予選の予選だが。

はつきり言おう、みんなやる気ないでしょ。

理由一つ目。

人が少なすぎ。

観客数…………… 3人。（参加者の友人、仲間のみ）

出場者…………… 8人。

参加者は、まあいいさ。

毎年このくらいらしいから。

だが、観客。少なすぎないかい？実質ゼロなんて。

三日後の国民大会開催を控え、ムジンの民衆は三つに分かれている。

自らの力を磨き上げる者、大会準備に追われる者、祭りの開催に胸を弾ませている者。

前二つはともかく、最後の集団ならば、前哨戦である今日の戦いを見に来る人がいてもおかしくない。はずなのに、だ。

うん、獣人の方々は予選の予選なんて見るヒマがあったら、大会の準備をやるみたい。

シード三人はもちろん、予選出場者だって敵情視察くらい来てもいいはずなのにな。

参加者も少ないし……。少年野球の方がまだ多たって……。

ちなみに、観客の中にリースはいない。「アキラがそんな段階で負けるはずないである？」だって。

いや、まあそうなんだけど。寂しいな。

理由二つ目。

試合会場

とはとても呼べない場所。

それはムジンの郊外、防壁のすぐそばにある広場。

広場と言っても、公園のような雰囲気ではなく。ただただ広く荒れた土地という意味で。

最後の理由。

審判。

1人で。

しかも、下っ端兵士。つまらなそうにあくびしてるぞこいつ。

あ、どっかいった。職場放棄か？

「国民大会なのに、これはひどいな。

人少なすぎだろ……」。

杖持ちが見えないから、魔法使いもいないっぽいし」

「ま、それにや理由があるんだよ少年」

「ん、あんたは？」

いきなり声をかけてきたのは軽薄そうな若い男。

背中に大剣を背負い、軽鎧を装備している。

体つきからして、大剣を十全に扱えるようには見えないのだが。

「少年も参加者なのか？」

「おいらもだ。ま、よろしくな」

「そっか。よろしく」

「見たところ、初参加みたいだな？」

「あんたは違うの？」

「なにを隠そう！おいらは去年も参加したんだぜ！」

「へえ。どこまで行ったの？」

「うん？……ん〜、本選には行けなかったな……」

本選には……。

こいつの力量を見るに、予選にも行けなかったんじゃないかね？
いや、確かに本選には行けてないから嘘じゃないが……。

「そっか。でさ、魔法使いがない理由って？知ってんの？」

彼　チャラ大剣と命名しよう　はよくぞ聞いてくれました、
と得意気に笑った。

「ルーキーには親切にしなきゃな。教えてやんよ。」

まず、この国民大会は本選こそバトルロイヤルだが、予選の最後
は1対1のトーナメントだ。

それが理由。

獣人相手に、前衛のいないタイムマンじゃ魔法を使う暇もない。

純粋な魔法使いは勝ち目がほとんどねえのさ」

限られた舞台の上で、獣人と1対1
ようは、前衛のいな
魔法使いは詠唱の時間を稼げないのだ。

本選のバトルロイヤルなら可能性はあるだろうが……。
やっぱ、獣人に有利な大会だと思っ。
……良く考えたら、主催者が獣人の国なんだし、当然か。文句言
うなら参加すんなってわけだ。

「ただでさえ、力と速さで獣人には敵わない。
あらかじめ魔法による強化をしておいて、ようやく五分になるか
どうかってとこだ。

その五分つてのが、銀メダルの下位レベルってんだから嫌んなる
ぜ」

「へー」

「少年、棄権するなら今のうちだぞ？」

むしろあなたは大丈夫なのかと。

「心配どうも。ま、やれるだけやるさ。

ああ、言ってなかった。オレの名前は

これも何かの縁、と偽名だが名乗ろうとしたら

「おおっと！待った！

これから戦うんだ、名前を憶えてもしょうがないし、やりづらい
だろ？」

試合の後、後腐れなく教えるのが恰好いいんだぜ？」

きらんっ、と。

ウインクをプラスしたドヤ顔で名乗りを遮られた。

「うわぁ、うぜ……」

「なんか言ったか？」

と、その時、視界の隅で例の審判っぽい下っ端さんがどこから箱を持つてくるのが見えた。

「いやいや、なんでもない。それよりほら、もう始まるみたいだ」

下っ端さんは箱を脇に抱え、周りを見回して。

「あー、なんでこんなこと……。貧乏くじひいたなあ……。……。どうせ予選で負けるんだからくんなよ、もう……」

ピキィッ！

聞こえたボヤキに会場に緊張走る。

あいつ、やっちまおうか？と言わんばかりの空気である。敵であるはずの他の出場者と心が一つになっている。

「試合のどさくさ紛れで痛い目みせたるか……」
「賛成だ」

そんな空気もどこ吹く風、下っ端さんはさらりと受け流す。

「あ、時間だ。」

「はい、じゃあー、今から始めます。」

みなさん、この中からくじを引いてください」

穴のあいたくじボックスを持って呼びかける。

出場者たちは次々とくじを引いていき（その際、下っ端を覗むことを忘れない）、？と？、？と？、と戦う相手のペアごとに並んでいく。

「全員引きましたねー。」

えー、トーナメントです。

ペアの人と戦って、その勝者が次の　　ってわかりますよね。

わかれよ？

よーし、オーケー？

ではルールを。

試合は、場外、戦闘不能、降参の三つで決着します。

殺しはだめです。いろいろ面倒なので。仕事増やすなですよ。

もし増やしたら失格にしてやるうか……。

いいや、さっさとやります。では第1試合からー」

心底やる気を感じない下っ端審判だった。

|||||

さくさくと試合は進み、いよいよ決勝戦である。

もちろん勝ち残ったオレのお相手は、やはりチャラ大剣
なわけがない。

え、彼はどうなったかって？

あれは、1試合目のこと。

チャラ大剣VSトゲトゲハンマー（モーニングスターだっけ？）
を武器とするおっさん。

「ふっ、このおいらと当たったのが運のつきだな。

なにより、あのテキトーな審判のせいで、おいらの名前
あんたを倒す男の名前も知らない」

「ああ、だれがテキトーだって？失格にすんぞこら。

ほら、さっさとやれ。試合開始」

「……………ま、まあいいさ。安心しな。

あんたを負かした男の名は、試合の後にきちんと教えてやっから
よ。

しっかりと刻みな。

このおいら、ハルベルト＝ラヴァ ぶふおう！？」

長々と語り、試合の後と言いつつ拳句なぜか名乗ろうとしたチャ
ラ大剣 改めハルベルト＝ラヴァぶふおうは吹っ飛ばされた。

これなんてかませ犬。

オレはそのモーニングスターおっさんに勝ち、いよいよ決勝戦。
決勝戦の相手は、フードをかぶった謎の人だ。

コートとフードで全身すっぽりと覆われたこの人、なんと魔法を
使う。

チャラ大剣の説明や杖もちがないから、てっきり魔法使いはい

ないと思っていたので驚いた。

弓も使うので、純粹な後衛　魔法砲台タイプではないが。

1 試合目は弓でもって相手をけん制しつつ、魔法を放つという戦い方で意表を突き勝利してきた。

2 試合目は魔法を使わせないよう間断なく攻めた相手をあざ笑うかのように魔法を使って勝利。

弓を使いながらの魔法行使。

杖の補助なしに、詠唱破棄ができるほどの使い手かもしれない。

自然、警戒心をワンランクアップさせ、向かい合う。

「では、試合開始！」

開始の合図とともに、全力で前へ跳びだす。

「先手必勝っ！」

無詠唱だろうと、使う前に倒せば関係ない！

一瞬で至近距離に詰めより、引き絞った右拳を顔面へ向けて放つ！

「　　っ！」

息を呑む音すら聞こえるほどの距離。

入る　　！

と思われた。

ゴウッ!

音はアキラの腹部辺りから。

フードさんとアキラの身体の間、わずかな隙間しかないそこで火の玉が形成され、襲い掛かってきた。

火属性の初級魔法 ファイヤーボール 火の玉だ。

「くっ」

魔力を込めた左手を腹部を引き寄せてガードすると同時にバックステップ。

衝撃を殺しつつ、左手を振るって火の玉を弾き飛ばす。

「魔法速すぎだろ　つと！」

着地した途端、矢が飛んできた。再び跳んでかわす。

「こっちのセリフよ。驚いたわ。いきなり目の前に来るんだもの」

初めて聞く声は勝気そうな女性のもの。

顔を上げると、深紅の髪を露わにした女性の姿があった。どうやら、さっきの戦闘の余波でフードが取れたらしい。

「女　、となんだ？精霊？」

女性だったってことも驚きだが、その首の横でふわふわと漂う半透明の存在に目をひかれた。

羽根の生えた小人……………精霊か妖精ってところか？

「……………なるほど。一人じゃなくて二人だったのか。」

弓と並行しての魔法じゃなく、分担作業なわけね」

一人が弓を使いながら無詠唱で魔法を行使したのではない。
二人組で、一人が弓を、もう一人が魔法を使っていただけ。

「使い魔は数に入れないから、ルール違反じゃないわ」

「だからって、隠しておくのもどうかと思うけど。

まさか精霊とはね……。凄腕魔法使いかもしれないから詠唱前に倒そうとしたんだけど、勘違いか」

精霊の魔法行使速度は人の比じゃない。

彼らは人間が身体を動かす感覚で魔法を発動させる。

危険が迫れば反射的に、それこそ人が手を払う感覚と速度で魔法が飛ばせる。

「ま、タネが分かればどうってことない」

「言ってなさい。あなたはなにもできないわ。

たとえ弓と魔法をかくぐれても、またこの子が魔法で突き放す。
速さが自慢みたいだけど、この子の魔法の方が速いみたいだしね」

彼女は新たな矢をつがえながら不敵に笑い、精霊は腕を前に突き出す。

矢と魔法が次々と放たれ、降り注ぐ。

「当たらなきゃどってことないね！」

「くっ、ちょこまかと！」

しっかりと相手を見て避けていく。
目を見ればだいたいの狙いはわかるし、そもそも見切れない速度ではない。

それでも、反撃しないのは、
解析アナリシスで精霊の魔法行使がどうな
っているのかを盗み見ているからだ。

興味本位で調べてみたが、その無駄のない術式は美しさすら漂わせる。

「ふっ！魔力切れを狙っているなら残念、ねっ！
あらかじめ魔石にたっぷりため込んでるからそうそう無くなら
ないわ」

「解析終了。人には真似できない業か……残念」

アキラの真意にも気づかず、得意げに言い放つ彼女の首には、ビ
ー玉ほどの輝く石。

容量の低い低ランク魔石だが、あの光量をみるにまだまだ余裕が
ある。

「近づくこともできないまま、大人しく的になりなさい！」

女性が常に攻撃し続け、アキラはひたすら避けるだけ。
一方的な展開。

だからこそ、女性は自らの方が優位だと誤認した。

「近づけない、ねえ。」

「じゃ、遠くから殴るだけだ」

パン！！

「がっ！？」

はじけるような音とともに、いきなり女性の頭が大きくのけぞった。

そのまま、ばたりと倒れてしまう。

精霊はなにが起こったのかわからない、と一瞬呆けていたが、すぐに再起動、慌てて主の傍へ。

倒れた主の周りを心配そうにぐるぐる飛び回る。

アキラは戦闘が終わったことを確認し、気を緩める。

最後の一撃、その原理は簡単。

素早く強く拳を振るって、拳圧を飛ばしただけ。

拳で放つ空気砲みたいなものだ。

威力は抑えておいたので、軽い脳震盪で済むはず。

「……あ、試合終了！予選進出者はアキラ！！キャストル選手！」

審判が偽名を呼んで、アキラの国民大会への予選進出が決定した。

10・国民大会「武」予選……………の予選（後書き）

次はバトル……………ではなく、大会を見てまわる話になりそう。

11・国民大会1日目（前書き）

深夜のテンションでちょっとはっちゃけすぎたかもしれない……。

11：国民大会1日目

【国民大会・開催初日】

その日は、朝から大騒ぎだった。

ドンドンバンバン祝砲が鳴らされ、国中のいたるところから歓声が聞こえる。

日本人たるアキラとしては、花火や色つき打ち上げ煙（名前は知らない）なんかも欲しいと思うが、ムジンではそんなものは打ち上げられなかった。

魔法ならなんとかなるだろうけど、魔力の少なすぎる獣人には使えても単発という寂しい結果になってしまう。

なんか物足りないなあ。

窓の外から、楽しそうに話す人たちを見下ろして祭りの空気を肌で感じる。

眼下では、子どもは買い食いしながら走り回り、大人はだれが勝つか予想し合ったり、ライバルと火花を散らしたりと様々だ。

年に一回、4日間にわたって行われるムジン王国最大行事。

所々で力を競い合う舞台が設置され、出店もたくさん。

まさにお祭り騒ぎというやつだろう。

まあ、大騒ぎなのは外だけじゃなく。

「アキラ！アキラ！行くぞ行くぞ！」

はよう準備をせぬか！置いていってしまっぞ！」

前日からわくわくどきどき、遠足前の子どもばりに心躍らせていたリース。

そのテンションの高さを見れば、アキラも少し落ち着く。人のふり見て、というやつだ。

「はしやぎすぎだろ……。まだ準備終わってないから、先に行きたいなら行っていいぞ?」

「なにを言うか!??」

我はアキラと周りたいというのに!一人で行っても意味はないのじゃー!」

「じゃあなんで置いていくなんていったんだよ……」

「それは……その、乙女心というやつじゃろう!??」

もじもじして指を合わせていたと思ったら、急に怒り出した。乙女心は複雑怪奇……うん、爆弾のごとしだな。触れるな危険。

「ほれ、行くぞ!」

というか、そもそもアキラに準備など必要ないではないか!服さえ着ておれば、『倉庫』から取り出せるのであるう!??」

「だな」

「では、マナだけじゃな!マナ疾く着替えよ!ああもつ遅い。そりゃっ」

ほんぽーん、とリースがマナの服を脱がせ、新しい服を着せてい

く。

マナもされるがままになってないで、反応しようよ。
いちおう、男がいるんだよ？変な目は向けないけどさ、女の子な
んだから恥らつくくらいはしようか。

ここ最近、首を振る、服の裾をつまむ、袖を引いてアピール、く
らいの動きはするようになったが、相変わらず全然しゃべらない。
もしかしてと思い、サーチ で声帯を調べたが特に異常はなか
った。身体のごこにも。

気長に待とうか。決勝進出が決まったら、前金として種族の情報
をもらうつもりだし。

「よしっ完了！では行くぞ！」

「あいさー」

準備を終えたオレ達は意気揚々と外へ繰り出した。

|| || ||

それは、とてもじゃないが手を出せそうになかった。
手を出した瞬間、なにかを奪われてしまいそうなおぞましさがあ
った。

にもかかわらず、抗いがたい魅力があった。

だから、オレ達はごくりと唾をのみ、心を決めた。

ぱくつ。

「つつつまっ!?!これうめー!」

「うーまーいーぞーっ!」

このフゲワラボというやつはすごいな!」

「……………」

あのマナまでがくいくい袖を引っ張ってもう一個とおねだりしている。

今、食べているのはフゲワラボという料理。

祭りを満喫するため、さっそく出店でなにかを食べようと思ったオレ達はそれを見つけた。

フゲワラボ。

見た目は、なんというか……キモい。

まず、ジャックオランタンを想像してほしい。ハロウィンのかぼちゃだ。

その顔が、ムンクの叫びを真似したような感じだ。

まさに断末魔、という言葉がピッタリである。

そんな皮に包まれた内にはボフマフとかいう牛とカバを合わせた動物の肉や野菜、店主特性の隠し味が詰まっている。

聞いてみれば、肉まんみたいなものだとわかるが……見た目が、
な。

リースが強硬に「いい匂いがする！絶対おいしいに違いないのだ
っ！」と言い張らなければ手を出すことはなかったと言いつける。
実際、売れ行きもそう良くはないみたいだ。

それでも陽気にながはつはと笑うおつちゃんと別れ、大会をめぐ
る。

初日に行われていた行事を次々と見て行くのだが。

走力・マラソン。

歌唱力・のどじまん大会。

画力・絵画展示。

胆力・にらめっこやお化け屋敷みたいな驚かし合い

エトセトラエトセトラ……

「『武』以外はただの祭りの催しって感じだよ……。イロモノも
けっこうあるし」

「諸々の事情で『武』に参加できない者、向いていない者はおるか
らの。

そういう輩のためでもあるのだろうさ。おそらく、最初は『武』
だけしかなかったのではないか？」

「なるほど。武闘会から祭りになるまでにいろいろあったのかもな。
で、次はどこに行く？」

「次は決まってる。行くぞ！」

走り出すリースに手を引かれ、マナとともに連れて行かれた先は。

「魅」の舞台。

いわゆる、ミスター&ミスコンテスト。

「しかし、すごい人の数だな……」

その会場では、舞台の前に設けられた広いスペースに人が集まっている。

オレたちは今、その人ごみの中だ。

全体の真ん中よりちよつとだけ舞台近くという、なかなかのポジションで人に埋もれている。

いつの時代も、こういう催しは人が集まるものなんだな。

「武」以外は盛り上がりがないというのは訂正しよう。煩惱は何物にも勝るらしい。

「やば、これじゃ、すぐにバラバラに　　ってあら？」

おい、リース？マナ？」

いつしか、握っていた感触が無くなっていることに気づく。
慌ててあたりを見回し、呼びかけた。

くいくい。

今日、何度も感じた袖を軽く引く感触。

「ああ。マナはいたのか。はぐれないよう手をつないでおこうな？」

「……………」

「リリースははぐれたか……………」

捜そうにもこの場所から動けそうにないし……………今は諦めるしかないぽいな」

そう結論付け、とりあえずミスコンを楽しむことにした。

「それではあああ！！

今から、ムジンにいる美男美女！！

その頂点を決めるミスター&ミスコンテストを開催だあああああああああああっ！！」

うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおお！！！！！！！！！！

「み、耳があっ！？」

何の準備もなく大喝采を聞いたため、キーンと耳鳴りがする。

「うおおおおおおおおお！！」

「ではあ！エントリーナンバー1番！

甘いマスクであなたを蕩かす！リ्यूチー！！スーウ！

エントリーナンバー2番！

勝手に応募されたらしいぞ、よくやったあ！

言わずと知れた、力と知を兼ね備えた戦士！

キザン！！サードリオオオオオオオオオオ！！」

「きゃああああああ！！ つあ」(ばたりばたり。数人が失神した)

あーお姉さん推薦の。

確かに、イケメンだ。騒がれるだけのことはある。

その上、国のトップスリーに入り、知力も上の中レベル。

……………けつ。

「エントリーナンバー3番！

他国からの参加者！ハルベルト！！ラヴァ

はいカットしまーす。

7人の男どもが並んで、ポーズをとって筋肉アピールするところなんて見ても面白くない。

さすがムジンならではの、筋肉アピールや演武が多いのは、筋肉や演武の美しさが審査で高ポイントに設定されてるみたいだった。

筋肉を見て盛り上がったる男女の勢いには、ちょっとついていけなかった。

ああ、ミスターコンテスト優勝者は大方の予想通りキザン＝サー
ドリオだ。

で、だ。

お待ちかね。

「じゃあ行くぞ野郎どもおおおおお！！

準備はいいか！！

ミスの部、始めるぞぞおおおおおおお！！

「うおおおおお（中略）おおおおおおお！！

急に叫んだオレにマナがビビっているが気にしない。

こういうのははっちゃけた者勝ちなのだ。

別にやっとなミスの部になってみなぎってきたわけじゃない。

「エントリーナンバー1番！

チャームポイントはふさふさのしっぽ！

コケティッシュな魅力とおしとやかさを併せ持つ美少女！

マモリ＝フォワード！！

「どうぞよろしくお願いいたします」

現れたのは、紹介通り、狐耳とふさふさしっぽの美少女。

女の子にしては高めの身長にしっかりとした腰まである茶色の長
髪が艶やかに映えている。

舞台中央に歩み寄ると、軽く一礼し、端へ。

「エントリーナンバー2番！
ちっさな体に無限のパワー！
元気印の笑顔が素敵なドゥー＝アンドロワ！」

「よつろしくー！」

お次は猫耳少女。

ぴよんぴよん飛び跳ねながら登場。
にこやかに笑いながら、身体全体でぶんぶん手を振っている。

「エントリーナンバー3番！」

髪、頭、首、鎖骨、胸、指先、腰、へそ、尻、太もも、ふくらはぎ、足！！

すべてからほとばしる！

そう、それは エロス！！

司会の俺様一押しお姉さまあ！！

フィーア＝パルクーさんだああああああああああああ

あ

「うふふ、よろしく願いしますね」

司会……私情入りすぎだろ……。

確かに、現れたのは妖艶な笑みを浮かべるお姉さん。

うん、エロいって言葉がピッタリだ。

むちむちの身体にチャイナドレス風の、ラインがピッタリ出る服を着ているから余計にそう見える。

会場の男共も今までで一番声を出したんじゃないかってくらいだ。

「エントリーナンバー4番！」

外国からの獣人さんだ！

今までいなかったタイプだぞ！

クールな魅力で俺達を跪かせる女王様！

その恋人にだけ見せる笑顔が見てみたい！！

リース「トウジョオオオオオオウ！！」

「ふんっ、私の前にひれ伏すがいい。気に入れば、しつけくらいはしてやるっ」

「ぶふあっ！？」

驚愕の紹介とともに現れたのは……リースだ。

編み上げブーツに真っ白のワンピースのギャップ、頭にはティアラ。

……よかった、ムチは持っていない。

てか、姿が見えないと思ったら何やってんだよ……。

名前も勝手にオレのファミリィネーム使っちゃってるし。それも偽名じゃないし。

その後、さすがに前半4人には敵わないものの、やっぱり美少女が3人現れ、計7人。

人数が少ないのは、参加者が本当にいないのか、それとも書類審査とかで落とされるんだろうか。

「1次審査は 『魂のセリフ』 だあああああ！」

「うおお（略）」

「説明しよう！『魂のセリフ』とは、彼女たちが順に、一言だけセ

リフを言う。

彼女たちの中で、一番心にずきゅんときたセリフ！

より多くの男性陣のハートを撃ち抜いた参加者に、順にポイントが入るってわけだ！！

こんな美少女達から言ってもらえるなんて勝ち組以外にや今日かぎりだ！気合入れてけ！！

じゃあ、行くぞおおおお！！！！

今日限りって……。

まあ、こんな機会でもなきゃ心を撃ち抜くセリフなんて言っても
られないだろうなあ。

悲しいことだが。

「さて、1番、マモリ＝フォワードさん！どうぞ！！」

マモリさんは舞台中央へ静かに歩いていく。

そして、正座したかと思うと三つ指をついて、小首を可愛らしく
傾げ。

「旦那様。ご飯にします、お風呂にします、それとも、わ・た・し
」？

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおー！！！！」

その仕草と言葉は多くの男性をノックアウトした。

「いやー、素晴らしかったですね。

「ご主人様でなく、旦那様なのは彼女の印象にピッタリでしょう！
しかし、ベタです。ベタですが、だからこそいい！
色あせないモノはあるんです！！」

最後、ちよつとカッコいいこと言ってるっぽいですが、ミスコンの舞
台である。

「2番、ドゥー＝アンドロワちゃん！どうぞ！」

今度は元気っ子が中央までとたとた走って行き。

「どうしたの？元気ないね？」

元気がでるおまじないしてあげるっ！ちゅっ！

上目遣いをした後、目を閉じて背伸び。観客へ向けてキスのマネ。

「いいいいいいいいいいいっふおおおおおおおおおお
うっ！！」

「みんな落ち着け！？」

アキラ的には、ちよつとあざとくてノリきれなかった。

「ふっ、俺にも、そんな心配をしてくれる子がいたらなあ……。。
いや、気づいてないだけで、今もそばに……。いるのかもしれない
……」

司会は遠くを見ながら黄昏で、カッコつけているが、ミスコンの
舞台である。

「では、3番ファイアパールクーさん！お願いしますー！」

チャイナ風むっちりお姉さんが舞台中央へ。

しなをつくり、唇に人差し指を当てて軽く口を開ける。

すごく……エロいです……。

「んねえ？今だけは、奥さんのこと忘れて楽しみましょう……？」

「ばっちこおおおおおおおおおおおおおおおおおおいー！」

「きたあああああああああああああああああー！」

不倫！背徳的なエロス！！妻と彼女との板挟みが心地いいぜちきしょうー！！

うまく立ち回れば夢の三人でっかああー？」

ああ、ついにカッコいいことすら言わず、欲望まみれに……。

「ふう、ちよっと待ってくれ、今落ち着く。

……ではでは、お次は4番リーストウジョウ様だあー！」

さて、ついにリースの番か。

いったいどうすることやら……。

当人は涼しい顔で舞台中央へ。

そして、片方の編み上げブーツを脱ぎ、前にさしだして。

「足を舐める。そうすれば、ご褒美をくれてやる。

ひゃっ、

ほ、ほんとに舐めるやつがあるかつ！

恥ずかしいではないかつ！」

顔を真っ赤にして足を引き、身体ごと観客から隠す。
その光景を見て、一瞬固まった後。

「……………」。

ぎゃあああああああああああああああああああああ！

「！」

「悲鳴！？」

「な、なんとという破壊力！」

上からのクール女王様と思いきや！お・も・い・き・や！！

まさかのかわいさ！！照れ照れだとおおおおう！？

もはや一言じゃない気がするが、これはこれでいいぞおおおお

おおおおおお！！

なめたいつ！ブーツで蒸れたあのおみ足を！！

はっ、それも考えてのブーツ！？

なんとという策士！！」

司会の人がついに壊れた。

ずいぶんコワレ気味だったが、これはもつだめだ。

そんな風に、收拾をつけるものは皆無のまま、カオスの宴は続いていく。

参加者の衣装替え、質問コーナー。

きわどい恰好も飛び出し、会場のボルテージはほぼ常にMAX。

「優勝の理由は、常に他の参加者とは一味違った魅力を見せつけてくれたこと！」

「そんなリース選手には、賞金と記念品が贈られます！みんな、拍手で祝おう！」

「うむ、ありがたく」

「では、リースさん。優勝のコメントを」

「ミスコンは初めてじゃが、なかなか楽しかったの。」

「ともかく、これであやつも我を認め、見直すことじゃろうな」

「おおっと！？リースさんにはすでにお相手が？」

「えええー！とか、そんなー！？とか、会場中で悲鳴にも似た声上がる。」

「あれ、なんかヤバい空気じゃないかこれ。」

「うむ。我が主なのじゃがな。」

「なにを隠そう、あやつは我に見向きもせんので、我の素晴らしさを思い知らせようと参加したのじゃ。」

「おーい、見ておるかー？」

「にこやかに手を振るリース。」

「その笑みがにやにやしているのは気のせいじゃないはずだ。」

「アキラはマナを抱え、身を低くしてこそこそと退散する。」

「もし見つければ、想像もしたくないことになる。」

「んー、会場におけるはずなのだが、見つからんな……」

「そうですね。では、後で感想を聞きださなくてはなりませんね」

「うむ。そうするとしよう」

「はい！最後まで凛々しくクールなリース＝トウジヨウさんでした
！！」

今年の『魅』の部、優勝者はキザン＝サードリオさんとリース＝
トウジヨウさんでした！

ありがとうございましたー！！」

12・国民大会2日目「智」(前書き)

修正。

どんだけ祭りを満喫するんだ。

さて。

開催時間が近づき、出場者たちはそろそろと用意された席に座っていく。

「では、陣形を決めてください。時間は1分です」

司会の合図を受け、一斉に動き出す。

自らの陣形を決め、絶対の自信を持って臨む者。相手の陣形を窺い、効果的な陣形を構築する者。それぞれだ。

「……………」

ぱちぱちぱちぱち。

「1分経ちました。では、試合開始です」

ぱち、ぱち……。ぱち……。ぱち。

「なあ、アキラ……………」

「言うなりリス。分かってるから」

「いや、な…………？見ていておもしろいか？これ……………」

大の大人が17人。イスに座り盤を挟んで向かい合い、ぱちぱちぱちぱち打っていく。

その解説はなし。

一応、各盤の傍に置かれたボードに盤上が再現されているのだが……。

そこまでするのなら解説しろよ。

盤の駒だけ見せられてもちんぷんかんぷんだって。

「ルールは聞いたけど、見たこともやったこともないから全然わからん……」

観客は、キザン・サードリオの追っかけっばい女子たちを除けば、戦駒が趣味らしきじいさん集団ばかり。

解説がないからとっつきづらいつてもあるのだろうが……。

武力、以外の扱いがうかがえるな。

走力や体力、耐久力など戦闘に関わる大会はもつとにぎわっていたのに……。

「なあ、アキラ。別のところに行かんか？」

「だな……。終わった頃に戻ってこようか。じいさんと話したいところあるし」

「では、行こう」

なんともいえない空気のまま、オレ達は「智」の部会場を後にした。

|||||

Side クマン＝ベール

二日目のこの日、「智」の部が行われる今日。

わかりやすい指標として、この日を、と決めた。

長い年月をかけ、少しずつ、少しずつ。

力だけではなく、知力といった他の「力」を認めさせようと身を粉にして費やしてきた。

国民たちの意識が少しでも変化するように、と。

それなのに、結果はこれだ。

ぐるりと一周、見まわして落胆のため息をつく。

映るのは、「武」のように観客の集まる姿ではなく。

閑散とした会場、やる気を感じられない大会側の兵士たち。

この会場を見て、同じ志をもつ仲間たちも駒を動かしながら現状を嘆いていることだろう。

この光景は妨害工作を受けた結果だった。

力至上主義トップ2の妨害。

やつらはこちらを潰すつもりなどではなく、嫌がらせ程度のもりなのだろう。

知力とまともに向かい合う価値など認めていないのだから。

(「武」たちの反応を顕著に見るため、あえて放っておいた。部下には相手が手を出すようなら逆らうな、と言っておいた。……やはり、やつらはこうなのだな)

長年の努力が報われているのか。

国の者たちの意識が変化したのかを知るいい機会。

だから、「智」の計画・立案そのものには全力を注ぎ。

「智」に対する妨害にはなんの手出しもなかった。

妨害は知力を認めていないという証拠。

そんなものはないと、信じていたかった。

長年の意識改革を促すための努力はまったく実っていないとは思
いたくなかった。

だが、やつらは変わってなどいなかった。

この会場を見れば、「武」以外の力を認めていないことなど一目
瞭然だろう。

クマンはトップの2人を思い浮かべ、この場にいる1人を睨み、
唇の端を噛みしめる。

ヴァイ＝ニフターツ。

力至上主義の塊。

その生まれの高貴さ、王の如き振る舞いと威圧感。

力の者たちを大勢束ね、それ以外の力を下等だと貶める存在。

なまじっか力がある分、強大な力に従う傾向の強い我が国の民に
もこやつを認めている者が多い。

キザン「サードリオ。

ヴァイの参謀役で、力と知の双方を兼ね備えると言われる男。表ではきれいな顔を見せているが、その内面は黒い。

知にも理解がある。　　そういう輩ではない。

良くも悪くも、知力を、力のためにしか使おうとしない。

やはりこやつも、知は力に従い、一方的にさしだすべきという考え方をしておる。

「智」の部に参加し、シードをもぎ取ったのも、後の参政を容易にするためだろう。

力もあり、知力もあると大会で結果を示せば、政治に食い込むのは楽になる。

この結果は、彼らがやったこと。

「智」の会場の位置、解説の兵士を人員不足と割り振らない、同時に開催される人気部門、破壊力の部。

それらは大会の運営に口を挟んできた力主義者の決定だった。

おそらく、主導したのはキザン「サードリオの方だろう。

回りくどい、姑息と言ってもいい嫌がらせはヤツの手口。

やっかいなのはヴァイよりもキザンの方なのだ。

ヴァイは力で押さえつける。が、ザコと判断した者には自ら手を下す価値なしと目障りになるまで無視を決め込む。

一方、キザンは少しでも障害になりえるのならばどんなことだってやる。時に力を振るい無理矢理従わせ、時に相手の内に入り込み懐柔させる。

このキザンの策略で、知の者にも外面に騙された者が出てきている。

(こいつらが王として権力を得れば……どうなることか)

この国では王は政に参加しないのが通例。

その通例すら破りかねない。そうでなくとも、ヴァイが王、キザンが宰相となればムジンは完全に力至上主義に支配される。

(イチがもっと大人に 力をつけていれば……。

いや、言っても詮無いことか)

イチ個人は腕力以外にも理解がある。

が、まだ部下を従わせるほどの圧倒的な力と器をまだ持っていない。

垣間見える片鱗から、いつか持つとは思うが……。

その時が来る前 今大会で、ヴァイが優勝し、王位に付いたら。

イチが王位を取り戻すまで、儂のように知を重視する者が残っているだろうか。

力至上主義の者に排斥しつくされていないだろうか。政治が昔に戻ってしまわないだろうか。

昔を思い出し、身震いする。

この国で、政治のほとんどを「知」の者が行うようになったのはここ50年ほどの話。

昔は政治も「力」の者たちの方が大多数を占めていた。

だからこそ、政治に参加し、国を変えるためには体を鍛え力をつけなければならなかった。

今の政治は、そうして国の中に飛び込んだ儂や師匠が、このままではいけないと行動して成した結晶だ。

それを無意味にしないように動いてきた。

師匠が亡くなった後も遺志を継ぎ、仲間を集め国の意識を変えようと動いてきた。

その結果が、この会場か。

(地道にやっても、正攻法では無理か……。)

やつらの意識を変えるには、巨大な一撃がいる。

やはり“計画”を動かさなければならんかの)

知力を蔑ろにする力至上主義たちを国民の前で下し、一気に失脚させる。

やつらを王になどさせるものか。

知力をも呑みこむ器の大きさがなければ王はつとまらないのだ。

腕力だけでどうにかなるほど、国の運営も世界も甘くない。

(そのための、第1段階はすでに終了しておる)

すでに、アキラという強者にはヴァイを抑えるように依頼した。

ヴァイが儂をつけて依頼を盗み聞きするのをあえて見過ごし、気の合いそうにない二人をはっきりと対立させた。

ヴァイとキザンVSイチという不利な構図を、アキラを加え2対2に持ち込むことができた。

(だが、慎重になるべきなのはここから……)

“計画”の全貌はだれにも話さない。

アキラが知っているのは、ヴァイを失脚させイチを王にするためとだけ。

イチには、ヴァイとキザンが国家の支配をたくらんでいるとだけ。

知力の地位向上という目的は彼らが知らなくともいいことだ。

そう、失敗の時は、儂だけが犠牲になればいい。

実際、“計画”の全てを知り、動いているのは儂一人だ。

国を変えようと動くのだ。

覚悟はできている。

(変えてみせる。

この国の未来のために！)

国民大会を象徴する「武」。

予選に楔を。

最終日の本選、この国を変える一手をうつ。

パチン、と。

クマンは盤に駒を置き、勝敗を決定させた。

12：国民大会2日目「智」（後書き）

予選集団戦、予選トーナメントを書こうとも思いましたが予選だけで3、4話ほどと長くなりすぎるので本選へいききたいと思います。

13・国民大会4日目「武」本選1「試合直前」(前書き)

短いですが、区切りのいいところまで。

13：国民大会4日目「武」本選1「試合直前」

国民大会最終日。

数日前、ミスター&ミスコンテストが行われた大きなステージ。

ステージ中央に立つ一人の男は、大勢の観客を前に腕を広げ、叫んだ。

「さあ、みなさん！

国民大会もついに大詰め！

最後の大会！

決めるは最強！

「武」の頂点！！」

司会の男は、ギルド職員にかけてもらった拡声魔法でステージだけでなく全国民へ声を張り上げる。

それに答えるように、国のいたるところから雄叫びがとどろいた。

「舞台は毎年、この日のために城壁の外に作られる特設会場！

一昨年は城。前年は砦。そして今年は 街！！

宰相クマン・ベル氏が設計し、急造ですが市街地を模した戦場を用意しました。

今年市街地戦です！！」

ステージの背後に、パツと映像が映し出された。

それはハリボテでできた家や役所を作り、外側を街の様相に整え

たフィールド。

ところどころに遠隔視の送信魔法具が置かれ、映像をムジンの各所に設置された受信魔法具のある会場で見ることが出来る。

これを見たアキラは、テレビのロケそのものだ、と評した。

「街の地図は参加者全員に配布されております！」

では、この栄えある決勝で戦う参加者たちの紹介をしていきましよう！」

司会は舞台そでを振り返り、一人ずつ紹介文を読みあげていった。

「まずは一人目！」

前国王より王位を継いだイチチームムジン王！

王として、かの王虎族の末裔として、その力を存分に見せつけてくれることでしょう！」

戦闘装束に身を包んだイチは厳かに歩いていく。

中央で一度手を振り、わきへずれた。

「それでは二人目！」

言わずと知れたその力！

圧倒的な力で国内ランク2位に輝くヴァイチームフーターツ選手だ！

今日こそ、イチチームムジン選手を倒し最強の名を得ようと思気込んでいるようです！」

ヴァイは2位と呼ばれ、司会を軽く睨みつける。

だが、それだけ。あとは国民に見せつけてやればよいことと判断し、イチの隣に並んだ。

「三人目！」

国内ランク3位！

力だけでなく、頭もいい！

甘いマスクの完璧男！キザン「サードリオ選手！」

おっと、女性の歓声がすごいです！

今日は彼女たちをさらに酔わせる戦いを見せてくれるはずですよ

！」

キザンはにこやかな笑みを浮かべながら、観客たちに向けて手を振った。

その笑みの裏に隠された黒い感情を、覆い隠して。

「四人目！」

強いのはなにも男だけじゃない！

女王が引退した後、ムジン国内で女性トップに君臨するのは言わずと知れた彼女！

カトル「シフィーア選手！」

現れたのは長身のスマートな女性。

両こぶしをガツンとぶつけあい、やる気をみなぎらせながら列に並ぶ。

「五人目！」

今大会のラッキーガール！

予選バトルロイヤル、予選トーナメントと強者たちのつぶし合いを潜り抜けて生き残った彼女！

しかし、その実力は本物です！本選でようやくそれを披露することができるとか！

本選の台風の目になれるのか！

サンク「ファイチンク！」

丸っこく可愛らしい耳を乗つけたような、小柄の少女がバク転しながら中央へ。

天へ拳を突き上げ、きっちり決めポーズを取った後列に並んだ。

「六人目！」

もっとも謎な参加者！

その素顔は仮面で覆い隠した彼はいったい何者なのか！？

大会側から明かされた情報は、獣人であることだけ！

見るからに怪しいですが、予選で垣間見えた力は本物！

いったい彼の全力はどれほどのものなのか！

名前も力メン選手！」

仮面で顔を隠した白髪の男はただまっすぐに列へ向かう。

観客へこびることなどしないと、全身が告げていた。

「そして、最後！」

七人目はなんと！大会初！獣人ではなく人間です！

予選の予選から勝ち上がり続けた彼の实力は本物でしょう！

いったいどこまでいけるのか！

アキラ「イースト選手！」

上から目線の紹介文に苦笑しつつ、アキラは舞台の上を歩く。

予選を見ていた者からはアキラを認めるような目が向けられるが、

それは少数派。

大多数の中にはアキラがいつ負けるのかを話し合う者もいた。

「この総勢七名が！最強の名を賭けて戦います！」

では、ここでルール説明をさせていただきます！」

司会の横にボードが運ばれてくる。
彼はそれを一つずつ指さしながら説明を始めた。

「ルールは簡単！」

この中で最後の一人になるまで戦ってもらっただけ！

その過程で同盟を組むもよし！一時的に撤退するもよし！

最終的に勝ち残った者が勝者です！

ただし、少なくとも一度は戦闘をしなければなりませんので要注意です！」

最後まで逃げ続け、同士討ち狙いはだめってことだ。

そもそも全国民に見られているから、たとえ勝っても情けない戦いだったら認められない。

「戦闘不能になった者は係員によって退場させられます。」

ただ、殺しは即失格となります。力ある者はそれを制御できなくてはなりませんからね」

「うっ。耳が痛いな……」

「参加者たちは30分後のスタートと同時に、市街地のどこかへ強制転移させられます！」

ではみなさん、彼らの健闘を祈って拍手をお願いします！」

ワアアアアアア！

大きな歓声と拍手に背中を押され、彼らは控室でそれぞれ準備を始めた。

戦いを前につずつずする者。

目を閉じ、精神統一する者。

地図を読み込み、頭に叩き込む者。

武器の最終確認をする者。

ウォーミングアップとして身体を動かす者。

だれとどう戦うか、イメージトレーニングを行う者。

他の参加者たちを見て、武器や体つきから少しでも情報を集めようとする者。

試合開始を待ちわびる。

「みなさん、もうすぐ時間です」

運営の兵士が彼らを呼び、再びステージへ。

「では、準備が整いました！」

それではこれより、国民大会『武』本選バトルロイヤル！

試合イッ開始イ

！！！！

転移魔法の残滓である淡い光とともに、彼らはそれぞれ飛ばされた。

最強を決める戦場へ

。

14・国民大会4日目「武」本選2「初戦」(前書き)

あとがきでアンケートがありますので、ご協力よろしく願います。

14：国民大会4日目「武」本選2「初戦」

Side アキラ

市街地のどこかに転移、と聞いていたアキラはまず休める場所を探そうと思っていた。

のだが。

「おいおい、マジか……？」

「うわーお……」

思わず頭に手を当てて空を見上げる。

サンクとか言ったか、小柄な少女が目を真ん丸に見開いている。

向こうもいきなりのエンカウントに驚いているようだ。

「いきなりだれかと同じ場所に出るとは思わなかったな。」

でも、ここで会ったのが百年目だよ！」

その硬直状態も束の間。

双方、バツと跳んで間合いを離れた。

「……初対面なんだけど？」

「じゃ、お互い運の尽きだよね！」

サンクはにこやかに笑い、手甲をつけた拳を構えた。足にも、すねを覆う手甲ならぬ足甲がついている。拳法家のようなのだ。

「運で勝ち上がったって紹介だったのに運の尽きっていつっちゃうのかよ……」

「も、あの紹介不本意なんだから言わないでほしいんだよ！
「ここらで実力見せちゃうんだから！」

「紹介が不本意なのはこっちもだよ。
……こうなっちゃ、やるしかないか。それに一度は必須の戦闘を
ここでこなしておいた方が後々楽そうだ」

アキラは腰にさしておいた西洋剣を抜く。

双刀・天地はその高すぎる威力から。

二丁拳銃は技術力の高さから。
使用を見合わせる事となった。

そこで、手ごろな武器がほしいと思って創ったものがこれ。

銘を裂空。

魔法伝導率の高さからミスリル製の両刃剣だ。

「行くよっ！」

跳ねるような踏み込みとともに、右が襲い掛かる。

「遅いよ。遅すぎる」

リースやイチと比べればまだまだ。
剣の腹で受け、そのまま左へ力を流してやる。

「なっ!？」

態勢を崩されたサンクはその技量の高さに驚いた。
力を受け流す。獣人相手のそれは一歩間違えば吹き飛ばされる。
なのに、アキラは一歩も動くことはなかった。

言うは易し、行うは難し、だ。

「よいせつと」

右手から倒れ込むサンクの背を剣の柄で殴る。

「あぐっ!

っでも、まだまだ!」

サンクは距離を取り、再び構える。
少し痛そうに顔をしかめているが、闘志はなえない。

「獣人はタフだよな、ホント。」

今の、しばらくのたうちまわってもおかしくないんだぞ?」

「あたた、うん。かなり痛かったよ?

お兄さん、ほんとに容赦ないね」

「いやいや。本気なら斬ってるから。」

殺しはなしだし、一番柄が近かったからそれで叩いた」

あっさりと言いつつ。

それに、サンクは冷や汗たらり。

目の前の相手が、“その気”だったらあっさり殺してるんだと分かった。

「それより、そんなに離れていいのか？」

拳法家なら、こっちの剣をかくぐんないと届かないんだぞ？」

「一回くらいならだいじょぶ！」

手甲もあるしね！」

自慢の武器を見せびらかすように、手甲を前に突き出す。そのほほえましい姿に、にやりと笑いかけてやった。

「一回、ね……？」

「な、なにその笑い……。」

まさか、一度にいくつもの攻撃が繰り出せるとかつ！？」

「なんでキラキラした目で見てくるんだ。」

やめろ、そんな期待されても無理だって。いやほんとに「

やればできないこともないだろうが……。」

今度やってみよっかな。

「じゃーなんなのー！」

「なぜ怒る……。くっそ、調子狂うな……。」

まあいい。見てろ！」

ブンツ！と裂空を振るう。
すると、白い光の斬撃が飛んだ。

裂空の真価は魔力を込め、放つことにある。

魔力を込めて強度と切れ味を増し、接近戦を。

込めた魔力を放出し、遠距離攻撃や近距離での追加攻撃を。

体獣人用として重宝する遠近両用の剣。

それが 裂空だ。

魔法剣ならこの世界にありふれている。

属性は変えられず無色の魔力しか込められないので、ちょっと珍しいくらいで通る剣だ。

「す、すすすすつごおーい！！

なにそれ、見せて見せて！

斬撃じゃなくて、魔力が刃の形で飛んでったよ！？」

「子どもがおまえは……」

はしゃぎながら近寄ってきて、まじまじ裂空を見つめるサンク。

……毒気を抜かれる。

すごくやりづらい。

そして、サンクは唐突に顔をあげて再び元の位置まで離れた。

「うん、よっし。

面白い武器もみたし！

やるつかー！」

「自由すぎるぞおまえー！！」

しかし、いちいち離れて仕切りなおすあたりいい子である。

「君がどんなに強くても、ボクは負けないよ！」

「この娘の相手すつげえ疲れる……」

「うん？」

なんでぐったりしてるのか分かんないけど、行くよ？」

「あ、待っててくれたのか？」

「……いいぞー。来い」

「そんな余裕はここまでにしてやるんだからっ」

「いい度胸だ！」

魔力刃を三つ飛ばす。

彼女は一つ目、二つ目は避け、三つ目はかわしきれないと判断すると手甲で弾いた。

そのまま駆けてくる。

「近づけば撃てないよねっ！」

「オレは飛ばさなくても十分使えるんだよ」

「つつっっー！」

袈裟切り。

魔力の籠った刃は欠けることなく手甲とぶつかり火花を散らす。サンクは苦しそうな声を上げるが、剣を力任せに振り払った。

「せやっ！ぶっ、ていっ！」

真っ直ぐ、素直な拳。

かわすとハイキックが襲ってくる。

スウエーで空振りさせた。

サンクは空振りの勢いを殺さず、一回転。

回し蹴りで足元を払う。

「蹴り返す！」

アキラは言葉通り、振りかぶって回し蹴りに真っ向から蹴りをいれた。

そしてすぐに離れる。

「あわわわっ！？」

回し蹴りが返され逆回転。

一回じゃ止まらずぐるぐると視界がめぐる。

「拳法家としちゃ、それなりな感じが。」

身体全体が武器ならば流れるように紡いで繋いで押しとおらなきやな。

手足は四つもあるんだ。

オレは一撃必倒よりも、息もつかせぬ連撃こそが拳法家の神髄だと思ってるよ」

「あはは、まるで指導みたい……」

苦笑いするサンク。

アキラは言われて、やっぱり彼女の雰囲気にならされていると気を引き締めた。

と、その時。

ドガン！……！！

遠くから轟音が響き、地面が微かに揺れた。

「どっかでやり合ってるやつがいるみたいだな。時間がないか……」

あの地形を考えない感じ……十中八九、イチがやり合ってる。相手がヴァイヤキザンだったら……まずいな。

「こっちの事情で悪いが、こっから終わらせてもらおう」

「あはは……、本気になってくれるのは嬉しいけど。

その殺気はちょっと怖すぎ……」

「悪いな」

魔力刃をサンクの足もとへ飛ばす。

「こんなの　きゃっ！？」

当然、彼女は避ける。

が、魔力刃は地面に当たると爆散し、球となってあたり一面にまき散らされる。

イメージは手りゅう弾だ。

「つつ……なにあれ。あんなのあり……？」

「手甲でガードしたのはいいが、気を緩めちゃダメだろ」

ガードしつつも吹き飛ばされた彼女の背後に回り込み、剣の腹を叩きつけ。

「ちっ！」

攻撃を中断。

アキラはその場から飛びずさる。

ななめ上から投擲されたなにかを避けるために。

なにかの正体は、それが起こした土煙で隠れている。

あつたのは　　槍。

「横槍失礼するよ。奇しくも文字通りだね」

「最後の最後で乱入とは……。なつてねえ野郎だな？」

「これはバトルロイヤルだよ？」

乱戦なんて当たり前だろうに。

それに、一応断つたじゃないか」

突き刺さった槍を抜き、サングの盾になるように立ちふさがるのはキザン。サードリオ。

観客から見れば甘いマスクだろうが、対峙する側からすればにやにやと嫌らしい笑みにしか見えない。

「ルール上は問題ないだろうさ。

でも、わざわざ決着の直前に乱入するのは気に入らないな」

キザンは今、ヴァイの援護をしていない。

なら、ここで倒しておいた方がいい。

あくまで依頼は、イチを影から援護し、ヴァイを倒させること。

たとえ向こうが2人で戦おうと、こちらは共闘してはだめなのだ。

「僕の目的もあってね。

君を探していたら、なんと彼女のピンチじゃないか。

ギリギリで間に合ってよかったよ。

彼女に負けられると、困るんでね」

声を潜めるキザン。

観客に聞かれたくない目的　　イチ陣営の排除ってところか？

「どうして？」

キザンはにやりと笑い、槍を突出し構えた。

「本選で最初の脱落者は君じゃないとねえ、人間！！」

ああ、そういうことか。
こいつ。

「人間人間うつせえんだよ獣人が！」

嫌いなタイプだ。

|| || || || || || || ||

さすがムジン王国の3位。

その槍捌きは大したものだった。

突きが最短を走って届く。

一直線の殺意を纏い、点の軌道で迫ってくる。

特訓の成果か、防ぐことは楽々できるが攻撃の機会が巡ってこない。
い。

槍の雨をかいくぐれない。

「そろそろそろっ！どうしたんだい！？」

防いでばかりじゃつまらないよ！」

「これを見ても余裕でいられるかア！？」

槍と剣。

間合いの違いが、攻撃し続けられる理由。

こちらが攻撃にうつれない一因。

なら。

「切り裂け　　裂空！」

こつちも槍の間合いの外から攻撃してやる。

横薙ぎ、縦、袈裟、突き。

いくつもの斬撃が飛ぶ。

「くつ、やつかいな剣だな！」

人間はすぐに武器に頼って自力を磨かない！

時に、　　その少女、まだ動けないのか？」

「え、だ、だいじょうぶですけど……？」

斬撃を避けていきながら、後ろのサンクに声をかける。

「なら、加勢してくれないかな！？」

ともに敵を　　人間を討ち果たそうじゃないか！」

二人がかり、か。

バトルロイヤルという性質上、それもあり。

たとえ二人になろうが、勝てないわけじゃない。

冷静に思考するアキラ。

そして、少女は。

「……………お断りします！」

予想外の答えを言い放った。

獣人である少女が、第3位の申し出を断るなんて思いも寄らなかった。

「なっ!?!」

「ボクの敵はボクが決めます！」

さっきは運よく助かっただけで本当なら負けてました。

だから、参戦しません！

それに、ボクは2対1じゃなく、1対1であの人と戦いたい！」

力強い言葉を叩きつけられた二人は、しばらく沈黙してしまう。

「そう……………」

「………ならば、君はさっさと退場しなよ」

ドスッ!

槍が、サンクの脇腹を貫いていた。

「えっ ？」

少女は理解できない、という思いを浮かべ。

ゆっくりと、支えを失い。

とさっ、と。

崩れ落ちる。

その光景が、目に焼き付いていく。

「あっ……………」

意味のない、微かな声が漏れて、運営側 おそらくギルドの協力者が彼女を転移させたのだろう。

転移残光を淡く光らせ、彼女の姿は戦場から消え去った。

それを横目で眺め、キザンは槍を振って血を払う。

「獣人の風上にもおけない娘だな。

おっと。君を最初に脱落させようと思ったのに、思わずやってしまった。

「これはいけない」

「……………」

「ま、いいさ。」

些細な違いだ。

彼女が獣人の面汚しである事実は変わらない。

人間ごときに追い詰められ、あまつさえ上に立つ僕に逆らったんだから」

「なんで、彼女を……………?」

「おかしなことを言うね？」

ルール上、彼女も敵だ。倒すべき、ね。

どうせ、君の後には倒すつもりだったんだよ。

だが、さっきも言ったけど、あれはいただけない。

君を最初に脱落させるといふ目的を超える程に、ね。

上に立つ者に　　上官に逆らう不穏分子は排除して当然だろ
う?」

「……………」

アキラはもう、なにもしゃべらない。

消えた少女のいた場所から、キザンへ視線を移動させる。

「さて。じゃあ、やろうか。」

順番が入れ替わったけど、僕が君を倒すことに代わりはない
「..」

「
今すぐ黙れ」

14：国民大会4日目「武」本選2「初戦」（後書き）

ここまで書いておいてなんですが、2章の主人公に違和感を覚えずにはいられなくなっています。

感想でもご指摘いただきましたが、アキラくんキャラ変わりすぎじゃないかと。

復讐を終えてそれなりに穏やかになるのはいいけど、なんだか動かしづらいキャラになってしまっています。

チートで無双しちゃいたかったのになあ……。

別にイチと引き分けなくとも、国民大会に参加させる理由はほかにもあったんじゃないかなあと思いますし。

このままで行くか。

2章を改訂してしまうか。
悩み中です。

まあ国民大会イベントなど大筋では変えないつもりですが。

なので、

1：改訂しちゃおうぜ

2：今のままでもよくね？

というアンケートを取りたく思います。

×切は10月末までで。

ご協力お願いします。

アンケートは終了しました。

ご協力ありがとうございました

15・国民大会4日目「武」本選3「躰」(前書き)

アンケートご協力ありがとうございました。

アンケートの答えだけでなく、様々な意見をいただきました。いくつか参考にさせていただきます。

最近戦闘ばかりで疲れる……。

閑話とか息抜きに書きました。

EX2を書いています。

15・国民大会4日目「武」本選3「躰」

どうしてこんなに頭にきているのだろう。

目の前で、傲慢に踏みにじられる様を見せつけられたから？

上に立つ者と下で這いつくばる者という憎き光景だったから？

いや、それだけじゃない。

きつと　　貫かれ、ゆっくりと倒れていく姿が、妙に『

彼女』とダブって見えたから。

ひどく歪んでいて、だからこそ無邪気な笑顔かたいを向けてくれた『彼女』とサンクが。
重なつて、見えたからだ。

分かっている。

サンクと『彼女』は違う。

でも、似ていたんだ。

サンクは純真で真っ直ぐな様子だった。

『彼女』はひどく歪で壊れていて、正も負もなかった。

大元は違えど、結果はそっくり 二人とも無邪気な笑顔を
していた。

そんな少女が倒れていく姿は、あることを思い出させた。

復讐を遂げ、過去おわたのことにして、ペルヴィアに置き去りにしてき
たことを。

おそらく無意識下で思い出そうとしなかったことを。

『彼女』の最期の姿を、はっきりと。

すべてが壊れ、すっかりした顔を浮かべ。

解放たれて、自由を喜び、満足げで。

解放の代償に、死を運んでくる男に感謝さえした。

アキラが束縛と強制を嫌う気持ちをより強くさせたであろう、王
家の哀れな道具の最期。

いったい『彼女』が最期に何を想っていたのか、今となっては知
る由もない。

そうしたのは、自分だ。

騙し、縛る道具でいることを選んだ『彼女』 故に銃を向
けた。

しかし、復讐を遂げた今　最期を見た今、『彼女』に抱くのはもはや憎しみではなく憐れみだ。

すべて終わった後に思うのは、手遅れの同情心だ。

あれからしばらくの時間が経った今、アキラは自分の気持ちをそう分析する。

たぶん『彼女』個人を憎む気持ちはもうない。

だから、サンクにペースを乱された。

幻視したんだ。

いつかの光景を。

彼女の役割を知らず、彼女だけは信じられていたあの時を、そこに見たんだ。

オレと『彼女』が失ってしまった眩しい光景。

『彼女』が道具のままであることを良しとしなかったら。

オレが、『彼女』への復讐をやめ、その手を取っていたら。

そんなIFがあつたのなら、きっとあれは今この時も続いていた光景。

『彼女』が諦めてしまったモノ。

オレが復讐を選び、拾おうとしなかったモノ。

今となつては、儚い幻想と成り果てた。

だから。

頭に来たのは。心が痛んだのは。

キザンの傲慢な態度なんかよりも。

失った眩しい幻想を踏みにじられたように感じたから。

だから、オレは。

|||||

「今すぐ黙れ」

ぞわっ!!

アキラを中心に、猛烈な殺気が場を満たす。

キザンは表面上涼しげにしていたが、内心アキラの急変に驚いていた。

「……さすがに、口が過ぎるんじゃないかな？」

そして、そのすぐ後には腹を立てた。
下等な人間如きが、この自分に、と。

筋肉が盛り上がる。

背は曲がり、腕は軽く前にたられされる。

全身から毛が生えて、陽光を反射し。

耳は逆立ち、牙が伸び、鼻が突きでる。

槍を捨て、代わりに爪が命を刈り取る形へ最適化する。

キザンは狼族。剣^{ヴァイ}狼族やフエ^{リース}ンリルのような突出した特徴はないが、その分オールマイティ。

変化したその見た目は、まさに人狼。

完全な獣化は四足歩行の獣モード。二足歩行で人型の獣は獣人モード。普段は人擬態モードと分けるとするなら、今回は獣人モードである。

「……この姿になったからには、君の勝利は万一にも存在しない。

さっきの彼女みたいに、儂く散らせてあげるよお！！」

「つくづく、苛立たせるな……」

キザンが爪が地面に家に、三本線の傷をつけていく。

だが、それらがアキラの身体につけられることはなかった。

時に避け、時に受け流していく。

それはあまりに完璧で、その場から一步も動かず行われた。

「遅すぎる。リースと比べれば、この程度止まって見える。

ほら。どうした、オレは一步も動いてないぞ？

オレをのた打ち回らせてくれるんだらう？」

「お、そい……だと？
この、僕が……遅い!?」

一言。

しかし、その一言は圧倒的速さで相手を寄せ付けずに勝つのを信条とする彼の自尊心を大きく傷つけた。

「なめるなア!!」

キザンの腹を蹴り、引き離す。

地面を音を立てて滑りながら、離れていく間を待つことなく。

「
躑をしてやろう。犬」

アキラは裂空を振りまくり、魔力刃を飛ばしていった。

めったやたらに魔力刃が飛び交い、模された市街地はずたずたに切り裂かれていく。

その中で、キザンは自分に当たるものだけを見切って避ける。

余裕たっぷり、その場から一步も動くことなく。

「これがどうした？」

何度も見せられた手品だ!

剣に頼るだけの腕じゃあ、こうなった僕は倒せないよおニンゲン?
」?

キザンは、アキラが本選に勝ち上がったのは裂空という武器があったからだと思っている。

だがそれも、扱うのが人間ごときなら恐るるに足りず、とも。

「僕はこの場を動いていないよお？」

君の攻撃なんて、止まって見える！簡単に避けられる！それこそ一歩も動かさずに！

さあさあさあさあ！君が遅いと言った僕に、あてて見せるよ！！せめて一歩、この僕を動かしてみなよ！！」

ついさっきアキラに行われたことをキザンはやり返す。

プライドと余裕から、一歩も動かさず避けてみせた。

だが、そんな慢心は、続くアキラの言葉にあっさりと打ち破られる。

「はっ、周りを見てから言えよ」

「なに………を………？」

「なんだこれはっ………」

周囲に目を向けたキザンは驚きに目を見開いた。

先ほどアキラがばら撒いた魔力刃が幾重にも重なり合い、キザンを中心にぐるりと囲っている。

それはまるで　　。

「　　檻だよ。オレの魔力刃で作られた特製の檻だ。

一応、全部斬撃だから触れたらすっぱり切れるぜ？」

裂空の魔力放出。

放たれるのは自分の魔力。

それも属性のついていない素のままの魔力だ。

魔力操作の訓練さえしていれば、簡単に操れる。サンクにしたよ

うに、地面にぶつけた魔力を爆散させるなんて初歩の初歩。

だから、放った後、任意の場所に留めておく、なんてこともできる。

アキラは滞空させた魔力刃を格子状に配置し、檻を形成したのだ。

「檻、だどっ……！？」
貴様ア……！」

「躡のなっていない犬は、檻に閉じ込めて反省させないといけないよなあ……！」

「ニンゲエエエエエン……！」

「閉じろ」

アキラはパチンツと指を鳴らした。

それを合図に、キザンを囲っていた魔力刃の檻が狭まっていく。

中に閉じ込められたキザンをそのままに。

バアアアアアン！

「……………」

ぶつかりあった魔力刃は消え、その後にはなにも残さなかった。

それを見たアキラは裂空を血振るいするように、ひゅんひゅん振るってから腰に戻す。

そして、イチたちのところへ行こうと背を向けた。

「 まだだよニンゲン！ 」

アキラが背を向けたと同時。

タイミングを計っていたキザンがボゴツという音とともに地面から飛び出す。

キザンは檻が小さくなっていく中、唯一の逃げ道 地面に
穴を掘って逃げたのだ。

さすがに360度囲っていた魔力刃の檻も、地面の下まではカバーしていなかった。

無防備なアキラの首筋へ、命を刈り取らんと爪が迫る。

「 いや、終わりだよ 」

振り向くこともしないまま。

パチンッ。指を鳴らす。

「 つぐあ ああああああ！ ？ 」

キザンの背後から、ブーメランの如く舞い戻った魔力刃が二つ。先程、裂空を腰にさす前に、血振るいに見せかけ振るった時の魔力刃だ。

それが合図とともにキザンを襲った。

「な、どうして……。」

痕跡は消した……、脱落したと思ったはずだ……」

背後から切るはずが、切られたキザンは苦しげにうめきながら問いかける。

いくらタフな獣人とはいえ、無防備な背中に、それも魔力攻撃を受ければしばらくは動けない。

「戦闘不能で転移させられたなら、あるはずの転移残光がなかった」

「くそっ……、人間ごときに……この僕が！」

背中の傷にうめき、倒れているキザンの背中を踏みつけ。獣化の恩恵ですでに回復しつつある傷を再び開かせた。

「ぐうああっ！」

「おいおい、なに終わった気になってんだよ。

まだまだだろっが」

「な、にを……」

「映像送信用の魔法具は檻を作る際のどさくさで全て壊した。

……これから起こることを知る者はだれもない」

サーチ で調べ、振りまくったときに破壊した。
さらに、周囲に他の本選メンバーもいない。

この場で起こることを知るのは、当事者の二人のみ。

「　　っお、おい！ば、僕を転送しろ！
はやく！」

キザンは顔を真っ青に染め、指輪　　選手の戦闘不能を判断する魔法具に必死で叫ぶ。

この魔法具（装備者の体調モニタリング機能）で、これをモニターすることで選手のリタイアを判断しフィールド外に転送しているのだ。できるだけ死人を出さないためだ。

脇腹を貫かれ、転送されたサンクのように。

つまり、魔法具が判断するより早く治療すれば、いつまでだってなぶり続けられる。

モニタリングする運営側に気づかれなければ、いつまででも。

他の本選出場者が介入してこなければ、いつまででも。

「その指輪に通信機能はない。残念だったな？」

「お、おい。待て、よせ！！」

僕は国の第3位だぞ！？こんなことをしていいとでも！」

「こんなこと？」

さっきもいったよなあ。

それを知るやつは、いないんだよ」

にたあ、と。

凄惨な笑みを浮かべたアキラに、キザンは息を呑むことしかできない。

「さあ、躑の時間だ」

15：国民大会4日目「武」本選3「躑」（後書き）

魔力の遠隔操作。

書いてる途中、ヤムチャの必殺技（笑）こととおきの技である
繰気弾とかあつたなあと思ひ出しました。

面白い技だけど、威力的に微妙だったなあ……。

対戦相手の顎を跳ね上げてたから、せいぜいアッパーくらいの威力
しかないみたいだし。

そんなヤムチャは大好きですが。

16・国民大会4日目「武」本選3・裏「王」(前書き)

イチ、ヴァイサイドのお話。

この裏ではアキラくんがキザンをボコっています。

16：国民大会4日目「武」本選3 - 裏「王」

Sideイチニテムジン

アキラとサンクの勝負にキザンが割り込むよりも少し前。

別の場所では二人の男が互いに睨み合っていた。

向こうはどう思っているのかは知らないが、オレにとっての宿敵。ライバルと言ってもいい男。

「最初にあたるのがおまえか、お飾り王」

「いい加減、その呼び方やめろよな。オレにはきちんとイチって名前があるんだよ」

高い身長から見下ろす男がヴァイニフターツ。

いつも、いつまでも、こいつの目にはオレが映っていない。お飾りの王。

そのフィルターがかかった「王子」しか映っていない。

ライバルが自分のことを歯牙にもかけていない。

その思いは、イチの闘争心を燃やす燃料だ。

「俺様が勝つたらやめてやる。その時、すでにおまえはお飾りの王ですらないのだからな」

「……ふーん、言ってくれるねえ。ま、勝負すりゃいいか。オレが勝つたら地面に頭つけて謝ってもらうぜ?」

「なにもいらん。俺様がおまえに勝つのは自明の理なのだから。おまえはただただ、失うだけだ」

双方がかち合えば、どちらかが従うしかない。

勝者は相手を踏み越え。

敗者は黙って従うのみ。

人間社会でも、声高には叫ばれない暗黙の了解。

それが、この国では決闘という制度で明文化され、認められている。

「じゃ、決闘ってことで。

どうせ大会だし、おまえとは本気で戦いたい。

いままで、なぜか公式戦で直接試合はなかったしよ」

「いいだろう。

貴様が親からもらった最強、ここで譲ってもらおうか」

最強を決めるのならこの戦いだけで十分であり、この戦いがなければ不十分だ。

国の1位と2位の直接対決。

観戦している国民のだけれども、それだけを楽しみにしていると

っても過言ではない。

「王牙虎、イチニテニムジン」

腰をゆっくりと落とし、拳を握りしめる。

「剣狼、ヴァイニフターツ」

精神を研ぎ澄ましていき、相手の全身を視界におさめる。

「これ」

「尋常に」

「勝負ッ！！」

叫ぶ。

「おおおおあああああああ！！」

相手は第2位のヴァイ。

出し惜しみはしない。できるような相手じゃない。

だからこそ、いきなりの獣化。

しかし、それをしたのは自分だけでなく、ヴァイも同時に変化し

た。

獣人モードになったイチは爪を伸ばし、ヴァイに斬りかかる。

ガキイツ！

「俺様には届かん」

ヴァイの身体を覆う剣狼の毛皮に弾かれる。

「ちっ」

剣狼の毛皮 あれは剣と同じ硬度を持つ毛皮。

剣を折り、断ち切るような 力と鋭さが無ければ弾かれる。

衝撃は一応通るのだが、あれはあくまで毛皮。

ある程度は吸収されてしまう。

毛の柔らかさと剣の硬さ。

相反する二つを併せ持つのが剣狼の毛皮なのだ。

その厄介さに、思わず舌打ちしてしまう。

が、勝負は始まったばかりだ。

「まだまだあっ！」

地面すれすれ、爪で大地に線をつけながら肉迫する。

「無駄だ」

こちらに合わせた、カウンターの爪が襲ってくる。

「シッ！」

それに当たる直前、方向転換し右に跳んだ。

ヴァイの爪は空を切り、彼はイチを目で追う。

だが、振り向いた先にはもうオレはいない。

ヴァイが見たのは、ついさっきまではなかった壁。

市街地を模されて作られたものじゃない。

地面がそのまま盛り上がり、四角形をかたどったような、ただの土壁。

そして、壁には足跡。

「しまっ！」

ヴァイは王牙虎の固有能力を思い出し、その後頭部を衝撃が襲った。

「どうだあ！なにが無駄だつてえ！？」

いくつもの家をぶち抜き、轟音と共に吹き飛んでいくヴァイに叫ぶ。

王牙虎の力を使い、大地を操り壁を作ってそれを足場とした。

壁を二度蹴って右から背後へ移動し、回り込んでの攻撃。

アキラとの模擬戦の未編み出した技。能力を利用する立体的な移動と攻撃。

よそでは使ったことのないものだ。ヴァイにも予想外だったはず。

「やってくれたな貴様ア……」

突っ込んだ先、家を壊してヴァイが歩み出てくる。

怒っているのがよくわかるが、傷などはどこにもない。

後頭部から攻撃を受けるなんて無様をってしまったことに憤慨しているのだろう。

「ははっ、来いよオヴァイ！」

「刻んでやる！」

ヴァイの爪を紙一重で避ける。

しかし、その避け方がまずかった。

爪は避けたが、ヴァイの腕に生えた毛皮。それがカスツた部分から血が出ている。

そこには、縦に一筋、スパツと切れた皮膚。

「つくづく厄介だなっ！」

「力を込めれば、剣そのものにもなる！」

ここまで操れるのは俺様くらいだ！」

時には爪が、時には剣の毛皮に包まれた足が、上下左右あらゆる方向から襲ってくる。

休みなく、間断なく、躊躇なく、遠慮なく。

爪は同じく爪で受けた後、滑らせるように動かして毛皮までをも受け流す。

剣の毛皮での攻撃は無理に受けようとせず、大地を操り土で壁を作って防ぐ。

土壁が行動を阻害しないよう、必要となればすぐに崩して砂に戻す。

大地操作は防ぐだけじゃない。

時には地面を柔らかくしてヴァイの態勢を崩したり、足場を勢いよく弾ませて攻撃の威力と速度を上げたり、離脱に役立たせる。

対アキラ戦で使おうと思っていた技がどんどん使わされ、それを越えて攻撃が来る。

予想以上にヴァイは強く、それに引つ張られるように自分も強さの階段を駆け上がっていくのがわかる。

一瞬一瞬で、強くなっていくのがわかる。

自分の中に隠れていたものが、自分の奥底に沈んでいたものが、どんどん見つかっていく。

「ああ、楽しいなあ！

すげえ楽しいっ！！」

口元は歪んでいる。

今自分は笑っている。

アキラの一件で説教と折檻を受け、一応、無鉄砲に挑みかかることは減ったがある程度は改善したと思っていたがダメだ。

国民大会なのに。

最強決定戦なのに。

そんな些末な事情は頭のどこかに追いやられ、目の前の闘争のみに集中していた。

「なあ！オレをお飾りっていうんなら、おまえは王になったらどうするんだ！」

これが国民大会だと思いだし、ふと沸いた疑問。殴り合いの最中なのに、いや、だからこそ聞いた。

「なんだ、譲る気になったのか!？」

「んなわけあるか！」

ただ、いつも嫌味を言われるからな！おまえのなる王つてのがどんなもんか聞いてみたくな！

「こんなっ、ときでもない　とお!？聞けないだろ!？」

倒れ込むほどにのけぞり、突きを避ける。

ブリッジの態勢を作り、足の下の大地を跳ね上げさせて疑似的なバック転。その際、足が毛皮に当たらないよう広げて腕を回避。

しかし、土は盛り上がり、ヴァイの腕を上げさせるとともに追撃の道をふさぐ。

「王は最強だ！それ以上でも以下でも以外でもない！」

『最強』　俺様が王だ!！」

「その最強になってどうすんだって言ってんだよ!？」

目の前のヴァイが力に　最強にこだわっていることは知っていた。
た。

だから自分をお飾りと呼ぶのだと。

クマンのじいさんなら知ってるかと思いい聞いてみたが、勝つことに集中しろと言って教えてくれなかった。

その答えは。

「同族ともよべない情弱な獣人を潰すのもいいし、人間どもを殺し尽くしてもいい。

いろいろとしたいことはあるが……すべては最強の名を得てからだッ!!」

「……本気で、言っているのか？」

思わず手を止め、聞きかえす。

ヴァイは両手を広げ、全国民に語りかけるように吐露し始めた。

「なあ、気づかないのか？ 獣人の質が落ちてきていることに。

それとも見て見ぬふりをしているのか？

人間が本選に残っていることがいい証拠だろう？」

「あいつは……」

「それだけじゃない。本選出場者も、年々弱くなっていくばかりだろうが。

政治をあのジジイが仕切るようになってから、少しずつ弱くなっている。知力を重視し、戦闘力を軽んじた結果だ。これからは知力の時代などと世迷言を抜かすから、国全体が弱くなっていくんだよ」

吐き捨てるように告げた。

「獣人に弱者は不要だ！」

人間如きに頭を下げて頼む者、びくびくと怯え機嫌をつかがう者、あげく捕えられ奴隷にされる者！

そんな者が多すぎる！そんなやつら、この国にはいない！！」

「……………そうか。」

なら、おまえには絶対に負けられなくなった」

勝敗は二の次でよかった。

戦いがあまりに楽しくて楽しくて、それだけでよかった。

この国の王は最強がなるべき。

その最強が自分ではなくとも、王の力によって国民が幸せになるのならそれでもいい。

そう思っていた。

だから、たとえ負けてもヴァイが 最強が王になるだけのこと。ヴァイの下、この国が笑顔であふれればそれでいい。

そう、思っていた。

ヴァイもこの国の一員なら、王となって積極的に国民に害をなすなどとは思っても寄らなかつたから。

なのに、いらない？

強くなければ、懦弱と蔑み、不要と切り捨てるのか？

たとえ、国民だろうと。弱い、ただそれだけで？

いや、本当に非国民として切り捨てるのか、それとも過酷な訓練を課すのかはわからない。

あいつの性格上、おそらく……悪い方だろう。

そんなのは、王じゃない。

クマンのじじいにずっと言われてきた。

王の役割。

王の器。

戦闘力以外の力の重要性。

言われたことの大半はよくわからない。

でも、大事なことはわかっている。

今も、覚えている。

父の 亡き前王の言葉とその背中を。

「『 最強の王はなによりもまず、この国のために。国民を幸せにするために全力を振るう者。

それが、王だ 』 だろ？

わかってるよ、親父……」

それだけでいい。

大事なことはたった一つ、わかりやすければそれでいい。

この手は二つしかない。

大事なものを守るには、一つを大切に包み込むしかない。片手では、いつ零れ落ちてしまいかわからない。

だから、なによりも大切な『一』を見つけなければならない。

ただ王はその『一』が大きいだけ。

「おまえに王は任せられない！
おまえには絶対に負けられない！！」

「力で屈服させるか……。それもいいだろう。
この国は力がすべて！
勝者がなにもかもを手に入れる！！」

力こそ全て。

だが、ヴァイの言う力とは、戦闘力のみをさす。
戦闘力を持つ国民しか認めていない。

そんな考えは、それこそ認められない。

「おまえの信念　折らせてもらっつッ！！」

「最強の座　奪わせてもらっつぞッ！！」

17：国民大会4日目「武」本選4「乱入」（前書き）

マケン姫っ！のOP「FLY AWAY」が良曲過ぎると思う。
書いてる途中、何度もリピートしています。

17：国民大会4日目「武」本選4「乱入」

そこは戦闘の余波でボロボロだった。

いたるところに傷や穴が空いており、無事なところを探す方が難しいくらいだ。

今も、ドン！という轟音と共にイチが家に突っ込み、家をゴミに変える。

イチは押し潰そうとしてくる瓦礫を吹き飛ばし、ヴァイに跳びかかった。

「だああああくそっ！

今度はこつちだ！」

「ふんっ、剣皮爪！」

イチの爪とヴァイの爪プラス毛皮がぶつかり合う。
火花を散らし、二人は立ち位置を入れ替えた。

にらみ合いは刹那、すぐにまた交差する。

一度、二度、三度、四度と激突するにつれ、イチが押され出した。

剣狼の毛皮を越えて大きなダメージを与えるには、やはり大技

すなわち溜めが必要になる。

その時間をとれないイチは必然、防戦を余儀なくされる。

「くっ、離れろっ！」

離れてできた溜めの時間。それを逃さず身をひねって身体ごと拳を撃ちつける。

今度はヴァイが家に穴をあけながら吹っ飛んだ。

お互いに傷だらけ。服には爪で切り裂かれた跡があり、激戦を物語る。

「ヴァイツ!!」

みんな追い出して!戦いで頭がいっぱいのやつだけで国が回せると思ってるのか!?

「なにも全員追い出すわけではない。弱ければ鍛えればいいだけのことだ。

だが、弱いのに鍛えようという向上心もない、そのくせ強者への反発心だけは人並み以上。そのような肉体だけでなく心までも弱い者はいらん!」

「それでも!国民だ!!」

「誇りなき者はムジンにはいらん!」

「この分ならず屋がッ!

一部からしか慕われない、そんな王があっという間もんかよ!」

「強者がついてくればそれでいい。

弱者など、従わせればいいだろう!

弱者は強者に従えばいいのだ!

それを換えようとするから歪む!弱くなる!

弱者が強者を動かそうなど思いあがるから!

あのクソジジイが出しゃばるようになってから、この国は歪んだんだよ！

それを　　俺様が正してやる！！」

ヴァイが語るその言葉に。

「へえ……そういふこと言っちゃった？」

アキラの逆鱗が含まれていた。

「アキラ……」

「貴様が、人間……」

二人の頭上。

とあるはりぼて民家の屋根の上、なにかを抱えて二人を見下ろすアキラがいた。

|||||

Side アキラ

「ほれ、やるよ」

ぽいつ。

無雑作に抱えていたモノを投げ捨てる。
ちょうどヴァイとイチの中間あたりに。

「なっ!?!」

「これはっ……!?!」

鈍い音を立てて地面に落とされたソレ。

「キザンツ!?!」

虚ろな瞳で転がるソレはキザン＝サードリオ。

明らかに異常な姿に、イチとヴァイは驚愕する。

キザンの服はボロボロで、かろうじて隠せているくらいしか残っていないのに、外傷がない。

傷がついたであろう証拠はあるのに、その傷がない。

「これは、いったい……」

「ん?回復薬ってのはさ、あらかじめ大量に服用して万全まで治る

と、傷を受けたときに勝手に効果が現れるようになる。

飲ませた後で切り刻むと、身体は勝手に回復するが、服はそうはいかない。

だから、そんな風に服はボロボロ、身体は無事って感じになるんだよ。

ああ、飲ませた方法？まず回復薬を球体にして、キザンの顔を包んで呼吸できなくするだろ？

すると、顔の周りだけ水に覆われて呼吸ができなくなるんで、肺から息がなくなると身体は呼吸してしまう。

それで溺れた時よろしく回復薬を飲んじゃったわけだ」

アキラは愉快的な物語の内容を教えるように、楽しげに語りかける。

「あと、痛覚増大魔法をかけたっけか。もちろん、発狂防止に精神強化もな。

最初はさ、『こんな真似が許されると思うな！？』とか『やめろお！』とか『憶えているよお……！』とか言いやがったんだよ。こう、キツと睨みながらな？

んで、20回くらい刺したり斬ったりすると、『ひっ！？』とか『もういいだろう！？』とか『ぎゃああ！？』とか、悲鳴ばっかにシフトするんだ。

こちら辺で飽きてきて、刺し方がぞんざいになるんだけど、それはまあいい。

40回を超えるとほとんどしゃべらなくなる。斬ったら反射で体が跳ねるくらいだ。精神強化魔法でもさすがに無理っばかった」

語られる凄惨な拷問に、イチだけでなくヴァイも気分が悪くなっているようだった。

「んで、そこまで言ったらアレだ。もういつかい、ってな？

精神回復させて、『それじゃ、今度は痛覚5倍な?』って言ったときは泣いて謝ってたぜ!?

面白かったから、2回目は痛覚10倍にしてやったんだよ! その結果がソレだ!」

ぎゃはは、と哄笑が響き渡る。

そんなアキラに、イチが食って掛かった。

「……なんで?! そんなこと!」

「それは『なんでやったのか』ってことか?

それとも、『なんでそんなことができるんだ』ってことか?」

「どっちもだ!」

「やった理由は、強者気取ってやりたい放題しやがったんで、弱者の立場つてのを味わってもらおうと思っただから。

できる理由は　　そうだなあ。最近、オレは周りに怒りをまき散らさない程度に丸くなったんだけどさ。

その反動か、ムカつくヤツに、一点集中するようになったからかな?」

「そんなのっ、納得できるかよ!」

「納得させるために言ったんじゃないからな」

いつもとは違う、暗い雰囲気纏うオレに、イチは困惑しつつも気丈に返す。

王として、武人として、拷問じみたマネは認められないのだろう。

「それにな。結局、そいつが弱かったってだけの話だ。
なあ、ヴァイニフターツ。オレは、なにかまずいことをしたか
？」

「……………別に、なにもしていないな。

キザンが、戦闘力において人間に負けるほど弱く、また心も弱か
ったというだけのこと。

第3位がこのざまとは……………やはり質の低下は著しいな」

その表情からはなにも読めず、言葉が本心なのかどうかもわから
ない。

「ふーん。ま、その言葉が虚勢と本音、どっちなのかねえ……………。

っと、退場か」

キザンの身体が淡い光に包まれ、消える。

指輪からではなく、この近くの送信用魔法具を見ていたのだろう。

これでキザンは本当に脱落ってわけだ。

「さて、この場は三人か……………。どうする？」

「ふん。貴様らは二人とも俺様の敵。

そちらは共闘するなら勝手にしろ。2対1……………まあ、ハンデとし
ては十分だ」

ヴァイが少し間合いを開け、オレとイチ、どちらにも対応できる
ように注意する。

このまま2対1で始まるかとも思われたが。

「いや、アキラとは組めない……。
例え敵でも、あんなことをするやつとは……肩を並べられない。
国民をみだりに傷つけるような、そんなやつとは……」

イチがそれを認めなかった。

拳が震えるほどに握りしめ、こちらを睨んでくるイチに。

「へ。あの話、信じちゃったの？
バツカで」

そんなことを、言った。

「……………は？」

心底バカにするような、呆れた口調。
それを聞いたイチの頭はフリーズした。

「……………いやいやいやいや！！
だって、おま、ええっ!？」

「拷問？あほらし。そんな悠長なことしてたら試合おわっちまうわ。
他の敵に奇襲されるかも知ないだろうが」

「は、いや、ちょ、じゃあなんで!？」

いまだ、絶賛テンパリ中のイチである。

「その、お偉いヴァイさんが言ったこと、マジなのかなあと思っ
てな。

弱者には何の権利もない、みたいな言い方にカチンと来たんだよ
ね。

じゃあ、仲間が人間如きに負けるような弱者だったとき、どんな
反応するかと思ったわけだが」

少しでも隙を見せれば、襲い掛かろうと窺うヴァイを殺気と視線
で牽制しつつ。

「結果はやっぱり、サイテーだ。

例え仲間だろうと弱者は認めない。

驚きはしたものの、心配はしないとはね……」

「いや、待て！だって、キザンは　　！」

「傷一つ、なかったよな？」

「あ……」。

で、でも！ただ気絶させたんならその時に退場するだろうっ！

なら、あんなっ、心が壊れたとしか……！！」

「ありゃ、悪夢を見せる幻覚魔法をかけたただけだ。

どんな夢を見ていたのかは知らんが、よほどらしいな。解いた瞬
間気絶して退場だ。

ああ、なんで解除するまで退場しなかったのかっていうと、指輪
がモニタリングしているのは身体面だけだからだ。幻覚にとらわれ

てても、身体は元気なままだから強制退場はさせられない」

くらった側が、もしかしたら、自力で魔法を破って復活するかもしれないのだから。

魔法をかけた側も、その後とどめを刺さないまま放置、なんてことはないだろうから問題はない。

「つまり、キザンのヤローは今、かすり傷一つ負ってねえよ」

「な、なんだ……安心した。」

だよな、アキラがそんなひでえ真似するなんて、んなわけないか」

ほっと息をつくイチ。

その言葉に、どこか違ってほしい予想が外れていたことを喜ぶようなものがある。

それを見て、こちらも安堵した。

うまく騙されてくれた、と。

本当は、彼らに語った内容以上のことをしている。

痛覚増大。発狂防止。精神汚染。

幻覚による無間地獄。

嘘だったのは叫び声がわずらわしかったので、音を遮断して届かないようにしたこと。つまり、悲鳴のくだりは嘘だ。

持論だが、人間と言う生き物は悲鳴を聞くと心が萎える。オレは純粹な苦痛による悲鳴で悦ぶレベルまで達してない。

なら、聞かなければいい。

人間、悲鳴を聞かなければけっこうひどいことができるのだ。

相手の痛みなんて、わからないんだから。

確かに、『今』のキザンは傷一つない。傷ついた傍から癒されていった。

だが、実際には傷つけられなかったところなどなく、負傷と回復を何度も繰り返し返していた。

そして、後々疑われないよう壊れたキザンの精神を作り直した。

色々ともな神経の持ち主に生まれ変わり、トラウマなんて存在しなくなつた。

多少の違和感はあるだろうが、それは『本選敗退のショック』などと周りは勝手に理由をつけて自らを納得させるだろう。

だって、キザンは身体に傷一つないし、心に傷を負った様子も見られないんだから。

「おい、イチ。ほっとしてるとこ悪いが、なにも終わってないぞ？」

「っおお、悪い」

「で、どうする？」

本音を言えば、そこのをぶちのめしたいところなんだが、割り込んだのはこつちだ。我慢してもいい」

「……………いや。悪いが断る。」

急ごしらえの連係なんてマイナスにしかならない。

なにより、これは王を決める戦いだ。
正々堂々、真正面から打ち勝って証明してやる！」

ヴァイを潰したいのは本当だが、百歩譲って我慢する。あいつの物言いが癪に障ったのは確かだが、ある程度ストレス解消は済ませた後だったので我慢はできる。あくまで『今』は我慢するだけ。後でこっそりなんかする予定だ。

それに、依頼の都合上共闘は難しい。

例えヴァイに勝っても、2対1で勝ったのでは最強の資質が疑われかねない。

「……なら、存分に」

屋根の上から睨み合う二人の姿を眺める。

「そーいうわけだ。待たせたな」

「別に、こちらとしては二人がかりでもよかったのだがな。それを打ち破ってこそその王だ」

「おまえに王は任せられない」

「抜かせ。おまえが王など許容できん」

「行くぞ！」

小休止は終わり。

二人は同時に跳び出し、再び、王をめぐる激戦が始まる。

「悪いが、邪魔させてもらおう」

ことはなかった。

瞬間。イチの前から、ヴァイが消えた。

それは思わぬ方向からの乱入。

イチからはヴァイが急に視界の外へ消えたように見えただろう。屋根の上からは飛び込んできた者が見えていたが、この距離から止めることはできなかった。

「なっ!?!」

「今の感触……仕留めきれなかったか……?」

驚くイチを無視し、ヴァイの飛んだ方向を見て憎々しげにつぶやくのは。

激突の寸前、側面から奇襲を仕掛けた乱入者。

仮面の男がそこにいた。

17：国民大会4日目「武」本選4「乱入」（後書き）

いつか二次創作が書きたいなあと思っていたのですが、TPPとやらのせいなんだかこれから難しくなるかもという話。

ほんとのところどうなるんですかねえ……。

これは今のうちから書いとけてことなかな。

18・国民大会4日目「武」本選5「正体」

「なっ、につしてくれてんだてめえっ!!」

決闘を邪魔されたと激昂するイチに対し。

「なにを怒ることがある。これは戦だ。まさか、正々堂々一騎打ち、なんて世迷言をいつつもりではないだろうな？」

「わりいか!？」

「この本選、残っているのはもはや4人だけ。

そのどれもが強者だ。隙があれば仕掛けるのが道理。

ましてや、国2位の猛者となれば手段は選んでられんだ」

仮面の男はどこか呆れたような雰囲気をにじませる。

そして、その目をイチからつい先ほど、瓦礫で作られた道へと移した。

「それでも、やはり倒しきることはできなかったようだが」

「貴様あ……やってくれたなッ!!」

「真正面から、わざわざありがたいな」

話している仮面に向かい、戻ってきたヴァイが襲い掛かる。

「おいおい……」

ヴァイをあしらう仮面を見て、思わず声が漏れた。

それは、相手の力を利用する技。

ヴァイの力に逆らわず利用し、そこへ自分の力を微かに上乘せし
て投げる。

この世界で、柔術や合気道などの技は見たことがなかった。

勇者の戦闘経験で、歴代にいた経験者の知識はあっても、この世
界で得た知識はなかった。

それもそのはず。この世界はモンスターが跳梁跋扈する世界。

相手を掴み投げる技、相手に触れて返す技。

それらあくまで対人用で、鋭利な爪や毒の皮膚、滑る粘液などを
持つモンスター相手には使いづらい技術なのだ。

それだけなら対人、対モンスターの両方で使える他の武術を学ん
だ方がいい。

この世界の事情ゆえに、廃れてしまったのか、発想そのものがな
かったのかはわからない。

いや、発想自体はあったのだろう。

今、目の前で使われたのだから。

「な、んだ……？」

傍で見ていたイチはどうやってヴァイが投げられたのか分かって
いない。

おそらく、投げられた本人もなにが起こったのか分かっていない
だろう。

達人の投げはそういうものだ。
知っている自分の目からも、あれはあまりにつまぐ。

鳥肌がたつほど。

「おい仮面！その技、どこで学んだ！」

「これか？」

先達の積み重ねを改良し、編み出したモノだ。
力の弱い自分のために長い時間をかけてな」

「そりゃ、すげえ……」

アキラとの問答の間にも、仮面とヴァイの戦闘は続いていく。

「せつ！」

仮面は再びヴァイを投げ、空中で蹴り飛ばす。

それは力が弱いとは到底思えないほど重いもの。獣人を基準に弱いと言ったのだろうか、それでも人の何倍もあるはずだ。

イチのすぐ横まで飛ばされたヴァイはすぐに立ち上がり、仮面を睨む。

「ふむ、二人並んでしまったか。

これからは、二人でかかってくるかね？

勝負に割って入った邪魔者とともに倒し、その後で決着をつけるのもいいだろうさ」

仮面はそう挑発する。

「だれがこんなっ！」

「こちらのセリフだ」

しかし、二人はそれを否定した。

「……………挑発にのるか。挑発されても熱くなるな。

たとえ挑発され、プライドが邪魔してやりづらくなるうとも、たとえ嫌いな相手だろうとも、目的のためには協力が必要な時もあるだろうに。

協力が嫌なら、利用と言い換えてもいいかもしれんが」

仮面の声に落胆の色がにじむ。

「王たる者、清濁併せのむ器が必要だ。

単純な二分だけではやっていけない。

善と悪。敵と味方。戦闘力と知力。どちらも受け入れなければな」

その姿に、違和感を覚える。

どうして、そんなことを言うんだ？

そんな、相手を諭し、導くようなことを。

「イチィチームジン。

君はさつきから国民は守るべきものと一貫して主張している。

それは正しい。

だが、守るだけではなく、時には国民だろうと敵にまわさねばならない時もあると知れ」

「ヴァイニフターツ。
強さを至上とし、外敵に備えるのもいいだろう。
だが、行き過ぎれば内部に敵を作り崩壊を招く。
理由があるうと、なにかを強制するのならば反感を覚悟せねばな
らない」

二人をそれぞれ指さし、告げる。

指された二人はそれを無視し、仮面に向かって飛びかかった。

まずはヴァイが。続いてイチが。

それは打ち合わせ無しの関係。

お互いがお互いの動きを見て、それを邪魔しないよう、攻撃が最
大に活かせるよう、意図せず行われた。

「これはこれは。

良い関係だ。だが、前言撤回かね？」

「うっせ、今はとにかくおまえをぶん殴りたいんだよ！」

「ま、いいさ。備えはあるのでね」

仮面は袖口から小さな丸い物を手に取ると、それをかざす。

「水よ」

「魔法っ!？」

イチが驚愕する。

仮面が取り出したのは、見た目はビー玉そのものの魔石。あらかじめ魔力をため込み、いざという時に使う魔法具。

その魔石が輝き、内包する魔力を供給する。

魔法が発動し、水の球が仮面の前に浮かんだ。

「
幾千に散り、刺し貫け。ニードルレイン
針よ、汝が敵を縫い止めよ。付加・バインド」

水の球が破裂。

詠唱通り、針の形で雨のようにイチやヴァイへ降り注いだ。それらの針に行動阻害効果が付加され、状態異常を引き起こさせる。

彼らは獣人。魔法の効果は抜群だろう。

「ぐっ
「！」

「使えるものは使う。当然だ。

そもそも、だれもが真正面から体当たりで来てくれると思うな。

敗者はなにも語れない。勝者こそが全てを手に入れる。

正々堂々1対1、なんてことは手段を選べるほどの強者になつてから言うのだな」

仮面は語る。

負ければ終わり。

ならば、まず第一に勝たなければ何も始まらない。

負けた者がなにを言おうと、ソレにはなんの意味も重みも存在しないのだから。

「ああ、それも強いってことなんだろうさ！
でも、最強は違う！最強はそんなじゃない！

最強は手段は選ばない！真正面から、ただそれだけを貫くんだ！」

イチは叫ぶ。

王は最強。

だから、別の意味で手段を選ばない。

あらゆる手段を用いて敵を倒すのではなく。

ただ一つの道を突き進んで乗り越える。

だからこそ最強だと。

「……ほう、それも正しいだろう。」

だが、未だ最強ならざるおまえたちでは大言壮語でしかない」

少しだけ、感心したような雰囲気を出したが、それはすぐに消える。

「しかし、ヴァイだけでなく、イチも頑固すぎるな……

最強に拘るのはヴァイだけではないか……。

前王の事もあるのだろうか……。

やはり、ここらで矯正しておいたほうがいいな」

その微かなつぶやきは風に乗ることなく、評された二人に耳には届かなかった。

ただ一人、聞こえていたのはアキラだけ。

一つも情報を逃さないよう、身体強化で目を耳を良くしていたことが功を奏した。

(なるほど……。そういうことか……)

今までの違和感が答えを得てぴったりとハマる。
なら、ここは介入せず黙って見ているだけにした。

解答と同時に、仮面に手を出すなどでもいうように睨まれたこと
もある。

ぶっちゃけ、そろそろ面倒になってきたわけでは決していない。

キザンですつきりしてモチベーションが一気に落ちたわけでもな
いのだ。決して。

「さて、君らが針のせいで動けない今、とどめを刺させてもらおう。
あまり長い時間拘束してられないのでね

まずは

「

仮面は滑らかに踏み込む。

「 ヴァイニフターツをやらせてもらおうか」

拳を放つ。

標的のヴァイはせめてとばかりに身を固くし、衝撃に備えた。

「せつ！」

狙いは 金的。

おそらく、急所である以外にも、そこが獣人化したヴァイのほぼ
唯一、剣狼の毛におおわれていない部分だからだろう。

服で隠れて見えはしないが、機能上毛におおわれることはないは

ずだから。

ヴァイの身体で攻撃の威力すべてがそのまま伝わる部分。
それが金的だった。

「……!?」

情け容赦のない攻撃に悶絶するヴァイ。

隣で見せられて鳥肌が立つほどすくみ上げるイチ。
爆笑するアキラ。

「終わりだ」

言葉とともに放たれた最後の一撃。

意識を刈り取られたヴァイは転移させられ、淡い残光を置いて退場する。

「さて、では　　次だ」

仮面はゆらりとイチに向き直る。

今度はイチの顔面めがけて拳が放たれた。

「　　もう魔法は解けてるんだよ！」

鮮やかなクロスカウンター！

だが、仮面は踏み込みをわざと浅くしていたのか、寸でのところでそれを避けた。

本当にギリギリで。

だからこそ、その素顔を隠す仮面の縁にカウンターがあたり、仮

面は遠くへ飛んでいく。

「おっと。今のはなかなか危なかった」

イチは目の前の敵の正体を、呆然と眺め、立ち尽くす。

「じーさん……」

仮面の下、現れた素顔はクマンⅡベールその人だった。

18：国民大会4日目「武」本選5「正体」（後書き）

積んでいたfate/extraをプレイ中。

キヤス狐かわいいよキヤス狐。

ただ、初回キヤス狐やって、二周目赤セイバーに行くとなんと楽々なことか！

スキルがなかったころのキヤス狐さんはすごく大変だったのに！な
んどもゲームオーバーになったのに！

セイバーさんレベル上げて物理で殴るだけでさっくさく進めるよ！

19：国民大会4日目「武」本選6「結実」

「じーさん……」

現れたのはクマン＝ベール。

ムジン王国の宰相。知力派閥のトップ。イチのお目付け役兼お叱り役。

慣れ親しんだ、イチにとっての祖父のような存在がそこにいた。

「なん、で。」

なんでじーさんがここにいるんだよ!？」

「不甲斐ないな、イチ。」

ヴァイもそうだが、こんなじじいにしてやられるとは。

何も考えず、ゴリ押しで行けると思うからそうなる。

頭を使わねばな」

クマンはイチを落胆の色が濃い目で見つめ、さりげなくヴァイの株を落とす。

そして、ちらりとアキラを一瞥。意味ありげな視線を寄こした。

それを不審に思ったアキラは念話を使う。

そこで、二、三言葉を交わし、アキラは口角を歪めた。

性悪め、と吐き捨て、一方的に念話を切る。

それきり、クマンはイチと言葉を交わし始めた。

「ああ、イチよ。わかっているさ。
おまえはまだまだ若く、未熟だと。
だが、王となったのだ。
もはや王子ではなく、この国　ムジンの王に、成ったのだ。
その自覚が足らんのではないか？」
それは代弁。

国民のだれもが、程度の差はあれど思っていること。

まだ若いイチが王となった事への不安。
最強の名を受け継ぐにはふさわしくないという憤り。

様々な形で国民の中に宿る負の感情だ。

もちろん、イチの将来を期待する者がいないわけではない。
むしろ、そっちの方が数が多いだろう。

しかし、イチに対する将来への期待を裏返せば、現在への不満が見え隠れすることになる。

「なあ、イチよ。なにか勘違いしていないか？
国内最強になれば、すぐに王と認められるなどと」

「なにが違うんだよ！
お飾りなんて言われるのもっ！ガキ扱いされるのもっ！
オレの力を認めてないからだろう！」

若くして王となった重責。
周囲の態度がそれを加速させる。

もつと、もつと。もつともつともつともつと。

強く、強く、強く強く強く強く。

足りない。まだ弱い。もつと、もつと

もつと強くならな

ければ！！

押し潰されそうになる期待。

なにより、それを向けられるイチはだれよりも感じ続けていた。

だが、それでも王になりたかった。

投げ出したくないからこそ、尊敬できる父おっを目指していたからこ

そ。

がむしゃらに力を求めた。戦いを求めた。強者と戦い勝利を求めた。

そうすれば、いつか

「最強であるだけでは足らんのだ。

王にはそれ相応の責任と品格が伴う」

だが、その想いは打ち砕かれる。

それは当たり前的事。

今までの王は皆、相応の年齢を重ねて身に着けていたモノがイチには足りない。

「歴代の王が戦いの中で身に着けた、相手の力を見抜く眼力も足りないから強者に挑み苦戦する。

歴代ならば避けた戦いに、本能を抑えきれず身を投げうつ。

儂ら知の者がどんな言葉を投げかけても、頭でっかちの言うこと！と無視して突っ込む。

それではすぐに死んでしまふ」

暗に、今の国を憂いている。
知力が蔑ろにされている現状を。

だが、イチが食いついたのはそこではなかった。

「避けた……？」

王が逃げたつていうのか！？」

「敢えて言おうか。

ムジンの『最強』は、『最も強き者』ではなく、『負けない者』
を指すべきだとな。

負けないため、戦いを避けるのも強者の選択だ」

激昂するイチに対し、クマンは冷ややかだ。

声を荒げることもなく、静かに、かみ砕くように教えを授ける。

「もし、この国の王が挑み、負ければ。どうなると思う？」

この国は他国に蹂躪され、獣人は奴隷に貶められるか、皆殺しだ」

「っ」

「王は負けない、などと青臭いことは言うなよ？

ありえないことではない。

王一人に対し、数万の敵が襲ってきたら？

大勢の敵が一斉に魔法を放つて来たら？

国内に罾を仕掛けられ、国民全員を人質に取られたら？

毒を盛られたら？病に侵されている時だったら？

そうなれば、王は死ぬぞ？いともたやすくあっけなく、な」

「それは……」

王は死ぬ。

寿命のある者なら当然のことだ。

だが、ムジン王という最強は 戦いに負けて死ぬことを許
されない。

「一般人ならば、逃げていい戦いも、負けていい戦いもあるだろう。
そうではない戦いがあるのと同様に。

この国の王にも、逃げていい戦いはあるさ。それで守れるなら逃
げるべきだ。

だが、負けていい戦いはない。

戦うからには勝たねばならない。

それこそが、『最強』の意味だ」

「逃げていい戦いつてなんだよ！」

「勝ち目のない戦いか、はたまた価値のない戦いか。
その時々だよ。」

そして、それを教えるのが儂ら知を預かる者。その時は言うさ。

戦えば全滅、逃げれば国民が助かる。ならば 逃げるべき
だ、とな」

「そんなの、じじいお得意の屁理屈だろ！」

逃げるが勝ち、なんてただの強がりだ！」

「ああ、そう言う輩もいるだろうさ。」

しかし、王は国民を守るために決断したのだ。

どんな謗りを受けようと、嘲られようと、その決断は尊く強いモ

ノだと儂は思うが？」

「　　」

言葉を詰まらせたイチに、クマンは語りかける。

「儂が言ったのは全て起こりうる可能性だ。

なあ、イチよ　　」

言葉を区切り、ゆっくりと続けた。

「　　隣国のペルヴィアが、ムジンに攻め込もうという動きがあつたのは知っているか？」

「え？」

クマンの言葉にイチだけでなく、こちらも驚かされる。

まさか、それはつまり……。

「今はない人間の国。この大地の主は人間と謳う国。

そこで、勇者という者を使ってまずはこの獣人の国ムジンを。次は魔族の国パンデモニウムを。人間以外の国を滅ぼそうという計画があつたことを知っているか？」

「そんな、ことが……。」

「幸い、その国は勇者が滅ぼしたそうだが、
わずかに半日足らずで、な。」

城と兵士宿舎、有力貴族の邸宅、すべてを跡形もなく壊されてい
たという。

その全てを、半日で行える桁違いの存在。
もしも、ソレと戦つことになっていれば
この国
が滅んでいただろうな」

「……………」

絶句している。

まあ、実際、クマンは正しい。
アキラにはやろうと思えばできることだ。

「だが、儂ら知の者がいくら敵わないと助言しようとして、お主らは聞
き届けんのだろうな。」

かろうじて聞いていても、そんなことはないとい蹴する。
そして、『最強』の意味をはき違えたお主は、玉砕して国を滅ぼ
すことになるのだ」

言葉を返せない。

イチにはその光景がはつきりと幻視できてしまったのだろう。

「半日で国を滅ぼせる勇者と戦い、国を滅ぼすのが正解か？
それとも、ここを離れ、別の地で生き延びるのが正解か？
王として正しい決断は、どちらだと思つ？」

「それは……………」

「そもそも、わかっているだろう？」

獣人という種である以上、儂らは魔法に弱い。

その王が最強なのは国内の話で、国外においては、獣人の弱点魔法を使われれば負けることもあるのだと。様々な対策が編み出されたが、それは完ぺきではなく万が一があるということを。」

「じゃあ」

言葉に打ちのめされ、俯いたイチは。

「じゃあ、国内だけの最強に何の意味があるっていうんだ！」

井戸の中でしか最強を誇れない王になにが守れるっていうんだ！」

「！」

叫ぶ。

今までなろうと努力し、なりたいと夢を抱き、なると決意していた目標。

それが、色あせてしまう現実を聞かされたイチは。

なにを信じればいいのかと、今まではなんだったのかと。

色を奪った相手に叫ぶ。

「それは、今更教えねばならないことか？」

「え……？」

クマンのそれは、とても小さな声なのに。すうつと響き渡った。

「今は亡き前王の背中を見続けていたのはだれだ？」

前王が守ってきたモノを受け継いだのはだれだ？」

「あ……」

「答えるツ！イチ＝テ＝ムジン！」

それは。

そんなもの、決まっているじゃないか。

「……………オレ、だ……………」

「そうだ。

王の意味？宰相である儂には真の意味など到底つかめん。
守れるか？守れるよう全力を尽くすしかない。
王とは何たるかを示すのは儂ではない。王だ。
自分で自分の答えを導き出せ、イチ」

「オレの、答え……………」

「今すぐ答えるとは言わない。

だが、探し続けよ。

模索し続けよ。

お前の成る最強を。お前の成る王を。

儂はそれを傍で見させてもらおう」

「オレの、目指す王……………」

そんなの……………まだわかんねえや。

どうすればわかんのか。それさえもわかんねえ。

でも、たった一つだけ、分かった」

イチは、自らの拳に目をやり、ぐっと握りしめる。
目に見えない、なにかを掴むように。

「今のままじゃ、だめだつて。

上辺の強さだけしかない、空っぽじゃ、だめなんだつて。
だからっ
「！」

握りしめた拳はそのままに。

「今は、勝つ！」

オレは負けていい存在じゃない！

ここは逃げていい戦場じゃない！

じーさんを、アキラを、倒してオレが優勝してみせる！！」

「そうか。では、やり合おう」

クマンは楽しげに笑う。

「おう！」

イチは意気揚々と構える。

「じゃ、老兵は去れや」

「っ！？」

そして、アキラがクマンを上から蹴り潰す。

ゴッ！！という音とともに地面にひびが入り、クマンが沈んだ。

「オレを忘れて、のんきにお話か？」

一応、気を利かせて最後まで待ってたんだが、もういいよな？
やり合おうっていったばっかだし」

クマンの仮面が取れたとき、念話で行った意思疎通。

その内容が、これだった。

イチとの話を邪魔しないでくれ。

そして

悪役になってくれ、と。

映像を見ている民衆の敵に。

人間という、分かりやすい獣人の敵に。

王を目指すイチを阻む悪役。

わざわざペルヴィアの話をしたのも、説教のため以外に、人間に
敵意を向けやすくするためというのもだろう。

そして、悪役を倒した者はヒーローとなる。

舞台は年に一度の国民大会。

観客はムジンの国民全員。

残る参加者は二人。

片や獣人、片や人間。
片や英雄、片や悪役。

これは国民大会という名のお祭り騒ぎ。

参加者以外にとっては、厳かな雰囲気の中行われる純粋な試合ではなく、大勢の観客を交えたエンターテイメントの面を持っている。

そんな中で、観客たちが応援するのは 自らの好みの選手。

残った二人の内、そう、イチ＝チームジンしか選択肢はない。

今、イチに国中の好意が寄せられることになる。

依頼の目的は三つ。

噂の払しょく。

イチの意識改革。

そして、イチが王の器だと国民に示し、支持率を上げる。

すべては、そのために。

(まったく、面倒なことをさせられる……。

顔変えといてよかったぜ……)

ま、あとは、ある程度の苦戦を演じつつ上手に負ければ終わり。

顔はクールに、内心ノリノリで、アキラは手の平を上に向けてイチに突出し、指をクイクイツと折り曲げる。

来い、というあからさまな挑発。

「さ、かかってきな。王さま？」

「ま、待て……。」

わ、儂はただでは負けんぞ……！」

声は下から。

そこでは、クマンがうつぶせ状態から力なく転がり、天を仰ぐ。

そして懐に腕をいれ、取り出したのは 魔石。

それがあれば、イチやヴァイに放ったように、魔石から魔力を供給することで獣人にも魔法が使えるようになる。

「ここに乱入する前に、あちこちに魔石を仕掛けておいた。

これは魔法の起動用だ……！」

くらえっ！」

魔石が強く輝きだし、それは一種の閃光弾と化す。

アキラはとっさに障壁を展開した。

パキーン！

澄み渡るような音が響く。

「この薄く困う感じ……。結界、魔法……？」

そして、その結界の効果を推測しようとして、気づく。

「な……？」

身体が重い。

一瞬、特定人物の重力を増すタイプの結界かと思っただが、違う。

目の前に張っていたはずの障壁が消えている。

これは、重力増加のような、生易しいモノじゃない！！

「クマン＝ベルツ！おまえっ！？」

叫びながら、念話をつなぐ。

（なんのつもりだ！）

（君が知りたがっていたものだよ。

これが、獣王国家に伝わる秘伝。

対人間用の結界魔法。

魔法を弱めるアンチマジックフィールドだ。

残念ながら、完全に魔法が使えなくなるわけではなく、威力が弱まるだけだがね）

（てめっなんてことしやがる！）

（余裕を持って負けられては困るのだよ。

この国には、そういうヤラセには鼻が利く者が多すぎるのでね。

真に迫ってもらおうよ）

「やってくれたな……」。

何をされたのかは知らないが、魔法が上手く使えない。

目くらましの間に、封じるツボにでも針を打ちこんだか……？」「

一応、秘伝。中継を見ている連中にバレないように言葉濁し、スリードを誘うことにする。

クマンにしてやられたのはムカつくが、あとで教えてもらうのだ。他の奴らが知っている技とするより、隠しもてる切り札の秘伝にしておいた方が、アキラにとっても都合がいい。

「儂にできるのはここまで。

イチ……勝て」

そう言い残し、クマンは転移させられた。

(ほんと、やってくれたよ……)。

王の答えはイチに丸投げ。戦闘はオレに丸投げ。いいご身分だなクマン＝ベールさんよお)

小声でぼやき、自分の状態を確認する。

身体強化のレベルが落ちている。

ついさっき身体が重く感じたのは、外的要因によって、急激かつ強制的にレベルを落とされたため。

10だった強化レベルが、今では5くらいになっている。

アキラでそうなのだ。普通の使い手が相手なら10が2まで落ちるほどの強力な結界だ。

「くっそ、ほんと、やってくれる……」

ああ、なんてドラマチックな展開だ。

仲間が自らの死を礎に、勝ちへの布石を打つ。

クマンは死んでないのに。ただ退場しただけなのに。
そんな風に思えてしまう。

その証拠に。

目の前で。

イチが、燃えている。

「jeeさん。オレ、やるよ。」

アキラの行いは、jeeさんもやったこと。

不意打ちだ、なんて騒いでもしょうがない」

それはアキラに向けたものではなく。

だれに当てたものでもない独白。

「でも、オレはまっすぐに勝つ。」

逃げちゃいけない戦いで。勝つしかない戦いで。

勝つてなお、誇れる戦いを見せてる！」

うわぁ、盛り上がってるなぁ……。

ま、こうなったらしょうがない。

こっちもこっちで悪役として踊りますか。

「ふん。ごたくはいい。」

お前も、あのじじいみたく這いつくばって消えてゆけ」

「はっ、言ってる。」

行くぞー！」

「来いッ！」

その結果は言つまでもなく。

敢えて言つのなら。

無様にやられる悪役の演技はなかなかのモノだったと自負している。

19・国民大会4日目「武」本選6「結実」(後書き)

都合上、イチVSアキラニ戦目はカット。

どうせ負けるわけですし、書く冗長になるんですよね……。

20：国民大会・終幕後

長かった国民大会もやっと終わり。

今、閉会のあいさつが終わり国民がどんちゃん騒ぎの中だ。
本来なら、イチも「武」の優勝者として大勢に囲まれ、祝われて
いるはずなのだが。

「おい、なんでいるんだよイチ」

「んな硬いこというなって。
なぐり合った仲間じゃなか」

「なぐり合ったというのに、仲良くできると思っているのかおまえ
は。」

「どうなってんだ脳筋思考回路」

なれなれしくも肩を叩いてくるイチの頭はいったいどうなってい
るのだろうか。

つい数時間前には戦っていた間柄なのに。

「いやな、戦うつてのにはそれぞれ理由があるって思ってな。
殴って分かり合えることもある。分かり合えないこともある。
でも、できるだけ分かり合いたいと思うんだよ」

「ふーん。すげえ成長したっぽいな」

「おうよー！」

これからももっと伸びんぜー！じいさんにもあの技習うんだー！」

心底嬉しそうに、そんなことを言う。

あんなことがあったのだ。

オレやじいさんはイチとの関係がちょっと険悪になるかと思われたがそんなことはなく。

戦いが終わってみれば実にさばさばとじていた。

ちなみに、ヴァイはこの一件で自らの支持者を大きく減らすこととなった。

力至上主義を謳っていたのだ。負けたのだから、それは当たり前のことと言える。

しかも、ヴァイは今まで蔑んでいた知力派閥のクマンじいさんにキザンは最後で最大の敵役となったアキラに。

そりゃあ、失脚するってものだ。

あと、この二人は次世代において軍部で上位に返り咲く可能性が高いので、クマンのじいさんがしっかりと矯正させるらしい。

ま、将来の反逆の芽を潰す、っていう魂胆もあるんだろうけど。
ご冥福を、なむなむってな。

「そんで、アキラはこれからどうすんだ？」

「この国に来たのは旅の途中だったんだろ？」

「だな。この国での用事もあらかた終わったし、そろそろ次へ行くな」

クマンのじいさんからは報酬としてしっかりと秘伝を習い、魔法
減退結果 アンチマジックフィールドを使えるようになった。

ただこれはあくまで獣人用のもので、人間が使うにはいろいろと改良があると判明。

なぜかというと、結界の中ではすべての魔法が強制的に弱らせられる。

つまり、術者も例外ではないということだ。

結界の中にいる自分の魔力まで弱くなるのだから、意味がない。獣人ならばそれでもよかったのだらうけど。

要改良、ということだ。

「そっか。出ていくのか……。
残念だ」

「おいおい、おまえがそんな」

「もう戦えなくなるなんてな」

「……ああ、そんなヤツだったよおまえは」

「ま、またいつかやろうぜ！

その時は圧勝してやるからな！」

「言ってる。返り討ちにしてやるよ」

「はっ、それは楽しみだ」

軽口を叩きながら笑いあい、お互い拳をゴツンと突合せる。

そのまま、振り返ることなくオレ達は別れた。

こつこつ関係も、悪くない。

|||||

大会の熱気も下り坂。ようやくすべてが終わり、アキラ一行は宿へと帰るところだ。

宿へ帰ったら出国の準備。

これ以上、この国に長居してもいいことはない。

国民大会も終わった。

変装していたとはいえ、敵（役）だったのだ。

イチと親しい人間、互角に戦える人間。

いつ勝手な連想をされないとも限らない。

クマンのじいさんにも、ちゃっかり釘を刺されたしな。

「さて。時に儂は思うのだが。

だれかが事件の全貌に気づく前に、出ていった方が望ましいのとおと。

あくまでやんわりと、だが。

ああ、ヴァイの記憶はちよつと弄っておいたので安心だ。

今大会の中で行われた全貌は、もはやじいさんとオレだけしか知らない。

「はあ、やっと終わった……」

ん〜と背伸び。ようやく肩の荷が下りた気分だ。

「……………」

「まったく、めんどくさかった……」。

じーさんの依頼に、脳筋の矯正、イチの敵役。いやー、めんどくさかったあー」

「……………」

「でも、オレとしてはなかなか楽しかったね。

悪役ともうノリノリだったし。

やられた後のセリフどうしようかとか本当に悩んだから。

オレは四天王で最弱に過ぎない、とか、第二第三のオレが現れるだろう、とかさー」

さすがに狙いすぎだと思ってやめたけど」

「……………」

「……………」

そう、さっきからすごくいたたまれない空気。

冷や汗がとまらない。

大会からの帰り道。観客やってたリースとマナと合流したのだが

……………。

隣を歩きながら、ず〜んず〜ん〜！とでも聞こえてきそうな威圧感を出す銀髪狼のリースさんである。頭上の狼耳がピンと立って、

しっぽの毛もちょっと逆立ち気味だ。

そのあまりの威圧っぷりに、道が勝手に開いていく。
大会からの帰り道でにぎわっているのに、みなさんきれいに端を歩いてらっしゃる。

ちよつとしたモーゼだよ、これ。

「……………あの、リース　　さん？」

「なんじゃ」

「……………な、なにかお怒りで？」

「いや、別にな。」

私の代わりに、あのいけすかん犬コロをアキラがぶちのめしてくれるかと思っていたのに、じじいに横取りされるし。サンクとかいう娘も犬コロの取り巻き？に横取りされるしい。アキラは画面にめつたに映らない上、映っても小さいし？　犬コロの取り巻き？を倒したらしいが、その場面はなぜか機器の不調とかで我は見れんかったしい？　サンクとかいう娘となにやらしい感じのようだったしい！！？　なぜか小僧王に無様に負けるしいっ！！　アキラに負けた我があの小僧王よりも格下みたいではないか！！」

「長い…………。オレじゃなくて、大会側の文句が入ってるし」

「なんじゃ！？」

「はいっ！なんでもございません！」

「ないのか！！我に対して言いたい事とか！言わねばならん事とか

「!!」

「いや、さっきも言ったけどさ？」

あれはクマンジーさんの依頼のうちで、元から優勝はしない方針だっただろ？

ヴァイはあれだ。現場でジーさんに止められたというか、キザンをぶちのめしてすっきりしてたというか？」

「……………そのキザンとやらをどう倒したのか分からなかったあ!!」

やばい、ちょっと泣きが入ってきている。

「ちょっと映像見られちゃまずいかなって……………言い訳ですね、はい」

「アキラの勇姿が見たかったのじゃ!!」

娘っこは格下すぎてすぐ終わり!取り巻き戦は見れない!犬コロは無視!小僧には苦戦の未負け!!

我はなんのために何時間もぎゅうぎゅう詰めの中映像を見に行っただのじゃあ—————!!」

明後日の方向へ叫ぶリリース。

そのコミカルな姿が可愛らしくて笑える。

「ぶっ、くくっ……………」

「なにを笑っているのじゃ!」

「な、なんでもないって」

「どもった！なんでもないわけないじゃろうが！」

「なんでもないわけなくない」

「なんでもないわけなくない！」

「なんでもないわけなくないかもしれなくもない」

「なんでも　　ううがあああああ！！」

「やば、ちょっとおちよくりすぎた。」

「もういいっ！帰る！」

リースはぷいっつと顔をそむけてさっさと宿へ帰って行ってしまった。

「あらら、すねちゃった……」

後にはオレとマナが残される。

「さて、マナ」

腰を下ろして、小さな彼女と目線を合わせる。

向けられる瞳は疑問が色濃く、小さく首を傾げていた。

それを見て、少しだけ安心する。

最初の頃は、そんな些細な仕草ですら表に出てこなかったくらいなのだから。

「じーさんから教えてもらったんだけどな。」

マナの種族は国の外に一族だけの里を作ってるらしい。なんでも、種族特有の力のせいでいろいろあったんだと」

それは教えてもらえなかったんだけどな、と苦笑い。

「……………」

「なにが言いたいって言うんだな。」

マナ。そこへ行くか？

じーさんが言うにはある程度の交流はあるらしいから、頼めば連れて行ってもらえるらしい。

ま、そうなるとオレ達とはムジンでお別れってことになるけど」

正確な場所は隠れ里だけあって秘密だったが、大まかな位置としてペルヴィアの近くにあるそうだ。

今、あそこらへんに近づきたくない。帝国あたりが出張って勇者搜索に精を出している、なんて話もある。

簡単にバレルとは思えないが、自ら火種になって飛び込むつもりはさらさらない。

「……………」

マナはじーっとこちらを見つめている。

「せめて、首を縦か横に振ってくれとありがたいんだが……………」

「……………」

ふるふる、と首を横に振る。

「里に行けば、家族……はわからないけど、仲間がいるぞ？
それでも行かないのか？」

ついでに、オレ達と一緒にだと厄介事がたくさんだぞ？」

「……………いつしょ」

「マナ…………」

それはマナのはじめての言葉。

鈴のなるように澄んだ、幼い声で発せられたのは、少女の小さな
お願い。

「そっか…………」。

ま、そうしたいってんならいいさ。

でも、いつか、さ。その里に行こうか？」

こくり、と首肯を一つ。

今度は声が出てこなくて少しがっかりした気分だが、長い目でみ
ることにする。

「おおーい！

貴様らあ！追いかけてこんかあ！…」

一人でさつさと行ってしまったリースが遠くで叫んでいる。

振り返ったらだれもついてきておらず、遙か後ろで立ち止まっ
ているのだからおかんむりみたいだ。

声がちよつと震えている。まさか、心細かったのか？

「じゃ、行くうか」

「……………うん」

聞こえるか聞こえないか、そんな微かな一言。

それが嬉しくて、さし出された手のひらを握って歩き出す。

「おーそーいーぞー！！」

「ああもつつ、子どもか！！」

「あはっ」

その小さな声を生んだ、マナの表情。

それを見逃したのは、一生の不覚だったかもしれない。

20：国民大会・終幕後（後書き）

リースのキャラがどんどん崩れていつている気がする……。
狼時代のカッコいい彼女はどこへ……。

いや、まあこっちの方が好きなんですけどね。

章間話：魔巧帝国マナトギア（前書き）

PV500万突破！！

久しぶりにアクセス解析を見てみるとそんな大変な事態になっているとは思ってもよらず。

ここはなんか閑話というかEXストーリーでも書いた方がいいのかなあ……。

スフィアがいたところとかリースとかマナとかイチとかヴァイ（笑）とか。

こんなの書いてほしい！というのがあればお教えください。

12月4日までに届いた意見の中から独断と偏見と書きやすさで選びたいと思います。

章間話：魔巧帝国マナトギア

通称『帝国』と呼ばれる国がある。

魔巧帝国・マナトギア。

魔法と機械、二つの技術の融合を目指す国。

国内では主に機械系の技術が目立った政策として推奨されているが、その裏では様々な国に伝わる固有の魔法アンチマジックファイールド。例えば、ペルヴィアにおける勇者召喚魔法陣、ムジンの魔法減退結果などだを集める諜報じみた活動なども行っている。

資源を求め、他国の侵略にも積極的であり、旧ペルヴィアを占領しようと動いたことは記憶に新しい。

そんなものだから、いろいろなときな臭い噂が絶えない国であり、その中には人体実験などを行い、そのための被検体を郊外の街や村から誘拐している、なんてものもある。

しかし、その魔法と機械の技術統合を目指す国だが、現状、魔法と機械の融合を完全に果たすことは未だ遙か遠くの夢であり、魔法ばかりが発達し機械は伸び悩んでいるところである。

だが、他国と比べ機械・科学技術はなかなか高く、すでに簡易式の銃を実用化させている。

まあ、いまだ先込め式単発銃（たとえば火縄銃のような）の段階であり、アキラが創ったような自動式拳銃はまだまだ手の届かない先にある。

それには魔法という強力な武器が発達し過ぎていて以上、銃はあまり必要とされなかったという要因も少なからず関係している。また、自動式の銃を作ろうとした場合、弾などが大量生産できなければただの棒にしかない。精密部品は工場などではなく一流の魔法使いが錬金することで作られるため、大量生産が叶わないのである。

だが、帝国の技術力がその程度でとどまっているかと言われれば、否だ。

なにも兵器だけを研究開発しているわけではない。銃などよりも、もっと望まれた技術が存在し、そちらに力を注いできたからとも言える。

それは 義肢である。

この世界にはモンスターが数多く生息している。それと戦えば、もちろん生半可な傷で済まないことだってある。四肢の欠損なんてザラなのだ。

千切れた四肢をくつつける魔法使いなど、それこそ片手ほどが世界に散らばっているのみ。

さらに、その数多くは魔族の国パンデモニウムの者ばかりという始末だ。

そこで、この機械の国は義肢が発達しているのだ。

その性能もピンキリ。

高い物は中から外まで、精密機械で作られたフルオーダーメイドになってしまいが、安い物はある程度の型を作るだけ。

型だけではハリボテと変わらないので、魔石を埋め込んで、義肢に疑似神経を通して動かせるようにする。

魔石は疑似神経を伝って本体から魔力を吸収し、付けている間、その魔力を使用・蓄えていく。

しかし、これにはデメリットが存在する。

獣人のような、魔力が極端に少ない者には使えない。だれか別の人物に魔力を供給してもらえばよいかというと、そうでもないからだ。魔力には個々人の波長があり、適合しなければならぬ。

この義肢。

望まれた技術ではある物の、いかんせん技術レベルは低く、その性能も大したものではなかった。

そう、なかった。過去形なのだ。

今の帝国製義肢は、最高級の品で人間の数倍の力を出すことができる。

埋め込んだ魔石と機械の力を相乗させることにより、モンスターを粉碎させる人外の力を得られる。

中には、自らのサイボーグ化を成そうとする猛者もいるのだとか。

この義肢の飛躍的　いや、爆発的な急成長。

義肢という特定分野のみがありえないほどの突出を見せている。

それはひとえに、一人の狂った科学者の存在が大きい。

マッドサイエンティスト

サマツトII エインティスド。

彼の興味は人体に集約される。

どうすれば人体をより強力にできるのか。

どうすれば人体をより俊敏にできるのか。

どうすれば人体をより頑丈にできるのか。

そのためならば手段は問わない。

時に機械を。

時に科学を。

時に医学を。

時に薬学を。

時に魔法を。

ありとあらゆるものを駆使し、人体の究極を追求する。

その一環が、義肢だ。

彼が作った義肢においては、ある程度の魔法との融合が見られる。

精密部品を使ってあるが、その設計さえも彼が行っている。

自ら見本を作り、他の錬金担当者に確かなイメージを持ってもらうなどその熱心さは義肢そのものからもうかがえる。

そして、そんな彼の現在の興味・研究対象は。

「く、くふふ、気になるなあ……。」

勇者クン。今はどこにいるのかなあ？」

そう、勇者。

ペルヴィア城を跡形もなく消した未知の魔法。

警備隊が持っていた未知の物質で作られた柔かい剣。

万に及ぶ兵たちを一度に葬り去った未知の魔法。

未知。未知。未知。未知！！

きつと いや、間違いなく勇者がいれば、もっと人という存在を突きつめられる。

新たな魔法か。新たな技術か。

いずれにせよ、なんらかの発見がそこにはある。

「っああ。会いたいなあ、勇者くん。」

僕のところに来てくれれば、じゅっくり解剖かわいがってしてあげるのにねえ……」

一人だけの研究室で、彼はその細く節ばった身体を抱きしめるながら、うっとり漏らす。

「エインティスド博士！」

そこへ、どたどたと、慌ただしく若い男が入ってきた。

「なんだい？いい気分でトリップしていたのに……。邪魔された僕は、ちょっつと機嫌が悪くなったよ？大した用じゃなければ、さくつとバラすくらいには、ね」

「ひっ！？」

あの、いえ、わたしは頼まれていた物をお届けにっ！」

ギリリ、と怪しく輝く瞳。そして、舌なめずりで伸ばされた舌がねっつりと煌めく。

それを見て、若い男は本能的な恐怖を感じ、すぐさま用件を言うて帰ろうと心に決めた。

その男がさし出したのは。

「ん？ おおっ！？」

これ、これこれこれだよキミィ！！
いいーねえ。ご褒美に解剖と改造してあげようか？
今ならロマン溢れるドリルがついちゃうよ？」

一冊の、汚らしい手帳。

「え、遠慮しておきます。

で、では、お渡ししましたよ！」

解剖されてはかなわない、と男は駆け足で研究室を後にする。

男の退出など気にも留めず、マッドサイエンティスト 狂った研究者サマツトは手帳を開き

ながら小躍りする。

その手帳は、他国へもぐりこんだ諜報員の手記。きちんとした報告書とは違い、諜報員の推測、雑多なメモなど他国で感じたあらゆる情報が書き記されている。

見る者が見れば、なまじ整理され、取捨選択された報告書よりも価値のある手帳。

サマツトは手帳をパラパラとめくっていき、あるページでピタリと止める。

「くふ、くつ、くはははは！」

ようやく、手に入れたよ！

勇者召喚の魔法陣！！」

開かれたページには、書きなぐられた魔法陣。

今はもう失われた、ペルヴィアの固有魔法。

固有魔法ではあるものの、勇者を召喚できない時期はその警備は甘く、部屋の番もサボり居眠りの体たらく。

アキラが召喚されるよりも前、ペルヴィアに潜入していた帝国諜報員が忍び込み、それを書き写していた。

しかし、その諜報員は城に潜入していたためアキラの魔法により死亡。

結果、報告書はあげられず、宿に残された手帳数冊だけが帝国に届けられた。

その数冊の内、ある一冊。

数年前、勇者召喚ができなかった空白期に得た魔法陣の写し。

「しかし、これから魔法陣を復元、そして改良は骨が折れる作業になりそうだね」

時間がなかったのか、焦っていたのか。

その筆記は粗く、細かな部分は書かれず大まかな部分だけが記されている。

それを補完し、ペルヴィアの二の舞にならないよう改良を加えなければ。

「まずは復元してから……ペルヴィア王家以外の魔力でも使えるように……召喚主に逆らえないように……それから、それから……」。

くはは、なんとも厄介なことだ。

しかし……、壁が高ければ高いほど！燃えるが科学者としての魂だよ！！」

ガリガリと床に魔法陣を構成する式を考えては消し、考えては消し。

「三ヶ月、いや！一ヶ月でやってみせますよお！！」

そして、マッドサイエンティスト狂った科学者サマツトは取りかかる。

新たな勇者を召喚するために。

自らの研究欲、好奇心を満たすために。

これはペルヴィア崩壊から10日後。

アキラがムジンで過ごしている頃、事態は急速に変化して
いった。

章間話：魔巧帝国マナトギア（後書き）

> 未知の物質で作られた柔かい剣

ここでまさかのスポンジ剣が再登場。

反撃の可能性をゼロにするためが、マッドサイエンティストの目に止まってしまったよ

作者自身も書いている途中で思ったのですが、スポンジって中々に作るの難しいのでは？

wikipedia先生によると、天然物と人工物があるようだ。

アキラくんのイメージで創られたスポンジはもちろん身近な人工物。ポリウレタンとか合成樹脂とかまだあるわけないっすよね。

マッドの口調修正。

1：目指すは魔法の国（前書き）

というわけで三章です。

あと、前話の博士の口調を修正しました。

シリアスブレイカーにもほどがあるということ。

耳にすればイラつく感じを出したかったんですけど、ブレイクされちゃたまりません。

某教授に似ているという指摘もありましたし、気を遣いすぎでしよ
うが変えておいて悪いことはないと思いましたが。

1：目指すは魔法の国

「さて、もうそろそろ魔族の国パンデモニウムだ」

ムジンで買った地図を眺めつつ、アキラは旅の仲間にかける。

ムジンを出国してから早数日。

創った馬車でのんびり旅を進め、目指すはムジンを挟んでペルヴィアの反対にあたる国、パンデモニウムである。

「ふむ。パンデモニウムか……」。

人間は我やマナをじろじろと見てくるからな。

その点、人間の少ないムジンやパンデモニウムはいいところではないかと思うぞ」

「……うん」

リースが尊大に言い、マナは小さく賛成する。

「しかし、パンデモニウムはどういうところなのだ？」

我は魔族の国と言うことしか知らんのだが」

「その辺はぬかりないぜ。」

ムジンには結構長い間いたからな、その間に情報収集はばっちりだ」

魔族王国、パンデモニウム。

獣王国家ムジンが“腕力”の国ならば、パンデモニウムは“魔法

”の国と言える。

その国に暮らしているのは大半が魔族。5分の1ほどが人間や獣人たちだ。

魔族の多い国柄のため、国自体が魔力の多い土地に建てられている。

豊富な魔力で満ちた土地は自然が豊かである反面、そこに生息する動植物は他では見ない進化を遂げている。さらに、パンデモニウム周辺個体と他地域に生息する個体では、同じ種族でもその戦闘力に2倍ほどの個体差が生じるというのだ。

そのため、城壁はかなり丈夫に造られているし、軍も強い。

また、魔族が多く住んでいるからだろう。魔法というものに対しての造詣が深い。

こと魔法、というものに関する環境では世界一を誇る。

国内でたくさんさんの学校、研究施設があり、さらには魔法書専用の図書館まであるほどだ。

その中でも有名なのが、「パンデモニウム王立魔法学院」。

そこへは多くの魔法使いたちが日々精進している。

学生は国民だけを対象としているのではなく、一定の審査を通れば他国からの留學も許可される。

学院では学生が自らの力を研鑽させるだけでなく、高名な魔法使いたちが新魔法の研究や失われた魔法の解明・復元などを行っており、その雰囲気は未熟なものが学ぶ小・中・高校のようなものではなく、いわゆる大学兼研究機関に近い。

もちろん、附属では未熟な者たちが学ぶ教育機関も存在する。

といった情報をリースとマナに聞かせたところ。

「ふむ。それで、アキラはその魔法学院とやらに行ってみたいわけだな？」

「まあな。パンデモニウムにしかないところだし、興味もある」

「人間が間違っただけを言わぬよう見に行くのもよいか……」。

ペルヴィアではひどいモノじゃったしの」

そういえば、書庫にあった本を見てずいぶん憤慨してたっけか。

「……楽しみ」

「おおーっ！マナ！そーかそーか楽しみか！」

わしゃわしゃーっとマナの頭を撫でるリース。

ついこの間から、マナが短いながらもしゃべるようになった。

それはいいのだが、それを受けたリースの過保護具合がかなりレベルアップしている。

気持ちわかるんだけどね。保護欲を刺激されるといっか……。

しかし、そのあまりの急変ぶりにおそろおそろ尋ねてみると。

「アキラが我を放って遊んでいるからな。その間にマナと仲良くなったのじゃ」

とのこと。

拗ね拗ねモードのリースの頭を撫でてご機嫌を取ると赤くなつてそつぽを向かれた。もう拗ねモードは終わつたらしいが、過保護っぷりはそのままだ。

見た目は母娘……いや、リースの身体的に姉妹みたい。

「しかし、魔族の国、魔法の国が……。うん、これこそファンタジー！な感じで今までにないくらいわくわくするな」

魔法。

パンデモニウムには見たこともない魔法があるかもしれない。

魔法を創造すれば容易く同じことはできる。

だが、それはそれ。

リースに指摘されたことがあるが、見る者が見れば術式の違いが分かるらしい。

通常での魔法行使と創造した魔法の行使。

結果は同じでも過程が微妙に異なるらしいのだ。

特に、魔族の中には魔法の術式を可視化できる者がいるらしいのでマズイことになりかねない。

新魔法を編み出した、という言い訳すればすむかもしれないが、せいぜい一回が限度。

自分の若さでいくつもの新魔法を編み出すなど異質そのものだ。

その異質さから、勇者と感づかれるかもしれない。

たとえ勇者がペルヴィアのトップシークレットで、どんな能力を持つかは外に知られていないとしても、だ。

ただでさえ、ペルヴィア崩壊の時に派手な新魔法を使ってしまっ

ただだから。

それではまずい。

きちんと魔法の国で学ぶべきだ。

この世界にある魔法、ない魔法をしつかりと区別すること。手段は多ければ多いに越したことはないし、バレる危険性もできるだけ排除しておきたい。

ただ単に、おもしろい魔法がないかな？という気持ちも多分にある。

「っと、そういえばリース。」

魔法の国に行つて大丈夫なのかな？」

「大丈夫つて、なにがじゃ？」

「いやさ、ムジンが力の国だったたる？」

で、入国にも一悶着あつたわけ。

中に入つても弱いくせに、みたいな目で見られるしさ。

力が魔法に置き換わつて面倒なことに、とか？」

「あー、まあ、ないじゃろ。」

魔法の国、といつても魔法が上手く使えるから偉いのではなく、

魔法の研究が盛んな国という意味じゃろつし」

「だよなー。そっかそっか」

「それに、我とアキラの魔法ならば並大抵の者には勝てるだろつて」

と、そこで疑問がわいた。

「なあ、リースは獣人なんだよな？」

なんで魔法がバカスカ撃てるんだ？

オレとやったときなんてシャレにならないもんもあつただろ？」

今まで、あつさりとスルーしていたこと。

あのころは獣人について良く知らなかったから不思議に思わなかったが、ムジンを訪れた今では違和感を覚えた。

「ふん。フェンリルの別名を知らんのか？」

氷狼。魔狼とも言われるのだぞ？

確かに獣人でもあるが、魔を操る術を持つ　　俗にいう魔獣
というやつだ。

なんでも、元々獣人も魔法を使えたとか、大昔の祖先が魔族と交
わったとか、いろいろ説はあるが詳しくはわかっておらん」

実際、どうだったかは知らんがな、とリースはどうでもよさそう
に付け足した。

ちなみに、イチ　王牙虎の大地を操るあれもそう。魔の血が薄
まり、地属性に特化した結果ではないか、と言われているようだ。

「へー。ま、リースは大丈夫か。」

もしも突っかかってくるバカがいたらマナを最優先で守るってこ
とで」

「マナは獣人じゃからな。それに……栄養が足りていなかったのか、
まだ身体が出来上がっておらん。」

今の魔法抵抗力だと初級が直撃するだけで危ないかもしれん」

「いちおう、今のうちに加護でもかけとこうか。」

「聖なる加護」

これは中級の補助魔法だが、結構使える魔法だ。

攻撃力などは一切上がらないが、防御、魔法防御、幸運などがグンと上がる。

この幸運上昇はおそらく自分しか知らない。

ペルヴィアで魔法を習っていた時、いろいろと試行錯誤したのだ。

サーチ を使って自らのステータスを数値化。

攻撃魔法の攻撃力最大値、補助魔法の上昇率を調べていた。

この世界の魔法は魔力を込めれば込めただけ効果もあがるが、それはある一定量まで。

それを越えると、どれだけ大量の魔力を術式に注ぎ込んでも効果は横ばいになる。

「そういえば、マナはいつたいなんの獣人なのだ？」

クマンとかいうのに聞いたのであろう？」

「なんつーか、イルカみたいな っていつても分からないか。」

仲間同士である程度の意思疎通が取れるテレパシーもどきが使えららしい」

といつても、交信可能な範囲は限定されるのでどこまででも届くわけじゃない。

「ほお。そんな種族なのか……。」

しかし、我とは交信できんのか……」

しゅん、となつて狼耳を垂らすリース。

「年齢を重ねれば、才能次第で一方向的に相手に送つたり、勝手に読み取つたりできるようになるらしいんだがな。さすがに今は無理だろ」

仲間とのテレパシー。

それはマナがずっとしゃべらなかつた理由の一つかもしれない。

しゃべるようになった今となつてはどうでもいいことだが。

「さ、そろそろ外壁が見えてくるはずだ」

「確かに、近いのだろうな。

それにしても、この地はすごいな。

他とは段違いに魔力が満ち満ちている」

「確かに、なんていうか……空気がうまい？」

「空気は食えんぞ？」

「……アキラ、変」

くっ。なんだこの疎外感！

そもそも、この二人は汚れた空気なんてものをほとんど吸つたことがないんだろう。

工場や排気ガスなんてものはない世界だ。

荒野などはあるものの有害物質が多いわけではないので、言ってしまうと、どこでだって空気が上手い。

ちょっとしたカルチャーギャップを感じてへこむ。

「ま、いいから行くぞ！」

魔法の国だ！」

そう、魔法の国。

魔法の研究・復元・開発が盛んな国。

そこでなら。

あるかもしれない。

「向こうの世界、か……」

召喚魔法と対をなす魔法。

送還魔法が。

2：召喚・送還魔法（前書き）

第1章の最後に500万PV記念話としてリースの話を書かせています。

どこに載せるか迷いましたが、アキラくんであつ前の話なので。

2：召喚・送還魔法

そこはおとぎの国。

幻想で満たされた、魔法の国。

人々は空を飛び、物を浮かせ、なにもない場所から召喚獣を呼び出しそれを駆る。

「そんな景色を想像していた時期が、オレにもありました」

「いきなりなんなのかは知らんが、言いたいことはなんとなくわかった。

どうせ思っていたよりも普通とか思っておるのдарう？」

「……がっかり？」

簡単な入国審査をすませ、無事に入った魔法の国パンデモニウム。ムジンのような事態になることなく、至って平和なことに満足して入国したのだが。

街並みは至って普通なのだ。

強いてあげれば、魔武器や魔法具を扱う店が多く見られることくらいか。

「空飛んでいる人とかいるんじゃないかな」と思ってたんだけどな。

もっと日常的に魔法が使われてるかと思えば、そうでもないみたいだし」

「特に急ぎでもない限り、飛行魔法など魔力の無駄遣いではないか」

「そんな冷静に言われるとあれなんだが」

と、そこですれ違う人に目を取られる。

「背中に翼……ハーピーって言うんだっけ？」

すれ違った女性の背中、小さい翼が生えていた。

本来はもっと大きいのだろうが、魔法か仕様か、小さくなっている。

そこで、道行く人たちをもっと注意深く見てみたところ、ほとんどが魔族ばかりだった。

背中に翼のある人。

頭に角が生えている人。

獣人のようなふさふさのしっぽではなく、鋭いしっぽのある人。

千差万別、様々だ。

「おい、アキラ。

きよろきよろするのはまだいい。旅行者なのだからな。

ただ、じろじろ見るのはやめい。連れの我らまで恥ずかしくなってしまうではないか」

「悪い悪い。つい　　ってあれスライムか!？」

苦言を呈したリースに謝るため、彼女の方を向いたオレの目に飛び込んできたのはまさにスライム。

ぽよんっ、ぽよんっ、と跳ねながら、そのぷるぷるの身体を揺らして進んでいく。

街中での思わぬ遭遇に、ついつい彼（彼女？）が見えなくなるまで見続けていた。

「ほへー……」

「アキラ、呆けるな」

「はっ！？あまりの衝撃にちょっとトリップしてた！」

リースに軽く叩かれ、正気に返る。

「スライムなどそう珍しいわけでもあるまいに。少し外をうろつけば嫌と言うほど出会えるであろう？」

「いや、街中で見たことに驚いたわけなんだが……。ふと思っただが、モンスターと魔族の違いってなんだ？だれも逃げたり討伐したりしないってことは、あのスライムはモンスターとは言い難いだろ？」

「野生かそうでないか、襲うか襲わないか、とかではないのか？明確にこう！と決まっているとは思えんが……」

「そんなもんか……」。

ま、それも含めて、まずはいろいろと調べるか。

この国に来たのも魔法について知りたかったからってのもあるわけだし。

ギルドで依頼を受けるにしても、ここらのモンスターを調べてからじゃないと」

「そうか。

では、その間マナはどうする？」

「リースが見ててくれ。

依頼に連れてくわけにもいかないしな」

「ええ」

露骨に顔を歪ませ、不満です！と訴えるリース。

「マナと一緒にがいいと思ったんだが、嫌だったのか？」

「……リースお姉ちゃん？」

オレの言葉を聞いて、マナが悲しそうにリースを見上げる。

そのまなざしに射抜かれて、リースは見るからにうるたえだした。

「ああっ！マナ、そんな目で見ないでくれ！

おぬしが嫌いなわけじゃないのだぞ！？」

ただ最近戦えてなかったから欲求不満と言うか、その、な！
我也暴れたいのだ！」

「……………それじゃ交代で面倒見るか。

そうだマナ。ついでに、軽い訓練でもするか？」

「……訓練？」

マナは小首をかしげる。どうして、と言いたげだ。

「マナはか弱すぎる。」

「少しくらい鍛えておいた方がいいかと思ってな」

奴隷時代に栄養が足りていなかったのか、マナの身体はかなり細い。

一緒に行動するようになってからはきちんと食べさせたおかげか、ようやく少しやせている程度には回復した。

「これからは少しずつ運動もしていかないと、思ったのだ。」

「体力作りが目的なんだけど、強くなりたいならそれなりのレベルまで行けるはずだ。」

一族自体が戦闘向きじゃないが、獣人なんだからな。

「もちろん、やるのは徐々に、ゆっくり焦らずになるけど」

「……うん。がんばる」

マナと目線を合わせると、彼女はしばらくの間をあけてからこくりと頷いた。

その頭をくしゃくしゃに撫でてやると、気持ちよさそうに目を細める。

「むう！我だってマナを鍛えるぞ！」

「……ありがとう」

「ふはは、我に任せれば万事解決だ！
獣人最強も夢ではないぞ！」

「おいおい……。」

無茶はするなよ？まだ子どもだし、身体ができてないんだから。
将来身体を壊す原因にもなりかねん」

「むうつ、それはそうかもしれんがな

「いや、だからな

オレとリースはマナをそっちのけで言葉を交わし合う。
その姿は、まるで親が子どもの教育方針で対立しているかのよう
な会話だった。

|||||

入国から、早数日。

朝はマナと一緒に軽くランニング、昼からはギルドでの依頼をこ
なし、夜は寝る。

そんな生活サイクルが形成されつつあった。

本来なら、二日目にはさっそく魔法学院に行こう！と思ったのだ
が、そこで言い渡されたのはまさかの拒絶。

曰く 「入館証が無い方は入れません」とのこと。

国内の研究成果が漏れないように。学院内に不審者が入らないように。当然と言えば当然のことだが入館証が必要だった。

しかも、それはその場でポンツともらえる物ではなく、申請 発行まで数日かかるとのこと。

「侵入してもすぐに分かりますから。いるんですよー、無謀な真似して捕まる人ー」と忠告されてしまった。

そこまで言うならやってやるうじゃないか、という気持ちも生まれたのだが、ちゃんと思い直したよ。

わざわざリスクを犯すほど急ぎでもないので、その日は申請だけして退散。

主な目的は図書館だったのだが、図書館が学院の敷地内にあるので、やはり入館証が必要になる。

しかも、できるのは入館だけで、貸し出しはできないとのことだった。

貴重な魔法書を奪う輩も多いからだそうで、警備もなかなか厳重だったと言っておこう。

そして、申請から数日後。

「やっと入館証がもらえることになった!」

「ふーん。で?」

喜び勇んでリースに報告したが、返ってきたのは絶対零度の眼差し。

氷狼フェンリルにふさわしき威圧感と冷たさだ。

「あの……リースさん？
なにをそんなにお怒りで？」

「ほう？」

まさか、わからないと？

心当たりがないとでも抜かすつもりか？」

「いや、だって入館証は本人が申請しないとだめだって言われたんだからしょうがないだろ？」

その通り。

入館申請してもらえる入館証は本人のもののみ。

そのため、申請日に留守番していたリースとマナの分はもらえなかったのだ。

「我もマナも

特にマナが楽しみにしていたというのに！」

「いや、普段の学院に行っても楽しいことないからな？」

研究室はもちろん、教室の中は見学できないし。できて、図書館に入るくらいだぞ？」

「そうか……。それではマナも退屈かもしれんな……」

「それに、そのうち入れるようになる。

もうすぐ学院祭があるらしいからな」

間がいいのか悪いのか分からないが、これから学園祭の時期なのだという。

普通の学校のような店や出し物だけでなく、研究成果の発表も兼

ねた一大イベントだ。

そのため、今の時期は忙しく入館証発行まで時間がかかったわけだが。

わざわざ申請しなくとも、一般人にも開放される学院祭まで待つという手があるかと思いきや、そううまくはいかない。

学園祭の期間は、使わない施設 特に関書館などは閉館される。

調べものがしたいのに、図書館に入れないのでは意味がない。

そんなわけで、わざわざ申請して入館証を発行してもらったのだ。

諸々の事情をリリースに説明すると、彼女は視線の温度を元に戻してくれた。

「ん。わかった……。」

マナには我から言っておく」

「頼む」

ちょうどいい高さにあるリリースの頭をなでてやる。

彼女はなにも言わず満足げだ。

しばらくして手を離そうとすると背伸びして手のひらに押し付けてきた。

その表情は髪に隠れてうかがえないが、言いたいことはわかったので再び撫ではじめる。

「ははっ」

「……………なんじゃ。笑ってないでもっとだ、アキラ」

「へいへい」

結局、何度も暗黙の「もう一回」を繰り返し、リースが満足したのは30分後だった。

|||||

魔法学院の中に建てられた図書館。

そこには普通の歴史書や勉学の本だけでなく、数多くの魔法書が収められている。

その蔵書は膨大で、閲覧可能な物だけでゆうに万を越え、閲覧不可の禁書庫には強力な魔法書が眠っているという。

ここはまさに本の塔。

天井まで届く棚がいくつも立ち並び、隙間なく本が収められている。

高い所にある本は飛んでとるしかなさそうだ。「飛べない人はお近くの司書まで」、という注意書きまで存在する。

これだけ多いと整理も大変だと思いが、そうでもない。

蔵書すべてに魔法がかけられており、指定した場所へ本が飛んで

おさまるらしい。

あ、今まさに目の前を本が横切って行った。

「この中からあてどなく本を探そうと思ったら、とんでもなく時間がかかりそうだ……」

案内表示にそって進んでも、分かるのはせいぜい棚まで。

想像してほしい。あ行の棚（横は25、高さは5メートルほど）からたった一冊を探す大変さを。

「そこで、便利グッズがあるわけだ。えっと、これこれ」

司書さんからもらった一枚の紙をこそこそと取り出す。

この紙に目当ての本・検索項目を入力すると、その所在地を地図で表示するのだ。

また、近くに行けばその本自体が淡く光ってお知らせする機能付き。

「オレのサーチと似たような魔法だな……」。

ま、場所以外もわかるサーチの方が優秀だが、ここでは使わない方が無難だろ」

このサーチもどき。仕組みはおそらく、図書館建設前に大きな魔法陣を敷き、紙一枚一枚に魔法をかけ、本にも魔法をかけたのだろう。

想像するだけで莫大な金と魔力と時間がかかっていることがわかる。

「うっし、探すか」

紙に魔法書を検索させ、歩き出す。

検索するのは三つ。

初級・中級・上級魔法など、とにかく現在使われている魔法についての本。

失われた魔法やその伝説・伝承などについて載っている本。
召喚／送還魔法の本。

時間は流れ、閉館時間寸前。

読みつかれた目を揉んで、凝りをほぐす。

調べた結果、現在使われている魔法は大体把握した。
後は、その中から使い勝手のよさそうなものを選んで練習すればいい。

失われた魔法についての本は微妙だった。
伝承があやふやで、具体的にどういう魔法かほとんどわからない。
そうだから、失われた魔法なんだろうけど。

中には、天候・時間操作や長距離転移など、昔は使い手がいたが術式が消えたとされる物もあった。

これらは人前では使わないようにしよう。

そして、肝心の召喚／送還魔法について。

その収獲は

。

「はあ……………」

思わず、ため息が漏れる。

召喚魔法の本はほとんどが召喚獣を呼び出す物で、ペルヴィアのような人間・勇者を召喚する魔法はなかった。

あの国固有の物なのだから、それは覚悟していた。

つまり、その逆である送還魔法についても、人を対象とした物はなかった。

あつても、ペルヴィアの考察本くらいで、本国の書庫で得た以上の知識は得られずじまい。

しかし、ため息の理由はそれだけじゃない。

送還魔法とは召喚魔法に付属しているものであり、召喚魔法の術式の中だけに存在するものなのだそうだ。

あらかじめ召喚魔法に組み込まれた、条件を満たすことで発動する術式。

例えば、時間制限や、魔力供給のストップなどの条件を満たせば、術式が発動して召喚獣は送還される。

そういう仕組みを、便宜的に送還魔法
送還術式というだけ。

召喚魔法とセットになっているのだ。

つまり、単独の 送還魔法 という魔法は存在しない。

「ない、か……………」

こちらに一方的により出す召喚魔法はあるのに（召喚時に送還術式を書かなければいい。その際、反抗されないよう別の方法で契約などが必要になる）単独の送還魔法は存在しない。

そのせいで路頭に迷ったいわゆる「はぐれ召喚獣」なる存在もいるのだとか。

だが、微かな光明はあった。

送還魔法

いや、送還術式は召喚魔法に組み込まれたもの。

その術式は、一言でいってしまえば召喚魔法の逆流だ。

そこで、ペルヴィアにあった魔法陣を逆算し、独立させれば送還魔法 ができるかもしれない。

だが。

そうしてできた送還魔法。

それが、本当に正しく機能するのかどうかは定かではない。

下手をすれば別の世界、最悪、どこでもない場所に放り出されてそのまま ってもありえる。

送り先である“向こうの世界”の情報が確かであれば。

「使えないんじゃ、意味がない……………」

いや、一応、研究だけでもしておくか……………」

幸い、ペルヴィア魔法陣は消す前に写しておいた。

この魔法陣から、なんとか“向こう”の情報を抜きだし、召喚術式を逆算、送還する術式を組めばいい。

実際に使うかどうかは別として、模索するだけ、組むだけ、なら

そう考えて、リースやマナの顔が浮かぶ。

この世界で知り合った仲間。

この世界に残りたいのか。
帰りたいと思っているのか。

天秤がどちらに傾いているのか、自分でもわからないまま。

とりあえず答えを保留し、どちらでも選べるよう手段だけは模索する。

今はそんな、どっちつかずの道を進むことにした。

3：魔法の学院祭（前書き）

結構間が相手しまいましたね。

師走となって少々忙しくなってきました。

がんばらねばー！。

3：魔法の学院祭

「所詮学院祭と侮っていたか……。すごいなこれは」

隣でリースが感心したように声を漏らす。

ムジンのような国を挙げての大きな祭りとはさすがに規模が違うが、それでも十分にすごい。

蒼空には、魔法で花火もどきが打ち上げられ、炎が歓迎の文字を描き、時折虹が橋を渡す。

大地では、風で花弁が舞い踊り、色とりどりの鉱石でできた像が人々を迎え入れる。

そして キラキラと、光りの雪が降る。

そんな幻想的な光景に、しばし目を奪われた。

「おお……すごいな」

「同感だ」

「……きれい」

三者三様、それぞれの言葉でこの感動を表した。

もちろんそんな言葉では言い尽くせない美しさが今も目に映り、変化していく。

「案内によると、だ。」

今日は生徒たちがいろいろと催しを開く日らしい」

学院祭は3日間構成。

- 一日目……部外者お断りな前夜祭。
- 二日目……学生が模擬店やイベントを組む文化祭。
- 三日目……研究成果を発表する研究祭。

となっているようだ。

単なる観光客などは二日目の文化祭を目当てにする。

研究者や魔法使いなどは、もっぱら三日目の研究祭の方に興味を示す。

今日は二日目に当たり、外部の人が入れるようになっている。

「模擬店とか、舞台でなんやかんやったり、娯楽の意味合いが強い日だな」

「マナにとってはそっちの方が楽しかろう」

「ふーん。リースは？」

なんでもないことのように言ったりリースへ聞くと、彼女はそっぽを向いた。

「我は……べ、別に？」

所詮、童のやること。児童にすぎんわけであるし？」

「へー、ほー、そーかそーか」

声の音程がおかしい。
動揺しているのがバレバレ。

なにより、頭の獣耳もピコピコ動いているし、しっぽも左右に揺れている。

そっぽを向いて顔は隠せても、こっちは隠せていない。

これも頭隠して尻隠さず、なのだろうか。どうでもいいか。

「……………そのにやけた顔をやめい。」

ついうっかり、爪が出そうじゃ

手を開き、グツと力を込めるリリース。

そこにはしゃきんつと爪が伸びていた。

「おおっと、勘弁してくれ。」

あと睨まないで。周りの生徒も怯えてるから

「むっ。まあ、ここは引こつ……………」

そもそもそんなに怒っていたわけではないしな

彼女もコミュニケーションの一環のつもりだったのか、あっさり
と爪をひっこめてくれた。

ほっと一安心、という時、ついつと袖を引かれる感触。

そこには、頬を膨らませているマナがいた。

「……………うー、はやくいっ！」

「おー、ごめんなマナ。どこから行く？」

「やはり、ここは食べ物！」

その国を知るならばまず食じゃろ！」

「オレはマナに聞いたんだが……、マナはそれでいいか？」

「……うん。」

おいしそうなの、いっぱい」

リースもマナも食欲まっしぐららしい。

今にも、よだれをたらさんばかりだ。

「では、ゆくぞー！」

「おー」

「……おー」

〈模擬店・食べ物編〉

「マジでか……」

走り出したリースがどこから買ってきた一本の串。
手に持たされたソレに、オレは戦慄していた。

「むぐむぐ。いけるな……」

「……………なかなか」

そして、何事もなく、ためらいもなく、かぶりついて咀嚼する二人にも、だ。

おかしい。

これは食えない。

味がどうとかじゃない。

見た目。見た目がアレだ。

串に刺さったブツ

うん、ぶっちゃけ虫だろこれ。

食べられる虫がいることは知っている。

イナゴだって食べられる。八チの子どもだって地方によっては食べるらしい。

アリの食べる部族がいるとかテレビで見た覚えもある。

ああ、食べられる虫がいることには疑問はないし、異論もないよ。

ただ、これはどうだろう。

こんがり焼いてあって、元の姿は想像するしかないのだが……。

頭は鳥っぽい。丸に三角形がくっついていて、たぶんくちばしみたいなのだろう。

隣でリースが、「この頭の一部が珍味でうまいのだ」とか言ってるがみたくない。

ごりっ、ぐちゅっ、ずぞぞ！とかいう擬音は今すぐ削除しろオレ！

頭蓋骨砕いて、中身潰して、吸い込んだ場景なんて思い浮かべるな！

おーけー、落ち着け。

頭はいいさ。それだけなら鳥だ。

だが、手足の数が六本である。

角材のようなまっすぐ伸びた胴体に、小枝のような足が六本。

虫にしか見えぬ、そして、一度虫と認識してしまったらもうだめだった。

アキラの中で、虫は食物ジャンルには含まれていない。

ランク付けでは、普通に食べるモノ（魚、牛や豚、鶏、馬や羊などなど）、頑張ってカエル、ビルから飛び降りる気持ちでカタツムリことエスカルゴ、餓死寸前まで追い詰められてようやく虫だ。

地域的にも年齢的にも、イナゴのつくだ煮などには触れてこなかっただけに、やっぱり忌避感が先に来てしまう。ご飯のお供にはふさわしいのだろうが、残念なことに、この世界には白米がないのだ。

一度食べてみれば、以外とおいしかったりするものなのだろう。

それほど気にせずとも、珍味としてあっさり受け入れたり、さらには気に入るかもしれない。

自分が触れてこなかっただけで、好きな人は大勢いる。

ああ、分かっているとも。

だが、その最初の一步が踏み出せないし、まだまだ踏み出そうとは思っていない。

今ある、おいしい食材をあらかじめ食べた後でいい。

冒険するのはその後だ。

もうちょっと人生の酸いも甘いも噛みしめて、成熟してからでい

いじゃないか。

長々と語ったが、一言でいえば、だ。

“これは食えない”である。

「……………」

こんがりバツタ鶏（アキラ命名）とにらみ合う。
くうっ！なんて威圧感だ！！

「アキラ、どうした？

食わんのか？」

「……………いらない？」

食べないのが不思議、みたいな目で見られる。
ああ、分かっている。おかしいのは自分だと。
襲ってくるカルチャーギャップ。

「……………いくしか、ないのか……………」

ぶるぶると震える手で、開けた口に串を持っていく。
眼はつむり、迫ってくるこんがりバツタ鶏を見ないように。

ああっ、湯気が顔に当たった。

すぐそばまで来ていますっ！

においは焼いたにおいだけで、素材のにおいは消え去っている！

「やっぱり無理だぁぁー！ー！ー！」

やはり虫だけはだめだっ！

順序を踏まないと！カエルとかワニとかから、順にいかない心が耐えられない！

郷に入っては郷に従え。そんなことを最初に言った人は、こんな事態を想定していたのだろうか。いいやそんなはずはない。きっとその人も「いやいや、これは無理でしょ」って言うに違いない！

「そうか、なら我がもらおう」

ぱつと手から串が奪い取られ、リースの口の中へ。
聞くのもおぞましい音が聞こえ、ごっくんを終了。

ああ、悪魔は見事退治されましたとさ。

「今こそ、リースと一緒にいてよかったと思っただことはないぜ……」

「そ、そうか？」

それは嬉しいが、なんだか釈然とせんとう。

大体だ、好き嫌いはいかんぞ？」

「オレは必要に迫られなければ食べない。」

弓を手渡してくれた生徒から説明を受け、試しに近くの的へ一発込めた魔力が弱かったからか、ぽすんと情けない音を立てただけで終わってしまった。

「へえー、おもしろい道具だな」

「なるほど……。威力は込めた魔力次第、というわけか……。では、我が一撃で全て倒してくれるわあ！」

そういつて、リースは弓に込める魔力を跳ね上げる。

ぶしゅううう。

「なあ！？矢が消えた！？」

驚くリースに、係りの子が訳を説明する。

「あー、すみません。」

安物なんで、あんまり強い魔力だと矢が形成されないようにリミッターがかけられてるんです」

「なるほどね。リース、ズルはだめだつてこつたな」

ランクは低そうだが、一応魔法具。

そうそう壊されちゃたまらないってことか。

まあ、矢の威力を制限することで、簡単に的を倒せないようにするって意味もあるんだろう。

一石二鳥だ。

「むう……。ぎりぎりを見極めるしかないか……」

難しい顔で唸りながら、小刻みに魔力を込めていくリリース。そこまでするか。そこまですて威力を追求するのか。

「……むむむ」

隣ではマナが弓を握って力を込めている。

だが、もともと魔力が少ないので、矢が形成されることすらない。

それでも一所懸命に力を込める。力み過ぎて顔が赤くなっている。

「マナ、そんなに頑張って、なにが欲しいんだ？」

「……あれ」

「あれっていうと」

指さした先にあったのは……。

「え？」

さっきの、串焼きバツタ鶏（調理前）らしき姿のぬいぐるみ。

おいおい、なんであんなのが飾ってあるんだよ。キモい。需要あんのかあれ。

「あんな、虫が欲しいのか？」

「……違う。隣の」

「ああ、あの小熊のぬいぐるみか」

指の先には、しりもちをつき、四本の手足を前に突き出した小熊のぬいぐるみ。

紙相撲の相撲のような態勢で、頭を狙えば簡単に倒せそうだ。

とりあえず、安心した。すごく安心した。

虫を持つマナと小熊を抱えるマナ、その癒し度は天と地ほどの差がある。

「よし、任せろ。オレがとつちやるからな」

「ふっ、ふはははは！見切った！

この量が限度ぎりぎり！回転と矢の形状をいじったこれはまさに最大威力だ！

アキラが出るまでもないぞ！我に任せよ！」

弓を確かめているオレの横では、なにやらコツをつかんだらしいリースが高笑いしていた。

「我が射抜いて見せようっ！」

「ふえっ！？」

「ぬいぐるみ射抜くなー。マナが泣くぞー」

そんな忠告など意にも介さず、リースは引き絞った弦を放つ。

他の参加者とは段違いの、荒々しい輝きをたたえる矢は一直線に小熊を屈指し飛ぶ。

ドスッ!

という鈍い音を立て、ぬいぐるみに穴が空いた。

「ああああ!？」

「あつぶねえ」

小熊　　の隣にあつた、バッタ鶏の、だ。

見事に頭を貫通している。

「あ、あはは……」

屋台を見ていた係りの学生が頬を引きつらせていた。

ぬいぐるみは倒れることなく、脳天に一つの風穴。

その穴が後ろの棚まで貫通していることに気づき、矢の威力にビビっている。

「魔力の込めすぎはやめてください……。ほんと、お願いします……」

……

「すまん……」

さすがに悪いと思ったのか、リースが謝り、弓を返す。

本来なら3回放てるが、試し打ちとさっきの大技、2回しか撃っていないのだが、さっきので不具合が出たようだ。

当然だが、もう一回分残っているから替えよこせ、とも、虫のぬいぐるみ寄こせとも言わなかった。

「アキラ、頼んだ……」

「よっしゃ任せろ」

試し打ちに一発使ったので、残りは二発。

弓道なんてやったことはないが、見様見真似で矢を放つ。

パシユツ　。

軽い音とともに、光の矢が飛ぶ。

それはまっすぐに突き進み、目標であるぬいぐるみの額に当たる。

「……………倒れない、ってかびくともしねえ」

少しもグラつくことなく、小熊は依然としりもちをついている。

あれか。これはもしかして、後ろに倒れないようななにかがあったり、っていう。

まあ、しっぽが大きくて支えになってるって可能性もあるが。

小熊はマナくらいの子が抱えなければ持てないくらいの大きさ。

重量の関係もあるのだろうが、やはり学生にとっては、午前の内からポンポンとられちゃ困るかもしれない。

「ふーん、そうくるんだ……」。

なら、こっちにも考えがある」

しかし、こっちは客だ。

マナのためにも、非情にならせてもらおう。

再び、弓を構え光の矢をつがえる。

さっきの狙いは脳天にどんぴしゃり。

だが、それよりも少しだけ横　　ぬいぐるみの横を狙う。

パシユッ　　。

「ああっ」

狙いがそれた。

そう思ったマナが小さな悲鳴を漏らす。

このまま進めば、矢はぬいぐるみを素通りしてしまう。

だが、これでいい。

光の矢は自分の魔力によって形成されている。

ならば　　。

「　　操れない道理はない」

小熊と虫の間を通り過ぎようとする矢が、くるりと向きを変える。

そうして、矢は小熊の側頭部に当たった。

前に手足が出ているから、前には倒れにくい。

後ろには支えでもあるのか、容易には倒れない。
ならば、横。

狙いたがわず、小熊はこてん、と横へ倒れた。
その背後が見えたが、不正はなかった。ただ、小熊のしつぽがす
ごくでかかったけど。

「よっし！」

倒したんだから、それもらえるよな？」

「……え、ああ、すごいですねー！」

呆然としていた係りの学生は慌ててぬいぐるいを手渡してくれた。
それを、マナに渡す。
マナはぬいぐるみを力いっぱい抱きしめた後、上目づかいで。

「……ありがとう」

といった。

「どづいたしまして」

「ほへへ、魔力の遠隔精密操作をこなすとは！
お客さんすごいですねー」

「あ、ああ。魔力がそう多くないからね。
いろいろと模索している中で練習したんだ」

係りの子が感心しながら言ってきたので、テキトーなことを言っ
てごまかしておく。

「じゃ、当たるのものも取れたし次に行こうか」

「じゃな」

「うん」

オレ達は逃げるように、射的を後にした。

〈イベント編〉

やってきたのは大きなホール。

ホールの前に立てかけてある看板には、タイムスケジュールが書かれており、今の時間は魔法のコンテストのようだった。

主旨は至って簡単。参加者が魔法を使って、観客を楽しませる。ただそれだけだ。

飛び入り参加もOKな、まさにお祭りにふさわしいイベントである。

ちなみにこのコンテスト。学院祭でやるものとは別に、毎年それなりに大きな大会が開かれるのだそう。そこでは幻想的な光景で満ちているという。

「模擬店でも思ったんだが、魔法と娯楽が完全につながってるよな」。

さすが魔法の国と言っべきか、娯楽がないのかとツッコミ入れるべきか

「どっちでもあるのだろうよ。」

魔法が生活と密接にかかわっているのだろう。

だからこそ、日常的に修練するし、それが娯楽にもなる」

「……きれー」

マナはオレ達をつまらない話など右から左へ受け流し、参加者のパフォーマンスに目を奪われていた。

それはまさに光の噴水。

舞台から淡雪のように細かく儂げな光が噴き出し、降り注ぐ。

さらに、色とりどりの照明を反射し、上から下へ降る間に何度も色が変わっていく。

光の噴水は勢いを強め、それは観客席まで届きだす。
やがて、形作られるのは七色に移りゆく光のドーム。

観客たちは幻想的な空間の中に誘われ、「ほう……」と感嘆の息を漏らした。

「使ってる魔法はシンプルだが、魅せ方がうまいなあ……」

「殺傷力のない、ただの光を灯す魔法。
それを改変し、舞台の照明までも利用することでそれを幻想にまで昇華している。」

「無粋だぞ、アキラ。」

「今この瞬間は、ただ眺め、感じ、記憶するだけでいいのだ」

「違う……」

三人で並び、自分たちを包む光のドームを見上げる。

ああ、本当に、きれいだ……。

「……………さて」

「ん？なんだリース」

「我也飛び入り参加してくるか。
格の違いを見せてやろうぞ」

「……………え？」

おかしいな。

いま、耳がおかしくなってしまったような？

「なあ……………つてもういねえ！？」

明後日の方向を見て黄昏ていた間に、隣にいたはずの少女はどこへやら。

「粹とか語ってたのはなんだったんだ……………。
てか、絶対飛び入りしにいきやがった……………」

司会つばい人がリースの名を呼ぶと、幻術か変化か、いつもは生えているしっぽと獣耳を隠したリースが舞台に出てくるところだった。

ポリシーというかプライドというか、獣耳としっぽを隠すことはめったにないリースだが、パツと見、魔法の使える獣人と捉えられてしまうからだろう。

「我が魔法に見惚れ、溺れるがいい！」

片手を振り上げて空を突き、パチンツと指を鳴らす。

オレに習って指パッチンことフィンガースナップを練習していた成果が発揮されていた。全然できず、諦めたと思っていたが……。こつそり練習していたのかもしれない。

リースが生み出したのは氷。

それも極小の、だ。

ダイヤモンドダスト。

魔法や照明のような疑似的な光を反射したチャチなものじゃない。太陽の光できらきらと輝くそれは自然の美しさの再現だ。

それらを、風の魔法を使って散らし、漂わせ、氷像や建物を形成させていく。

舞い散る細氷。

踊る氷の小人たち。

そびえる氷の建物。

描き出される氷の世界。

「うわぁ……………」

「すーい……………」

今まで見てきたパフォーマンスとは比べ物にならない。

幻想的、という言葉はこの光景のためにある。

パチンツ！

小さな音のはずなのに、それは会場中に響き渡った。

氷の世界が、ほどけていく。

さらさらと。さらさらと。

長い年月をかけて風化した都市のように、建物は上から流され吹き飛んでいく。

そうして舞いあがった世界の欠片は、輝きながら、空で踊る。

ああ、と。誰かが漏らした。

やがてくる終わりを嘆き、惜しむように。

ゆっくりと近づく終わりを感じ、噛みしめるように。

そして、すべての氷が落ちきったと同時に、ワァ　　ッ！！と
会場が沸いた。

その歓声を一身に受け、ぺこりと軽くお辞儀をして、リースは舞
台から去って行った。

彼女が完全に見えなくなるまで、拍手が鳴りやむことはなく。

去り際にリースが見せた得意げな顔とウインクへ、オレも精一杯
の拍手でこたえた。

こうして、学院祭の二日目を満喫したオレ達だった。

3：魔法の学院祭（後書き）

今回は情景を想像しながら書きました。

こんなんだったら楽しいだろうなあ、綺麗だろうなあ、とか。
そのせいか、今までにない長さになっている……。

つくだ煮デイスってしまって申し訳ありません。

あくまで個人の意見であり、イナゴのみと修正させていただきました。

4：序曲

学院祭二日目。

この日は研究者向けという意味合いが強く、学園祭と言うよりは発表会に近い。

そのうえ、昼はこの学園の食堂が解放されるので、出店なんかもほとんどでない。

学院生は、発表会に関わる者でなければ休みみたいなものだ。学園祭後の振り替え休日みたいなものだろう。

研究発表会に参加するのは、同じ研究者や高名な魔法使い、勉強熱心な見習い魔法使い。そのくらいだ。

となると、当然、アキラと同じように学校へ向かい、校門に吸い込まれていく人たちはあまり若くない者たちばかりになる。

ローブや杖を持っている魔法使いばかりに。

アキラはその中で、一人気楽な普段着。

明らかに浮いている。場違いである。

「リースたちは来ないって言うし……、なんだかなあ」

じろじろと向けられる視線に辟易しながら、ため息をついた。

昨日で大体満足してしまったらしいリースとマナは、今日は不参加。

多少、生での実演を挟むとはいえ長つたらしい講釈が一日中続くのだ。

マナはもちろんのこと、リースまでパンフレットを眺めただけで興味を失くしてしまった。

パンフレット見る前までは「人間の研究とはどれほどなのか、見せてもらおうか」なんて言っていたのに。

前言撤回まで数秒も要さなかったぞ。

そうやって、アキラは昨日もらった文化祭のものとは別の、発表会の順番や内容が記されたパンフレットを眺める。

「しかし、いろんな研究テーマがあるもんだ」

失われたとされる『時』属性の考察。

魔物の生態と地域性、個体差。

効率的な魔力運用を考えた、既存の魔法の改善点。

属性別に見た魔法の威力差、速度差を消費魔力別に調べ上げた実

験結果。

詠唱別の変化と発動する魔法の変化の関連性。

エトセトラ、エトセトラ。

そして。

なにより気になるのが、この13番目の項目。

『召喚魔法からみる他世界の可能性』

なんてピンポイントな研究だ。

気になるのは、この他世界がいったいなにを指し示しているのか。

オレがいた世界のことを指しているのか。

それとも、まったく別の世界か。

単純に、存在するとされる精霊界や霊界、冥界なんてもののことかもしれない。

「聞いてみてのお楽しみ、か」

こんな薄いパンフレットじゃすべてを紹介しきれしていない。
肝心な部分が書かれていない。

さてはて、いったいなにが飛び出すことやら。

|||||

会場はものすごく広がった。

この日のために特設された、半円状の演劇舞台のような会場。
大きな舞台、背後に浮かぶ魔法でものを映し出すディスプレイ。
そこから放射状に広がるイスの数々。後方の人も見えるように段々
々に作られている。

土属性の魔法使いたちが作ったのだろう。
段差や舞台に痕跡が残っている。

なぜわざわざ舞台を作ったかと言うと、妥協からだ。

屋内で発表するとなると、実演ができない。
爆発して火事にでもなったら大騒ぎだ。
屋外で発表するとなると、講義に不便だ。
一日中、立ち見なんてやってられない。

そこで、折衷案。

舞台とイスは魔法を使い、急ピッチで作成。

風雨は半透明のシールドを張ることなどでなんとかする。

もちろん、いざ生で実験をするときは舞台とイスの間にも透明なシールドを展開するらしい。

舞台は別に壊れてもいい。

今日のためにパパッと作った飯のものなのだから。

とりあえず、空いている席

最後尾の隅っこへ陣取った。

研究者たちはみな熱心で、オレのように消極的な者はほとんどいなかった。

その後、続々と現れる聴講者たちはみんな前から詰めるように座っていく。

どんどん前から埋まっていくのだが、全然こちらまで届く気配がない。イスを作りすぎたのか？

あらかじめ入り終わったのか、新たに現れる人はめったに来なくなり、そろそろ開催されるらしい。

結局、イスがまるまる三列ほど空いて、オレのところと言った具合だ。

「それでは、多々いまより第38回、研究発表会を開催したいと思います。

わたしは司会の

開会のあいさつがしばらく続く。

なんでこういうあいさつは長ったらしいのだろうか。

だれも望んでないと思うんだ。

話している側は面倒で、聞かされる側は苦痛だろうに。

まねに、話すのが大好きなやつがいるから……。

話しを聞く気になれず、思考を明後日の方向へ飛ばしていく。

研究発表はピンきりだった。

アキラの興味があまりない部分もあるのだろうが、面白いと思うものとおつまらないと思うものの差が激しい。

たとえば、失われた属性と言われる『時』。

この研究発表は昔の文献や資料をまとめたものがほとんどで、結局は推論どまりだった。

「失われた属性 『時』を今ある属性で表すとするなら、風や土属性が近いと言えるでしょう。」

風や土の魔法において、時を疑似的に進めたと言える結果を残すことができますので」

そう言って、彼は実演してみせる。

右に詠唱すると、右に置かれた岩がぼろりと崩れ落ち。

左に詠唱すると、左に置かれた食材が見る見るうちにぼろぼろに。

それはおそらく、日射や空気などによる「風化」や微生物による「分解」のことを指している。

その二つの現象を分類するならば、風と土の属性に当たるのだという。

「しかし、これは自然と起きる現象を、魔法の力を使って促進させているだけに過ぎない。」

とてもではないが、時間を進めている、なんて言えません」

そして、この話はここで終わりだった。
手がかりではあるが、そこ止まり。

嵐と土や、上位派生である嵐と岩、そういった魔法を同時に使って相乗させれば。

そう言うてはいたものの、そんな魔法が使える者はそうそうおらず。

どうやらこの研究発表は予算や、興味を持ってくれる高ランクの魔法使いへの紹介の場でもあるらしかった。

最後に深々と頭を下げて、二つの属性を極めた魔法使いの協力をお借りしたい！と言っていたからな。

そして、昼休みをまたいで、長かった講釈はついに13番目。

『召喚魔法からみる他世界の可能性』

その若い研究者が考えている他世界とは、精霊界や冥界などのこと。

まったく別の文明が栄えており、魔法なんてものが存在しない科学全盛の文明など想像もしていないようだった。

(期待外れか……)

アキラがそう断じようと思った時。

発表が終盤にさしかかった時。

勇者召喚への言及がなされた。

「今は亡き、かの聖王国家ペルヴィアの勇者召喚魔法だけは既存の召喚魔法のくくりにとらわれていないと思われる。

常に術者 王族が付いて魔力を供給し続けなくとも送還せず、なぜか召喚には必ず一定の周期が存在する。そのうえ、必要な桁違いの魔力量と血筋の関係性。不思議なことばかりだ」

双方の契約、ねえ……。

あんなだまし討ちが、契約か。

アキラは冷ややかに、その研究者の言葉に反論する。

「しかし、今となつては確かめるすべがない。

あの国に現存していたであろう資料がすべて消失してしまったのは、ひどく残念だ。

……………おっと、話が逸れてしまったか。

私が疑問を呈したいのは、彼ら 『勇者』とはいったいどこから来ているのか、ということだ」

いけないいけない、と彼は頭をかく。

「彼らはわたし達の及びもつかず、思いもつかない魔法を行使してきた。

歴史において、一人で千も万も倒したと言われている。誇張が含まれているだろうが、そうなる原因はあつたはずだ。

まーた、話があらぬ方向にそれてしまったか」

再び、頭をかいた。

「つまり、なにが言いたいかと言うとだ！

彼ら　　勇者はわたしたちとはまったく異なる種族なのではないか！？

東になつても敵わないほどの魔力を持ち、見たことのない魔法を思いつく！

この世界に生きるすべての生命と隔絶した生命！」

両手を大きく広げ、高らかに叫ぶ。

「そつだ！精霊界や冥界が存在するのならば！

彼ら勇者の存在する世界　　勇者界とでもいうべきものがあるのではないだろうか！！」

「その世界で彼らは生きている！

だから、勇者召喚は永続した魔力供給を必要としない！
契約を必要としない！

なぜなら！

魔力によってこの世界に繋ぎとめる召喚ではなく！

勇者界からこの世界へと転移させただけなのだから！！！」

「なにを、馬鹿馬鹿しい！」

「そんなもの、ありえるものか！」

「ありえぬ夢想を語るのならば別の場所へ行ってくれ！」

会場の全員が、そんなものは机上の空論。

おとぎ話だと鼻で笑い飛ばした。

だが。

ただ一人。

笑えなかった。

通常の召喚魔法は魔力を供給している間、その生物を現界させ続けるものだ。

だが、その中には召喚時には魔力を要するが、それ以降は与えなくてもいいものがある。

契約による召喚魔法。

召喚した相手と双方向の契約を成すことによって、現界する魔力を生物の側で補ってもらおう方法だ。

契約によって相手にさし出す代価は魔力や寿命、記憶なんてものがある。

それを代価に、相手側に現界の魔力を自分で出してもらい、手伝いしてもらおう形式。

だから。

アキラは自分が召喚されたのは契約による召喚魔法だと思っていた。

魔力を供給され続けなくとも送還されなかったのは、術式がないかもしれないことと契約を結ばされてしまったからだ。

だが。

いま、目の前の青年が否定した。

召喚魔法ではなく、次元転移だと。

(……………あれ？だからなんだってんだ？)

そうだ。

どうせペルヴィアの魔法陣から逆算するんだ。

召喚だろうが、転移だろうが、無理矢理“連れてこられた”のは変わらない。

だから、戻る方法だって変わらない。

送還魔法が、次元転移魔法に名前を変えるだけだ。

衝撃発言に驚いたものの、すぐに冷静になったアキラはそう結論付ける。

やることは変わらない。多少難易度が変化するだけだ。

「……………ふう。君たちにはわからないか……………」

壇上で、聴講者たちの反応を見渡した青年は肩を落として落胆する。

「勇者界の存在がなにを意味するのか。
彼らの国は、我々などよりよほど発展している可能性が高いと言
うのに。」

まったく、ボンクラどもめ……」

ぶつぶつと。

眼が据わり、危うさを身にまとう。

「もういいか。」

死ぬ間際、せめてもの慈悲として、大変貴重な話をしてやったと
いうのに。

彼らは愛すべき聴衆たりえない」

「　　っ!?!?」

その言葉が持つ、本気をだれよりも感じ取ったアキラは、とっさ
に短距離転移でその場から転移する。

轟ッ! ! ! ! ! !

会場の外に出たアキラが見たのは、観客席がきれいさっぱり跡形
もなく消えている光景。

最初から、なにもなかったとでもいうように。
そこにはなにも残っていない。

いや。
ただ一つ。

大きな穴が空いていた。

舞台から半円状に、深く黒い穴が。

「あっははははははは！！

最ツ高のシヨ―じゃないか！！

一瞬で消えたぞ！！」

壇上にいた青年が、狂った男が大声でワラウ。

げらげらと。げらげらと。

腹を抱えて。

「さあ！この国のクズどもよ！

目を見開いて拝め！！

この僕の

最高傑作を！！！！！！」

魔法で拡声された彼の声は、この国全土へと響いたであろう。

さっきまで彼の背後にあったディスプレイは天高く浮かび上がり、
拡大され、この惨劇をしっかりと映していた。

そして、ソレは宙に止まる。

宙で浮かぶ。

各所が壊れた異形。

それは、狂ったヒトガタ。

彼は、穴の上で浮かんだまま。

「僕八、勇者だ。

これは手始め。

薄汚い魔族の国を、滅ぼしてやろう」

その『勇者』は いつかのように、国へ宣戦布告した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5382v/>

『勇者』の反逆

2012年1月6日07時02分発行